# 時と宇宙（そら）を超えて～分割版～

琅來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時と宇宙（そら）を超えて～分割版～

【Ｎコード】
Ｎ７９８６Ｘ

【作者名】
琅來

【あらすじ】
※こちらは分割版となります。
長編版　↓　ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０６９７ｐ／

身分が物を言う世界――そこは、今から千年後の、宇宙進出をも果たした、遠い遠い未来だった。そこには、二人の少女がいた。彼女達は身分が違いながらも、仲のよい親友だった。けれど、中学一年生の夏休みから、二人は運命の渦に翻弄されることになる。そうし

て知った、衝撃の事実とは――。

# 序章「総ての始まり」（前書き）

この話は基本的に友情物ですが、話の都合上恋愛も入ってきます。
また、途中で近親相姦も入ってくるので、苦手な方はご注意下さい。

# 序章「総ての始まり」

「嗚呼。この子は……この子はあの時に、産まれて来てしまったのですわね。せめて……せめて、もう少し遅ければ……」
「そのことは、言うな。今は、産まれたてのこの子供に、名を付けなければな」
「それは、考えがあります」
「どのような名だ？」
「はい。それは、今この国にはない、富や名声を陰謀などによって手に入れるのではなく、優しい行いによって心を富ませること、樹木を視てその神秘を感じる美しい心、そして、その時に実った果実を、単なる食糧として感謝する気持ちすら持たないのではなく、ここまで育ってきたその生命力と大地の恵みに感謝する心を願って、――と名付けましょう。この子が――になった時の繁栄を願い」
「ああ。それはいい。美しい名だ」
「ところで……」
そう言うと、美しいその女性は、一息置いてから、隣の男性に話しかけた。
「この子は、やはり、あちらへ……？」
「その時は、お前の名をつけよう……きっと」
「あの……この子に、弟か妹が産まれたら……そして、信頼でき、決して裏切らないような子供がいた時は、その時にはこの子が――と言って、いいですわよね？　いくらあんな人でも、まだそのような酷いことをやろうとは思わないでしょうから」
「ああ。我らはいつまでもいられるとは、限らんのだからな……」
この二人の間に、なんとも淋しそうな空気が流れた……。

「まあ、なんて可愛い子なんでしょう。ぴったりの名前は何かしら？」

「そうだなぁ。そうだ。古い言葉で、『鶴は千年　亀は万年』と言うではないか。だから、鶴はどうだ？」

「そんな名前は嫌よ。なんて言ったって、この――に相応しい名でないと、絶対にからかわれるはずだわ。それに、古風すぎるわよ。絶対に、断固として拒否します」

「しかし、縁起がいいと言うと……」

「じゃあ、この――を取って、私が好きな音で響きのいい、『――』という音をつけましょう。そして、この『――』の漢字は、このように」

女性はそう言うと、手元にあったパネルに一つの漢字を書いた。

「そう、そしてこの二つをくっ付けて、――にしましょう！　貴方。反対、しないでしょうね？」

「も、勿論だ！　反対する訳がない！　……それに、響きのいい名だしな」

「ええ。本当に……本当に、可愛い子。大きくなった時、どんな子でもいいわ。この子に合う友達が、沢山できるといいわね……」

「ああ……そうだな……」

先程の二人とは実に対称的に、何とも暖かく、優しい想いが満ち溢れた……。

# 第一章「日記帳」―1

ここは、今からおよそ千と数百年後の、西暦三二四八年、全宇宙共通暦一三二一年の世界。

西暦二七〇〇年頃、地球は他の遠く離れた星から発見されたことを告げられ、しかも文明がこちらの方が大分遅れていることに気付かされ、大混乱に陥った。

だが、ここではもうそんなことは遠く昔の過去の出来事となり、地球は地球連邦となり、日本国はただの日本州となって、みんなが全宇宙共通語を話す時代となった。

ここはそんな日本州の、とある街にある公園だ。

季節は夏真っ盛りで、夏休みである。

「由梨亜(ゆりあ)～！　お待たせっ！」

「あら、遅かったじゃないの、千紗(ちさ)。呼び出したのはそっちのくせに」

声を掛けられた少女――由梨亜は、背中の中程まで届く、柔らかく波打った茶色の髪を一つにまとめている、緑がかった黒の瞳の美少女で、声を掛けた少女――千紗は、肩甲骨辺りまでの、長くもなく短くもない長さで、墨を流したかのような、柔らかく光る真っ直ぐな黒髪を一つにまとめ、瞳の色は髪よりは茶色い色をしている。

それだけならいいのだが、今の地球連邦の常識で考えると、この光景は可笑しく見える。

何故なら、由梨亜はいかにもお嬢様に見えるのに対し、千紗は普通の少女なのだ。

もしもここに常識のある、普通の人がいたら、首を捻ったはずである。

何故ならこの地球連邦は身分社会で、大きな会社を経営し、しかも慈善団体などに寄付するお金を惜しまない、何十代も続く家を貴族と呼び、いくら稼いでも、寄付するお金を惜しむ家や、まだ成っ

て間もない成り上りは富豪と呼ばれ、それ以外の人は庶民と呼ばれる。

また、商売をしていても、老舗と呼ばれるような昔から経営しているお店でも、支店がなかったり、少なかったり、手を付けている仕事の幅が狭かったりすると、いくらお金を稼いでも、寄付しても、ぎりぎり富豪には認められるかもしれないが、貴族として認められない。

そして、この由梨亜は正真正銘大貴族のお嬢様で、千紗は正真正銘の、親戚のどこを捜しても富豪や貴族がいない、立派と言ってもいいほど立派な庶民なのだ。

しかし、この二人は敬語を使わず、しかも相手の名前すら呼び捨てで普通に通している。

なので、珍しくはあるが、二人は身分を越えて友達になったと考えるのが妥当である。

「あのね、由梨亜。さっき先輩から連絡あって、あたし達も百不思議に挑戦しろって！」

そう……七不思議ではない。

百不思議である。

この二人の通っている学校はかなりの曰く付きで、そう言った怪談物が数限りなくあるのだった。

「本当！　千紗？」

「勿論！　それで内容は、夕方頃に学校の使われてない備品室に行くことだって。それで、怪談によれば、そこには、昔自殺した女の子が遺書にって遺したノートが、逢魔ヶ時になると現れるんだって。それを見つけるっていうのが、あたし達が挑戦することだってさ」

この二人の会話で大体分かったかも知れないが、二人の所属している部活は、『心霊研究部』という部活である。

だが、その名前の響きとは違い、普段のこの部活は、科学的な根拠を元に心霊現象を解明していくという、至って科学的な部活である。

この二人は、その部活の一年生だ。
だが、年に一度――三年生が引退してしばらく経った夏休みに、何故か一年生が、この学校の百不思議の中から一つを挑戦するという慣習がある。
そしてこの二人も、その順番が回ってきたということだ。
「それで、時間は？」
「今週の水曜日、夜の六時だって。先生もいいって言ってたよ」
「ってことは、先生からも許可を得ているんだ」
「当たり前でしょ？　あたしはともかく、先輩がそんな手抜かりするはずないよ」
……自分で分かって言っている所が、特に問題な発言であった。
「まあ、そりゃそうよね……それで、場所は？」
「旧校舎三階の北端の、さっきも言ったと思うけど、備品室。だけど、今は使われてないから、埃に気を付けないとね」
「ええ。ねぇ千紗、今日暇？　時間あるのなら、うちで遊ばない？」
「うん、いいよ！」
この二人の名前は、本条（ほんじょう）由梨亜と彩音（さいいん）千紗。
二人は、とても仲の良い親友だ。
しかし、二人はこの後に起こることを知らなかった。
知っていれば、断るに違いなかった、恐ろしいことを。

丁度、明日初めての任務に挑戦するという、火曜日のことだった。
「千紗」
「何？　由梨亜？　明日の確認？」
「違うの。あのね、千紗。明日……行かない方がいいよ」
「どうしてっ！」
「千紗、煩い。ちょっと黙って」
由梨亜は大声を出した千紗に注意をしてから言った。

「あのね、私の曾お祖母様は、この学校に通っていらしたらしいの。曾お祖母様は、本家から外れてたから。それで、私が明日、これに挑戦するっていうことを聞いて、注意して下さったの。曾お祖母様はこの、私達が試そうとしているこの怪談で、危険な目に会ったんだって。だから、この怪談は、飛ばされたんだって」

「何それ。由梨亜。それ、ほんとに信じてんの？」

「えっ？」

由梨亜は、きょとんとした表情で言った。

「あのさ、それって、どの曾お祖母さん？」

「……え～っと、お母様の、お母様の、お母様に当たる曾お祖母様よ」

由梨亜は、指を折って数えた。

「……その人ってさ、前、あたしが由梨亜の家に遊びに行った時に、私立の超頭がいいので有名な幼稚園から大学までの一貫校出身で、その中でも常にトップクラスだったって、あたしにすっごい自慢してた人だよね？」

「……」

由梨亜は、言葉が出なかった。

「これはあたしの想像だけどさ……多分、由梨亜の曾お祖母さん、由梨亜を心配して言っただけで、何にも根拠はないと思うよ……？」

千紗が恐る恐る言った言葉に、由梨亜は頭を抱えてしまった。

全く否定できないだけに、とても痛い。

「うん……多分、そうかも……」

「じゃ、明日、予定通りにね？」

「……うん。ごめん……千紗」

「いいって。ほら、行こ？」

「うん……」

由梨亜は半ば脱力したまま、千紗と共に歩いて行った。

そして、その夜が来た。
「千紗〜！」
「遅い！　今まで何やってたの！？」
「えっ……。だって千紗。今、五時四十分だよ？　五時五十分集合って言ってなかったっけ？」
「え……アハッ」
「もぅ。ボケないでよ」
由梨亜が頬を膨らませて言った言葉に、千紗は笑いながら答えた。
「じゃあ行こっか」
「うん！」

「うっわ〜！　こんなに薄暗くって人気もない学校って怖いね〜由梨亜。何だか気味悪いし……。ねっ、由梨亜。あたしはこんなことするの初めてだけど。由梨亜はある？　あっ、そうだ、そういえば、この中にあるノートって……」
「千紗！」
「はい！」
千紗は、思わず背筋を伸ばして答えてしまった。
……ちなみにその叱責は、正直言って今まで聞いたどの先生や親からの叱責よりも迫力があり、逆らいがたい物であった。
「煩い！　ちょっとは静かにしたらっ？　ほんと言うと、私、怖いんだから……ちょっとだけだけどね」
「ふ〜ん……ちょっと、意外かも……」
「いいから、さっさと行くわよ！」
「は〜い……」
二人は、薄暗い廊下を歩いて行った……。

「由梨亜、着いたよ」
「ええ」
「それじゃあ、行くよ！」
ガラッ、という音を立てて千紗と由梨亜が戸を開けると、使われていない机の上に、何かが一瞬ピカッと光った。
光は一瞬にして消えたが、千紗は構わずにその机へと歩き出した。
「ちょ……待ってよ！　千紗！」
呆気に取られていた由梨亜が、我に返って千紗を追いかけた。
千紗は追って来た由梨亜を従え、その光った場所へ行ったが、光った机の上に置いてあった物を見るなり、息を呑んだ。
「……ほんとに、ノートがあった……」
「千紗……でも……でも、さ。これ……もしかしたら、先輩の悪戯かもよ……？」
「うん……でも、悪戯にしてはちょっと悪質じゃない？」
「うん……まあ、悪質って言えば、悪質だろうけど……ちょっとした、ドッキリかもね」
……既に、二人の中では『先輩の悪戯』と確定されてしまっている。
「うん……じゃあさ、これ、先輩に報告した方がいいよね？」
千紗は携帯端末という、地球連邦内ならどこでも繋がり、希望すれば立体映像にできる優れ物であり、大抵はみんな持っている物を取り出して言った。
「じゃ、あたしが柑奈（かんな）先輩に電話掛けるね？」
「ええ。私って、こういうの持ってないもんねぇ……」
由梨亜の溜息じみた言葉に、千紗はにやっと笑った。
「こういう時、お嬢様って不便だねぇ」
「もうっ！　いいから、さっさと先輩に連絡取ったら？」
「はいはい」

千紗は、すぐに柑奈に電話を掛けた。

その時、柑奈は苛々と携帯端末を手に取ったり置いたりと繰り返していた。

と、その時、いきなりコール音が鳴り、ぱっと携帯端末を手に取った。

「もしもし？」

『もしもし、柑奈先輩ですか？　あたしです。千紗です』

柑奈は、それまでの苛々とした様子を消し、手をぽんと打った。

「千紗？　……ああ、そういえば今日だったね。……それで、どうだった？　何か、見付かった？」

柑奈の悪戯っぽい言葉に、千紗が映像に映るように、一冊のノートを掲げた。

『はい。こんなノートが置いてありました』

「へぇ。こんなのがねぇ。中身、見てみた？」

『あ、いえ……まだです』

「じゃあ、見てみなさいよ」

『はい……』

柑奈は、しきりと千紗を急かした。

そのノートをパラパラと捲っていた千紗は、少し怪訝そうな顔になった。

「ん？　どうした？　千紗」

『あの……これ、普通のノートじゃないんですけど……』

「どんなの？」

『え～っと、何て言うか……』

『日記帳に見えますね……』

横から、由梨亜が顔を出して言った。

「ふ～ん……じゃ、しばらく二人でそれやっといて」

『はっ？』
『はいっ？』
二人は、揃って驚いたような顔になった。
『え～っと……これを、ですか？』
「うん。そう。二人で交互にやっといて？　一人だったらずっと一人でやればいいだろうけど、二人だからね。だったら、二人で交互にやったらいいんじゃないの？　あ、でも、後で見せて貰うことになるかも知れないから、見せられない内容は書かないこと。いい？」
『はい、先輩』
「それじゃあ、明日ね」
『はい。さようなら、先輩』
千紗と由梨亜はそう返事をすると、端末を切った。
柑奈はしばらく端末を手に考え込んでいたが、一つの番号を押した。
短いコール音の後に、柑奈と歳の変わらない少女が出る。
『もしもし……柑奈？　もしかして、千紗と由梨亜から連絡来たの？』
「うん。見事に引っ掛かってくれたわよぉ～」
柑奈は、にっこりと微笑んで言った。
そう、これは毎年恒例の肝試し――というか、悪戯なのである。
『じゃあ、どうする？　千紗と由梨亜で一年は全員終わったけど……ネタばらし、いつやる？』
「う～ん……じゃあ、九月入ってからにしよ？　あんま早過ぎても、興醒めでしょ」
『じゃあ、また明日ね、部長さん』
「はいはい、明日絶対遅れないでよ？　副部長さん」
二人はそう冗談のような口調で言うと、それぞれ端末を切った。

「じゃあ、先輩はああ言ってたけど、順番どうする？」
二人は学校から帰りながら、会話を交わしていた。
「ん～、じゃ、由梨亜からでいいよ」
「ええ。分かったわ。じゃあ鈴南（すずな）が早く帰ってって言ってたから、急ぐわね」
鈴南とは、由梨亜付きの召し使いである。
けれど、その鈴南にしても、実は貴族階級のお嬢様であり、千紗よりも身分が高い。
そんな人間を複数人使用人として抱えている由梨亜は、それこそ正真正銘のお嬢様なのであった。
「うん。じゃ～ね」
「じゃ～ね～！」
「あの由梨亜は、どんなことを書くのかなぁ……」
由梨亜が去っていくと千紗は独り言を漏らし、そして角を曲がり、自宅へと帰って行った。

由梨亜は、屋敷の扉を潜ると、声を掛けた。
「ただ今戻りました」
すると、すぐに鈴南が出て来る。
どうやら、由梨亜が帰るだろう時間を待っていたようだ。
「お帰りなさいませ、お嬢様」
鈴南が頭を下げると、その後ろから、由梨亜の母が顔を覗かせた。
「あら、お帰りなさい。由梨亜」
「ただいま。お母様、鈴南」
「それでは奥方様、お嬢様。こちらへ。夕ご飯のお支度が整っております」
「ええ、鈴南」

# 第一章「日記帳」―2

「お帰りなさい！　お父様！」
その日の翌日、本条家の広い屋敷に、由梨亜の元気な声が響いた。
「ただいま、由梨亜。お前の誕生日の前までに、シャリート国から帰れて良かったよ」
由梨亜の誕生日は、八月十六日。
そして、何の偶然か、千紗も同じ誕生日だった。
今は、八月十四日だ。
「ところで由梨亜、明日は部活あるかい？」
「いいえ。夏休みは木曜の午前中だけなの。明日は金曜だから空いているわ」
「それでは明日、十八日にするお前の初めてのパーティーの為に、ドレスを買って来ようか？」
「ええ。それでは私、着替えて来ます」
由梨亜は部活から帰って間もなく父親――本条耀（よう）太を迎えたので、制服のままだった。
由梨亜は階段を駆け上がって部屋に駆け込むと、溜息を一つついた。
「ふぅ～」
（良かったぁ。怪しまれなかった。お父様もお母様も鈴南も頭固いから、もしも見られたら大変なことになっちゃうわ。早速書こう！）
由梨亜はしばらく日記に何かを書いていたが、五分後、書き終えたのかその手を止めた。
「できた～！」
（これ、明日……は無理だから、明後日渡そう！　あっそうだ！　千紗に、その時一緒に招待状渡そう！　私のパーティーに。ついでに、部活の人全員に、都合がつくなら招待状送ろうかな。ああ、楽しみっ！）

由梨亜が楽しげに心を弾ませていると、コンコン、という音がして、外から鈴南の声がした。
「お嬢様、お食事の時間にございます」
「ええ。今行くわ」

その翌日、由梨亜は耀太や母親の本条瑠璃（るり）、他に荷物を運ぶ為と、運転の為と、車の盗難防止の為に車に残ってもらう為に連れてきた召し使い達と共に、本条紳士淑女高級店という、本条家が開いている店の本店に、わざわざ四十分も掛けて行った。
交通網が発達している今、四十分も掛けた移動というのは大事である。
本来なら屋敷に運び込んでもいいのだが、あまりにも品揃えが豊富だった為、それもできず、またいい物が揃っているのはやはり本店なので、時間を掛けることにしたのだった。
店に入ると、由梨亜は少し甘えるようにして言った。
会えない時は、一ヶ月以上も会えない相手でもあるので、自然とそうなってくるのだ。
「お父様。私、ドレスとか靴とか、青や白で統一したいわ」
「ああ。いいとも」
「あっ、このドレス可愛い！　綺麗な色～。この色も綺麗ね～。あぁ、迷ってしまうわ」
「由梨亜。どんなに迷ってもいいから、お前の気に入る物を買いなさい」
「はい、お父様」

結局由梨亜が買ったのは、裾が南国の海の海底が一段と深くなっ

た所のような深い藍色で、上に向かって少しずつ淡くなっているグラデーションの長袖で膝下丈の、今時珍しい――つまり、かなり高価な――本物の絹でできたドレス、少しだけ灰色がかった白いエナメルの靴、群青色の毛糸のポンポンのような物を真っ白なレースでくるんだ髪留めだった。

「由梨亜。これでいいのか？　他に買わなくて」

「ええ。だって、これと言えるアクセサリーが見つからなかったんですもの」

由梨亜は少し唇を尖らせると、すぐに笑顔になり、言った。

「でも、ドレスとか靴とか、気に入った物があって良かったわ」

「そうだな」

その時、由梨亜は確かに何かの視線を感じたが、振り返ると、何もなかった。

（まただわ。また、何もない……この前も、その前も、そして今も、確かに誰かからの視線を感じたのに……）

「どうした？　由梨亜」

「いいえ。何でもないわ」

「さぁ、お乗り下さいませ。旦那様、奥様、お嬢様」

チャイムが鳴り、千紗がドアを開けると、そこには珍しいことに由梨亜の姿があった。

「由梨亜！　来てくれたんだぁ～。上がって」

「お邪魔します」

「一々言わなくても別にいいって！　ほらほら」

由梨亜は千紗に急き立てられ、玄関を上がった。

「はい」

コトン、と千紗は、二人の前にお菓子の入った器とジュースを置いて、話しかけた。

「それで、どうしたの？　由梨亜がうちに来るのって、珍しいよね？　って言うか、一年振りぐらいじゃない」
千紗は由梨亜に、単刀直入に訊いた。
「あ、うん。そうだね。はい、日記帳。うちだと、鈴南達の目が厳しくて渡せないの」
由梨亜はそう肩を竦めて言うと、千紗に手渡した。
「ありがと、由梨亜。じゃ、あたしが書き終わった後も、由梨亜に来て貰うか部活の時の方がいいね」
「ええ、そうね。あと、私の初めてやる誕生日パーティーの招待状。他にも、都合つく部員の人も招待するつもりよ」
「へぇ～。あっそうだ！　由梨亜、あたし、由梨亜に今プレゼント作っている途中なんだ。楽しみに待っててよね？」
「へ～。何作ってるの？」
「ブレスレットと、あとネックレス！」
「ふ～ん。何色？」
「白とか、水色とか、青とかを組み合わせているの」
「そうなんだ。偶然だね。私も、千紗に薄いピンクや赤紫とかの、ブレスレットとネックレスを作っている最中なの。ちょっとびっくりだわ」
「じゃあ、交換するみたいだね！」
「そうだねぇ～」
由梨亜は、日記帳の存在を知られずに千紗に渡せたことをとても喜んでいた。
そして、次に回って来た時も、上手く出し抜けられるようにと祈った。

「それは……それは、どういうことだ。由梨亜！」
耀太の、怒りが燃え上がり、もう手が付けられない状況に陥った

罵声が、屋敷を揺るがすが如く響いた。
だが、由梨亜はそれに全く動じず、困惑したかのように、たった今言ったばかりのことを言った。
「何って……ただ、友達や先輩方を、私の誕生日パーティーに誘いたいって、言っただけじゃないの。これの、どこがいけないの？」
由梨亜が至って不思議そうに言った為、耀太も怒りを少し抑え、こう言った。
「いけないも何も、大量の庶民を屋敷に招待するなぞ、前代未聞の珍事だぞ。過去には庶民の友人を招いたこともあったから、千紗はいい。しかし、その他の者を招いたことなど前例がない。いくら年上とはいえ、身分を考えればお前の方が上なんだぞ。本来ならば貴族であるお前が敬語を使われる立場であり、庶民に敬語を遣うような立場ではない。そこをきちんと踏まえておけ」
「……はい」
「分かったのならばよい。しかし、部活部活と浮かれて勉強をサボるような真似はならぬ。鈴南、由梨亜に家庭教師が来る時間だ。先生をお迎えしろ」
「はい。畏まりました。お嬢様、お勉強のご用意を」
「分かっているわよ。鈴南」
「それでは由梨亜、先に行け。私は鈴南に話があるからな」
「はい、分かりました。それでは失礼します。お父様」
由梨亜が出て行くと、耀太は声を潜めて言った。
「鈴南」
「何でしょうか」
「由梨亜は、何故あのようになってしまったのだろう」
鈴南は額に皺を寄せ、難しい顔で黙ったかと思うと、小さな声で慎重に言った。
「お部屋にいる時や学校にいる時は、人権侵害に触れる為、監視は不可能です。ですが、その他の時……本条家の者が付き添わずに外出する時は、身の危険を回避する為という名目を持って、なるべく

目を離さぬように、召し使い達に手を回しておきます」
「さすが鈴南。そういう所もしっかりしている」
「お褒めの言葉、ありがとうございます。それでは、先生を迎えてきます」
鈴南が出て行くと、耀太は半眼を伏せた。
（鈴南に任せたから、大丈夫だと思うがな……）
「こちらも、手を回しておくか。用心はいくつ重ねても足りる物でもないし。私の可愛い由梨亜の為なら、害になる物全てを取り除いておかねば……」
由梨亜は耀太の言葉を扉の陰で聞いていたが、それを聞き遂げると足音もなく立ち去った。

千紗は、由梨亜が帰った後、すぐに日記帳の中身を見た。
「へぇ～。由梨亜のお父さん、シャリート国から帰ってきたんだ～。そういえば、なんか嬉しそうだったよなぁ、あの日。えっ……ゆ、由梨亜……」
千紗は、思わずその文字を絶句して読み返した。
そこには、
『この日記帳を手にしてから、出掛けた時に視線を感じるようになったの。不思議よね。しかも、大勢の人がいても、沢山の車が走ってても、そこだけが視えないかのように、存在しないように、人一人が余裕を持って立てるくらいの幅の空間が空いているの。その一瞬後には人や車が通ってその空間は埋まるんだけど……ま、気にし過ぎなのかもね。やっぱりこれ、どうしても先輩の悪戯としか思えないんだもの』
と書いてあった。
それに、千紗は思わず吹き出していた。
「全く、由梨亜ったら……ま、ほんとに先輩が監視してたら怖いけ

ど。でも……そんなのあり得ないし。やっぱ、気にし過ぎなんだよ、由梨亜」

そう呟きながらも、親友である由梨亜を心配しているのだろうか、千紗の顔にはあまり笑顔がなかった。

翌日、由梨亜は千紗の家に、勉強道具を抱えて行った。

一緒に宿題を片付ける為だ。

その途中、昨日のことを思い出した由梨亜は、申し訳なさそうに言った。

「千紗、ごめんなさい。お父様から、千紗以外は駄目って……」

「何で！　あたしがいいなら、他の人もいいはずじゃあ……」

「それが、大勢の庶民を屋敷に招待するのは、前代未聞の珍事。過去には、庶民の友人を招いたこともあったから千紗はいいけど、他の人を招いたなんてことはない。いくら年上とはいえ、身分を考えれば、私の方が上。本来ならば、貴族である私が敬語を使われる立場であって、庶民に敬語を使うような立場ではない。そこをきちんと踏まえておけって……お父様が」

「そっか。じゃあ、しょうがないよね……。でもさぁ、由梨亜。何でこうなのかなぁ。今のこの世の中、身分制度でガチガチに凝り固められて、階級重視じゃん。何も由梨亜を批判するわけでもないけどさ、お嬢様は幼稚園からずっと、あたし達庶民が通えないようなお嬢様学校に通ってるでしょ？　ホテルも、あたし達は一流な物なんていくらお金を出しても泊まれないし、二流の物はお金持ちの倍取られるし。貴族の人に遠慮して、庶民を近くに寄せないようにしているのかも知れないけど……でも、ここまで差が激しいと嫌になるよ」

「でも、昔から……そう、約四千年近く前の昔から、この制度は続いているのよ。その頃はもっと格差は大きかったけれど、今とはあ

んまり変わらないわね」
　由梨亜はそう、溜息をつきながら言ったが、千紗の可笑しな様子に、首を傾げた。
「……」
「千紗？」
「……」
「ちょっと、聞いてるの？　千紗」
「……」
「ねえ、千紗。千紗ってば！」
「あのさぁ。由梨亜」
　由梨亜が煩かったのか、それとも珍しく考え込んでいたのか、千紗はようやく口を開いた。
「あたし達って、今日、十三歳の誕生日だよね？」
「あっ……」
　ようやくその事実に気づいた由梨亜は、今までしていた会話が、あまりにも誕生日にそぐわないことだということに、やっと気付いた。
　そして千紗は、さっきあんなに長々と現代の格差について熱く語っていたのに気付いて、黙り込んでしまったのだった。

　その帰り、千紗は由梨亜に、由梨亜は千紗に、それぞれ青系、赤系で作ったビーズのネックレス、ブレスレットを渡した。
　どちらも素晴らしい出来で、手作りの汚さはなく、手作りの良さのみがあった。
　そして思わず由梨亜は、
「うわあ。千紗、ありがとう！　丁度着るドレスが青いんだよね」
　と言って感激したのだった。
「何言ってんの！　お礼を言うのはあたしの方だよ！　赤はあたし

の色って言われるし……本当にありがとう！」
　お互いに感激しながらも、別れ道に来てしまった。
「それじゃあ、明後日の私の誕生日パーティーで！」
「うん！　また明後日！」

「はい、どうぞ。さっさと食べちゃいなさい」
「いっただっきま～す！　うわ！　やっぱりお母さんのご飯美味しい！」
「全くもぅ。千紗ってばお世辞が上手！　……そういえば、今はもう天国にいるお父さんも、私が作った料理をいつも美味しいって食べてくれたのよね……」
　千紗の父は、千紗が五年生の時……つまり、二年前に交通事故で逝ってしまったのだった。
　しんみりしてしまった空気を払うように、千紗はことさら明るい声で、母親に話しかけた。
「お母さん、よく覚えてるよね。あたしだったら、そんな細かいことまで覚えてらんないよ。……そう言えば、明後日に由梨亜の誕生日パーティーがあるのね。それで呼ばれているんだけど、何着ればいいかな？　あたし、そんな余所行きの物、大して持ってないんだけど……」
「う～ん……そうねぇ、私が前着ていた、薄い赤紫色のドレスは？　それに千紗。『そんな細かいこと』とは聞き捨てならないわ。貴女、初恋もまだなんだからそんなこと言えるのよ」
　目を不気味にキラッと光らせながら言う母親に、千紗は苦笑しながら言った。
「こっちこそ、『初恋もまだ』とは聞き捨てならないよ。初恋ぐらい経験済み！　そんで、ドレスって、あのドレスのこと？　濃い目の赤紫色で蔓草模様が刺繍されてるの。あれちょっと大人びてるよ

ねぇ～」
「――それはそうと、そう言えば千紗、夏休みの宿題は？」
いきなりの母親の話題転換に、千紗は反応が遅れてしまった。
「……え、えっとぉ～。それはぁ……そのぉ……」
「って、いうことは、まだ、全然手を付けてないわね？」
「ぜ、全然じゃあないんだけどぉ……さっきも由梨亜とちょっとやったしぃ……」
「千紗！　下らないこと喋ってないで早く片付けなさい！　さもないと……」
「……さもないと？」
千紗は上目遣いに、そっと母の様子を窺った。
「宿題持って学校に行かせるわよ！　丁度先生がいて、片付けるのがさぞ楽でしょうねぇ？」
その、あまりにも恐ろしい言葉とにっこり笑った笑顔……。
思わず千紗は身震いしてしまった。
「はい、はい！　すぐ片付けます！」
そう言うと、千紗は急いでご飯を掻っ込み、部屋へと走っていった。
それを聞いていた母は、思わずクスッと笑ってしまった。
「あの子は私に遺された、たった一人の娘……。大事に育てなくっちゃね……」
つい、そんなことを呟いていた母は、部屋から聞こえる声に、思わず破顔してした。
「あっれ～。夏休みの宿題どこ置いたっけ～？　えーっ。ない～！」
その声が聞こえてくると、千紗の母親は、リビングのテーブルの片隅にその宿題があるのを発見し、ぷっと吹き出して言った。
「千紗～！　宿題ここにあるわよ～！」
「えーーっ！　うっそ～！」
ドタバタと、凄い勢いで部屋から出て来た千紗に、母は思わず笑ってしまった。

「全くもう、千紗ったら」
母親はくすくすと笑うと、千紗に宿題を手渡した。

## 第二章「誕生日パーティー」―1（前書き）

今回、途中でかなり差別的な発言や、敬意が全くないような発言が出て来ます。そういう物が苦手な方は、ご注意下さい。

# 第二章「誕生日パーティー」―1

八月十八日月曜日の午後三時、由梨亜（ゆりあ）の誕生日パーティーが、本条（じょう）家本宅にて行われた。

だが、由梨亜はまだ子供なので午後三時から午後八時までの五時間だけだった。

由梨亜の家の門の前に行くと、本条家に仕えている、黒い、揃いのスーツを着た男性達と、薄手の白の長袖、踝丈の清楚な感じのするドレスを着て、髪をこれまた白いレースのリボンで高めの位置に一つ結びに結んだ女性達が、それぞれの招待状を一枚一枚確認していた。

千紗（ちさ）は、緊張しながら、招待状を渡した。

それは、千紗が今まで見たことがない立派な模様と本条家の印章が綺麗に印刷してあり、門にいた召し使い達は、実に丁寧な態度で、招待状と、目の前に置いてある端末機で招待状を出した人の名前が載っているリストを確認し（これは偽の招待状を使って潜り込まれないようにする為と、誰が来てくれたのかを確認する為である）、中の大広間まで案内してくれた。

千紗は、由梨亜の家には何度も行ったことはあったが、そのほとんどが由梨亜の部屋がある棟にしか入ったことがなく、おまけにこの大広間がある棟は由梨亜の部屋があるのとは別の離れている棟にあったのでこの大広間に入ったのは初めてだった。

そして、この大広間はとても広く、千紗の家が二つ入ってもまだまだ余裕がありそうだ。

天井はとても高く、三階までの吹き抜けになっており、大きな、本物のシャンデリアがいくつも輝いている。

庭から見て一階部分の左半分はダンスフロアに、右半分は立食ができたり座って食べたりできるようになっている。
そして一階から三階に掛けて、吹き抜けになっている。
庭と二階、三階はテーブルやベンチがあり、食べたり話したりができるようになっていた。
千紗は感嘆すると同時に、周りの様子を観察した。
やはり、千紗の年頃と同じような子供はいるが、少女達は千紗の何倍も立派で真新しいドレスを着て、しかも全員一箇所に集まり、談笑をしながら千紗や少年達を……特に、自分達よりもみすぼらしい格好をした千紗の方を、無遠慮にジロジロと眺めていた。
少年達は何人かずつ固まり、談笑しながら少女達の集団をチラチラ見ていて、千紗のことは虫けらほどにも気を留めていなかった。
まあ、その反応は、千紗にとっては気楽なことだったが。
大人達は男同士、女同士で固まり、談笑していたり、その固まりから抜け、ダンスの申し込みをしていたりしていた。
しかし、千紗がいくら見渡しても、人混みの中に目を凝らしても、由梨亜の姿はない。
時間は、もう三時三十分になろうとしている。
（こういう風に時間が過ぎてから主役登場なのが、上流階級風なのかな……）
と、千紗は思いながら、到って大人しく、静かに待っていた。

「由梨亜お嬢様、準備はお済みですか？」
鈴南（すずな）の声が、由梨亜の部屋の前で聞こえる。
由梨亜は、ドレスの着付けを
「たまにはいいじゃないのよ。ほっといて。それに、こういうことも今のうちに経験しておいた方が将来困らないと思うし。だから、ねっ、自分でやるから」

と、理屈になっているのかなっていないのかよく分からない理屈（我儘とも言う）をこね、言い張り、その勢いに反論できずに固まってしまった召し使い達を尻目に、部屋にドレスと靴を持ち込んでしまった挙句、内側から施錠してしまったのだった。

「由梨亜様、髪を結わなくてはなりませんから、お早く……」

「うるさいわねぇ、鈴南。まだ三時じゃないの。終わったから、扉の前を退いて頂戴」

「はい」

鈴南はそう言って下がり、それを部屋の中から確認した由梨亜は、扉を開け放した。

そこには、この前本条紳士淑女高級店で買った、裾が南国の海の海底が一段と深くなった所のような深い藍色で、上に向かって少しずつ淡くなっているグラデーションの長袖・膝下丈の絹地のドレス、少しだけ灰色がかった白いエナメルの靴を身にまとい、そこに千紗のプレゼントした青系のビーズで作ったネックレス・ブレスレットを付けた由梨亜の姿があった。

ネックレス・ブレスレットは、グラデーションだけの無地のドレスを邪魔せず、すっきりと収まって、由梨亜の若さ、まだ幼いからの独特の美しさ、大人びた気品を矛盾せず、それどころか強調して放っていた。

鈴南は、その勢いに呑まれたかのように見えたが、由梨亜のつけているネックレス、ブレスレットに目を留めると

「それは……？」

と、問いかけてきた。

「千紗がプレゼントしてくれたの」

と、由梨亜は茶目っ気たっぷりに、悪戯っぽく答え、その答えに思わず絶句し、彫像のように固まってしまった鈴南を、その場に措いて立ち去り、本来ならそこで着付けをするはずの部屋へと向かった。

そして、魂がどこかに飛んでいったような鈴南は、二、三秒後慌

てその後を追った。
　由梨亜がその部屋へ着いたのが三時五分だったが、髪をセットし、メイクを終えたのが三時四十五分だった。
　鏡に映った由梨亜は、普段は少しフワフワと波打っている髪を真っ直ぐにし、毛先をクルクルと巻いて、それを首の少し上辺りで留め、その先を右肩の方へ垂らしていた。
　その髪留めは、この前の買い物で買ってきた物だった。
　顔は、睫毛にはマスカラを塗り、唇はほんのりと紅く染まり、目の上は薄い水色で彩られ、美しい美少女に……しかも、余所行きの格好をした大金持ちの家の令嬢となっていた。
　いや、普通なら、この格好が普通なのだ。
　由梨亜がお嬢様離れしていて、いつも庶民のような格好をしているだけなのだから。
「さあ、お嬢様」
　と、促され、由梨亜は部屋を出て耀太（ようた）、瑠璃（るり）と合流し、大広間へと向かった。

　千紗は、大広間で由梨亜がくるのを待っていた。
　そこへ、
「そこの貴女。ちょっといいかしら？」
　と、いかにも上品な声が掛かった。
「何ですか？」
　と、千紗が振り返って言うと、そこにはさっきこちらをジロジロと眺めていた少女達の集団があった。
「ちょっと、伺いたいことがありまして……お時間、宜しくて？」
「ええ、いいです」
「それでは、少し庭で……」
　そう言うと、少女達は千紗をあまり目立たない庭の片隅へと連れ

て行った。
そして、千紗を片隅に押しやり、少女達は腕を組んで一列の半円形になり、千紗が逃げられないように閉じ込めた。
「お前、私達のような上流階級ではないでしょう？」
と、先程大広間で千紗に声を掛けてきた、一番年上の、少女達のリーダー格だと思われる少女が、氷のように冷ややかな声で千紗に話しかけた。
その言葉には、先程のような、美しい、丁寧な響きはなく、侮蔑や軽蔑するような響きが含まれていた。
「ええ、そうよ」
千紗は多勢に無勢な状況を、聞く人に全く思わせないような言い方で、身分の高い人にとっては不遜に、そして挑発するかのように、相手の顔を、顎を上げ、胸を張って答えた。
「あたしは、確かに貴女達に言わせればただの一般庶民、中流階級よ。親戚がそういうのになったっていう人も、一人もいないわ。でも……それでも、あたしと由梨亜は親友よ。だから何だって言うの？　何が悪いって言うの？　身分の違いが、何よ。一体何になるって言うの？　この日本州を治めておられる天皇陛下だって、貧しく、それ故に泥棒をしたりして、地に這いつくばり、その日を生き永らえている人だって、みんな同じ人間よ！　同じようにお母さんのお腹で育ち、母子共に痛い思いをして産まれて来た、人の子よ！　気が合えば、友達にだって……いいえ、親友にだってなれる！　だって、同じ人間よ。そんなの当たり前過ぎるほど当たり前なことじゃない！　だからあたしと由梨亜が親友になって、なにが悪いと言うのよ！　悪いと思うなら、その理由をあたしが納得するまで述べなさいっ！」
千紗は色々と溜まっていたので、つい途中から声を荒げてしまった。
だから、すさまじい気迫で少女達に啖呵を切った千紗は、その気迫に少女達が飲まれたことを感じ、形成が逆転したことを確信した。

しかし、それは早計に過ぎなかったようだ。
先程の少女達のリーダー格だと思われる少女が自分を取り戻して、睨みつけながら言い返してきたのだから。
「んまあ、なんて汚らわしいことを！　あんな野獣以下の下等生物と神にも等しい天皇陛下を同列に並べるだなんて！　天皇陛下とそのご家族ご一族は神よ。神の子よ！　そして降嫁なされた天皇陛下の姫君とそのご家族、そして私達何代も続く貴族……そう、大商人や上流階級と呼ばれる一族が人間。そういう者だけが人間と呼ばれるのに値するのよ。残念ながら地球連邦の総人口の半分にも満たないのだけれどね。そしてお前達、一般庶民、中流階級と呼ばれる、この地球上に最も多くいる生き物達は半人よ。私達人間と下等生物達との中間。ありがたく思いなさいな。下等生物とも、野獣とも言われても仕方のない生き物を、『半人』と呼んであげているんだから。そして、お前がさっき言った最下層……あの下等生物達は野獣や溝鼠、そして泥よ。生き物ですらないわ。人間がそういった『物』と親しむのは、言語道断。今からでも遅くはないわ。お前と由梨亜様を今後一切近づけやしないんだから！　さあ、地に這いつくばり額を擦りつけて、許しを、私達の慈悲を請いなさい！　そうすれば、私達は人間ですから、考えてあげなくもないわ。あら、それとも……」
と、その少女は含み笑いをし、軽蔑しきった口調で言い放った。
「『半人』ですから……言葉も通じませんの？　私達人間の上品な言葉は。ねえ、皆さん」
少女はそう言うと上品に笑い、周りの少女達もそれに同調し千紗のことをなじりまくった。
「ほ～らほら。早く謝らないの？」
「さあ、早く頭を下げなさい」
「いえいえ、土下座にすべきよ」
「そうそう。それでは、そのドレスを土で汚しなさい」
「そうね。それにそんな時代遅れのドレスなんて、もう既に汚れま

みれになっていますわ」
「それならば、もう少し汚れても、文句はいえませんわよねぇ？」
「いいえ、それだけでは何か物足りませんわ」
「そうね。それだけでは足りませんから、額と顔を泥で汚すことにしましょう。ねえ、皆さん？」
「そうよ。異存はありませんよね、この『半人』っ」
「いいえ、半人とは、ちょっと……いいえ、大分美化し過ぎではないかしら？」
「ええ、そうですわ。これは奴隷よ」
「それに、奴隷は人間ではないわね」
「私達に使役される為に生まれてきた『物』よ」
「人権もないわ」
「口答えも許されなかったわよね？」
「侮辱も、許されなかったはずよ」
「直接手を触れることも許されないわ」
「私達『人間』の顔をまともに見詰めるなんて、生き恥もいい所ね」
「お前の本当に従順な先祖と比べたら、その先祖が泣くわ」
「それに、天皇陛下とそのご一族のことを口にする時は、地に跪き、額を擦り付け一言『自分のような「物」が貴方様方の御名を口にすることをお許し下さいませ。どうかご慈悲を』と言わなければいけないのでは？」
「ああ、それと最上級の敬語を使わなければならなかったのではないかしら」
「それどころか、奴隷なんかは、滅多に声を出してはいけないはずよ」
「なら、この奴隷は、奴隷に認められている生存権違反を次々に犯しているわ」
「それなら、直ぐ様この奴隷を躾けなければね」
「感謝しなさい。公共機関に言い付けないで、私達の手でやるんだから」

「ええ。それと、後で本条家の方々や私達のお父様やお母様にも言い付けなければね」
「それでは話がまとまった所で、そこの『物』、さっさとおやりなさいな」
「お前には、拒否権などと言う権利は……それどころか、生存権に定められている、『生きる』という権利以外は何の権利も持たないのよ」
「さあ、さっさとやりなさい。私達、そんなに長時間待てませんわよ」
「あら、ひょっとして、もしかすると……」
「本当の本当に、上品な人間の言葉が、お前みたいな奴隷には、通じないのかしら?」
以上、ほとんどの少女達の、千紗に対する侮辱であった。
そのことに気分を良くしたのか、少女達は勝ち誇り、驕り高ぶったように笑う。
そんな中、少女達の満足そうな、こちらを蔑む顔に囲まれた千紗の頭のどこかがプツッと音を立てて切れた。
「はぁ? あんた達、何言ってんの? 気は確かですか?」
千紗は到って穏やかに、それでいてどこかふざけているように聞こえる声で、言い放った。
千紗は、激情したり興奮したりした時は、先程のようにはっきりきっぱり言い放ち、見事に啖呵を切りまくるが、完全に切れてしまうと、ふざけたように、静かに、穏やかに、それでいて言葉の一言一句にすら、実に丹念に丹念に猛毒を仕込んだ毒針を地肌が見えなくなるぐらいにまでまぶし、それを伝えたいと思う人のみに、真冬の北極と南極を足して二で割らないぐらい冷たく、心を凍らせるように響く。
それでいて、関係ない人には全くそのようには聞こえない。
凄いの一言しか……出てこない。
「全く何を言ってるのかしらねぇこの人達は。ほんっとうに全く意

味が解らないわ～。あたしと由梨亜が、由梨亜の両親召し使い共々二年前に完全公認の親友だとも知らないでねぇ。あんたらって、そんな頭もない産まれたての小鳥かしら？　それともミジンコ？　ミカヅキモ？　アメーバ？　アオミドロ？　ゾウリムシ？　ヤコウチュウ？」

千紗は、小学校の理科で習った微生物の名前を次々に挙げていったが、少女達は眉を顰めた。

「な、何よそれ。この世に存在しない、ありもしない想像上の名前を挙げて欲しくないわ」

勇気を取り戻した少女のうちの、千紗と同い年の少女がそう言ったが、千紗は皮肉たっぷりにニコニコ笑いながら言った。

「あ～ら。何言ってるの？　この微生物の名前を知らない訳？　おっかしいわねぇ。あ～あ……あんた達は受験しなくてもいいし、そのまま黙ってても将来は保証されそうなんだけどねぇ……最低限、義務教育の中で習った内容は覚えていて欲しいわねぇ。それに、この微生物の種類を学ぶことは必修科目だったし……。ミカヅキモ、ゾウリムシ、ヤコウチュウ、アオミドロの名前を知らないのは、まぁ、馬鹿過ぎだからしょうがないとしても、よ？　ミジンコとアメーバの名前ぐらいなら、ちょっと賢い幼稚園児でも知っていそうだけどなぁ？　ああ、それとも今あたしが言ったように微生物程度の頭脳しか持ち合わせていない訳？　それとも、右から聞いたことが左へ抜けて行く竹輪耳？　三歩歩けば忘れる鶏？」

「この……！」

と、少女達が気色ばんで大声をあげようとした時、絶妙のタイミングで、その気を挫くように、後ろから声が掛かった。

「お嬢様方、どうかなされましたか？」

皆が振り返ると、そこには本条家の、それなりに高い地位で仕えているらしい、召し使いの中でも立派な服装をした男性が立っていた。

少女達は、千紗の、皇族と貴族を卑下する、あまりにも傍若無人

な態度を告げ口しようと思ったが、生憎相手の名前が分からない。
もし自分の家や、自分と同じ階級、または自分より格下の家で使えている召し使いで名前が分からなくても、
「そこの貴方」
などと、呼びかければいい。
だが、本条家は地球連邦の上流階級のなかではトップクラスである。
様々な分野で活躍し、辺境に当たる地球連邦なのにも拘らず、地球連邦初の他星に支店を出店したほどで、だからといってお金儲けにしか目がない悪徳商売人ではなく、そうやって稼いだお金を地震などの天変地異や自然災害があった所に全く惜しげもなく送り、世界中にいる貧しい人達の為に医療物資や食料、学業用品を送り、様々なことに寄付をしている。
極め付けが、何十代も続く大貴族である。
なので召し使いとはいえ、本条家に仕えている以上、ただ『貴方』と、軽々しく呼べないのだ。
そういう理由があり躊躇っていた少女の間をすり抜け、千紗はその人の下へと歩み寄った。
そして、千紗は何と、半ベソをかきながら、その人に訴えたのだった。
「坂本さん。あの人たちが、何だか分からないんですけど、何かあたしに身に覚えのないことを責められているんです……」
それを聞いた少女達は呆れ返ってしまった。
(あんなに私達を侮辱しておいて、その白々しさは一体何!)
と、全員が思った。
本気で呆れ返った。
しかし、そんなことは知らない坂本は、こう慰めた。
「千紗さん、大丈夫ですよ。貴女は分からないと思いますが、彼女達には、彼女達なりの誇りという物があるのですよ」
「そうなんでしょうか?」

それで少女達はようやく千紗の名前を知ったが、それどころではなかった。

何故かと言えば、千紗はうっすらと涙ぐんでいるだけではなく、声まで涙声になってしまっているのだ。

少女達は、あまりのことに、今度は膝がヘナヘナと崩れ、土にのめり込みそうになるのを堪えなくてはならなかった。

さすがにそれだけは、貴族の誇りに賭けてもできない。

そしてこんな腹芸は、今の自分にはできそうにない、と本気で思った。

また、何故一般庶民がこんな技を持っているのか、真剣に考え込んでしまった。

身分の上下に拘らず、商売をやっていたり政界に身を置いていたりする人間は、思ってもいないことや、物事を有利に運ぶ為の駆け引きを口にする……つまり、腹芸が重要となる。

なので、ある程度は子供のうちからできるし、やらなければならないことだが、今の千紗のように堂々と口論し、啖呵を切り、相手を窮地に追い込みながらもその仕上げとして、召し使いとはいえ、見知っているとはいえ、事情を知らない相手に涙ながらに縋りつき、それを覚られずに丸ごと信じさせるなんてことは、まだ幼い彼女らには到底無理な話である。

それどころか、そんなことができる大人もあまりいない。

しかし、二度目になるが、本当に何も知らない坂本は、少女達を追い立てた。

「そうです。さあ皆さん。由梨亜様が来られますよ」

「はい。分かりましたわ」

そういうと、何とか持ち直した少女達はツンとすまして、千紗を睨みつけながら、部屋に戻っていった。

# 第二章「誕生日パーティー」―2

庭から見て、ダンスフロアの一番左端は、幅が十メートルほどある階段がどっしりと構えている。

そして、その階段を上って曲がると、それぞれ五メートルほどの幅の通路があり、そこの使用法は先程も述べた通り、食べたり話したりする場所である。

二階の食事スペースの奥には両開きの扉があり、そこから屋敷の中に出入りができるようになっている。

三階は、大きい階段や扉がないことを除けば、二階とほぼ同じだった。

千紗（ちさ）が、

（由梨亜（ゆりあ）はあそこからくるのかなぁ……）

と、待っていたら、階段の横に司会者が立った。

（いよいよ始まるんだ……）

と思いながら時計を見ると、丁度四時になる所だ。

（上流階級ってのは……）

千紗は頭が痛くなるような思いをしたが、何とかそれを堪え司会者の言葉を聞くことにした。

『長らくお待たせ致しまして、申し訳ございませんでした』

千紗はこれを聞き、確信した。

このように待たせるのが普通なのだと。

一般的に考えれば、やっぱり時間が掛かったのかな、と思う所だが、千紗は声の響きから、ただの社交辞令に過ぎないと分かった。

『ただ今より、本条由梨亜（ほんじょう）様の誕生日パーティーを開催致します。本日は八時までと、大変短い時間ですが、皆様、どうぞお楽しみください。それでは、本日の主役、由梨亜様とそのご家族が入場されます！』

会場にいた全員は、ぱっと後ろを向いた。

そして、二人の召し使いにより、二階の両開きのドアが開けられ、そこから由梨亜と両親が入ってきた。

会場にいた者は皆、由梨亜の姿を、まるで光の妖精、海の精霊のようだと思った。

何故なら、由梨亜が身に纏っていたのは、まだ中学生という幼さにぴったりの無地のドレスだが、だからこそ放てる威厳という物があったので、下にいた者達は固唾を呑んで見ているしかなかった。

扉から出てくると、三人は左側の通路を通り、階段で三人並んで下に下りてきた。

下に着くと、司会者は

『皆様、これからパーティーを始めますが、その前に、本日の主役、由梨亜様からご挨拶があります。それでは由梨亜様、お願い致します』

と言い、由梨亜に簡易拡声器を渡した。

『皆様、本日は私の誕生日パーティーにご出席戴きありがとうございます。本日は私の年齢のこともあり時間は短めとなりますが、どうぞごゆっくりお楽しみ下さい』

由梨亜はそう言い、完璧なまでに見事に貴族の令嬢に相応しい礼儀正しいお辞儀をして、父母の所へ行った。

『えー、皆様。本日の主役は由梨亜様でございますが、由梨亜様はまだ婚約者がおられませんので、本日は由梨亜様のご両親、本条ご夫妻が最初に踊られます』

そこで、耀太（ようた）と瑠璃（るり）はお辞儀をして前に進み出た。

ダンスフロアの一階部分の壁は、一面は階段に、もう一面は庭に通じるガラス扉となっていたが、更にもう一面は紅色の垂れ幕に覆われ、こちら側からでは見えなくなっていた。

千紗は今までそこには一体何があるのだろうか、と考えていたが、その時に謎は解けた。

そこには最低で五十人、最高で百人ほどの楽人が控えて、と言うよりは、いつでも楽器を弾いたり吹いたりできるような体勢で待っ

ていた。
そして、指揮者が指揮棒をあげ、ワルツを弾き始めた。
全員が見守る中、二人は見惚れてしまうほど優雅に一曲踊り、お辞儀をした。
拍手が一斉に沸き起こって、司会者は律儀に待っていたが、一分ほど経った所で、このままでは時間がずれまくって仕方がないと思ったのか、召し使いとしては失礼ながらも、拍手の途中で拡声器を使って大声を張り上げた。
『え～、皆様！　お静かに！　お静かに願います！　皆様！！』
そして、ようやく静まった所で、司会者は司会の仕事を再開した。
『皆様。ただ今、グラスをお配りしておりますので、少々お待ち下さい』
この言葉に千紗が失礼にならない程度に辺りを見回すと、カートを押している召し使い達が、大人にはシャンパンを、未成年やお酒の飲めない人にはジュースを配っていた。
『お飲み物が皆様の手に渡られたら乾杯を致します。それが終わられたら七時半まで自由でございます。楽人達は、基本的にずっと演奏を続けておりますので踊られていても構いませんし、皆様が今おられる所の後ろや二階や三階、お庭などで飲食をなさってもかまいません。しかし、七時半までにはここに今のようにお集まり下さい』
司会者がそうして話している間に、全ての人にグラスが渡った。
『それでは、皆さんにグラスが渡ったようですね。それでは、由梨亜様、お願い致します』
由梨亜が前に出て、左手に司会者から手渡された簡易拡声器、右手にグラスを持つと乾杯の音頭をとった。
『皆様、今宵は十分に楽しんで下さい。乾杯！』
「乾杯！」
と、皆が復唱し、一斉に飲み物を飲み干した。
そこから、空気は一気に砕けた物になり、それぞれ談笑しながら、食べ物を食べたり、ダンスフロアに出て行ったりした。

楽人達は、先程とは全員入れ替わり、ワルツを演奏し始めた。
千紗は、乾杯が終わってからすぐ由梨亜の元へと向かおうとしたが、先程の少女達がそうさせなかった。
「生意気よ」
と、小声で言うと、さりげなく数人ずつ固まって散らばり、千紗が由梨亜の元に向かうのを阻止したのだった。
千紗は、それのせいだけではなかったが、由梨亜の元に向かうことを諦めざるを得なかった。
何故なら、少年達三十人のうち五人が由梨亜にダンスの申し込みをしていたからだ。
残りの二十五人は、そこら中に散らばった少女達を値踏みし、ダンスの申し込みをしていた。
ちなみに言うと、千紗にその目を向ける少年はただの一人もいなかった。
千紗は食事が並べてある所に行くと、食べ物をある程度取り、庭に行って食べ始めた。
千紗は、なるべくゆっくりと食事を摂り、一番建物から離れて座って、しかも二、三回ほどお替りまでしたが、五時半頃にはもう全て食べ終わり、お腹も一杯になってしまった。
そこで、仕様がないから、中に入って優雅な貴族のダンスでも眺めていようと中へ入った。
そして、ふと
(由梨亜って、まだ踊ってるのかな……?)
と思い、踊っている人の合間を縫って視線を巡らすと由梨亜がまだ踊っているのが見えた。
だが、相手の少年は先程の五人ではない。
一曲踊る分と、パートナーを変えたり、楽人が変わったりする為に曲の間に空く時間が、合計でおよそ十分は掛かることを考えると、時間的に見て今はだいたい九曲目なのだから、九人目となる。
千紗には由梨亜のニコニコとした笑顔が見えたが、その笑顔は他

の人が見れば普通にニコニコ笑っているなぁと思うかもしれないが、千紗には由梨亜が疲れているのが見て取れた。

（由梨亜、よくそんなにできるなぁ……）

と、思いながら、由梨亜が踊るのを眺めていた。

曲が終わると、由梨亜は相手と別れたが、また次の相手が来て踊った。

（由梨亜の相手をするぐらいの人が、このパーティーに最低十人……）

千紗はそう思うと目眩がしてきた。

本条家は上流階級の中ではトップクラス。

本条家とほぼ同等の上流階級の家はそれなりにあるが、敵対する家を除くとその半分くらいになる。

その中でも、由梨亜と釣り合う年齢の子息がいるのは、更に半分……。

それに、いくら初めてとは言え、一人娘とは言え、このパーティーは『本条家の一人娘、本条由梨亜の誕生日パーティー』である。

なので、そんなに招いた、由梨亜の父、本条グループの再頂点に立つ本条耀太に対する思いが、感心を通り越して、呆れた物に変わってしまった。

由梨亜が踊るのは見ていて飽きず、飲み物を飲みながら一時間ほど見続けてしまった。

そして十五人目と踊り終わった後、ようやく由梨亜はダンスの相手から解放された。

そして、千紗は今度こそ由梨亜の所へと行った。

今回は、邪魔する少女達はみんな踊ってしまっていて、邪魔ができなかった。

ちなみに、その少女達は自分に申し込んで来た少年達と踊っていて、

「しまった！」

と、思い、すぐに駆け寄って間に割って入れないことを悔やんだ

のだ。

「由梨亜！」

千紗は、由梨亜が解放されるとすぐに呼びかけた。

由梨亜もすぐに気付いて、

「千紗！」

と、返した。

「由梨亜……大丈夫？」

と、千紗は思わず声をかけてしまった。

何故なら由梨亜はとても疲れ切っていて、見ているほうが疲れるような様子だったからだ。

「もう駄目、絶対に踊れないわ。十五人と踊ったんだもの。これ以上踊れって言われたって脚が疲れていて無理だし、お腹もペコペコよ。絶対に踊らなきゃいけない義理や縁のある人とはもう踊り終わったし、これ以上申し込まれても断れるし私自身断る気でいるから、もう大丈夫！　後はゆっくり休めるのよ！」

「じゃあ、お庭で夕ご飯食べなよ！　あたしはもう食べ終わっちゃったから飲み物でも飲んでさ！　丁度いい穴場があるんだ。あんまり周りから見えないから、内緒話とかするのにすっごい丁度いいの！」

「そうなんだ。じゃあ、そこで食べたり飲んだりしよっか」

そして、由梨亜は一人で食べ切れるのかと思うほど沢山食べ物を盛った二皿のお皿が乗ったカート、千紗は大きめのコップを二つに、更に大きな入れ物に入った飲み物が二本乗ったカートを押して、千紗の言った穴場――つまり、千紗が食事をした所に向かった。

そして、食事をしながら、他愛のない話をしていた。

つまり、こんなに大きなパーティーを開くと一体どれぐらいお金が掛かるのだろうとか。

こんなに人が来ていたら、顔も名前も覚えていられないとか。
夏休みの宿題が、どれぐらい終わったとか。
部活のこととか。
この前やった、百怪談で見つけた、何の変哲もない日記帳のこととか。
そして、由梨亜が食べ終わると、千紗は本題に入った。
「由梨亜、あのね、ここに招待された女の子達いるでしょう？　その子達に言われたの。あたしと由梨亜を近付けさせないって」
そして、千紗はさっきの少女達との言い争いの内容をほとんど正確に、しっかりと伝えた。
もしその少女達が千紗の言うことを聞いたら、真っ蒼になって逃げ出すこと間違いなしだろう。
何故なら、第一に由梨亜にそんなことを聞かれたら、今後社交界での彼女達に対する由梨亜の心証が悪くなるだろうし、第二に彼女達は、千紗のようにそこまで正確に会話の内容を復唱することは全くもって必要のないことであるし、実践する機会すらないので、そのこと自体に恐怖を覚えるだろうからである。
そして、それを聞いた由梨亜は、思わず笑ってしまった。
「千紗……い、いくら何でも、て、天皇陛下と、物乞いや奴隷を……同列に、並べるなんてっ……！　スケール大きい！　そんなの誰も思いつきやしないよ！　さっすが千紗！」
由梨亜は時間を掛けてようやくそこまで言うと、身体をくの字に曲げ、声を殺して大爆笑した。
「由梨亜……笑うか話すかどっちかにして……」
千紗のそう呆れ返った意見は、千紗にしては珍しくしっかりした物で、周りからの賛成も得られそうだった。
「まあ、でも彼女達も言い過ぎね。半人やら野獣やら下等生物やら。それに、奴隷だなんて……一体何千年前の話よ。今のこの世の中に、奴隷なんている訳ないのにね」
「ん～。でもあたし、あいつらが『奴隷に生存権がある』って言っ

たことに驚いたな。だって生存権って、『健康で文化的な最低限の生活を営む権利』でしょ？　あの人達の、その前後の発言とは矛盾してると思うんだけどなあ。それに、人権はないのに生存権はあるって……矛盾の塊じゃない」

「まあ、知らなかったんじゃないかしら。あの人達は無知な貴族の典型例だからねえ。知らなくっても不思議じゃないわ。あの人達、生存権をただの『生きる権利』とでも勘違いしてたんじゃないかしら。でも……」

そういうと、由梨亜はクスッと笑った。

「千紗が切れるなんて……よっぽど頭が悪い上に口も悪いのね。それに、『貴族』という身分でガチガチに固まっている、『偏屈婆ぁ』の予備軍よ」

そう断言すると、由梨亜はヒソヒソ声で千紗に話した。

「ねえ、千紗。相談したいことがあるの」

由梨亜のさっきとは打って変わって真剣な顔と口調に、千紗も半分笑っていた顔を引き締め、千紗も真剣に問い返した。

「何、由梨亜？」

「あのね……夏休みに入る一ヶ月くらい前、席替えがあったでしょ？　その時、私の隣の席、藤咲香麻君になったの、覚えてる？　それでね、話しかけられた時、笑いかけられた時……。胸が苦しくなって、ドキドキしたの。ねえ、千紗。これって、一体何？　すっごく、辛くて……」

「由梨亜……」

千紗は、思わず呆れ返ってしまった。

由梨亜が『お嬢様』だということは、千紗も重々承知していたが、ここまでの箱入りだったとは――。

「ねえ、千紗、教えて」

「由梨亜……それはねぇ……貴女は香麻君のことが好きなのよ」

「そ、う……なの？」

「由梨亜、初恋ってしたことないの？　って言うか、たとえ初恋が

まだだったとしても、よ？　そういうの、小説とかドラマとかアニメとか漫画とか……そういうので、知らなかったの？」

千紗は、呆れてしまった。

そして、

（まさか……そんな分かりきったことを訊くなんて……）

と思い、思わず溜息が出てしまった。

「ええ。まだなの。と、言うよりは、恋って物――好きっていうことが、よく分からないのよ」

「そうなんだ……。ところで、由梨亜」

千紗は、先程の重い溜息とは打って変わって、明るい口調で言った。

「その、あたしがあげたアクセサリー、全部付けててくれたんだぁ」

千紗は、感激したように、続けた。

「由梨亜、やっぱりお嬢様だからさ、アクセサリーとかも一杯あるでしょう？　それに、いくらでも気に入った物はバンバン買うことができるし……だから、新しいドレスを買ったとしても、それに合わせてアクセサリーも買ったりすると思ったから、あたしの作ったのなんて、付けないかと思ってたよ。精々が、持って来るくらいで。それに、たとえ付けることがあっても、こういう大きいのでは、絶対に付けないと思ってた。なのに……」

「もうっ！　千紗ったら、馬鹿じゃないの？　折角千紗が私の誕生日の為に、手作りで作ってくれたんだよ？　そんな大事な一生の宝物、私が付けない訳ないじゃない！　それに……」

と言うと、千紗の方を見た。

そして、にっこり笑って言った。

「千紗だって、私が作ったの、付けてくれてるじゃない！」

「それこそ、その言葉そっくり返すよ！」

二人でひとしきり笑った後、七時三十分が近づいてきたので、会場に戻って行ったのだった……。

# 第三章「婚約者」―1

由梨亜は、とってもご機嫌だった。

日記帳は先輩の悪戯だと思っていながらも、先輩に直接訊ねることはできなくて少し苛々していたが、自分が初恋と言う物を体験できたことが分かり、千紗に貰った誕生日プレゼントのアクセサリーが気に入ったこともあり、その日はにこにこしっぱなしだった。

ある、耀太からの報告を聞くまでは。

その翌日、由梨亜が部活に行って帰ってきた午後のことだった。

「由梨亜、話がある。ちょっと来てくれないか」

そう耀太に言われ、由梨亜は客を迎える応接間へと向かった。

由梨亜がそこでしばらく待っていると、鈴南が誰かを連れて来た。

「失礼致します。どうぞ、こちらへ。由梨亜お嬢様がお待ちでございます」

「失礼します」

と、由梨亜と歳の近そうな少年が三人……。

由梨亜が呆気に取られていると、最初に入って来た、どこか気取っている少年が、取って付けたような微笑を顔に浮かべ、挨拶した。

「初めまして。僕は眞湖グループ第百三代総帥眞湖翔碁の三男、眞湖聡と申します。歳は十六です。貴女のような素晴らしい女性と知り逢えた僕はかなりの果報者でしょう。どうぞ僕のことをお忘れなきようお願いします。そしてこれから宜しくお願い致します」

と、昨日の由梨亜の誕生日パーティーで一緒に踊ったので初対面ではないものの、たったの二回目の由梨亜を口説き優雅に一礼し下がると、厳つく頑丈な身体付きの少年が挨拶した。

「初めまして。僕は蔡条グループ第百十四代総帥蔡条瑛彦の弟の三

男、蔡条護と言います。僕の二人の兄は子供のいない伯父の為に養子となり、一番上の兄は蔡条グループの跡取りとなりました。その為、僕がこのような晴れがましい栄誉に浴することとなり、とても光栄に存じます。歳は十五です。宜しくお願いします」

見た目とは大変裏腹に、かなり優しい口調で（演技かも知れないが）自己紹介と自分の宣伝を行うと、サッと一礼し、今度は護とは対照的な、あまり筋肉もついておらず、痩せていて、少し青白い顔で眼鏡を掛けた、学者タイプの少年が挨拶をした。

「初めまして。その、僕は紺城グループ第九十八代総帥、紺城智早の四男で、紺城早宮と申します。歳は、その、由梨亜さんと同い年で十三です。このような大役が、僕に務まるかどうかは分かりませんが、精一杯頑張るつもりでいるので、宜しくお願いします」

そう早宮が言い、頭を下げて一歩下がり、由梨亜は他の二人と並んだ三人を、眺めながら、

（さっきから『果報者』やら、『晴れがましい栄誉に浴する』やら、『大役』やら……一体、何を言っているのかしら……？）

と思い、由梨亜は自分の隣に立っている耀太を見上げ、訊ねた。

「お父様……この方達……は？　何故、今日家にいらっしゃるのでしょうか？」

「由梨亜、この方達は、由梨亜の婚約者候補だ」

「……はいっ？」

裏返った声で、由梨亜は言った。

たっぷり、十秒間の沈黙だった。

「由梨亜、お前ももう中学生だ。婚約者を決めなくてはならない。今はまだ決めなくてもよい。だが最終的に、遅くても大学に入学する時に決めろ。時間はまだたっぷりあるからな。但し、この中の三人から、絶対に選べ」

耀太はそう由梨亜に言うと、

「さあ、今日は対面だけだからな。今後は、毎週土曜日の午後か日曜日に来てくれ。それでは、ありがとう。また来週」

そう言うと、耀太は
「鈴南、聡殿、護殿、早宮殿をお送りしてくれ」
と言い、部屋を去り、聡、護、早宮の三人は、
「それでは、由梨亜さん。また来週お会いしましょう」
とそれぞれ言い、鈴南に連れられて出て行った。
皆が部屋からいなくなった途端、由梨亜は近くのソファーに座り込んでしまった。
（そんな……せっかく、初恋ができたって言うのに……まあ、私は本条家の跡取り娘で、婚約者候補の存在がいるってことを忘れていた私も悪かったんだけど……）
そう思うと、もうやる気がなくなってしまう。
（せめて、携帯端末で千紗に連絡とってこのこと伝えないと……って鳴呼！　私、端末は内線用しか持ってないんだった！　千紗に外線で連絡しようにも、鈴南とかが見張ってる中で、どうしたらあんなことを言えるっていうの!?　鳴呼、もう……無理だよぉ……）
しかも、夏休み明けでもある、五日後の月曜日の二十四日にならなければ、部活すらない。
こうなってしまっては家から出ることすらも怪しまれ、出られないので、千紗の家にも行けない。
我慢して、耐えるしかなかった。

五日後、由梨亜は教室に行くと、真っ先に千紗に声を掛けた。
「ねえ、千紗。ちょっと……いいかな？」
「どうしたの？　由梨亜」
「ちょっと、ここだと話しにくい話だから……昼休みに、いい？」
「うん、別にいいよ？　で、どこで話せばいいかな？　教室なんか論外だし……校庭だと、運動部とかが昼練しに来たり、遊んだりする人がいるし、食堂も……」

「だったら、屋上とか……どう？　屋上の、東屋みたいになってる、緑で囲まれていて、でもベンチのないとこ……」
「うん。わかった。じゃあ、ついでにお昼屋上で食べない？　お昼食べながら話すような内容じゃなかったら、食べ終わってからでもいいし」
「ええ……そうね」
「じゃあ、あたし先生に許可取ってくるね」
「うん……お願い」
そう言った由梨亜の姿は、頼りなく、儚げで、長く由梨亜といる千紗には、何か思い悩んでいるということが分かった。
千紗は珍しく眉根を寄せて考え、結局答えは出なかったが、昼休みになれば分かることだ。
千紗は難しいことを考えるのを放棄し、とりあえず授業に集中することにした。

昼休み、二人は朝約束したように、屋上で食べていたが……二人とも無言で食べていた。
食べ終わった後、千紗は由梨亜に言った。
「ねえ、由梨亜。何、あたしに教室じゃあ言えないことって？　何のことなの？　お弁当も食べ終わったし、言って？」
「うん……。あのね、千紗。五日前、あの私の誕生日パーティーの次の日、お父様が、十六歳で、眞湖家の三男の聡さん、十五歳の、蔡条家の会長の弟の息子さんで、二人のお兄さんがその伯父さんの養子となった三男の護さん、十三歳で紺城家の四男の早宮さんが……私の、ね……婚約者候補として、来たの。それで、高校を卒業してから大学に入る前の冬休みの間に、その三人の中から、婚約者を決めろって。ほんと、私……」
そう言うと、由梨亜は涙ぐんだ。

ちなみに、この全世界では、基本的に新年を迎えると同時に進級することになっていて、地球連邦も同じだ。
「あ……ちょっと、いい？　由梨亜」
「何……？　千紗……」
「あの、さ……由梨亜、まさか三人と結婚するわけじゃないでしょ？」
「うん……そうだけど……？　何当たり前のこと訊いてるの？」
「ってことはさ……必ず二人は選ばれない訳でしょ？」
「うん」
「選ばれなかったら、どうするの？」
「それは、ちゃんと男の跡継ぎがいる場合の女の子、または私みたいに女の子しかいないけどその子に姉がいる子とか、とにかく跡継ぎじゃない女の子と結婚するの。まあ、相手が一般庶民の漫画みたいな大恋愛もあるけど、確率としては、一パーセント未満ね。で、私みたいな跡継ぎ娘と婚約する場合、聡さん、護さん、早宮さんにとって、私は『第一婚約者』なの。で、さっき言った、跡継ぎじゃない女の子が『第二婚約者』。私が結婚した人の第二婚約者は結婚できないけど、将来にはいくつか方法はあるわ。まず、行かず後家になって一生屋敷に残る道。だけど、その道を選ぶ人は非常に少ないわ。第一、特別な理由がない限り親兄弟が追い出すわね。余程その家に役立つような特殊能力を持ってたり、とても外にもお嫁に出したりできないような人じゃない限り」
由梨亜はそう言って肩を竦めた。
「あと、自分の興味の高い物とか、自分に向いている分野を、専門学校とか大学とかで技術を手にいれて、庶民として一人暮らししながら働くの。それと、自分の家より身分の高い家に仕えることね。私の家で働いている女性は、ほとんどそうよ。鈴南だってそう。男性で働いている人は、特に次男が多いわね。何て言ったって、長男に子供ができずにもしものことがあれば、その後を継ぐのは次男だもの。他家にお婿に出したら、その結婚した人の子供がすっごい迷

惑を被るわ。だけど、他家に仕えさせればそこの家との縁もできるし、いざとなったら仕事を辞めさせて家を継がせることもできる。お婿に出すよりかなりお得よ。もしくは、男女両方ともだけど、一般庶民と結婚する場合もあるわ。確率的に多いのは、他家に使える、一般庶民と結婚、独り立ちする、行かず後家の順番ね」

「へぇ……そんなことできるんだぁ」

「まぁ、結婚の場合、九十九・九パーセント政略結婚なんだけどね」

「はっ？」

千紗は、思わず訊き返してしまった。

貴族との結婚なら、政略結婚なはずだが、一般庶民との結婚なら、該当しないはずなのだ。

一体、何故――。

「一般庶民と言っても、本当は違うの」

「……え？」

「一般庶民って言っても、それなりに力はあるけどまだ一代目、二代目の成り上がりとか、お金をがっぽり溜めて寄付も何もせず富豪と呼ばれる家、それに政治家……その人達も貴族と庶民の区分で見れば庶民に入るから、政略結婚で庶民と結婚なのよ。それに、たとえ独り立ちしても、結局働く所は、自分の親とか親戚とかの会社や、その会社と繋がりがある会社。そしていざ結婚するとなっても、その会社の有力者と結婚してその伴侶が自らの家を裏切らないように……もしその伴侶が裏切ろうとしたら、自らの生命を懸けてそれを止める……見張り役。それか敵対する会社、同じだけの力を持った会社に……もしかしたら、将来自分達に危害を加えるかもしれない会社の人と、事実上の人質として結婚するわ」

由梨亜はそう言うと、悲しげに目を伏せた。

「それに、この人と結婚したいと思って結婚する人は、ほとんどいない。私達は、そう言う風に育てられてないもの。私だけが例外な訳で……。まあ、他にもそういう人はいるかもしれないけど、その結婚したいと思っている相手がその家の条件に合わない人だったら、

絶対に認めないわ。何があっても阻止しようとする。まあ、その条件に合わない人と駆け落ちしたらひとまず諦めるけどね。でも……もし、子供が産まれたら……最悪よ」

「えっ……何で？」

（駆け落ちしたら諦めるのに、子供が産まれたら最悪？　つまり、諦めないってこと？　普通、逆なんじゃないの？）

千紗は、全く分からなかった。

「子供が産まれたことは、戸籍を見れば分かるもの。どんなに隠そうとしても。役所の人間も、貴族には逆らえないでしょうしね。そして、どこにいるのか見つけ出したら、その子供は実の祖父母の命令によって、親から誘拐される。そして、その両親は二度と子供に会えないまま一生どこかで働く。時にはその二人すら引き離すこともあるわ。でも……でもね、もし見つけられなくて捕まえられなかったら……そして子供がある程度大きくなったら、認めてくれるの。そして自らの娘、息子、孫として認められて、様々な便宜を図ってくれるわ」

「そうなんだ……でも、由梨亜は……」

「ええ。私には、できないわ」

そう言った由梨亜の顔には、諦めの色が色濃くあった。

「私には兄弟姉妹がいないし、父方の叔父さんや大叔父さんなんていないから、他に直系の跡継ぎはいないのよ。この本条家の跡を継げるのは、この私、ただ一人だけ。たとえ駆け落ちしたとしても、捕まって、家に閉じ込められて、一生、自由に外には出れなくなる……」

由梨亜の疲れたような、諦めたような声を聞き、千紗は胸が痛くなった。

「でも、諦めちゃ駄目！」

千紗は激しく、強く言い放った。

「千、紗……？」

思わず呆気にとられる由梨亜を尻目に、千紗は立ち上がって言っ

た。
「あたしは、人を好きになるって、そういう物じゃないと思う！　勝手に決められて、好きでもない奴と無理やり結婚させられて、『後からいくらでも好きになれる』だなんて勝手なお題目を、さもあり得そうに言い切って……そんなの、生き物のすることじゃないよ！　そして、そんなことをさせる奴は、絶対に生き物の生き方を知らないし、知ろうともしない！　少なくても、普通の生き物の心なんか持ってない！　由梨亜、諦めたら駄目だよ！　絶対に！」
「千紗……そんなことよりも……」
「何？！　そんなことって！？」
「お弁当箱」
「……オベントウバコ？」
千紗は気勢を削がれ、ぽかんと間が抜けたように、オウム返しに言ってしまった。
「お弁当先に食べ終わってて良かったね。お弁当箱、膝から落ちて、転がっちゃってるよ」
「ちょっ……ちょっと、由梨亜！　気付いてるなら早く言ってよ！　あ～あ、お弁当箱が砂まみれ……お母さんになんて言おう……」
その呆然とした声に、笑いを噛み殺しながら、苦笑するように、たしなめるように言った。
「千紗、何かを乗っけてそのまま立ったらどうなる？　それは見事に従順に、重力従って落下するでしょうが。それに人の話に途中で割り込むだなんて、人としての礼儀に反するわ」
「あっ……そっか……」
「まったくもぅ。千紗ときたら。あっそうだ」
由梨亜は、なにやら鞄をゴソゴソと探った。
「え～っと……あった！　はい、千紗。遅れてごめんね。これ、もう書いてたんだけど、あの婚約者候補のことがあって、お父様と鈴南達の目が厳しかったから、外に出にくくって。ごめんね」
「そっか……ありがとう、由梨亜。でもさぁ、この交換日記帳って、

本当に先輩達の悪戯なのかなぁ？」
「えっ？」
「だってこれをするようになってから、由梨亜が変な視線感じたり、婚約者候補がいきなり出てきたりしたんでしょう？　何の前触れも、予兆もなしに。それって、変だよ。そんなの、いつだっていいのに。これは、偶然って言うの？　もしかして、何かの力が働いているんじゃないのかな？」
「ま、まさか……ただの偶然よ。千紗らしくないわ。全然、科学的じゃないわよ」
「……だけど、きっと何かあると思う。だって、これ、変だよ。それに……悪戯ごときで、先輩達があたし達をつけるとは思えないし」
「う～ん……そんなこと言われても、ねえ……じゃ、今日の部活の時、先輩に問い質してみましょう？　そうすれば、私の勘違いだったって証明されるかも知れないし」
　由梨亜が明るく言った途端、女性の澄んだ声が……ただし、男のような口調で、二人の耳に届いた。
『よく、分かった』
「えっ……」
「嘘……」
　二人が驚いたのも、無理はない。
　何故なら、その声は、千紗が持っていた日記帳の中から聞こえてきたのだから。
「日記帳が……喋ったのかしら……」
「ま、まさか……あり得ないよ……もしかして、先輩達……こんなのに、小型スピーカー付けてた、とか……？　あ、あと、盗聴器……？」
　あまりの出来事に現実とは思えず、唖然呆然としている二人を余所に、交換日記帳は眩しい金色に輝いている。
『お前達の望みを叶えよう。さあ、行くのだ。自由な、千年前の世界へ……！　お前達の、真の姿を取り戻す為に……！』

（千年前……確か、その時身分同一化運動が起こって、成功して……一時的に……確か二百年間、身分の同一化運動に成功したから、世界は身分社会じゃなくて完全な学歴社会になって……身分の面では、確かに……確かに、自由で！）

そこまで、千紗が一瞬のうちに考えた途端、直視すれば失明してしまうかも知れないほどの、眩い光が駆け抜け……。

そして、その光がやっとのことで去り、目を瞑ったりしなくても見えるようになった屋上には、何と、由梨亜と千紗の姿が、跡形もなく消えていた。

しかも、その光に気付いた人物は、誰一人としていなかった。

二人は空間と空間を繋いでいる、『何だかよく分からないトンネル』にいた。

と言っても、正確には、二人がしっかりと手を握り合ったまま、矛盾しているとは思うが、無重力に似た足元の心許なさを感じたまま、下に向かって落下しているのだが。

周りは一体何色と言ったらいいのか……それとも言葉で言い表せないのか……様々な色が輝き、けれど混ざって汚い色にはならず、色が流れていると言う表現がぴったりだ。

そんな中を下に降りていくと、下にしっかりと固定された色が――いや、景色がある。

そして、そこに近づくほど、キーンとした音が、強くなり、強くなり……そして、様々な色が輝くトンネルから吐き出される瞬間、二人はあまりにも大きな、大きすぎる音によって、気絶してしまった。

気絶してしまうその瞬間の少し前、千紗の耳には、鈴を振るような、高く澄んだ、綺麗で不思議な声が聴こえて来た。

『何も、怯えることは御座いませんわ。貴女とその友の、乱れ絡ま

り合った運命を、元に戻すだけなのですから……。貴女にとっては、とても、とても辛いことでは御座いますが、それが――貴女の身体で感じ、体験した、それだけが、真実で御座います。元に戻るだけなのですから……落ち着かれて、全てを、御受け入れ下さいませ……』

（何言ってるの？　この人。あたしと由梨亜の絡まり合った運命って、一体……何？　何なの？　元に戻るって？　受け入れるってったって、何を受け入れればいいの？　もう……もう、訳分かんないよ！　って言うか、何この敬語！　こんな敬語、普通は使わないでしょ！）

千紗は少々変なことを考えながらだったが、由梨亜と千紗は、二人にとっては異世界としか言いようのない時代に、飛ばされていた。

生活習慣は勿論、言語までもが違う時代へと――。

# 第三章「婚約者」―2

「千紗……千紗！」

珍しい由梨亜の慌てているような、急かすような声が聞こえ、千紗はこの時代で目覚めた。

「由梨……亜？　ここって、一体……」

「分からないの。私もたった今目が覚めた所で……」

と、由梨亜は泣きそうな顔で言った。

そこへ、ドアを開き、一人の女性が入って来た。

「――？」

「えっ？」

「何て言ったの？　解る？　由梨亜」

「いいえ。私にも、さっぱり……」

「――。――？　――？　――」

「千紗、私、この女の人が何て言っているのか確実には答えられないけど、大体の意味は解ったわ」

そう言って溜息をついてから、由梨亜は言った。

「『すみません。あの、何て言ったんですか？　もしかして言葉が解らないんですか？　私にも、何て言ってるのかさっぱり解らないんですけど……』って」

そして、そこにいた女性は、また何やらよく解らない言葉を発し、いきなりドアを開けて、飛び出して行った。

千紗は、まだ目覚めてからあまり時間が経っていない為、どこかぼんやりとしていたが、由梨亜はそれよりも前に目が覚めていたので、頭が少しはっきりしていた為、何とかパニックになりそうな気持ちを抑えてから周りの様子を観察した。

そこは全面白い壁になっている小さな部屋。

出入り口の所には水道があって、手が洗えるようになっている。

他には、とってもとっても古い、小さな冷蔵庫と思われる物、あ

とは、歴史の授業で習った、だいたい千年ぐらい前まで使われていた、テレビと言う情報を得る為の端末、二人の寝ている、二つのベッド……。

辺りは、薬臭いような、消毒液の臭いがして……。

そこまで考えた途端、直感的に、由梨亜にはここがどこだか分かった。

「千紗、ここ病院よ」

「えっ？　でも病院の普通病棟って昼間は階全部が一繋がりで、場合によって隔壁装置を作動させる明るい場所でしょ？　ここは何だか暗い雰囲気だし、ここじゃあ治る病気も治らないよ」

「ええ。だから、ここはそんな装置もなくて、そんな分かりきったことも分からない……大分昔の、時代。それも、何百年前、って言う……」

「ここって、やっぱり……千年前の世界なのかな……」

そこまで言った時、さっきの女性――そして、ここが病院だとすると、恐らく、看護師と思われる女性が、様々な人を連れて来た。

その人達は十人ほどだった。

そして、恐らくその人達の母国語であるような、先程の女性とはまた違っている言葉を喋っていったが、ほとんど分からなかった。

だが、中に一人、言葉が少し解る人がいた。

「貴女は？」

と訊いて来たのだ。

彼は地球連邦の古代語を喋っていたが、千紗はその古代語で、喜んで答えた。

千紗と由梨亜は、中学校に入ってからの選択授業で、古代語を習っていたのだ。

だから、簡単な会話なら、できるようになっていた。

「あたし、貴方の言っていることが解るわ！　あたしは彩音千紗（さいいん）。十三歳よ。彼女は本条（ほんじょう）由梨亜。十三歳」

「貴女は、彩音……千紗？　そちらは本条……由梨亜？　そして、

十三歳？　そして、何故――？」

その後、その人が喋った言葉は、まだ古代語を習って間もない二人にとって、少ししか意味の解らない物だった。

その二日後、二人がその病院らしき所で、図書室に行った。

そこには様々な本があったが、ほとんどが読めない物だった。

やはり、少しなら意味の解る本はあったが、まだ習っていない単語や文法が大量にあり、よく意味が解らなかったが、大抵の発行年は二千百年代頃だった。

そして、その中から、千紗がある物を発見した。

「ねえ、由梨亜。これって……」

呆然としたような千紗の口調に、由梨亜は首を傾げながら言った。

「どうしたの？」

由梨亜が駆け寄り、千紗の手に持っていた物を見た途端、唖然としてしまった。

何と、あの日記帳が千紗の手に載っているのだ。

「な、何、これ……一体、何がどうなっているの？」

由梨亜がそう言った途端、千紗の手の上にあった日記帳から眩しい銀色の光が溢れ、千紗と由梨亜は思わず目を瞑ってしまった。

そしてその光が去った後、看護師がやって来た。

「あら、ここにいたの？」

（えっ？）

二人はとても驚いた。

今までは何を言っているのか解らなかったのだが、今は何を言っているのか解るのだった。

「もうそろそろ検査の時間だから戻りなさい……って、ニホンゴは通じないんだった。エイゴも初歩的な物しか通じないし……えっと、私と」

と言い、右手の人差し指で自分を指すと、
「貴女達二人が」
と言い、左手の人差し指と中指で由梨亜と千紗を指し、
「一緒に行く」
と言って、その三本の指をくっつけ、移動させた。
由梨亜と千紗は、
「分かりました」
と言ったが、相手が首を傾げたので地球連邦の古代語で言い直した。
すると、その看護師は、
「ほんと、何言っているんだか解らないわ。名前を言った言葉とか、こっちに話し掛けてくる時に喋っている言葉はエイゴだけど、名前はニホンジンっぽいし……でも、二人で話している言葉はニホンゴどころじゃなくって全然聞き覚えもないし、意味も解らないし……」
と、独り言を言った。
だが、千紗はその話の内容でもなく、先程の異常現象のことでもなく、別のことを考えていた。
（エイゴ……って、何？　ニホンゴ？　ニホンジン？　意味解らないよ。でも、あたし達が話しかけられて少し解った言葉……あれは『エイゴ』だったのね。そして、彼女が話している言葉は『ニホンゴ』……）
そして、由梨亜と千紗は一緒に病室に向かった。
あの、交換日記帳を抱えたまま……。

検査が終わった後、二人はその交換日記帳を開いた。
自分達がこんな所に来た理由を知る為に。
その交換日記帳には、二人が書いた内容もなく、二人が期待したような内容もなかった。

しかし、実際書かれていた内容は、読まなければ良かったと思うほど、嫌な物だった。

《我ハ　コノノートニ　閉ジ込メラレシ者ナリ
面白半分ニ　フザケタ願イヲスル者ニ　禍アレ　呪アレ
真剣ナ思イヲ　抱エシ者ガ　コノノートヲ手ニスル時ニハ　祝福ヲ
我ハ　知ッテイル
コレヲ手ニシ　我ガ祝福ヲ与エル存在ト　ソノ者ガ望ムコトヲ
故ニ　我ハ一時的ナ物ナレド　ソレヲ授ケヨウ
差別ノナイ　世界ヲ
ソシテ》

そこで、交換日記帳の文章は、途切れていた。
と言うより、恐ろしいことに、血に汚れて見えなくなっていた。
そしてページをめくると、そこには、ぽつりと、まるで切望するかのように続きがあった。

《我ハ……望ム
其方達ノ　真ノ幸セヲ
我ハ　コノノートニ　吸収サレタ生命
ナレド　未ダ消滅シテオラヌ　生命ナリ
ソノ生命ガ　消エ失セルヨウナ危険ヲ　冒ソウトモ　我ハ　其方達ヲ護ロウ
永遠ニ――永久ニ》

ここは……恐らく、北の方なのか、山に近いのか――もしかした

らその両方なのかも知れないが、あと三、四日後にようやく十月なのに、窓からは、紅葉した落葉樹が見える。
その樹を見るともなしに眺めながら、二人は考え込んでいた。
このノートに書かれていた内容を。

その一週間後、由梨亜と千紗がこの時代……つまり、千年前の時代に来た衝撃でできた打ち身、痣、捻挫、打撲などの怪我が治ると、修道院兼孤児院の、『香封畏院（かほういいん）』に入れられた。
ここの時代では、小学校を卒業する十二歳で、小成人式と言う物を受ける。
それは、小学校を卒業して、中学校に入学してもやっていけるかどうかをテストする物で、その段階は、特級から八級と分かれ、その段階によって扱いが違う。
例えば、特級ならばどの学校にも入れるが、その下に行くに連れて、学校の選択肢がどんどん減っていくのだ。
つまり、下に行けば行くほど将来や進路の選択の幅が狭められてしまうという制度である。
なので、産まれ持った身分は、社会では
「フン、そんなの何になるのさ」
と、粗雑に扱われるが、逆に有名な学校を卒業すると、
「ああ、あの学校の卒業生ね！」
と、随分大事に扱われ、場合によっては、様々なことに掛かる料金が優遇される場合もある。
また、会社などの就職も、かなり有利になる。
また、あまり有名でない学校の場合は、差別も何もない。
なので、学力でそこにいったという人だけではなく、もっと上に行けるような学力を持った人――そう、随分優遇されるような学校に行ける人でも、その特別扱いが嫌だと言って、わざとレベルの低

い学校に入る人もいた。
そして、そういう学校にも入れなかった人達は、優秀な学校に行けた人とは完璧に逆の扱いになる。
なので、身分による差別はないものの学力や学歴による差別があり、賢い人物が頭の悪い――賢い人に言わせれば、愚者に対する軽蔑の思いは、千年後の時代で、身分の高い人物が身分の低い人物に対して抱える軽蔑の思いと比べると、圧倒的にこちらの方がとても強いのだ。
由梨亜と千紗の場合は、ここの言葉が一切解らず（と思われていて）、喋れないので（これは本当）、この小成人式は受けられない。
そして、この小成人式を受けられなければ、本当の成人式を受けることができない。
なので、大人になっても就職できない。
だから、このような修道院で、一生働いて生涯を終えることだろうと、思われていた。

さて、香封畏院に入った由梨亜と千紗だったが、意外と人数がいて、百人ほどの規模の修道院だった。
だが……その修道院の過ごし方が、あまりにも過酷で、激しく辛い物なのだ。
何と、平日は睡眠時間が五時間ほどしかない、かなりのハードスケジュールだ。
だが、休日は自由時間があり、睡眠時間が六時間摂れ、しかも、自由時間に昼寝もできる予定だった。
そんな所で、二人は過ごし始めた。
そのおよそ二ヶ月後、驚くべきことが持ち上がるとも知らずに……。

# 第四章「仲違いと、そして――真実」―1

「さあ、皆さん。働きなさい。吾らの守護者に視られても、恥ずかしくないように！」

朝の祈祷がそういう言葉で締めくくられると、みんな一斉に席を立った。

何があるのかと言うと、だいたい二週間後の十一月十八日はこの宗教が興った記念日で、その日の一日前から三日間、この香封畏院では、封香奏祭というお祭りがあるのだ。

ちなみに、香啓畏院と言う、男子専用の修道院の方は、啓香奏祭と言うお祭りとなる。

何ともファンタジーで、夢見がちで嘘にしか聞こえないが、何でも昔、この宗教の創始者が、悪人の集団を捕まえ、こらしめたそうだ。

その悪人達は、こらしめられて改心し、二度と他人に悪さをしないと誓い、その印としてその悪人の頭の一族に代々伝わる珠、『香封珠』と『香啓珠』を、創始者に渡した。

二度と、自分のような者に悪用されないように。

それは実に不可思議な珠で、香啓珠を持った者が念じれば様々な天変地異が起こせる、不思議な、そして恐ろしい珠なのだそうだ。

……どうせ、嘘だろうけれど。

また、香封珠を持った者が念じれば、逆に様々な天変地異を抑えることもできるそうだ。

……本っ当に信じられないと言うか、絶対確実に眉唾物だろう言い伝えだ。

そして、その創始者は、この雌雄の香封珠・香啓珠を、その悪人の望み通り、再び悪用されないよう呪術を施した箱に入れ、それを十重に囲み、普段は絶対にその箱を開くことはできなくしたらしい。

たった一日を除いて。

この日、十一月十八日は、創始者がこの雌雄の珠を封じた日。
そしてこの日、創始者のような呪力を持っていない者、呪法をかけられない者でも、それなりの人数が集まり、強い祈りを捧げれば、それによって、箱は開くことになっている……らしい。
そして、香封畏院の最高巫女が、祈りが終わると前まで歩き、その箱を一つずつ開いて珠を取り出し、厳かに、一年にたった一つの願いを唱え、信者達がそれを唱和する。
そして香封珠（たった二つしかない為修道院も二つしかなく、女子の方に香封珠、男子の方に香啓珠が納められている）に祈りを捧げ、箱に戻しまた一年間の封印をする。
また、それとは別にその創始者を称える為の祭りでもある。
そしてそれが行われる間、近くに住んでいる信者でない人達も来て、祭りを楽しむ。
信者でない人が来ても、それはこの宗教、香封啓教（こうほうけいきょう）の宣伝になるので、喜んで迎え入れている。
だからこそ一ヶ月前から掃除や準備に様々な時間を取られ、平日も休日も区別が全くない。
その為、一ヶ月前からは修道院に入っていない一般の信者達は礼拝には来ず、個人や学校などで、宗教の勉強に来る人もいない。
そして、何と睡眠時間がたった四時間である。
本当に身体が保たない。
だから、休憩時間に椅子に座り込んで仮眠を取り、休憩終わりの鐘が鳴ると同時に目を覚まして掃除を再開するのだった。
勿論、それは十代から五十代の、掃除をする女性達もだった。
そしてもし鐘が鳴っても起きなかったら、夜に祈祷書を写さなければいけなくなるのだ。
それは、とても大変な作業で、何より睡眠時間がなくなる。

だから、由梨亜も千紗も必死で起きて仕事をしていた。
本当は言葉の通じぬ異邦人に祈祷書を写させる訳がないのだが、二人はそんなことは想像できなかったし、その気力もなかった。
そして、一週間前になれば大分楽になった。
今まで、普通の日……封香奏祭の一ヶ月以上前でも睡眠時間は五、六時間だったのに、一週間前になると何と七時間睡眠になるのだった。
それは、ここしばらく寝足りなかった由梨亜と千紗にとっては、まさに天国のようだった。
まあ、油断して寝坊し過ぎるのも罰則が待ち構えていたけれど。
そして、三日前になると、また予定が変わった。
勿論、前日は封香奏祭の準備に明け暮れるけれど。

「ねえ……由梨亜。お願いだから、教えてよ。あたし、そういう風に悲しそうな由梨亜の姿、もうこれ以上見たくない。あたし達、今まで隠し事なんかしなかったじゃん。それは、あたし達が出会った五年生の時から、ずっと、ずっとそうだったでしょ？　……ねえ、何で？　何でよ、由梨亜。お願いだから、意地張んないでさ……ねえ、由梨亜」
封香奏祭の五日ほど前、千紗は悲しげに、嘆願するように、そして、半分諦めたかのように、今夜も同じ問いを口に出した。
由梨亜の答えも、毎回同じで、
「千紗、ごめんね。今は言えないけど、封香奏祭の日に分かるから……。だから、今は……。おやすみ、千紗」
「……おやすみ、由梨亜」
そして、二人の会話は途絶えてしまった。
今、この時代で言葉が解り合えるのは、お互いしか、いないというのに……。

やはり今夜も同じ答えが返って来た千紗は、ひどく哀しく苦しい気持ちを味わっていた。

（どうして？　何で由梨亜はあんな風になってしまったの？　封香奏祭が近づいてから、落ち込んで、塞ぎ込んで、あたしとも話さなくなって……一体、何が原因なの？　それが分かれば、あたしは全力でそれを阻止、排除するのに……！　なのに、由梨亜は何も言わなくて……何で！　何で由梨亜はあたしに何も話してくれないの？　もう……訳分かんないよ！）

そして、また、今夜も同じことを思い、器用なことに、怒りを感じながら眠りについた。

千紗は布団に入ってから眠りにつくのが速く、今日も僅か一分ほどで眠った。

その数分後、由梨亜は二段ベッドの上の段にある自分のベッドから降り、すぐ下の段で寝ている、千紗の顔を覗き込んだ。

そして、呟いた。

「千紗……ごめんなさい。私は貴女のこんな顔が見たくて、ここに来た訳でも、留まってる訳でもないのに……でも、もうそろそろしたら、貴女は戻れるから……だから、その時までは……ごめんなさい。本当に、ごめんなさい、千紗。あと、もう少しだから……」

そう言うと、由梨亜は目尻に垂れてきた涙を拭い自分のベッドに上って行った。

一体、ここで何が起こるというのだろうか？

そして、二人は元の世の中に戻れるのだろうか？

今の時点では、まだ誰にも分からないが、ただ、一つだけ言えることがある。

それは、この時代に、時を超えて来たその理由、そしてそこで何が起こるのかが、封香奏祭で、もしくはその後で分かるということだ。

そして……二人はどうなるのかと、いうことも。

早朝の空気の中に、香封畏院の鐘が鳴った。
今日は、封香奏祭第一日目。
当日になったら、少しはゆっくりできるかなぁ……などと千紗は考えていたのだが、それは大間違いだった。
何故なら、今日までみんなで作ったタオルやぬいぐるみ、クッション、枕カバーなどの手芸品を大聖堂で売るのだが、またその量が半端でなく多い。
それと比例するように、売り子の人数も多い。
そして、簡単な手作りお菓子や、搾りたてのジュースを有料で出すのでキッチン担当もいて、更に給仕係もいるので、それぞれ交代してやっていた。
勿論、由梨亜と千紗は常にキッチンでお菓子及びジュース作り担当か、休憩だったが。
けれども、それでも由梨亜は何も喋ろうとはせず、黙々と手を動かし、休憩時間も千紗のことを意図的に避けているようだった。
そして午前中が過ぎ、夕方になり、日が暮れると、封香奏祭に来た人々は、それぞれ客室に戻ったり、家に帰ったりして行った。
そして、その後小聖堂で祈祷を行った。
いつもは鐘と同時に祈りを捧げ始め、鐘と同時に終え、香封畏院の最高巫女……処女で最年長の女性から一言二言戴いてから部屋に戻って行くのだが、今日は祈祷の最後に、最高巫女が長々と話し始めた。
この香封畏院の最高巫女は、御歳八十七歳となるが、肌には艶があり、背筋も伸び、どんなに高齢でも精々七十代ぐらいだろうと思われるほど若々しい方だ。
「皆の者、今日のお勤め、ご苦労であった。明日は、中聖堂にて、祈祷を、街の信者達と、合同で行う。明日の、八時から九時頃に。全て、善きように。皆の者」

その声は、外見の若々しさから見るととても深く、落ち着いた声で、そこに立って、話しているだけで、威厳が辺りに満ち溢れていた。

「全て、善きように。最高巫女様」

皆で唱和した後、この香封畏院で、処女で二番目に年長の御歳七十九歳の副巫女が言った。

「皆の者、今年の願い事は、決まった。今年は、昨年出た意見、皆でアンケートを採った結果、一番多かった意見、『地球の森林保護、二酸化炭素削減が、これまで以上進むよう』という物に決まった。休みなさい。全て、善きように。皆の者」

「お休みなさいませ。全て、善きように。最高巫女様、副巫女様」

そして、みんなで席を立ち、部屋へと戻って行った。

（森林保護？　二酸化炭素削減？　この頃、まだそんなこと言ってたの？　一番酷かったのって、確か地球暦二千年代初め頃だったはず……あっ、思い出した。確か、この頃ってそれまで使われてた化石燃料っていうのが、もうほとんど使われなくなってきて、この時で言う、新エネルギー、エコなエネルギーって奴が一般的になってきた頃だっけ……だから、まだ地球温暖化問題があって……その時には、今あたし達がいる時代には、人間は生きているかどうかよく分からないって考え方が一般的だったんだよな……そう言えば、あともうしばらくしたら、地球は初めて他星の存在を知って、しかもこっちの方が大分技術が後れていることを思い知らされて、大パニックに陥るんだよなぁ……）

そう思い、布団に入りながら考え事をしていた千紗は苛立ったように寝返りを打った。

（ああ、駄目。今まで布団に入ってまで考え事なんてしてなかったから、分かんなかったや。寝る直前に難しいこと考えると、眠れなくなるんだ……やばい。本気で寝れないかも……）

そう思っていた千紗は、上で起き上がるような気配がして、不思議に思った。

そして降りてきた由梨亜に、千紗は驚きながら声を掛けた。
「由梨亜。何やってるの？　今はもう十一時過ぎたんだよ？　それに、早く寝ないと、明日身体が保たないよ」
千紗の不思議そうな言葉に由梨亜はギクッとして固まり、ギクシャクと千紗を振り返った。
「ち、千紗……び、びっくりさせないでよ。っていうか、それが久しぶりに言葉を交わす相手に対する言葉？」
「そりゃあ、由梨亜とはこの頃何も喋ってないけどさ……。でも、あたしが声を掛けられないような雰囲気を出してたのは、由梨亜じゃん。おまけにあたしのこと意図的に避けまくってさ……あたしは、ずっと、由梨亜と普通の会話がしたかったよ。だって、ここに入って、封香奏祭が近づいてから、まともな会話なんて、誰とも、一度もしなかったじゃん。あたしは……ずっと、淋しかったんだよ。周りの人とは、古代語じゃないと喋れないし……あたしは古代語、まだ習いたてだから詳しい会話なんてできないし、元々そんな重要な科目でもなかったし……。由梨亜としか、普通の会話はできないんだよ？　なのに……なのに、ずっと避け続けられて……あたし、本当に淋しかったんだからね。由梨亜は、本当に、何とも思わなかったの？」
「私は……」
と、由梨亜は目を泳がせ、言葉を濁らせた。
「だから、そう誤魔化さないで。分かってる？　由梨亜。そうやって全部曖昧にするのは、貴族階級がいつもやってることかも知れないけどさ。あたしとの間ではやめて。そう誤魔化すぐらいなら、最初から何にも言わない方がマシだよ、由梨亜」
千紗にピシャリと言い放たれ、由梨亜は
「……ごめん。本当に、ごめんね。千紗」
と謝った。
「それにさ、由梨亜、封香奏祭の日にわかるって言ったよね？　今日、封香奏祭一日目だけど、何もなかったよね？」

「三日目に分かるわ。お願いだから……待って。そうすれば全部教えるから。まあ、私もこの前知ったばかりだからちゃんと伝えられるかどうかはいまいち不安だけど……でも待って。全部分かるから。私達が、この千年前の世界に時を越えてまで来た理由。何でこうなったのかも、全部。その後、千紗は元の時代に帰れると思うから、心配しないで」

由梨亜は、自覚症状もなしにうっかり失言をしてしまったが、それを大人しく見過ごす可愛い千紗ではなかった。

そういうことは、厳しく問い詰めるのが千紗流である。

「……『は』？」

「えっ？」

「今由梨亜、『千紗は』って言ったよね。由梨亜は元の時代に、帰れないって言うの？」

由梨亜は、思わず手で口を覆ってしまった。

失言してしまったと思っているのは、まず間違いなく確かだ。

千紗は、幼い頃から本条家の跡継ぎとして鍛えられてきた由梨亜が、思わずたじろぐぐらいの据わった目をして、はっきりと言い切った。

「あたしは嫌。あたしだけ帰って由梨亜がこの時代に残るって言うのなら、あたしも残る。あたし、由梨亜の居ない時代に帰ったって全然意味ないもん。あいつが……並樹咲（中流の貴族）が、前の学校で騒ぎ起こしたからうちの学校に……私立小学校から普通の公立小学校に来て、あたしが咲に意見したからってあいつにいじめられて……・友達いなくなっちゃったあたしにとって、由梨亜しか友達がいないんだから。だから……お願い、由梨亜」

「……大丈夫よ。千紗。私は、この時代に何か、残らないから」

「……本当？」

「ええ。私は絶対に、必ず現代に戻るから。この時代で、一生を終わらせなんかしない」

「そっか……。そう言えば由梨亜。何しようとしてたの？」

「ああ。あのね、千紗の寝顔、見ようと思って」
「はぁ？」
千紗はあまりにも予想外の言葉に拍子抜けして、間抜けな声が思わず口を付いていた。
「毎晩見てるんだぁ、実は。それから寝てるの。千紗って、眠りにつくの光速並みに速いしね。今日は寝てなくて驚いたよ」
「へ、へえ～」
かなり久し振りに和やかな雰囲気になった二人に、突然鋭い声が掛けられた。
「ちょっとあんた達。何やってんの？　煩くて煩くて眠れやしない。せっかくの睡眠時間なのにそれをさらに短くされたら堪んないわよ……ってあんた達か。全く、言葉が通じないってほんと不便ねぇ。えっと……エイゴで言うのメンドイからジェスチャーでいっか」
そう言ったのは、同室の十代の少女だった。
「あんた達」
と言って、由梨亜と千紗を指し、
「ベッドに戻って」
と言って二段ベッドを指した。
二人は頷き、大人しく布団に入った。
（一体……何なのかな。でも、由梨亜は封香奏祭最終日に教えてくれるって言ってたし。だったら、色々考えないで、さっさと寝ちゃおう）
そして、すぐに眠りに落ちたのだった。
何とも暢気なことだが、これが、千紗が千紗たる所以である。

# 第四章「仲違いと、そして――真実」―2

そして、封香奏祭（ほうこうそうさい）一日目が終わり、二日目が過ぎた。
二日目にやった内容は、一日目とほとんど同じだ。
千紗（ちさ）は、由梨亜（ゆりあ）と約束した通り、由梨亜が落ち込んでいた理由や、隠していることなどについては触れず、笑顔で、今まで通りに由梨亜と接していた。
千紗は後からこのことを振り返った時、もっと早くに由梨亜と言い合って仲直りしておけば良かったと思ったが、この時は、ただ、単純に、由梨亜と仲直りできて嬉しいと思っていた。
三日目は、それまでやっていた、普通のお祭りのようなことは一切やらず……と言うより、信者以外立ち入り禁止とし、一日中祈祷となった。
朝早く、それまでバザーで使われていた大聖堂の片付けをし、片付け終わった頃、客室から信者達も集まって来た。
そして、みんなで大聖堂の長椅子に腰掛けた。
六百人収容できる大きな聖堂であるにも拘らず、その実に半分以上もの席が埋まっている。
そして、周りの人達は、呪言を唱え始めた。
それは、こちらの言葉を理解できるようになっていた由梨亜と千紗にも、全く解らない異国の言葉、もしくは呪文だった。
だが、声の響きは、親が子を慈しむような、慈愛の想いに満ち溢れていて、聴いているだけで心も身体も温かくなった。
そして、その呪言がしばらく続いた後、神器と呼ばれる、処女で三番目に年長の女性が就く物で、その名の通り、神託のような物を得る時の祈祷を行った時、降臨して来た創始者の寄坐となる、御歳七十三歳となる女性が、最高巫女と副巫女と共に入ってきた。
最高巫女の両手には、二十センチ四方の箱が捧げ持たれている。
その中に入っている物は、あの『香封珠（こうほうじゅ）』だ。

「皆の者、祈りをやめ給えよ」
　最高巫女の、八十七歳とは思えない豊かで深みのある、大きな声が大聖堂に響き渡った。
「これは、初めて視る者もいよう。これは、この宗教、香封啓教創始者、長手深芳様から賜った神聖なる珠、他院に納められている、『香啓珠』と雌雄の珠である、『香封珠』である。今年もまた、様々なことがあった。そして、今年は昨年出た意見、『香封珠に願い得る神聖なること、皆の想いを取り入れ給えよ』、と言う物を受け入れ、この香封畏院にいる者達から、何を願えばよいかを訊き、そして、最も多かった物にした。皆の者、心して、聞け」
　そう言うと、最高巫女は一息つき、その『願い』を口にした。
「昨年の物と似ておるが、違う物である。その願いを、皆の前で発表しよう。
『この美しき星……〈地球〉。吾等はこの星以外に棲む所はあらず。しかしこの地球、吾らが棲むには適さぬ環境になりつつある。もし棲むのに適さなくなったのであらば、吾々は死に絶え、この星には〈死〉のみが立ち込めるであろう。今は改善に向かって来ておるが、それでも、まだ良くなってはおらず。それどころか、また、悪くならないとも限らぬ。吾らはそうならぬ為に、願う。森林がこれ以上減らず、それどころか増えるように。それに伴い二酸化炭素急増を抑え、減るように。この願いが叶えられれば、長手深芳様、貴女様は敬われ続けることと成るであろう。そして、深芳様を守護された神々、精霊達も敬われ続けることと成るであろう。故に、吾らは願う。吾らの未来を願う想いを、どうか、叶え給えよ』」
「吾等の未来を願う想いを、どうか、叶え給えよ」
「香封啓教創始者、貴き力をお持ちになる長手深芳様よ、吾らの願いを叶え得る力を持つ香封珠よ」
　最高巫女が願いを口にし終えると、今度は副巫女が祈りを捧げる役目に就き、それを信者達が何度も何度も復唱した。
「香封啓教創始者、貴き力をお持ちになる長手深芳様よ、吾らの願

いを叶え得る力を持つ香封珠よ」
「香封啓教創始者、貴き力をお持ちになる長手深芳様よ、吾らの願いを叶えうる力を持つ香封珠よ」
みんなが、長手深芳と香封珠に対して祈りを捧げている間、最高巫女は香封珠の入っている箱に手をかざし、口を僅かに動かし、無心に祈っていた。
すると、普段は（実際にやったことはないが）叩いても落としてもうんともすんとも言わないはずの箱の鍵がカチリと開き、蓋が開いた。
すると最高巫女はその中から出て来た箱を取り出し、同じことを繰り返していった。
その間ずっと神器は床に跪き、最高巫女同様、口を僅かに動かし、無心に祈り続けていた。
そして、最終的に香封珠が最高巫女の手によって取り出され、皆の視界に入るぐらい、高く高く掲げられた。
まるでそれが合図だったかのように、皆の祈りがふっとやんだ。
その途端に、神器の口から、女性の神々しい声が大聖堂に響き渡り出した。
千紗は、千紗と同じ時代に生きる大多数の人間と同じように無神論者であり、科学的な根拠が何もない物を全然信じず宗教なんかとんでもないと思う人間だったが、この声を聞いた途端、神を信じなくても、少しは超常現象を信じてもいいかと思ってしまった。
それほどまでに、神器の声は普段の声とは全然違う、神々しい声に変わっていたのだった。
『その願い、叶えよう。皆の言うこと、この妾が承知した。近いうちに、その願い叶うであろう。しかし、努力を怠ってはならぬ。妾が願いを叶えるのではなく、妾が其方らを手伝うのである。このこと、しかと申し付けたぞよ』
神器は言葉を紡ぎ終えると、首がガクッと垂れ、意識が戻った。
すると、最高巫女が話し始めた。

「皆の者、これにて今年の祈りの儀を終える。長手深芳様の仰せらるること、しかと心に留めよ。夕刻、香封珠の封印の儀を行う。それまで休むように。全て、善きように。皆の者」
「はい、今年も長手深芳様の御加護を。全て、善きように。最高巫女様、副巫女様、神器様」
そして、人々は大聖堂を後にした。
今日は、封香奏祭最後の日で、また、長手深芳が香封珠・香啓珠を封印した日でもある。
つまり、普通の人にとっては一日目、二日目がお祭りで、三日目は『なにやら得体の知れない、信者しか参加できないお祭り』と認識している。
しかし、信者達にとっては一日目、二日目が前夜祭であって、三日目こそが本祭りなのだ。
そして、この日は最も清い日である為断食をする。
しかし……千紗のようによく動き回り、まさに『子供はよく食べよく眠る』の見本のような成長期の少女達には、かなり辛いのだった。

千紗は、グウグウ鳴るお腹を抱え、ベッドに横たわっていた。
理由は勿論、『動くとお腹が空く』からだ。
その時には、部屋には千紗以外誰も居なかった。
他の八人の少女達のうち、真面目で将来ここに残りそうな五人が小聖堂にお祈りに、他の一人が食堂に忍び込みに行き、そこに巫女や規則に厳しい老女達が行かないようにあとの二人が見張りをしていた。
そして由梨亜は、千紗が気付いたら既に居なかった。
最初はトイレにでも行っているのだろうと思っていたが、さすがに一時間もトイレに入っている訳がなく、どこにいるのか全く分か

らない状態だった。
そこに、コンコンと扉が叩かれた。
千紗は起き上がることさえ億劫だったので、寝たまま
「誰……？　鍵は開いてるわよ」
と、扉の外の相手に、意味が通じないことを承知で問い掛けた。
すると、驚いたことに扉が開き、そこには由梨亜が立っていた。
「由梨亜……？　どうしたの？」
「千紗、ちょっと来てくれる？」
由梨亜の顔は強張り、少し蒼褪めているようだった。
「由梨亜、どうしたの？　顔色悪いよ。少し寝たら？」
「いいえ。それどころじゃないの。私は、やらなくちゃいけないの。千紗、私達がこの世界に来た理由を話すわ。だから……来て」
「えっ？　でも、ここで話してもいいんじゃあ……」
「いいえ。ここで話すと、迷惑が掛かるもの。それに、誰がいつ来るか分からないし……」
「そう……。じゃあ行くよ。本当は、お腹空いて、あんまり動きたくないんだけどね」
千紗がそう答えると、由梨亜はちょっと笑い、
「そういう所が、千紗らしいわ。私……そういう千紗が、好きよ」
「由梨亜……？」
千紗は、訝しげに答えた。
今まで、『千紗らしい』と言われたことはあっても、『そういう千紗が好き』とは、一度も言われたことがなかったからだ。
そして、由梨亜は理由を話すだけではなく、何かを起こすとも……直感的に分かった。
そして、由梨亜は
「こっちよ」
と言い、千紗の手を取り、小走りで進み始めた。

## 第四章「仲違いと、そして――真実」―3（前書き）

※警告

今回、あまり直接的ではありませんが、近親相姦の表現があります。またこれ以降の話では、普通に近親相姦が行われ、兄妹で夫婦、または恋人になっているという表現も出て来ます。他にも、一夫多妻制や後宮などのハレム的な要素も出て来るので、そういう表現を生理的に受け付けられないという方は、これ以降の話は読まないで下さい。この前文で気分を悪くされた方がいらっしゃいましたら、申し訳ございません。

## 第四章「仲違いと、そして――真実」―3

由梨亜は千紗の手を握り、スタスタと歩いて行った。
千紗はどこに行くか分からなかったが、由梨亜の緊張した雰囲気に圧され、訊けなかった。
そしてしばらく歩き続けると、由梨亜がどこに向かって歩いているのか分かってきた。
何故なら、その道はここ一ヶ月ほどずっと通い続けた道……客室のある棟へと向かう道を通っていたのだから。
（一体、何が起こるというの……？　それに、あたしと由梨亜はどうなるの……？）
と、千紗は考え続けていた。
やがて、客室の中の使われなかった部屋の一つに着いた。
由梨亜は扉を静かに開け、閉める時もできるだけ音を立てないように気をつけていた。
そんな由梨亜の様子にただならぬ物を感じ、千紗は由梨亜を見つめた。
千紗は、掠れた声で話し掛けた。
「由梨亜……とうとう、教えてくれるんだね……」
「ええ……そう。私は……」
そこまで言うと、由梨亜は一息つき、真っ直ぐに千紗を見つめた。
「千紗、落ち着いて聞いて欲しいの。そして、全て信じて欲しい……」
「……うん。分かった」
千紗は、由梨亜の真剣な表情を見て、決心した。
由梨亜は、このような様子で冗談が言える人ではない。
だから、これから話すことが真実であると千紗は知っていたし、直感でも感じていた。
由梨亜は、それでもしばらく躊躇した後、思い切って、千紗に告

げた。
「……私は……私は、この星の……地球連邦の人じゃないわ」
千紗は、あまりのことに頭が真っ白になってしまった。
覚悟はしていたけれど、そこまでの物とは思いもしなかった。
「由梨、亜……？　じょ、冗談じゃ……」
「勿論、冗談じゃないわ。私がそんな冗談、言える訳ないわよ。まあ、私もこっちの時代に来て、初めて知ったんだけど……」
「で、でも……由梨亜のお父さんとお母さんは？　どうなの？」
「いいえ。違うわ。あの人達は、実の親ではないわ。血が繋がらない……育ての親」
「でも、子供が産まれた記録は残ってるじゃん。それは？　そんなの、偽造しようがないよ」
千紗は必死で食い下がった。
「ええ、身分の高い人達の出生記録を作るのはそういう記憶があっても無理。けど身分の低い人なら遅れても大丈夫でしょう？　理由だって、名前を決めるのに時間が掛かったと、母体が弱かった為産まれるまでは油断が許されない状態だったと言えば済むことだしね」
千紗は『身分の高い』という所に引っかかったが、由梨亜の言う身分が高いというのは王族などだと思い直し、それを横に置いて言い返すことにした。
「でも……そんな、人の記憶って換えることなんてできる訳ないじゃない。そんなのお話の世界だけでしょう？　そんな都合良くできたら、世の中何も苦労はないよ」
「いいえ。一つだけ方法はあるわ。……千紗、『魔法』って、信じる？」
「魔法？　まさか、これっ……！」
由梨亜は、これまでの記憶を辿るかのように遠い目をした。
「私達が産まれた家を変わったのも、それに伴って周りの人の記憶もそれに沿って変わったのも、出生記録が変わったのもここに来たのも、香封珠（こうほうじゅ）に願いを叶えさせたのも、全て魔法。それに、宇宙連

盟――この全宇宙の平和と共存を維持する団体の、事実上の長たる役割を持つ国、花鳶国が特許を持っている物は、魔法を使っているわよ。特に、過去を見る去解鏡は、科学技術なんかじゃできない代物よ。魔法じゃないとあり得ないわ」

由梨亜は重大なことをサラッと言った為、千紗はそのことに気付くのに時間が掛かった。

だが、数秒後、気付いた千紗は、思わず唾を飲み込んだ。

「由梨亜……そんな、まさか、あたし達って……」

「そうよ。貴女の名前は本条千紗。名前ぐらいなら、後で変えましたと言えばいいのだから、そういうことはどうとでも繕えるのよ。そして、『彩音千紗』という人物は、本来なら、この世のどこにもいない（・・・・・・・）」

「どういう、こと……？　どういうこと、由梨亜？！」

思わず千紗は声を荒げた。

「千紗、静かに。つまり、こういうことよ。『他の居住可能惑星Ａで産まれた赤ん坊Ｂが、地球連邦の本条家に産まれた赤ん坊Ｃに成り代わり、本条由梨亜となる。赤ん坊Ｃは子供に恵まれなかった夫婦Ｄに産まれた赤ん坊として、記憶を変えられ、彩音千紗となる。そして育ち、赤ん坊Ｂと赤ん坊Ｃは大きくなってから出会い、親友となり今ここにいる』」

由梨亜の真剣な表情と、感情の全く窺えない声音に、千紗は由梨亜が本当のことを言っているのだと、何故かすとんと腑に落ちた。

「じゃあ、由梨亜は？　あたしが、本当はお父さんとお母さんの間に産まれた子供じゃなくて、由梨亜のお父さんとお母さんの間に産まれた子供だということは分かったし、信じる。だけど……だけど、由梨亜は？　一体、誰なの？　誰の子供に産まれたの？」

「そうね、何から話せばいいのかしら？　……じゃあ、まず、私は誰なのかを話すね。私は……私は、宇宙連盟の長たる役割を担う花鳶国の王女、花雲恭富実樹よ」

「花鳶国って、王族のみが日本州や中華州と同じ名前を漢字で表す

国で……確か……！」

千紗は、とんでもないことを思い出した。

そのことは、先生が、教職にある身とは思えないほど嫌悪感に満ちた顔で言っていたから、千紗の記憶に色濃く残っていた。

そして、だからこそ、由梨亜は地球連邦に来たのだと確信した。

「……そうよ。花鴛国の王族の苗字は『花雲恭』。そしてね、花鴛国の王……花雲恭家の長には、常に六人の妻がいるの。前王の娘で最も高い王位継承権を持つ王女がなる后。他国の王女がなる妃。貴族の中で最も身分が高い戦祝・政財・宗賽大臣の誰かの娘や孫がなる妾。地封貴族って言う、土地を封じられている貴族の娘か官吏の娘がなる最貴。後宮に勤めている侍女がなる最侍。それなりの地位の一般庶民の娘がなる最女」

由梨亜はずらずらと後宮の女性達の官名を挙げた。

「私は王の娘だけど、妾の娘。だけど、誰の子であろうと女であろうと、最初に産まれれば第一王位継承者となるの。そして私が産まれてほんの二時間後、妃の娘である異母妹が産まれたわ。次の日には、后の息子である異母弟も。順番から言うと私が王位を継ぐんだけど、二時間差の異母妹に変えるべきだと、妃や後見人の貴族が騒ぎ出してね。こっちの方が血筋は上だと。そっちはたかが妾の子ではないかと。そして、自分は妃だが元々他国の王族。この国の『因習』で自分は妃になったが、自分は王女だったと。外交関係上の問題となる前に、こっちに第一王位継承権を寄越せと」

由梨亜の顔は、どんどん険しくなる。

「しかも、彼女の性格は過激で、私はあの国にいたら消されていたでしょうね。第一、后と妾は何度も彼女に生命を狙われ、流産されかかったらしいわ。あと、他の弟妹達のことだけど……」

由梨亜はそこまで言うと、一息をついて言った。

「私が産まれて八ヶ月後に最女の長女、十ヵ月後には最貴の長男、一年一ヶ月後に最侍の長男、一年五ヶ月後に后の長女、一年八ヶ月後に妃の長男、二年後に妾の次女、二年二ヶ月後に最女の長男、二

年六ヵ月後に最侍の長女、二年八ヶ月後に最貴の次男、二年十一ヶ月後に后の次女、三年一ヶ月後に妃の次女、三年四ヵ月後に妾の長男が産まれたの。だから上から行けば妾の長女、妃の長女、后の長男、最女の長女、最貴の長男、最侍の長男、后の長女、妃の長男、妾の次女、最女の長男、最侍の長女、最貴の次男、后の次女、妃の次女、妾の長男ね。さっき言った理由――あの人が妃になったせいで、私の本当の御父様と御母様は、私を地球連邦に送ったのよ。理由は他にもあるでしょうけどね」

由梨亜は、少し寂しげに言った。

千紗はと言うと、あまりに沢山のことを一度に言われたせいで、少し混乱気味だ。

由梨亜はベッドの上に置いてあった箱を取り上げ、歌うように、千紗には意味の解らない言葉を唱えながら、箱を開けていった。

そして、出てきた物を見て、千紗は息を呑んでしまった。

「それは……『香封珠』！」

「よく覚えてたわね、千紗。そういえば思ったんだけど、千紗は記憶力がいいのに勉強ができないって嘆いてるのは、勉強を頑張るってやる気が足りないんじゃない？」

「由梨亜！　また話逸らさないでっ！」

また、千紗は声を荒げた。

「あ……またやっちゃった」

「でさ、由梨亜。由梨亜はどうやってそのこと知ったの？　由梨亜、こっちに来てから知ったってことは、あっちでは知らなかったってことでしょう？」

「うん。封香奏祭（ほうこうそうさい）の準備が始まってからの朝の祈祷の時間に、情景が浮かんで来たの。それは、あの花鴬国の様子だった。科学技術は地球連邦とは比べ物にならないくらい進んでいたのにも拘らず、自然が沢山あってとても美しい星だったわ。そして、最後に、私が産まれた時の様子、それで起こった争い、何故私が地球連邦に来たのか、そして、元いた時代に戻る方法が分かった。全部分かったのは、

封香奏祭の一週間前だったわ」
「一週間前って、丁度由梨亜があたしと話さなくなった時……」
「ええ、そう。ところで、戻る方法は、実は三つあるのよ」
「み、三つ……？」
千紗は、少し動揺してしまった。
何故なら、常識的に（？）考えて普通はあり得ない状況から戻る方法は、そんなに多くないと思ったからだ。
「一つ目は『富実樹と入れ替わった少女を生贄として奉げ、その生命力を使い花鳶国へ戻れ』」
「……あたし？　あたしを、生贄、に？　その……方法使えば、あたし、死ぬの？」
「ええ。生命力を使うということはその生命を全て使い切るということだからね。ちなみに、それが一番いい方法らしいわ。だけど、私は絶対嫌。生贄なんて時代錯誤なこと、誰がするもんですか。それに、誰かを殺して自分が幸せになるなんてことやりたくないし。特に、それが私の親友の千紗だなんて。そして二つ目は、『何か強力な力を持つ物を、入れ替わった少女を媒体として力を注ぎ込み、富実樹は花鳶国に戻れ。だが、媒体とされた少女はこの時代に残される。但し、媒体とされた衝撃に耐え切れず、寝たきりになってしまう可能性が高い』」
「その方法使ったら、あたし、この時代に取り残されて、しかも一生寝たきりになるかも知れないの？！」
千紗は、驚き過ぎて、かなりの大声で叫んでしまってから慌てて口を押さえた。
「大声出さない。一応結界張ってるからあんまり洩れないけど、千紗は規格外よ。絶対に洩れるわ。で、話を戻すけど、私もこの二つの方法は使いたくない。千紗がこの時代に残るのは嫌だし、死ぬのも寝たきりになるのも嫌。だから、三つ目の方法を使いたいと思うの」
「三つ目の方法って……？」

千紗は、ほんの少しだけ期待を混ぜて言った。
その様子に、由梨亜は微笑して、言った。
「あのね、三つ目の方法は、『富実樹と入れ替わった少女の二人で力を合わせ、強力な力のある物の媒体になり、負担を半分にする。そして富実樹は花鴛国に戻り、入れ替わった少女は現代の地球連邦に戻り、本当に産まれた家に戻る。周りの記憶も、最初からその少女がその家に産まれたという物になり、出生届もそれに合わせて変わる。但しその入れ替わった少女は、最初は富実樹のことを憶えているが少しずつ忘れていき、最終的には富実樹を完全に忘れる。しかし富実樹は覚えている。また、互いを信頼していなければこの方法は使えない。この方法は、互いを信頼していれば最も成功率が高いが、逆の場合成功率は最も低い』」
「つまり、この方法は場合によって最も成功率が高く、最も成功率が低い方法ってことね」
「そう。……千紗、どうする？　千紗が嫌なら、私はここに残るわ。私は、見たことがない御父様御母様よりも、千紗の方が大事なの」
「何言ってるの、由梨亜。そんなの認めないよ。由梨亜は花鴛国の王女で、第一王位継承者でしょ？　そんな由梨亜が戻らなかったら、花鴛国のお父さんとお母さんがどんなに悲しむか分かる？　あたしは三つ目の方法を試すよ。由梨亜が戻れるのならどんなことでもやる。あたしは由梨亜を信じてるし、由梨亜もあたしを信じてるでしょ？　だから今のあたし達にとって三つ目の方法が、一番成功率が高いってことだよ。もし失敗したとしても、由梨亜は戻れるように祈るよ」
「千紗……」
由梨亜は涙で声を詰まらせた。
「ありがとう。三つ目の方法をやってみよう。私は、絶対に千紗のこと忘れない」
千紗も、少しだけ瞳を涙で潤ませながらも、精一杯の晴れやかな笑みを浮かべた。

「あたしはどう足掻いても由梨亜のことを忘れるけど、それでも覚えていれる最後の瞬間(とき)はできる限り延ばす。約束するよ。あたしは由梨亜のことを忘れても、心の奥底に、由梨亜のことを……由梨亜と過ごした楽しい時間を刻み付けて、記憶じゃなくて感覚で、絶対に覚えてる」

「じゃあ、始めよっか」

「うん。由梨亜、絶対に、成功させようね」

「勿論」

千紗と由梨亜は、不敵に微笑んだ。

まるで、今の自分達には、不可能なことはないとでも言うかのように。

まるで、自分達に残された最後の時間――『彩音千紗』と『本条由梨亜』として過ごせる、最後の瞬間(とき)を、心に刻み付けるように。

二人は、最後の賭けに出た。

互いを想う気持ちのみで……。

# 第五章「時と宇宙（そら）を越えて……」―1

「由梨亜、まず、あたしはどうすればいい？」
千紗は、真剣な目をして由梨亜に問い掛けた。
「うん。まず、この香封珠の力を引き出す為には、呪言が必要なの。それを言った後お願いをするんだけど、お願いの方を聴いて繰り返して」
「うん、分かった」
そう千紗が答えると、由梨亜は香封珠を両手で持ち、目を閉じて呪言を唱え始めた。
それは意味の解らない言葉で、千紗は少しボーっとしていたが、由梨亜が見詰めているのに気付き、その後に言った意味の解る言葉を必死で繰り返した。
「『富実樹の父である花雲恭峯慶、母である花雲恭由梨亜、富実樹を花鴬国へ、千紗を現在の日本州へと戻らせて下さい』」
「『富実樹の父である花雲恭峯慶、母である花雲恭由梨亜、富実樹を花鴬国へ、千紗を現在の日本州へと戻らせて下さい』」
「『その証として、わたくし達の友情の徴を、ここに示します』」
「『その証として、わたくし達の友情の徴を、ここに示します』……っえ？」
「あれ？　どうした？　千紗」
「シルシって？　何？」
「ああ、それは今から言うわ。……『その徴として、わたくし達の血を捧げます』」
「『その徴として、わたくし達の血を捧げます』……うっ、血なの？」
「ええ。『この力ある物、「香封珠」に血を捧げるので、わたくし達にその御力を御貸し下さい』」
「『この力ある物、「香封珠」に血を捧げるので、わたくし達にそ

の御力を御貸し下さい』」
「それじゃあ、これで血を」
そう言って由梨亜は、どこで手に入れたのか、今となってはアンティークに等しいほど古い短剣を取り出した。
勿論、千紗は見るのも触るのも初めてである。
由梨亜は、自分の右手で短剣を抜き、左手の人差し指にその刃を当てた。
そして、血が出ている左手をそのままにして、右手で千紗に短剣を渡し、それを千紗は同じように指に当てた。
「……っ！」
思わず、千紗は顔を顰めた。
たかが左手の人差し指から少し血が出ているだけなのだが、それでも痛いのだ。
しかも、今この世の中では包丁にも安全装置が付けられ、百パーセントに近い確率で指が切れなくなっている為、刃物で指が切れるのは本当に初体験だった。
そして、由梨亜はよく顔を少しも歪めないなと感心した。
由梨亜は千紗の手を取り、二人の左手を、人差し指が付くように合わせた。
そして、混ざって滴り落ちる血を香封珠に垂らした。
そうすると、香封珠は真っ赤なワインの色に輝き、滴り落ちる血を吸収した。
「あっ……！」
と声を上げた由梨亜の回りを光が取り囲み、こちらの世界に来てから、ずっと解かれていた髪が、室内にも拘らず強く吹いている風に煽られ広がる。
そして、由梨亜の少し波打っていた髪が更に波打ち、フワフワと広がり、色は茶色から栗色へと変わり、その毛先が腰に届くぐらいの長さまで長く伸びた。
そして背が四センチほど伸び、顔立ちは変化し、由梨亜の面影は

少し残ったが、今までの由梨亜とは到底思えない外見となった。
そして、光の乱舞がやみ、由梨亜は……いや、『花雲恭富実樹』は目を開けた。
けれど、その目の色も、花鴬国王家の血筋特有の、桃色へと変貌を遂げていた。
そこに現れた女性を見ても、耀太も、瑠璃も、鈴南も、クラスメイト達も、部活の仲間達も、『由梨亜に似た女性』、『似ているけれど他人の空似』といった印象しか受けないぐらい、由梨亜は富実樹になった途端、印象が変わってしまった。
長く付き合ってきた千紗でも、ぱっと見には別人に見えるほどだった。
「ゆり、いいえ。貴女は……『富実樹』？」
「ええ、この姿の私は『富実樹』よ。そして千紗、貴女も産まれた時の本当の姿で育っていたのならば、その姿になっていたはずの姿に変えなくちゃね」
『富実樹』はそう言うと、千紗に向かって、手をかざし掛けようとしたが、その途中で、奇々怪々な音を聞き、ピタッと手を止めた。
「ゆ、ふゆ、ふ、ふみ、ふ……」
それは、何とか富実樹のことを『富実樹』と呼ぼうとして、どうしても『由梨亜』と呼んでしまいそうなのを何とか抑えようとしている千紗の声だった。
富実樹は呆れて、伸ばし掛けていた両手を腰に当てて言った。
「千紗、呼びにくいなら、何も無理に富実樹と呼ばなくていいわよ。由梨亜って呼んでいいわ」
それから、富実樹は千紗を眺めた。
「ここまで外見違うのに同じに思えるなんて、千紗って凄いわ。私、そんな自信ないし」
富実樹のその呆れたような言葉に、千紗は少し唇を尖らせて言った。
「だっ、だって外見は変わっても、声の抑揚、顔の表情は全然変わ

ってないし、由梨亜の面影がちゃんと残ってるんだよ？　これで別人だと思えなんて……しかも目の前で変わったのに……無理があり過ぎるよ。少なくとも、あたしはそうは思わない」

「だから、そこが凄いのよ。大抵の人は、見た目が変わったら別人だって思うんだもの」

そう言うと、富実樹は千紗の左手を取り、自分の左手と共に香封珠にくっつけた。

そうすると、不思議なことに、流れていた血が止まり、傷跡も癒えていった。

そして、今度は千紗の身体を光が取り囲んだ。

その光がやむと、千紗は香封珠からゆっくりと手を離し、部屋に備え付けてある洗面台の方にゆっくりと歩いて行った。

そこに備え付けられている鏡を覗き込むと、そこには、千紗とよく似ているが、千紗ではない別人が映っている。

今まで見てきた、自分の顔とは似ている。

それは認めるが、でも、違う。

まず、髪の色が墨を流したような黒から薄茶色へと変わり、顔立ちも、耀太や瑠璃と似た少し彫の浅い、色白でほっそりとした小顔へと変わっていた。

だが、よく見知った人物が見れば、

「髪染めた？」

「お化粧した？」

「プチ整形した？」

などと訊かれるほどしか変わっていなかった。

「由梨亜、これって……」

千紗がそう呟くと、いつの間にか斜め後ろから鏡を見つめていた富実樹が、自分の姿を苦笑しながら眺め、こう答えた。

「ええ。それが、貴女の本当の姿なのよ、千紗。私がこれから先、この姿で暮らすように、貴女もその姿で暮らすことになるわ」

そう言うと、富実樹は

「千紗、続きを始めるわよ。私達は、これから『花雲恭富実樹』として、『本条千紗』として、行動しなければならないから」
「うん、由梨亜」
二人は香封珠を取り上げ、二人の両手で包み込んだ。
すると、千紗の頭に富実樹の声が流れ込んだ。
『千紗、これから最後の呪言を唱えるから、それを合図が出てから口に出して唱えてね』
『うん。分かった』
『「今、其方の持つ力を解き放ち、我らを正しく元いた場所へと戻し給えよ」。覚えた？』
『うん。分かった。あたし、記憶力は本気になれば凄いんだもの。言えるわ！』
『じゃあ、いくよ。三、二、一！』
「『今、其方の持つ力を解き放ち、我らを正しくもといた場所へと戻し給えよ』っ！」
二人がそう叫んだ瞬間、香封珠が今までになく、直視したら目が瞑れてしまうかも知れないほど、金色と銀色が混じりあった色に輝き、千紗は思わず目を瞑ってしまった。
「千紗……」
富実樹の静かな声が聞こえ、千紗が目を開けると、そこはこの世界に来る時に通った、あの様々な色が氾濫しているトンネルだった。
一つ違うのは、来る時は抗いようのない力で引っ張られていたはずが、今は浮くようにして富実樹と一緒に立っているということだ。
そして、何にも引っ張られてなく、まるで無重力の中に立っているように、けれど、床の上に立っているように足元は安定していた。
「何？　由梨亜。そういえばさ、本条由梨亜と彩音千紗の時は、彩音千紗の方が身長高かったけどさ、花雲恭富実樹と本条千紗だったら、花雲恭富実樹の方が身長高いんだね」
「でも、千紗の身長は大して変わってないわよ。私が大きくなっただけ。っと、今度は千紗が話ずらしたわね。……ねえ、千紗。ここ

って何だと思う？」
「……？　分からない。由梨亜は分かるんじゃないの？」
「いいえ、分からないわ。ただ、一つだけ分かることがあるとすれば、ここは亜空間だということだけね。私達が生きている通常空間でもなく、異質な異空間でもない……『亜空間』」
「由梨亜……」
「だからね、私、そういうことを知ろうと思うの。地球連邦では、とっくの昔に魔法は存在を否定され、迫害されて細々と消えて逝ったわ。私達がさっきまでいたあの時代……あそこの時代が、『魔法』と言う名称を使わなくても、そう言う『力』をまだ信じている人達のいた、最期の時代なのよ。あの何十年後かには、そういう魔法を信仰する宗教は全てなくなっている。貴族制の、王権制の、復活とともに。だけど……花鴛国にはまだ魔法が残っているの。だから、私はそれを学ぶつもりよ。私は今の所、それが夢なの」
「由梨亜……嬉しそう！　良かったぁ……最後に由梨亜のそんな顔を見られて」
　千紗は、本当に……本当に嬉しそうに、微笑んで、言った。
「千紗……私も、最後に千紗が嬉しそうなの見れて、本当に良かった」
「でも、由梨亜……」
　千紗は、先程とは対称的に、哀しそうに目を伏せて言った。
「これで、お別れなんだよね。もう……これから先、会えないかも知れないんだよね」
「大丈夫よ。私、王宮に閉じ籠るばかりの王族にはならないから。だからニュースで私のこと見れるかも知れないし、それに王族が各国を訪れるのも外交関係上あるでしょ？　まあ、それで何かに巻き込まれて死んでしまったとしても十四人も弟妹がいるんだもの。問題ないわ。まあ、私は地球連邦だけじゃなくて色んな国を訪れるつもりなんだけどね。そして地球連邦に行った時って、大抵有名な地方を訪ねるでしょ？　それなら地球連邦五大経済地方のその三の位

置にいる日本州を訪ねても不思議じゃないから、私が日本を訪れることもできるし、その時偶々会えるかも知れないじゃない！　だから、また会えるかも知れないよ！」

「……由梨亜。ありがとう。あと……あの、ね、由梨亜。これ」

と、不意に千紗が話し始めた。

富実樹は少々困惑しながら訊き返した。

「何？　千紗」

「これ、あたしがこの前あげた誕生日プレゼント。前、ここ通って行ったでしょう？　で、その後病院で目覚めた時、あたし、これ握ってたの。返すタイミングが掴めなくて返せないでいたけど、これで最後だし……だから、これ、返すね」

千紗はそう言い、富実樹にそれを手渡した。

「千紗……ありがとう。本当に……本当に……！」

「あたしは由梨亜の姿をニュースとかで確認できるかも知れないけど、由梨亜はもっと難しいでしょ？　それに、あたしの方は次第に由梨亜のことを忘れて、由梨亜は永遠にあたしのことを憶えている……だから、これを見てあたしを思い出して」

千紗がそう言い終えた途端、二つの大きく輝く光が降り、二人を包んだ。

「時間切れなのね……千紗、私、千紗に逢えて本当に良かった……ありがとう！」

「それは、こっちの台詞だよ。由梨亜に逢えて本当に良かった。ありがとう、由梨亜！　花雲恭富実樹としてのこれからの人生を、精一杯生きてね！　……またね、由梨亜！」

「千紗も……千紗も、本条千紗としての人生、楽しく過ごしてよ！　絶対に！　またね、千紗！」

その言葉を口にし終えた途端あまりにも眩し過ぎる、爆発したかのような光に包み込まれ、何も見えなくなり、また、何もかも分からなくなった。

しかし、最後の最後まで二人の胸の内に抱えていた想いは一緒だ

った。

互いに、ありがとうと、出逢えて良かったと感謝する気持ちを抱えて……。

# 第五章「時と宇宙（そら）を越えて……」―2（前書き）

途中でいじめの表現があるので、苦手な方はご注意下さい。

# 第五章「時と宇宙（そら）を越えて……」―2

千紗が気付くと、そこには見慣れない天蓋があった。

それ以前に、身体が柔らかな布団の上に横たわっていることに途惑いを感じた。

（一体……ここは、どこ……？　確かあたし……千年前に、飛ばされて……色々あって……それで……。そうだ。香封畏院に入ったんだった。そして……由梨亜と話さなくなって……封香奏祭があって……。それで、その、最後の日に……由梨亜はっ……！　由梨亜が……本条由梨亜じゃなくて、花鴬国の王女様、花雲恭富実樹……で……あたしが、彩音千紗じゃなくって、本条、千紗で……！　そうだ。由梨亜……由梨亜はっ？）

ゆっくりと身体を起こし、由梨亜を捜して辺りを見渡すと、鈴南がシーツの上に頭を乗せて眠っていたのに目が留まった。

千紗は、少し焦った。

鈴南は本条家に仕えている召し使いだが、本条家は上流貴族の家柄。

たかが召し使いといえども、普通、庶民は本条家の人の目に届く所には雇わない。

庶民は、庭の手入れや召し使いの身の回りの世話をしたり、屋敷を掃除する機械を手入れしたり、台所仕事をしたりする、本当の端者なのだ。

本条家の令嬢に仕えるならば、最低でも下流貴族の娘なのである。

なのに、人前で寝てしまうなんて……それも、自分の仕えている人の前で寝てしまうなんて、とっても恥ずかしいことだ。

少なくても、自分の知っている限り、鈴南はそう考える人物である。

一瞬、千紗は鈴南を起こすことを躊躇ったが、思い切って起こすことにした。

「鈴南……起きてる？」
千紗がそう呼び掛けると、鈴南は一瞬ビクッと身体を震わせ起きた。
「お、お嬢様……お……お目覚めですか？　これは、申し訳ありませんでした」
鈴南はそう恐縮して謝った後、
「千紗様、少々お待ち下さいませ。今、旦那様、奥方様、侍医をお呼びして参ります」
鈴南はそう言うと慌てて部屋を出て行った。
余程恥ずかしかったのだろうか、可哀想なことに、顔が真っ赤である。
千紗はその間に、鈴南に気を取られてあまり詳しく見なかった部屋を見渡した。
千紗は、自分の記憶の中にある由梨亜の部屋の記憶とこの部屋を照らし合わせたが、やはり、これは由梨亜の寝室だ。
今の千紗の状態から見て右側にある扉の向こうは由梨亜の居間のような所で、千紗が遊びに行くとその部屋でよく遊ぶ。
その更に奥にある扉の向こうは、勉強部屋のはずだ。
いつも、由梨亜の家に遊びに行くと、沢山の部屋が由梨亜一人の為にあることに、呆れ半分、羨望半分の思いを抱えていたことを、はっきりと思い出す。
（……良かったぁ……まだ、由梨亜との記憶を……彩音千紗としての、あたしの記憶を、失ってない……）
その時、鈴南が侍医と由梨亜（ではなく千紗）の父と母を引き連れて戻って来た。
「千紗様、具合が悪い所はありますか？」
そう侍医が問い掛けてきて、千紗はようやく自分の身体がどういう状態なのかを確認した。
大した痛みはないが……何だか、よく分からない。
「えっと、少し眩暈がするような……グラグラするような……変な

感じです」

千紗が正直に言うと、侍医はあっさりと言った。

「それは、お腹が空かれたからでしょう。ですが、まだ消化のよい物を食して下さい。少しずつ元に戻っていくでしょうから、それまでは我慢して下さい」

侍医は、由梨亜（ではなく千紗）の父と母に言った。

「薬を処方しておきますので朝と夕に飲ませて下さい。あと無理に起こして疲れさせないようにお願い致します。それでは鈴南殿、薬を調合してお渡ししますのでこちらへ」

侍医はそう言うと鈴南と一緒に部屋を出て行った。

「千紗……」

由梨亜（ではなく千紗）の母は、千紗の額にかかっている髪を掻き上げ、優しく、にっこりと微笑んだ。

「千紗、貴女は一日、眠り続けていたのよ。夏休みが明けたその初日に、貴女、一人で、屋上でお弁当を食べていたでしょう？　その時、貴女は倒れてしまったのよ。貴女が倒れたと聞いて、本当にびっくりしたわ。心臓が止まったのかと思ったのよ」

「千紗、お前は起き上がれるようになったが、まだ本調子ではない。無理せず寝ていなさい。なにか欲しい物があれば、言ってくれ。できる限りのことは叶えてやるから」

「いいえ。何もないです」

千紗がそう答えると、由梨亜（ではなく千紗）の父は

「そうか。では、何かあったら鈴南に言え」

と寂しそうに言い、部屋を出て行った。

由梨亜（ではなく千紗）の母は、千紗の枕元に座った。

「千紗、もうしばらく眠っていなさい」

由梨亜（ではなく千紗）の母は、千紗を愛おしそうに撫でて、子守唄を謡い始めた。

千紗は、

（十三歳になったのに子守唄か……）

と少々呆れながらも、その手の感触を楽しんだ。
千紗の（実は養）父と（実は養）母は共働きで、幼い頃の記憶は、ほとんど保育所で遊んでいる記憶だ。
物心がついてから、（実は育ての）両親に甘えた記憶は少なく、親としての優しい手をほとんど知らないのだった。
しかも、千紗の（実は養）父が死んでからは、（実は養）母は家計を支える為に今まで以上忙しくなり、休みもほんの少ししか取れなくなった。
そして、その手触りを楽しんでいるうちに、千紗は、深い眠りへと引き込まれて行ったのだった……。

千紗は三日も経つと、元通り元気になった。
千紗は動き回れるようになると、屋敷中の絵や写真、今まで撮った成長記録などを全て確かめたが、恐ろしいことに、全て由梨亜の代わりに幼い千紗が写っていた。
最初は記憶を探っても何もなかったが、しばらく時間が経つうちに、その光景が浮かび上がり、その頃の、自分の本当の記憶が思い出しにくくなり、千紗は鳥肌が立つのをまざまざと感じた。
「ど、して……」
そう、声が漏れるのを、抑えることができなかった。
（あたしは……由梨亜の記憶を、少しずつ失っていくの？　だんだん？　少しずつ？　だったら……いっそのこと、最初っから、全部奪えば良かったのにっ……！）
そう思うことを……抑えることが、できなかった。

千紗は目覚めてから一週間後、学校へ行くことになった。

そして学校へ行った千紗が教室のドアを開けると、喜色満面の並樹咲が振り返った。
「あら、千紗様！」
そう言うと、驚異的な速さで千紗の前まで来て、その勢いに、思わず千紗は一歩退いた。
「千紗様、お加減は宜しいですか？　あたくし、千紗様が学校に来られるようになって本当に嬉しく思います！」
咲はそう嬉しそうに言うと、嫌そうに後ろを振り返った。
「おお、嫌だ。千紗様、ご覧下さいな。この清潔な学校に黴菌がおります。お前達、何をしているの？　すぐに追い出しなさい。千紗様にも、このあたくしにも、この黴菌と同じ空気を吸わせるおつもりっ？　お前達庶民とは違い、大貴族である千紗様はとても繊細なのですよっ？！」
その言葉に、千紗は由梨亜が転校してきたばかりの頃のことを思い出し、嫌な気分になって眉を顰めた。
けれど、咲に一喝されたクラスメイト達は、咲に目を付けられるのが嫌なのか、続々と動き出した。
「おい、香並、立てよ」
「そうよ。第一、咲様と名前が二字も被ってるなんて、目立ちたがりにもほどがあるわ！」
みんなにいじめられている香並都樹は、優しく大人しい気性の少女である。
だが、そこが咲の癇に障ったのか、都樹は咲にとって、千紗以来である二年振りのいじめのターゲットになっていた。
都樹は、みんなに囲まれ、怯えていた。
「おい、何か言えよ」
「えーっ。黙秘権かよ」
「っつーか、香並にそんな権利なんてあんのかぁ？」
「って言うか、香並に人権ってあったっけ？」
「ないない、絶対ない！　って言うか、香並って、人間だったっけ

か？」
「ああ、こいつは黴菌だ！」
「ええ、その通りです！　これからはみんなもそれを黴菌と呼びなさい！　それは人でもないし、名前もないのですから！　力でもって、このことを思い知らせなさいっ！」
咲の言葉にクラス全員で笑い、都樹の持ち物を全て都樹に向かって投げ付け、殴り蹴る。
その笑いには、咲は気付いていなかったが、恐怖が滲み出ていた。
本当はいじめたくないけど、言い返したり、参加したりしなかったら、自分がいじめられるから――
自分だけはいじめられたくないし、人身御供が他にいるなら別に、それで――
そういう思いが、このクラスを覆っていた。
しかも、このいじめは、傍観者という者が存在できない。
もし傍観していたのなら……例えば、みんなでいじめている人物を取り囲んでいる時、もし一人だけ取り囲まなかったら、今度はその人がいじめられる。
もし全員でやらなかったら、咲が教育委員会に泣き付き、全員、退学か停学となるだろう。
先生達も、怖いから言いなりだ。
千紗には、その思いが痛いほど分かる。
千紗も、二年前までいじめられた一人だったから。
その思いを、まざまざと付き付けられた張本人だから。
だが、だからと言って無視する訳にはいかない。
千紗は、都樹を庇うつもりだった。
由梨亜が千紗を救ってくれたように、今度は千紗が。
「あんた達っ！　もう、好い加減やめなさいよっ！」
「千紗……様？」
咲は呆然としながら言った。
恐らく、五年生の時に転校して来た『本条由梨亜』と、それまで

いじめられていた『彩音千紗』という存在が消え、五年生で転校して来た『本条千紗』という存在のみになった為、咲が千紗をいじめていた事実はなくなり、勿論『本条家の令嬢』に咲がいじめを咎められることもなく、いじめが再発したのだろう。

その事実に苛ついた千紗は、途惑う咲を丸っ切り無視する。

「あんた達ねえ、そういう風に嫌々いじめるのって楽しい？　本当は嫌なんだけどって思ってるの、ものすっごく分かるよっ？　そうやっても、咲が喜ぶだけ！　もう、こんないじめなんてやめてっ！」

千紗はそう叫ぶと、都樹の所に行き、手を差し伸べた。

「大丈夫？　都樹」

「すみません……ありがとうございます、千紗様」

「やめてよ、敬語なんて。他のみんなも」

千紗は、周りをグルッと見渡した。

「今後一切、いじめはやめて。もしあたしの目の届かない所で咲がいじめていたら、すぐにあたしに言って。……咲」

そう言うと、千紗は咲に向き直る。

「今後一切、いじめを禁じます。それがあたしの耳に入ったら、どんなことになるのか分かってるわよね？　本条グループには、そういうようなことをやれるだけの力はあるわよ」

千紗が脅しを掛けると、咲は顔を歪め立ち去った。

「千紗様……本当に、ありがとうございます」

都樹が千紗に向かってお礼を言うと、

「そんな大したことをやったつもりはないわ。だから、お礼なんて必要ないわよ」

「ええ。分かりました、千紗様」

「あ、そうだ。あたしのこと敬語で呼ばないでね。絶対に」

「そ、そんな……本条グループのご令嬢を……」

「だから、そういうことを気にしないでね！」

千紗が強引に押し切ると、都樹は顔を僅かに引き攣らせながらも、何とか言った。

「は……う、うん！　ち、千紗、ちゃん！」
千紗は、嬉しそうに微笑んだ。
そしてそれを見た都樹も、ぎこちないながら微笑み返した。

その日、千紗は感覚的にはかなり久し振りに部活へと行った。
「あ～っ！　大丈夫？　もう何ともないの？」
「あ、はい。ご心配をお掛けしました……」
「ううん、そんなのは大丈夫よ。でね、その……夏休みにやった、あの百不思議のことなんだけど……」
「やっぱり、悪戯ですか？」
千紗にズバッと切られ、柑奈（かんな）は絶句した。
「うん……そう。気付いてたの……。何かがっかり。からかいようないじゃない」
「当たり前じゃないですか、柑奈先輩」
千紗と同級生の子が、ガッと近寄って来た。
「ね、千紗。あたし達がやった時に見付けた、この指輪。やっぱり、先輩の悪戯だったんだ。で、千紗が学校休んでちょっと経ってから、先輩達がネタばらしって言って、冗談だったってばらしたの」
その言葉に、千紗は笑って言った。
「やっぱりそうかぁ……なんか、怪しいって思ってたんだよねぇ……。ね、あたし達が見付けたのって、ほんとにその『指輪』だった？」
「うん。そうだよ？　何言ってんの？　千紗」
その言葉に、千紗の顔は笑っていたが、背筋に冷や汗が流れるのを抑えることはできなかった。

# 第五章「時と宇宙（そら）を越えて……」―3

「御久し振りに御目に掛かります、陛下。この度、わたくしを花鴛国へ連れ戻して下さいましたこと、本にありがたく存じます」

「富実樹第一王女よ、大きくなられ、再びこの国に御戻りになられたこと、喜び申し上げます。これからは、この国の王女として、また跡継ぎの娘として、そして弟妹達の姉として振舞うよう、御願い致します」

そう言ったのは、一段高い所にある玉座の足元に控えている、一見しただけでかなりの大貴族だということが分かる男性である。

そして、その玉座に座った威風堂々とした男性の足元に、略式ではあるが一国の国王に、そして自らの父に、公式な場で挨拶するのに相応しい礼をした、美しい少女がいた。

ここは花鴛国の王宮、カサミアン宮の玉座の間。

男性の足元にいるのは、生後一ヶ月足らずでこの国を離れ、そして十三歳になった今戻って来た、花鴛国第一王女にして第一王位継承者である、花雲恭富実樹。

そして、玉座に座っている男性は言うまでもなく、ここ花鴛国の国王にして富実樹達十五人兄弟の父である、花雲恭峯慶。

そして、左右の長机に座っているのは、普段から王族との接触が許されている大臣級の貴族や官吏十数人と、庶民からの選挙で議会の委員になったうちの代表五名。

そしてその短い対談が終わり、富実樹と峯慶は、一緒に後宮の峯慶の部屋の一つに行った。

部屋に着いてから、峯慶は富実樹に向かって尋ねた。

「富実樹……本当に、良かったのか？　戻ってきて。来年でも良かったのだよ？　いくら向こうにいても、こちらに戻って来るその時は、変わらなかったのだから……」

「……そのことは、仰らないで下さい。私も、後悔していますから

……」

「では、何故そうしなかったのかな？　私の娘よ」

峯慶が茶目っ気を出してそう尋ねると、富実樹は少し唇を尖らせて答えた。

「あれ以上、千紗（ちさ）が――私と入れ替わった人が、真実から押し出されているのに耐えられなかったんです。それに、知らせてしまったとしたら、私も千紗も、どこかぎこちなくなってしまいます。それだったら、告げたらすぐに戻る方が良かったんです」

「そうか……それでは、お前はこれからこの国の地理歴史、王族としての立ち居振る舞い、言葉遣いその他諸々を学びなさい。丁度よい教師もいることだしな」

「御父様、丁度よい教師とは、どなたですか？」

「今呼んで来るから焦らないように。由梨亜妾（ゆりあしょう）、富瑠美（ふるみ）を呼んで来なさい」

由梨亜妾――富実樹の母は、その『富瑠美』を呼びに行った。

しばらくして、ノックの音がして、由梨亜妾と、その『富瑠美』だと思われる、富実樹と同じくらいの少女が入って来た。

「失礼致しますわ。御父様」

（御父様……？）

富実樹は嫌な予感に駆られたが、見事にその予感が的中した。

「富実樹、これは深沙祇妃（みさぎひ）の娘で第二王女、第二王位継承者である富瑠美だ。つまりは、お前のすぐ下の異母妹（いもうと）だよ」

そう紹介された富実樹の異母妹の富瑠美の髪は、富実樹と似てふわふわと波打っていたが、金糸に勝るとも劣らない見事な金髪で、目は富実樹と同じ桃色だが、色は富実樹よりも濃い色で、背は富実樹より少し小さい。

そして、髪の色、瞳の色、それに身長を見ないことにすれば、瓜二つであった。

「御異母姉様（おねえさま）、御初に御目に叶いまして、わたくし、本当に嬉しゅう御座いますわ」

「貴女は……私の異母妹の……富瑠美様？」
富実樹はどこか呆然としながら問い掛けた。
だが――
「それはいけませんわ。御異母姉様」
いきなり、富瑠美がきっぱりと言い返して来た。
「まず、一人称は『私』ではなく『わたくし』と仰って下さい。それにいくら母親が妃（ひ）と妾（めかけ）ではあっても、第一王位継承者、及び第一王女は貴女様で御座います。つまり、わたくしの異母姉（あね）に当たります。ですので、わたくしのことは富瑠美と御呼び下さいませ。それから、絶対に他の兄弟に様付けをしないで下さい。実の兄弟で、それも貴女様の方が格上であらせられるというのに、それは大変可笑しいことですわ。誰に何度訊こうとも、誰もがそう返すはずに御座います」
いきなりどぎっぱりと言われ、思わず目を白黒させていると、苦笑しながら峯慶が言った。
「富実樹、富瑠美はお前の異母妹ではあるが、お前を裏切る可能性の少なく、そして最も地理歴史儀礼祭典等に通じている。これから、お前は富瑠美に付いて、様々なことを学びなさい」
「は、はい……分かりましたわ。御父様」
それから、
（どうして……富瑠美は、あの深沙祇妃の娘なのに……）
と不思議に思い富瑠美を見ていると、富瑠美は苦笑して答えた。
「御異母姉様、このことを不思議に思うのも、無理は御座いませんわ。わたくしは、御異母姉様とはほんの二時間差で産まれ落ちましたが、そのたったの二時間で、わたくしは第一王位継承者にはなれませんでした。それに、わたくしの御母様――深沙祇妃は失望して、御母様付きの侍女侍従共々、生後間もないわたくしを育児放棄してしまったのです。早い話が……そうですね、ボイコットですわ」
「ボイ、コット……？」
富実樹の問いに、富瑠美はあっさりと答えた。

「ええ。第二王位継承者とは言え、王位継承権を持つ子供が死んでしまっては堪りませんから、御父様が、わたくしを御母様から無理矢理取り上げて、由梨亜妾に預けたのですわ。そして名付けもして頂きました。ですから――」

「ちょ、ちょっと待って。貴女の御母様……深沙祇妃は、名前も付けずにボイコットした訳？　それって大事じゃない！　誰も、何も言わなかったの？」

咄嗟のことで、富実樹は思わず敬語を使うのを忘れてしまった。

だが、その途端……富瑠美の冷た～い視線が、富実樹を射抜いた。

「それでは、後で言葉遣いの猛特訓をさせて頂くということで……」

その地を這うような低い言葉に、富実樹は思わず一歩後退ってしまった。

「まあ、そうですわね。それどころか、御母様の後見人は、皆それに便乗してしまいましたわ。しなかった方も、いるにはいましたけれど……。ですが、他の方々は、わたくしが第二王位継承者であること、そして阿実亜女（あみあじょ）に懐妊の兆しがあることから、御父様と由梨亜妾以外からは、本当に無視されましたわ」

「へ、へえ……」

思わず、富実樹は感心してしまった。

「そうですわ。こんなことを話している場合では御座いませんでした。それでは、早速授業の方を始めたいと思います。御異母姉様、授業のことですが、この国のことについてどのようなことを御存知ですか？」

「はい。えっと、この国が宇宙連盟の長的役割を持っていることや、地球連邦が他の星の存在を知らなかった時の日本国との関係など、基本的なことしか……」

「そうですか。では、地理歴史から始めましょう。また、それらの合間を縫って言葉遣いと儀礼作法を。それでは地理から始めましょう。こちらへ。あと、昼餐は御食事のマナーの練習です。やることは沢山ありますわ。それと、ことによっては他の弟妹達の力も借り

ますわよ」
「は、はい……」
さっさと歩き始めた富瑠美の後を慌てて追って行ったが、富瑠美が滑るように歩いているのに対し、富実樹はそれと逆だった。
そして部屋に残っていた富実樹の父母は、富実樹の
「どうしたらそういう風に歩けるの……？」
と言う弱音を聞き、笑い出してしまった。
峯慶はゆったりと重々しく、由梨亜妾は軽やかに。
「まあ、なんて面白いこと……」
由梨亜妾が言うと、峯慶も言った。
「ああ。こう言う子供達に育つとは、正直言って、あの時は思ってもみなかった……」
「そうですわね。本当に、予想も付かないことばかりで、面白う御座います。……そう言えば、陛下。富瑠美があの誓約書を書くこと、深沙祇妃は御承知なさいましたの？」
「ああ、それか。勿論、気が狂ったかのように騒ぎ出したよ。だが喚いている隙に富瑠美がさっさと署名して、それでことなきを得た。さすがは、富瑠美だ。其方が育てたことはあるな」
「……ええ。まあ、そのことは置いておくとして……それは、深沙祇妃は騒ぐでしょうね。富実樹に何もない限り、王座を狙わないという誓約書だなんて……」
「ああ……。そうだな」
峯慶は小さく笑みを洩らして言ったが、ふと、真顔になって由梨亜妾に問い掛けた。
「話は変わるが、あの二人は、本当に自分の名前の意味を解ってくれるだろうか。我々が、心を込めて付けた名を……」
峯慶のその溜息のような言葉に、由梨亜妾が風のように呟いた。
「富実樹は、『富や名声を陰謀などによって手に入れるのではなく、優しい行いによって心を富ませること、樹木を視てその神秘を感じる美しい心、そして、その時に実った果実を、単なる食糧としてみ

なし、感謝する気持ちすら持たないのではなく、ここまで育ってきたその生命力と大地の恵みに感謝する心』を、富瑠美は『心を富ませ、豊かな心を持つように、高貴さを表すラピスラズリ――瑠璃のように気高い心を持ち、それでいて弱者を思いやる気持ちを持ち、宝石のように美しく、きらきらと光る美しさ、心を持つように』と、わたくしが付けた名のことですね？」

「ああ。……富実樹は解ってくれるかも知れないが、富瑠美は、真実解るとは思えないな。あの深沙祇妃の血を引いているのだから、やはり似る所はある。富瑠美は、物事を深く追求せずに、上辺だけを飲み込んで行動することが多々あるからな……。富瑠美には、この意味が、解らないだろう。……さて、そろそろ行かなければ。処理しなければならない書類が山ほど残っている」

「いってらっしゃいませ、陛下。ですが、わたくしの記憶違いでなければ貴方様は、書類の処理は、他の御兄弟と比べて、凄まじい速さでこなされていたと思いますが……」

由梨亜妾は、茶目っ気たっぷりに含み笑いをし、峯慶も同じように笑い返してきた。

どうやら、この夫婦は茶目っ気がたっぷりとある、似た者夫婦のようだ。

「それは、他の兄弟が少し遅くて、私が少し速かったということだけだよ」

そう言うと峯慶は部屋を出て執務室へと向かい、由梨亜妾は自分の部屋へと向かった。

## 第五章「時と宇宙（そら）を越えて……」―3（後書き）

今回の話で、第?部はようやく中盤まで進みました。ここまで読んで下さって、ありがとうございます。

次話からは、少し時間が飛んで四年後になります。それぞれ、本来の居場所に戻った二人、特に富実樹（由梨亜）の方が、どんな活躍を見せて、どんな選択をするかに焦点が当たることになります。富瑠美以外の富実樹の兄弟達も登場する予定ですので、お楽しみ頂けたらと思います。

この話はまだまだ続きますので、どうぞ宜しくお願いします。

# 第六章「四年後……」―1

それから、四年近くの月日が流れた。
現代に戻って来ておよそ二年半後、千紗（ちさ）は高校も公立校へと、両親の反対を無理矢理押し切って入学した。
そこは、大学への――特に有名大学への進学率がとても高い学校で、しかも偏差値も平均が七十近くあるというとても頭のよい学校であり、いくらお嬢様でも簡単には入学できない、実力で伸し上がって来た学校なのだ。
なので、耀太（ようた）も
「公立校……進学校……う～ん……」
と唸るしかなかった。
進学校と言うことは跡取り娘が優秀であるということを証明できるが、私立ではなく公立、しかも男女共学という所が躊躇わせるのだった。
だが、結局は千紗が勝利したのである。
しかし、三人の婚約者候補の問題があった。
千紗はこの婚約者候補達と会いたくないから、高校も部活に入ろうと決めていた。
そしてどうせなら一番忙しい部活に入ろうと思い、体験入部した文化部（運動部だけは何があっても絶対に駄目だと言われたので）の中で、レベルが高く忙しそうだった吹奏楽部に入部し、ホルンを担当した。
そして、意外と千紗には才能があったらしく、中学から続けている人には及ばずとも、そうでない一年生の中では一番上手くなった。
三年生が引退した頃には、中学校から続けている人と並ぶぐらいまで上手くなった。
そして二年生になり、全地球コンクールのユーラシア大陸大会で好成績を修め、しかしながら連邦大会には出場できずに先輩達は引

退して行った。
先輩が引退した後、千紗が部長となり部活を引き継いだ。
それでも耀太と瑠璃は婚約者候補を諦めず、しつこく誰が一番いいかを訊いて来た。
千紗は本条家の令嬢として相応しい身のこなし方を身に付けていったが、それと同時に由梨亜のことを少しずつ忘れていき、一年経った頃には完全に忘れた。
たまに釈然としないことや、寂しく感じることがあったが、小さなことだった為、そのことすら忘れてしまった。
富実樹は、一年間富瑠美達富実樹に好意的な弟妹達から時に厳しく、優しく、厳しく、厳しく、厳しく、厳しく色々なことを教えてもらい、他の弟妹達に追い付くぐらいまでになった。
そして、富実樹が戻って来て一年後の年、峯慶は身体の調子を崩してしまった。
長い間ベッドから降りられない身体になってしまったのだ。
なので、峯慶は譲位して病気の治療に専念することになり、多数の反対があったものの、第一王位継承権を持っている、この国に来てまだ一年と少しの富実樹が女王として王位に即くことになった。
富実樹はただ純粋に父を心配し、王位に即いたからには、他の弟妹達と力を合わせて国を護って行こうと考えていた。
そして、富実樹が王位を継いで二年間が過ぎ、三年目が始まって半年が経った頃、この花鴬国では何かが起ころうとしていた。

そこでは、官封貴族と呼ばれている、官位を封じられている貴族、官吏、成人した王族が大会議室で討論会を開いていた。
「陛下、地球連邦は陛下が御育ちになられた地でおられることは存じておりますが、そのような些事に心を傾けるのではなく、寛大な御心を御持ちになられて下さいませ」

「だから、そういう意味ではありません。貴方方は地球連邦を、武力を持って従わせ宇宙連盟に加盟させ、宇宙連盟の長である花鴛国の言うことを聞かせようと仰いますが、わたくしはその方法が間違いだと言っているのです。武力ではなく話し合いを持って連盟に加盟させないといけません。武力を使ったら、必ず死者が出ます。それは、誰かの親であり、兄弟であり、子供であるのです。誰かが死んだら、誰かが悲しみます。そして、悲しみは恨みを呼び、そして、復讐へと発展する可能性が高くなります。そして、復讐はまた新たな悲しみと恨み、復讐を呼び、グルグルと回り続けます」

富実樹は、唇を引き結んでぐるりと辺りを見渡した。

「ですが、その原因となることを起こさなければそのようなことは起こらず、復讐自体なくなります。そして、そのようなことがあるのならば、どこかで断ち切らなくては国と国との関係が成り立ちませんわ。そして、一度亀裂が入ってしまった関係は戻りがたい物です。だから、そのようなことを、他の方法があるにも拘らず行使することはなりませんわ。絶対に。それに、宇宙連盟の存在意義は、全宇宙の平和と共存を維持すること。武力などを使ってしまえば、その理念に真っ向から相反することになりますわ。何か反論は御座いますの？」

富実樹の呼び掛けに、富瑠美派の貴族は黙り込んだ。

反論しようにも、富実樹のあまりにも上手い弁舌に、上手く反論する術が見つからないのだ。

だがそんな状況の中で、富瑠美は何と富実樹の言葉遣いを注意した。

「陛下、『だから』ではなく『ですから』と御言いになられなければなりませんわ。また、『ずっとグルグル回り続けます』も、できれば『半永久的に悲しみ、恨み、復讐と連鎖するのです』に直した方が宜しいかと。一年間の特訓が足りなかったのかしら……？」

「いいえ、充分足りておりますわ！　ただ、熱心になるとつい……」

「なるほど。では、熱心になって言葉遣いをきちんとするよう常に

御心掛け下さいませ。それではもう意見は出ないようなので、本日はこれでお開きということで宜しいですか？」

富瑠美が立ち上がってそう言うと、皆が頷いた。

「それでは、明日の総票会で、この議題の結果を」

総票会とは、一定年齢に達した王族、官封貴族、地封貴族、官吏、宗教家、学者が投票する物である。

富実樹がそう言い、討論会は終了となった。

富実樹は早々と書類を自分の親族の貴族に預け、大会議室を立ち去って行った。

富実樹は自らの部屋へと戻り、長椅子の上に、バフンと倒れ込んだ。

「もう、嫌になってきちゃうよ……」

「何が嫌になるのですか？　富実樹御姉様。それと、言葉遣いを直して頂かなければ」

「分かっておりますわ。ただの独り言です。それよりも些南美。どうかなさいましたの？」

富実樹を、十四歳の富実樹の妹で第五王女、峯慶の第九子である些南美が覗き込んだ。

些南美はくすくすと笑うと、富実樹に言った。

「富実樹御姉様、そのように寝転がるのはとても御行儀の悪いことで御座いますわよ。即刻やめて頂かなければ富瑠美御異母姉様の御所に参りますが、どう致しますか？」

「はいっ。起きますわっ！」

富実樹は跳ね起き、長椅子に座り直した。

「それで富実樹御姉様、今日で、あのことについては最後の御前会議でしたが、何か御座いましたの？」

「ええ。わたくしは地球連邦を宇宙連盟に加盟させるのは大賛成で

す。地球連邦の方々はわたくし達よりも器用ですし、科学の発展にも繋がると思いますのよ。ですが、武力でそんなことをしてしまったら、地球連邦から好意的な協力は得られにくいと思うのです。わたくしも、同じ立場でしたらそう考えると思います。ですから、できれば最初から武力を使うのではなく、まずは話し合いで加盟させた方がよいと何度も言っているのですが、富瑠美派の貴族達の反対が激しくて。総票会でどうなるかは、最後の御前会議で大体分かると御父様は以前仰っておりましたが、わたくしには全く分かりませんでしたわ。それは、他の方も同じようです」

「そうなのですか。ですが、いつの世にも、国民全員から支持される完全無欠の王なんておりませんわ。もし反対意見が出たら可笑しいという物以外で反対意見が絶対に出ないのなら、そこは王の言うことが絶対で、王に反対することは諸悪の根源だと決め付ける国だけです。真に喜ばしいことながら、この国はそうでは御座いませんもの。反対に合うのは仕方のないことですわ」

　些南美は少し苦笑気味に言った。

「それよりもわたくしは、富瑠美御異母姉様が鴬大臣（おうだいじん）に御着任なされたことに、とても驚きましたわ」

　ちなみに、鴬大臣とは花鴬国の大臣の一種で、その大臣には代々王の弟妹がなる。

　そして、王が退位すれば鴬大臣も政から身を引き、鴬大臣が位を退けば王も退位するという慣習がある。

　つまり、花鴬国の国王と鴬大臣は、いわゆる一蓮托生の間柄なのだ。

　一年も前の話を言われ、今度は富実樹が苦笑気味に言った。

「ええ。大抵の方はそう思われるでしょうね。富瑠美は、あまり物事を深く考えずに表面を見て判断することは多いのですけれど、政治力と様々な方面に通ずる知識は、賞賛に値しますわ。まだこの国に来て四年のわたくしとは、まるで比べ物になりませんもの」

「それは、わたくしも認めますけれど……」

些南美は少し唇を尖らせて言いました。
「わたくし、やはり富瑠美御異母姉様を鴬大臣に据えたのは、間違いだと思いますわ。幼い頃はわたくしと一緒に育ち、御母様のことを慕っていらっしゃるとはいえ、何しろあの深沙祇妃(みさぎひ)の娘ですから。他にも、富瑠美御異母姉様に準ずる方はいらっしゃるでしょう」
富実樹は小さな溜息をつくと苦笑し、何も知らない子供に教えるように言った。
「いいかしら？　些南美。物事は……特に政治は、こちらの信じる物だけを推し進めては成り立ちませんわ。これは、わたくしと富瑠美のことでも言えることです。わたくしが十三でこの国に戻ったことで、自らが後見する深沙祇妃の子である、富瑠美が王位に即けなくなってしまわれたのですもの。深沙祇妃の後見人達は、皆大損をしたと思われますわ」
富実樹はそう言うと、苦笑した。
「沙樹奈后(さきなこう)は、息子がわたくしの夫となることに決まりましたし、何よりもこの国で生まれ育った王族で御座いますし、御母様とも仲が宜しい方でいらっしゃいますから、このことは深く理解しておいでです。ですが、深沙祇妃はそう簡単にはいきませんわ。元々は他国の王族でいらっしゃいますし、ことは外交問題にまでも発展する惧れが御座います。そして、その不満を解消するには、深沙祇妃の子供のいずれかにそれなりの役職を与えるのが一番ですわ。丁度、富瑠美は政治面でも知識面でも才能に溢れておりますから、鴬大臣に就けただけのことです。それに、富瑠美がいなくても、他の誰かが富瑠美と同じことを言い出すでしょう。つまり、結果としてあまり変わりはありませんわ」
「ですが、富実樹御姉様……」
些南美が反論しようとした時、扉が叩かれた。
「失礼致します、富実樹異母姉上(あねうえ)」
そう言って、たった今話題にしていた沙樹奈后の長男で、第一王子であり峯慶の第三子、そして富実樹の婚約者である杜歩埜(とふや)が入っ

て来た。
「あら、杜歩埜。どうなされましたの？」
「またもや富瑠美異母姉上達を論破なされたと小耳に挟み、やって来たのですが……」
そう言って苦笑すると、
「どうやら、先客がいたようですね。さすが些南美、情報が速い」
「そんなことは御座いませんわ。わたくしは結果しか存じ上げませんでしたもの」
そう言って、二人は互いの目を見つめ合い、くすくすと笑った。
富実樹はそれを苦笑して見ていたが、長椅子から立ち上がると、
「どうやら、わたくしは御邪魔なようですわね。それでは失礼致しますわ。久しぶりに、御母様に会って参ります。どうぞ、わたくしの部屋での逢引きを御楽しみ下さいませ」
と言い、本当に部屋を出て行ってしまった。
見る人が見れば、杜歩埜と些南美は相思相愛だということがはっきりしている。
だが、現実的に見て、二人が結婚できる確立はとても低い。
この国の王家は、近親婚で成り立っている部分がある。
男王の場合、二人が嫌がらなければ——まあ、滅多に嫌がることはないのだが——后（きさき）は一番高い王位継承権を持つ妹がなり、女王の場合は一番高い王位継承権を持つ弟と結婚する。
男王の場合、確実に妹の子供が王籍に残るとは限らないが、女王の場合は血が色濃く保たれる。
しかし、それは王位に即くことができたら、の話。
それを叶える為には、富実樹と富瑠美がどうにかなって王位を継ぐことができなくなり、更に阿実亜（あみあじょ）女の長女で第三王女、峯慶の第四子の璃枝菜（りえな）と、沙樹奈后の長女で第四王女、峯慶の第七子の早理恵（さりえ）がどうにかならなければならない。
そして、それはとても可能性が低い。
また、他の臣下達はそのことに気が付いていない。

二人は、互いに視線だけで満足するしかないのだった。
だが、杜歩埜が富実樹と結婚すれば、正式に認められなくても可能性がある。
それは、『総下』と言う制度だ。
この国では、男王の場合、后、妃、妾の子供が三人、最貴、最侍、最女の子供が二人産まれれば、もうその妻達は妻としての役目は終わる。
総下とは、昔それに不満を持った王がいて、それを解消させる為に作られた制度だ。
だが、今はそのような意味合いとは違う。
今は、まず貴賤を問わず総下になることを嫌がらなかった二十一歳の娘達が年に一度集められ、王に目通りを許される。
そして、それは一生に一度の大チャンスだ。
王に目通りし、その娘達の中から王の気に入った娘を年に二人から五人ほど選ぶ。
そして、選ばれた娘達は二十四歳の誕生日を迎えるまで王の総下として過ごすのだ。
二十四歳の誕生日を迎えた後は、大半はどこかの貴族の二番目や三番目の妻になる。
つまり、女性としての箔が付き、玉の輿に乗れるということになる。
そして、王位に即いたのが女王だとしても、その夫が総下達の相手をする。
それを利用すれば、富実樹が杜歩埜と結婚した後に、些南美は総下になれるのだ。
また、王や女王の夫が気に入った総下がいたら、もしくはその子を産んだら、その総下は一生後宮にいてもよいということになる。
それまでのおよそ九年間、富実樹は些南美達の恋愛を見守るつもりだった。
たとえ自らの子供が王位に即けなくても、総下の子供は後宮の侍

女や侍従となる慣例だから、血縁者の為に働かされるとしても、それでも愛する人の隣にいられるのなら満足だろうから。

自分なら、そうだ。

今でも、夢の中で目覚めたら香麻（こうま）が目の前にいた、と言う夢を度々見ている。

あの日、最後に逢った香麻は、少し照れ臭そうに笑っていた——その笑顔が、夢の中で蘇る。

そして、いつもその時の自分は、中学生の由梨亜なのだ。

諦めてはいる——だが、心の何処かで諦められない自分がいる……。

そのことで、富実樹の胸は張り裂けそうに痛んだ。

そのようなことを考えながら歩いていたら、いつの間にか母親の部屋の前まで来ていた。

# 第六章「四年後……」―2

「失礼致します、御父様、御母様」
今、峯慶は妾とその子供達の住まう階に当たる、二十階にいる。
なので、父に会いに行く時も、母に会いに行く時も、同じ階に行けばいいのだ。
「あら、富実樹。どうなさいましたの？」
「いいえ。何もなかったのですけれど、御二人に御会いしたくて来てしまいましたわ」
富実樹はそう言うと、峯慶の足元のベッドに座った。
「御父様、御久し振りで御座います」
「富実樹、御前は相変わらず元気だな。その元気を少し分けて欲しいくらいだよ」
峯慶は苦笑して、目を覗き込んだ。
「そんなことを言って、本当は何か別の理由があるのではないか？」
「えっ？　何がですか？」
富実樹はしらばっくれると、机の上に置いてあったプズィと言う、甘くて皮ごと食べられる一口大の果物を取り、口に運んだ。
由梨亜妾はくすくすと笑うと、富実樹に向かって言った。
「富実樹、丸分かりで御座いますわよ。嘘を付く時に何かをするのは、富実樹の癖のようですからね」
「うっ」
富実樹は、軽くむせてしまった。
「これ、富実樹。ここでむせたら大変なことになるぞ」
「は、は……い、御……父……様っ。ゴホゴホ」
富実樹は何とか飲み込むと、一息ついた。
「それで？　富実樹。何がありましたの？　わたくし、気になりますわ」
由梨亜妾が、少女のように目をきらきらさせて言った。

「あ、あの……えっと、その……」
「富実樹、私も由梨亜妾も気になるのだから、さっさと言って御終いなさい」
これまた峯慶も、まるで少年のように目をキラキラさせて言った。
歳を取っても、もう十六になる子供がいても、相も変わらず少年少女のような夫婦だ。
富実樹は言葉に詰まり、
「し、失礼致しますわ。わたくし、やはり戻りますわね」
そう言うと、慌てふためき、部屋を逃げるように『静々と』飛び出して行った。
それを見ていた峯慶と由梨亜妾は、思わず吹き出していた。
「面白いこと。必死で隠そうとしても、わたくし達には分かっていることですのに……」
「ああ。しかも、それを解消するには杜歩埜と結婚するしかないからな。富実樹は地球連邦で育った為、恐らく近親婚には嫌悪を抱いていることだろう。それを、この国の風習に合わせることになって……可哀想なことをするな」
「ええ。わたくしはこの国で産まれ育って来たものですから、王家の近親婚に嫌悪などを感じたことは御座いません。わたくしは深沙祇妃の、沙樹奈后と紗羅瑳侍に向ける目に、他の方に向ける目とは違って嫌悪が入り混じっていたことで、初めて近親婚を忌み嫌う方がおられるということに気付きましたから。沙樹奈后は陛下の異母妹ですし、紗羅瑳侍は陛下の従姉であり三従姉でありますから、血の繋がりが御座いますもの。最初は信じられなかったのですが、やはり富実樹は嫌悪感を抱いていることでしょうね。近親婚をすれば異常が出る可能性がある為、『汚い』と禁じられている地球連邦で育ったのですから……」
二人は前王と妾だが、この国の風習を変えることはできず、助言をしようとしても、女王である富実樹が隠そうとしているからには気付かないふりをしなくてはいけない。

二人は軽く、けれど、それに込められた意味はとても重い溜息をついた。

富実樹は先程の峯慶と由梨亜妾の態度について、頭の中で大癇癪を起こし、不満をぶちまけていた。

（全く、御父様と御母様ときたらっ！　私が杜歩埜と些南美（さなみ）の恋愛を隠していることを分かっているからさっさと吐きなさい、みたいに！　御父様にも御母様にも、絶対に分からないわ！　御父様は最初に産まれて、王位に即くことは分かり切っていたから色々危険はあったけど、ちやほやされて女なんか選り取り見取りで、しかも自分の妾と大恋愛なんかしてっ！　御母様は戦祝大臣（せんしゅくだいじん）の孫に産まれて、しかも八歳の時に御父様との婚約も確定してっ！　しかも下手に他人に惚れないように屋敷の外には滅多に出ず、侍従なんかとも滅多に会わず！　そして御父様に会った途端に一目惚れなんかしてっ！）

どすどすと、思わず強く足を踏み鳴らしてしまう。

（絶対あの二人には、私の香麻（こうま）への、まるで身を斬られるかのように切なく心を絞られるかのように苦しい、何年も逢ってないのに慕い続けてしまうこの気持ち――杜歩埜も些南美も感じているこの気持ち、分からないわ！　杜歩埜達も、私と似たような境遇ね。互いに好き合って、結婚してもいいってぐらいに好きなのに、相手もそれぐらい好きだって分かっているのに、それでも想いを伝えることは許されず……私は叶わない恋だと知ってるし、もう逢えないから諦められる。だけど、もしここの侍従か官吏か貴族が香麻だったら耐えられないわ。それが杜歩埜達の場合だと、毎日顔を見られるし目配せもできる。だけど、想いは伝えられない……。きっと、私よりも辛いはずだわ）

富実樹は、そこまで考えると、フウッと溜息をついた。

（何とかしてあげたいけど、私には無理……せめて私にできるのは、

私が杜歩埜と二十五歳で結婚した後、あの子を総下にするしかないんだわ……）

「何とか、ならないかしら……」

富実樹は思わず口に出したが、実現不可能だと自分でも分かりきっていること、余計にその言葉は虚しく耳に、心に届いた。

一つ、大きな溜息をついた後、ふと、資料庫の一つに入ってみようと思いたった。

いつも、自分の周りには人が居る。

そして、気の休まる時はない。

久し振りに一人になりたいのと、周りの人が自分を見つけられるのか試す気持ちだった。

そして、一番近い資料庫へ入った。

そのことで、自らの運命が再び変わろうとするとは、露程も知らずに――。

ガッチャ

ギィ～イ～

ガッ　グッ　ガッチャン

という、何とも不気味な音と共に、富実樹は資料庫に入った。

この王宮では、トイレや風呂などの一部の例外を除いて、扉は全自動式になっているのに、この資料庫は、簡単な暗号のタッチパネルが付いている所だけが近代的と言える部分であり、扉は人力で開けなければならないのだ。

「何これ。ろくに掃除してないわね……。空調設備もないし。こんな埃っぽいとこ入ったの、あの交換日記帳を見つけた時以来よ……。そういえばここ、今現在必要ない書類を溜めておく所のうちの一つだっけ。それにしても……うわ、何これ。九百六十四年前のサマヌ国の王朝交代劇の新王朝を認める許可？　こっちは花嶌国の、九百

九十八年前の総下制度の許可？　確かにこれは捨てるに捨てられない書類ね……。全然使わないけど。それにしても、こんな部屋があと三部屋あるって言うのに、どれだけよ……」

確かに、富実樹の言う通りだ。

データを入れている『キエシュ』自体には、混乱させないようにする為一種類ほどしかデータは入らないが、見失わない為縦一センチ、横五センチほどの大きさで、それを入れている箱は縦一メートル、横七十センチとなり、その中にはかなりの量が入る。

しかもその箱が天井に付くほどの棚となり、壁など見えず、さらには通路も人が擦れ違える程度の隙間しかない。

富実樹は、頭が痛くなった。

「こんな量、バックアップの為とはいえ、よく取って置くわね……ほんと、頭が痛くなるわ……」

そう思いながら、とりあえず一周することにした。

そして、最後に一番奥の片隅に行った。

そこに行くと、不思議な紋様の描かれた円があった。

「何、これ……？」

近づき、靴の先でその端を擦ってみたが、何も変化はない。

もっとよく見ようと床にしゃがみこみ、その時、体勢を崩してしまい……その円の中に、両手を付いてしまったのだ！

すると突風が富実樹を包み込み、富実樹を円の紋様の中に引きずり込んでしまった。

富実樹は前にも似たような経験をしていたから、驚きはしたものの恐れはしなかった。

何故なら、そこは富実樹が現在の日本州から過去の日本国へ、過去の日本国から花鴬国に行ったその時に通った、あの亜空間と同じだったからだ。

そして、富実樹は半分忘れかけていた、地球連邦の古代語の声が聞こえた。

『貴女は何を望みますか？』

（『貴女は、何を望みますか』、ですって……？　そんなこと、決まっているじゃないの！）

富実樹は理不尽なこととは知りながらも頭にきて、地球連邦の古代語で叫んでしまった。

「当たり前じゃない！　千紗に会うことよ！」

その途端、身の丈が二メートルほどの、今の富実樹では、どんなに暑くても不可能な軽やかな服装をした女性が立っていた。

そして、何か意味不明の言葉で話しかけられた。

「――？　――。――。――」

それは意味が全く分からなかった物だが、前にも聞いたことのあるような物だった。

「いいえっ！　わたくしはまだ、できませんっ！　御引き取り願いますっ！」

恐怖に駆られた富実樹がそう叫ぶと、さっきの円の外側に座り込んでいた。

（嫌だ……何、これ。怖いっ。怖いよっ！）

富実樹は不安に駆られ、先程の悪戯心を忘れ、資料庫を飛び出していた。

（何……何なの？　これ、怖いっ！）

富実樹が部屋に戻ると、既に杜歩埜と些南美は居なかった。

富実樹は誰の目もないので、寝室のある、後宮の二十五階へと上がり寝てしまった。

「富実樹はようやく気付いたか。しかし、乗り越えられなかったようだな……」

「ええ。冷静に、もっとじっくり考えられれば意味は解ったでしょうね。わたくしとしては、仰っている意味が解り、それでもまだこの国に留まってくれる方が宜しいのですが。それにしても峯慶様、

あの大きさと雰囲気はどうかと思いますが。あれでは誰でも逃げ出しますわ」

由梨亜妾は、あれを仕掛けた峯慶に、文句のような物を言いながらも、刺激しないように、慎重に言葉を選んで言った。

それは、仕方がない。

峯慶は富実樹の望みを何よりも第一に考えているが、由梨亜妾は、十三年ぶりに再会した我が子とそう簡単に別れるつもりはなかった。だから三年前、富実樹が王座に即く前にこのような仕掛けをした峯慶には、軽く恨みを抱いていた。

「それは仕方がない。そう簡単に国を離れてもらっては困る。慎重に考えてもらわねば。それにチャンスがない訳ではない。富実樹はあの時すぐには思い付かなかったが、後で考え付けば……」

「ええ。そうですわね。ですが峯慶様、このように長い時間御起きになられていれば、体力も危うくなりますわ。御夕食の前で御座いますが、御眠りになられた方が宜しいのでは？」

「ああ、そうだな。娘の為とは言え、私は今日、少々無理をし過ぎた……」

そう言うと、峯慶はストンと眠りに落ちていった。

## 第六章「四年後……」―2（後書き）

三従兄弟（みいとこ）…親同士が再従兄弟、祖父母同士が従兄弟、曾祖父母同士が兄弟である者同士の関係。一組の高祖父母（曾祖父母の親）が共通している。自分から見て八親等で、続柄的に見て同世代。

# 第七章「二人の悪戯」―1

富実樹（ふみき）は、眠りから目が覚めた。
窓から外を見ると、もう既に暗くなっている。
時計を見ると、既に午前零時。
この時間は、明日の為に皆が眠りに付いている時間であり、すなわち夕ご飯を食べ損ね、お風呂にも入り損ねたことを意味している。
（あ～あ。お風呂は仕方ないとしても、夕ご飯くらいは食べたかったなあ……）
そのようなことを考えていると、猛烈にお腹が空いてきた。
おまけに、盛大な音を立ててグウグウと鳴り出す。
（やっぱり、こうなったら……）
「厨房に、忍び込むしかないわよ、ねぇ……」
そう一言漏らすと、完璧に行く気になってしまった。
（よし、行くか）
富実樹は、今着ていたひらひらで豪華で裾を引きずる服を脱ぎ捨て、ちょっとした悪戯心とお忍びの為に盗んだ、料理と上級侍女のお世話を行う下級侍女の女官服を着た。
久し振りの質素な服、直接脚に風を感じる膝下丈のスカートと、髪を一つに結んで垂らした髪型を楽しみながら、こっそりと部屋を抜け出した。

富実樹は最上階の二十五階にある自分の部屋を抜け出し、昇降機で一気に王族専用の厨房のある三階まで降りた。
三階で降りた後、静かに辺りを見回したが、さすが深夜のこと、誰も見当たらない。
明かりを点けると、もしかしたら起きているかも知れない人に見

られる可能性があるから、そのセンサーを切ろうとしたが、最初から切られていた。

（何なのかしら？　もしかしたら、誰か厨房に忍び込んでる……？）

富実樹は不安を抱きながら、こっそりと一番近い厨房の入り口まで行った。

近づいてみると、抑えてはいるが、灯りを点けているかのように細い光が洩れている。

富実樹は一気に扉を開けると、

「そこにおられるのは誰で御座いましょうか？　ここは王族専用の厨房で御座います。ここに忍び込むのは、たかが侍女風情では――」

富実樹の言葉は、途中で途切れてしまった。

そこにいる人物は、王族の話し相手などをする上級侍女の女官服を身に纏っていたが……それを着ている人物は、あまりにも見知り過ぎた顔だった。

「え……」

「あ……」

「お、おね……！」

「し、静かに！　ここで声を上げてしまわれたら、見つかってしまいますわっ！」

富実樹が声を押し殺して、けれども鋭く注意をした上級侍女の女官服を着ている女性は、何と富瑠美（ふるみ）だった。

富瑠美が何とか声を上げるのを抑え終わった時、富実樹は呆れたように言った。

「全く富瑠美、貴女と言う人は……貴女はご飯普通に食べたでしょ？　どうしてこんなとこにいるのよ」

富実樹の口調が王族貴族とは懸け離れた物になってしまったのは、言うまでもない。

「そ、そう仰る御異母姉様（おねえさま）こそ……何故、御夕食に来られなかったのですか？　そこまで御仕事が御忙しいとは、聞いてはおりませんけど……」

「寝ちゃったからよっ！　私はすんごく眠くって、寝ちゃったのっ！　この頃あんま寝てなかったからっ！　それと今は言葉遣い注意しないでっ。私はいつも心の中ではこういう風な言葉遣いで物考えてんだからっ。他の人がいないんだから今はいいでしょっ」

「え、ええ、まあ……御異母姉様がそう仰るならば……」

富瑠美が勢いに圧されて思わず言うと、富実樹がいきなり本題に入った。

「で、富瑠美は何してた訳？」

「ええっと、その、御父様と由梨亜妾（ゆりあしょう）に御食事を作ろうと思ったのですが……御異母姉様、助けて下さい！　わたくし、一度も料理を作ったことがなくて……どうすればよいのか、全く分からないのですっ！」

富瑠美はそう言うと、富実樹にしがみ付いた。

富実樹は途惑いながらも、何とか富瑠美を落ち着かせて話し掛けた。

「ちょ、ちょっと待って。ええっと、御父様も御母様も、ご飯を食べていないの？」

「ええ、そうです。ですけど、さすがにそれでは、御身体が保ちませんわ。今日は、朝からほとんど何も御口にしていないのです」

「確かに、それじゃあね……そうだ、私が作るわ。で、富瑠美はその補佐をお願い」

「ええ。ところで、何を御作りになるおつもりなのですか？」

「そうねえ……ちょっと待ってね」

そう言うと、台所を歩き回った。

「……そうね、雑炊とお握りとゼリーを作りましょう。私が雑炊とお握りを作るから、富瑠美はゼリーを作って。ちょっと待ってね」

と言うと、富実樹は厨房を駆け回り、カートに道具と材料を量って持ってきた。

「それじゃあ、この端末に調理方法全部書いてあるから。この通りにゼリー作ってね。分かった？」

「わ、分かりましたわ……多分」
「じゃあ、分からなくなったら訊いて。それじゃあ、活動開始！」
「は、はいっ！」
そして、二人はゼリーと雑炊とお握りを作り始めた。

最初は二人とも無言で作業をしていたが、富瑠美は沈黙に耐え切れずに口を開いた。
富瑠美は、深沙祇妃達が富瑠美が産まれた時にボイコットした為、峯慶の命令で、十歳までは深沙祇妃と比べて質素な由梨亜妾の元で育った。
だが、それから今までの約六年間は、派手好きな深沙祇妃の元で育った。
つまり、最初の人格・性格構成は由梨亜妾の元で、第二の人格・性格構成は深沙祇妃の元で行われたことになる。
その為、優しい性格と気性の持ち主で質素を厭わない性格でありながら、派手な物や豪華な物を見ても普通に見ている、もしくは好むということが矛盾せずに存在するようになった。
富瑠美は朝起きる時には静かな音楽と優しい侍女の声で目が覚め、食事の時にはずっと楽団の生演奏が演奏され、鴬大臣としての仕事中は高位の貴族官吏の声と侍従や侍女の声が聞こえ、また精神を集中させ、リラックスした気持ちで仕事に臨めるように音楽が鳴り、仕事がない時は侍女と喋ったりゲームをしたり、眠る時は穏やかな眠りに誘われるように音楽が鳴り、またお風呂でも音楽が鳴り、富瑠美の身の周りでは音が絶えることはほとんどない。
だから富実樹と違い、このような沈黙には長時間耐えられないのだった。
「あの、御異母姉様」
「何？　富瑠美。何か分からないことでもあった？」

「いいえ。けれど、ただ、少し気になることがあって……」
富瑠美は、今まで言えなかったことを口にした。
「貴女は、時々悲しそうな目をするでしょう？　哀しく、懐かしそうな目をして……あれは何を、誰を思い出しているのですか？　わたくしはそれが気になるのです」
「ああ……あれは、ね。……千紗のことを思い出しているの」
「『千紗』？　それは、誰ですの？」
「私の……たった一人だけの、何にも換えられない、とても大事な親友よ。大切な……大切な友達。そして、私の為に運命を狂わされてしまった、可哀想な人」
「まさか、その方とは……」
富瑠美が富実樹の方を振り返ると、富実樹は料理をする手を止め、遠い目をしていた。
「彼女の名前は、本条千紗。私が本条由梨亜だった時は彩音千紗だった人よ。私が本当は花雲恭富実樹で、千紗が本条千紗だということは、こちらに来るおよそ一週間前に知ったんだけど、それからは、千紗の顔がまともに見れなかったわ。申し訳なさ過ぎて……」
富実樹は、そこまで言うと作業を再開し、富瑠美にも
「早くしないと終わらないわよ」
と注意した。
富瑠美が慌てて作業に入ると、富実樹の溜息が聞こえ、話が再開した。
「でもね、千紗はそれを知っても全然怒らなかったし、取り乱しもしなかったし、それどころか信頼してくれたのよ。自分の人生が大きく変わってしまったのに。千紗は、性格が大胆っていうか……その、大雑把なんだけど、正義感の強い子で、いじめられたりもしてた。でも、千紗はそんなことは気にしなくて……私に上流階級の貴族という身分がなければ、今でもいじめは続いてたわ。とにかくそんな性格の子で、私のせいで彩音千紗になったことを知っても、『あたしは由梨亜と会えたし、悲しいことも起こったけど、楽しいこ

とも一杯あったから全然気にしないよ！』って、本気で言えるような子だった。それが分かってたから、申し訳なくて……夢の中でも、地球連邦のお父様とお母様より、千紗が出てくる回数の方が多いのよ。それで、益々懐かしくなって、申し訳なくて……ごめんなさい。つまらない話だったでしょう？」

富実樹が申し訳なさそうに言うと、富瑠美は強く反発してきた。

「そんなことは御座いませんわ！　普通の方でしたら、そのように思うのは当然に御座います。御異母姉様が地球連邦の方々を懐かしく思われるのは、花鴛国（かおうこく）側としては王としての心構えが成っていない、王として相応しくない、すぐにその御気持ちを御捨てになって下さいませ、と思いますが、強い思い入れのある所なら無理は御座いません。王といえども、人で御座いますからっ！」

富瑠美はそう言うと、鍋にふやかしていたゼラチンを勢い良く入れ、掻き混ぜ始めた。

ところがあまりにも強く掻き混ぜた為、手が鍋に触れ、軽い火傷を負ってしまった。

「……っ！」

「どうしたの？　富瑠美」

富実樹は鍋の中に小魚を入れようとしていたが、それをやめて富瑠美の方に行った。

「お、御異母姉様、手が御鍋に触れてしまったら、熱くて痛くて……」

「あ、当たり前じゃない！　ほら、よく見せて……やっぱり火傷してる」

「『火傷』……？　これが、火傷なのですか？　わたくし、初めてなります」

何だか嬉しそうな富瑠美の様子に、富実樹は頭を抑えて溜息をつき、さっさと水道まで連れて行って手を水で流し始めた。

「このまま、ちょっと待ってて」

と言うと、辺りを捜し始めた。

「あったわ。薬箱。富瑠美、もうそろそろいいから水を止めてこっち来て」
と言うと、ガーゼを取り出し、火傷の痕を覆った。
「とりあえずこれでいいわ。後でちゃんとやってもらいなさい。これは応急処置だから」
「ええ。ありがとう御座いますわ、御異母姉様」
そう言い、作業を再開し始めた。
そして、その間、富実樹は話をした。
地球連邦で育ってきた、今までのことを。
富実樹が学校で出会った上流階級及び富豪の傲慢さ、強引さ、身勝手さ。
それらの人達と、富実樹の違うこととか。
千紗と会ってから、富実樹の人生がどれほど変わったこととか。
それから、今までのこととか。
今現在の、宇宙連盟が提唱している自由、権利と遠く懸け離れた地球連邦のあり方。
そして……過去に行ったこと。
富瑠美は息を呑み、それらの話を聞いていた。
なんて、悲しい話なのか。
なんて、地球連邦は荒れているのか。
『全宇宙共通連盟憲章』の権利の章の自由の項の一つに、恋愛と結婚の自由がある。
それは、互いに納得していなければ、絶対に結婚はできないという決まりだ。
だが、地球連邦では王族以外でも（王族では慣習となっていることが多いので、王族はその枠から外れている）、互いの意思を無視して無理矢理結婚させるようなことが、今でも平然と行われているという。
確かに、それならば地球連邦が宇宙連盟に加盟するのを渋るだろうし、富実樹が宇宙連盟に地球連邦を加盟させるのに躍起になって

いるはずだ。
たとえ、それが富瑠美とやり方が違っていても。
そして、富実樹も話し合いでは解決できないかも知れない、と思っているに違いない。
何故なら、富実樹は戦祝大臣（せんしゅくだいじん）に軍備を密かに整えさせている、と言う噂があるからだ。
それは、いざとなったら武力を使うということで、それだけ、地球連邦の状態が異常だということだ。
富実樹が語り終える頃には、富実樹はお握りを握り終え、雑炊の下準備もだいたい終わり、富瑠美もゼリーを型に流し終えた物を冷蔵庫に入れていた。
時刻は、だいたい午前一時頃。
固まるのは、その一時間後ぐらいだ。
富実樹は、富瑠美の方を振り返って言った。
「後は固まるのを待つだけだから、お握り食べようと思ってるんだけど、富瑠美は？」
「ええ、わたくしも頂きますわ。やはり、慣れないことをいきなり行うと、疲れてしまう物なのですわね。御腹が空いてしまいましたわ」
富瑠美はそう言うと、富実樹の元へと歩み寄った。
富実樹は、床の上に作ったお握り六個を乗せた皿を置き、手早くお茶まで淹れた。
その手際の良さに、富瑠美は感心しながら、
「では、御異母姉様、頂きますわ」
と言って、お握りを食べ始めた。
それは、中に鮭の身をほぐした物が入っていて、塩味も丁度良く、海苔もぱりぱりとしていて本当に美味しい物だった。
すると、富実樹は言った。
「ねえ、富瑠美。さっき私の方が話したんだから、次は富瑠美の番よ」

と言って話を促した。
そして、富瑠美は話し始めた。
物心付いた頃には、由梨亜妾の元で楽しく暮らしていたこと。
けれど、富瑠美の母が由梨亜妾ではなく深沙祇妃だという事を言い聞かされていたこと。
そして、何故由梨亜妾に育てられていたのかということ。
深沙祇妃に還されてからの生活、そして富実樹と初めて会った時のこと……。
それらを話し終える頃には、一時間近くが経っていた。
そして、冷蔵庫からゼリーの型を取り出して切り、それらを飾り付けカートに乗せた。
その時、富瑠美は不思議そうに言った。
「あの、御異母姉様。何故この王宮には厨房があり、ほとんどが手作りなのでしょう？　全て機械任せの方が、人件費削減の面から見ても宜しいのではなくて？」
「まあ、確かにそうなんだけど……でも、機械と人の手で作られた物じゃあ全然味が違うのよ。大量生産を目指すスーパーやコンビニならそれでいいけど、こだわりを持ったお店は、そりゃあ機械に任せる部分もあるけど、大抵の部分は手作りよ。勿論、普通の家もね。だってそっちの方が美味しいんだもの。わざわざお金の掛かる機械を買わなくてもいい訳だし、いざとなったら機械を買うより安いスーパーやコンビニで買えばいいのよ。そういう面でみればこれはかなり理に適ってるわよ。侍女や侍従が余ることもないし、私達は手作りの美味しいご飯が食べれるんだもの。これ以上のことはないわよ。だからね、富瑠美。貴女の悪い癖は、物事を一面からしか見ない所にあるの。物事はその裏も考えなくっちゃ」
「え、ええ……納得致しましたわ」
富瑠美が圧倒されながらも、そう言うと、今度は富実樹が質問してきた。
「でも、私にはこのカートの方が不思議よ。どんなに揺れても物が

落ちないし、中身もこぼれないもの。どうも、不思議でならないのよ。ねえ、富瑠美。これって、花鴛国で開発された技術よね」

「え、ええ……。それが何か？」

「これって、どっちの力でできてるの？　科学の力？　それとも、魔族の力――つまり、魔法？」

「これは、科学の力ですわ」

「そうなの？」

「ええ。これは花鴛国が発明元ですけれど、特許を取っている訳では御座いませんし、花鴛国と同じくらい技術が進んでいる国でも作られておりますわ。魔族の力を利用して作られた物は、花鴛国が特許を取り、しかも首都のシャンクランにしか、工場がありません。それが見極めるコツですわ」

「へ～」

二人は、そう会話を交わしながら、薄暗い廊下を歩いて行った。

# 第七章「二人の悪戯」―2

そうこうしているうちに、由梨亜妾の部屋がある二十階に着いた。
そして、互いに目線で喋らないように制止し合うと、峯慶のいる部屋の前まで行った。
だが、驚いたことに薄く明かりが洩れている。
どうやら、起きているようだ。
そこで、富実樹は一計を巡らせた。
「富瑠美、ちょっと声を出さないで見ててもらってもいいかしら？」
「ええ……？」
富瑠美がそう言うと、富実樹は目を閉じ、何かを呟いた。
すると、一瞬強い光が出て、富瑠美が目を開けると、そこには別人が立っていた。
背は、富実樹が富瑠美よりも大きかったのが、富瑠美とだいたい同じくらいまで小さくなり、髪も背の中程まで短くなり、大分波打っていたのが少し波打っている程度になり、色も栗色から茶色へと変化した。
そしてその瞳の色は、薄桃色から緑がかった黒色へと変化していた。
それは、昔いた花鴛国シューリック大陸先住民――いわゆる魔族の身体的特徴と同じだ。
富瑠美は知らなかったが、もし千紗がここにいたのなら驚くだろう。
何故なら、それは地球連邦の『本条由梨亜』が成長した姿なのだから。
「私の名前は……そうね、ユーリ・ウェルナ・シェヴィにするわ。貴女も変えた方がいいわね」
そう言うと富実樹は富瑠美に手をかざし、髪の長さを肩甲骨ほどまで短くし、髪質も真っ直ぐに近いぐらいにまでに伸ばし、目の色

も、花鴛国の一般的な瞳の色である菫色に変えた。
「う〜ん……そうね、貴女はリリィ・マシュリル・ウェルトね。それで、貴女は富実樹付きの中級侍女で、私は貴女の世話をする富実樹付きの下級侍女。いいわね？」
富実樹の問いに富瑠美は答えず、ただただ目を瞠っていた。
「御異母姉様（おねえさま）……何故……」
「ふふ、私はこれぐらいの魔力なら使えるの。何でかしらね。由梨亜の時は使えなかったのに、今は使えるのよ」
富実樹は悪戯っぽく笑うと、おどけて言った。
「リリィ様。それでは、どうぞ先王陛下の御部屋に御入り下さいませ」
「はい。分かっておりますわ」
富瑠美もツンとすまして言うと、コンコン、と戸を叩いた。
「先王陛下、由梨亜妾様、御入り致しても宜しいでしょうか？」
富瑠美の問い掛けに、峯慶は答えなかったが、由梨亜妾が出て来て訊ねてきた。
「こんばんは。何か御用で御座いますか？」
「はい。先王陛下と由梨亜妾様は、御食事を御取りになられないまま御就寝致しましたが、昨日は何も御召し上がりになられておりませんのを思い出しまして、それで、勝手ながら、簡単に御召し上がりになられるような物を御作り致しましたので、いかがかと……」
「御気遣い、ありがとう御座いますわ。どうぞ、御入り下さいませ」
そう言うと、由梨亜妾は二人を部屋に入れた。
「御名前を御伺い致しておりませんでしたわね。何と仰るのでしょうか？」
その質問にも、前もって考えていた二人は動じなかった。
「わたくしは、リリィ・マシュリル・ウェルトに御座います。陛下の中級侍女を致しております。ユーリ、御挨拶なさいな」
富実樹は、控えめに自己紹介した。
「わたくしは、ユーリ・ウェルナ・シェヴィと申します。陛下の下

級侍女を致しておりまして、リリィ様の御世話を致しておりますわ」
そして峯慶の前に出ると、峯慶は吹き出した。
「……？　どうなされましたの」
由梨亜妾が尋ねると、峯慶は目尻に笑いを残したまま答えた。
「……富実樹、富瑠美……下手な変装をしても、ばれるぞ」
富実樹と富瑠美は、二人そろってつまり、由梨亜妾は
「……あら、富実樹と富瑠美でしたの。それは気付きませんでしたわ」
と棒読みで、明らかにとっくに知っていたように言った。
富実樹は魔法を解いて元の姿に戻ると、拗ねたように言った。
「何故、御分かりになられてしまわれましたの？　大分自信が御座いましたのに……」
「何故か？　何、頼んでもいない食べ物の世話をする侍女が、二人の娘に面影があり声が同じ少女であれば、そう思わない方が可笑しい」
「……誤算でしたわ」
富実樹は心底悔しそうに呟くと、首を傾げて言った。
「それにしても、御父様は、千紗（ちさ）と同じことを仰りますのね」
「千紗……？　ああ、富実樹と入れ替わった少女か」
「はい。彼女もわたくしと別れる前、わたくしが富実樹に変わった時、わたくしを『富実樹』と呼ぶのに多いに抵抗があったようですわ。理由を訊くとこう仰いましたの。『外見は変わっても、声の抑揚、表情も顔の表情も全然変わってないし、由梨亜の面影がちゃんと残ってる。これで別人だと思えだなんて無理があり過ぎる』、と。それと同じことを仰ったので……」
富実樹はそう言うと、パン、と手を打って言った。
「さあ、召し上がられませんか？　これはわたくし達が腕によりを掛けて作った自信作で御座います。この雑炊とお握りはわたくしが、ゼリーは富瑠美が作りましたの。さあ、御召し上がり下さいませ。御母様も、御一緒に」

そうして、それらを皆で食べ始めた。
峯慶は雑炊を茶碗一杯分食べ、ゼリーも食べた。
由梨亜妾は峯慶に付き合いあまり食事を摂っていない為、雑炊とお握りを中心に食べた。
「これは美味しい。私は食欲がなかったが、これは大丈夫だ。ありがとう、富実樹、富瑠美」
「御父様、御礼は御異母姉様だけに申し上げるべきですわ。もし御異母姉様が来て下さらなかったら、わたくしは作れませんでしたもの。まあ、わたくしは御父様と由梨亜妾の為にお料理を致そうと思って厨房へ下りていったのですが、御異母姉様は何と……」
「ちょっ、富瑠美っ！　それ以上は駄目っ！」
「御異母姉様」
と、富瑠美は冷たい声で言った。
「は、はい？」
富実樹がそう返事をすると、富瑠美はこう答えた。
「話し方が庶民的になっておいでです。御両親の前でそのような御振る舞い、断じて許せることには御座いませんわっ！」
富瑠美はそう叫ぶと、富実樹の元へ、迫力満点に近寄った。
「わ、わ～っ！　富瑠美、ストップ、ストップ！　堪忍してっ！　お願いっ！　富瑠美っ！」
「それでは条件が御座います」
「じょ……条件？」
「そうですわねぇ……まず、わたくしに、正式に、御謝り下さいませ。御父様、由梨亜妾、何か御座いますか？」
富瑠美がいきなり話題を振ったにも関わらず、二人は平然として答えた。
「そうだな……富瑠美が言い掛けたことの続きを話してもらおう。由梨亜妾は？」
「ええ。わたくしも大賛成に御座いますわ。さあ、御始め下さいませ」

そのきらきらとした瞳に見つめられて断ることのできる人が、どれぐらいいるだろうか。

それほどまでに期待の込められた瞳だった。

「うっ……」

富実樹は

（余計なことをっ！）

と、恨みまくりの眼で富瑠美を睨んだが、あっさりと躱されてしまった。

「……申し訳御座いませんでした」

「もう少し」

「これからは御父様と御母様の前でこのような失態は致しません。……いいでしょう？」

「貴女が何も言わないのなら、わたくしは許しを与えませんわよ」

「……御許し、下さいませ……」

「はい、宜しいですわ」

富瑠美がにっこりと笑って言うと、富実樹はそっと溜息をつき、思った。

（全く、この異母妹（いもうと）は……）

「それでは富瑠美、話しなさい」

峯慶がそう言うと、富瑠美は

「はい、御父様」

と言い、話を続けた。

「御異母姉様は、御夕食には来られませんでしたの。御眠りになられてしまわれたそうですわ。そして夜、御目が覚めてしまわれた御異母姉様は、御腹が御空きになられたそうで、何か御食べしようと厨房に忍び込まれに来たそうです。そこで、わたくしと鉢合わせなさったのですわ」

「それは、それは……クッ」

「ふふ、ふ……」

峯慶と由梨亜妾の、忍び笑いが部屋を覆い、富実樹は真っ赤にな

った。
「お、御父様、御母様っ！　あ、あまり笑われると、恥ずかしいですわっ！」
富実樹は何とかそう言うと、雑炊をすすりだした。
そして、料理が片付くと、富実樹は皿をカートに乗せ言った。
「さあ、わたくし達はそろそろ戻らなければ。さあ富瑠美、行きますわよ。明日……いえ、もう、今日は総票会ですわ。今日で、全てが決まりますわね。わたくしは負ける気はありませんわよ、富瑠美」
「ええ、こちらこそ負けやしませんわ。こちらが勝って見せます」
二人が密かに火花を散らしていると、由梨亜妾が苦笑して言った。
「けれど、総票会に参加する中で最も力を持っているのは王族ではなく、一般の貴族、官吏、宗教家、学者に御座いますわよ。二人とも、それを御忘れなく」
その呼び掛けに、二人は目を瞠り、口々に
「そう致しますわ」
と答えた。
そして、富瑠美は首を傾げていった。
「そう言えば、御父様と由梨亜妾は、どちらに投票なさるか御決めになりましたの？」
富瑠美のその問い掛けに、二人は顔を見合わせ、峯慶が答えた。
「まだ、揺らいでおるな。決定するのは明日、二人の最終論説を聞いてからだ」
「そうですか。それでは、失礼致しますわ。御休みなさいませ、御父様、由梨亜妾」
「御休みなさいませ、御父様、御母様」
二人がそう言い部屋を出て行こうとすると、峯慶が声を掛けた。
「富実樹、少しいいか？　富瑠美は先に行って構わないから」
「はい。分かりましたわ」
富実樹と富瑠美が答え、富実樹が峯慶に向き合うと、峯慶は穏やかな目をして言った。

「富実樹。それは懐かしく聴き覚えのある物だ。そして、それを選ぶのなら、今は失っている物を取り戻すだろうが、今持っている物は全て失うであろう……。考えるのだ、富実樹」

（御父様は、一体何を言ってるの……？）

と富実樹は首を傾げながらも答えた。

「分かりましたわ、御父様。それに、わたくしが今得ている物を捨てることはないでしょう。歳を取ればあり得るかも知れませんが。御休みなさいませ」

「ああ、御休み……明日は、楽しみにしているぞ」

富実樹はそう言うと部屋を出た。

扉が閉まると、珍しいことに、由梨亜妾が非難掛かった目付きで峯慶を睨んだ。

「峯慶様。何故、そのように解りやすいヒントを御与えになられてしまわれましたの？　そのようなヒントを御与えになれば、富実樹は、わたくし達からっ……」

「ああ、そうだな」

その非難を、峯慶はあっさりと肯定した。

「峯慶様はまた、わたくしから富実樹を御奪いになられるおつもりですかっ？　わたくしは、もう我慢がなりません！　今、はっきりと分かりましたわ。富実樹は手段があれば、地球連邦に戻りますっ！」

「マリミアン、落ち着きなさい」

峯慶のその落ち着いた、けれど厳しい声に、由梨亜妾は一拍おいてから息を呑んだ。

何故ならばその名前は、由梨亜妾が峯慶に嫁いでから今までのおよそ十七年間、一度も使われることのなかった――由梨亜妾が産まれた時に付けられた本名だったのだ。

「あの子の道は、十六年前に……あの子を手放した時、我らの手から離れた。それに、其方にはまだ他にも子供がいる。再会して三年でまた失うのは悲しいだろうが、富実樹の幸せを考えるのだ。富実樹は、こちらよりも地球連邦の方が安心できるだろう。我らには止められない。それに、死ぬ訳ではない。富実樹がこの国に還って来てくれただけでも、充分としようではないか」

由梨亜妾は、渋々ながらも頷いた。

「ええ……。嗚呼、あの時、富実樹を地球連邦に送らなければっ！そうすれば、富実樹はっ！」

由梨亜妾のその悲痛な想いに、峯慶はそうなっていたであろう事実を静かに告げた。

「それでは、富実樹は死んでいただろう。我々は、富実樹を殺されない為に地球連邦に送ったのだよ。事実其方も、何度も生命を脅かされていたではないか。そのことを……忘れるな」

由梨亜妾が唇を噛み、項垂れると、峯慶は優しく言った。

「由梨亜妾、もう、眠ろう。今日は、総票会だ」

「……はい」

由梨亜妾は、泣きそうな顔で頷いた。

# 第八章「あり得なかったはずの凶行」―1

「御早う御座います、陛下。朝に御座いますわよ」
「ええ、もう起きておりますわ」
そう答えた富実樹（ふみき）の顔色はあまり良くなく、少し蒼褪めていた。
だが、起こしに来た上級侍女はそれを緊張の為だと思い、その様子を無視して言った。
「まあ、今日は早う御座いますわね。陛下の従姉としても、嬉しゅう御座いますわ」
そう……上級侍女の彼女は、由梨亜妾（ゆりあしょう）の四歳年上の異母姉（あね）、シュメリアン・リシェル・スウェールの長女、ユリザ・シュメリアン・フェルスだ。
ちなみに彼女は二十歳で、他にも由梨亜妾の異母妹（いもうと）、シュリエル・ハミシェ・スウェールの十二歳の長女であるシリュィ・シュリエル・ヒューンと、同じく由梨亜妾の異母妹、アミエル・ハミシェ・スウェールの十二歳の長女であるマリア・アミエル・ウェリアムも、富実樹が即位したと同時に上級侍女として仕えている。
王族個人に仕える上級侍女は、その王族の従姉妹という慣習があるので、時たま再従姉妹が加わることもあるが、富実樹の上級侍女達は皆、従姉妹達であった。
「それでは、朝食室へ」

四人は朝食室でいつもより早い朝食を食べ、富実樹は最終論説の為の論文の推敲に入った。
と言ってもこのような大きな物になると、重要なこと以外では大勢の前では発言しないし、話さない。
今回その文章を読み上げるのは、戦祝大臣（せんしゅくだいじん）――つまり、富実樹の

祖父だ。
ちなみに富瑠美（ふるみ）の方では、深沙祇妃（みさぎひ）の後見人で、貴族の中で二番目に位の高い、政財大臣（せいざいだいじん）が文章を読み上げることになっている。

富実樹が推敲を終える頃、コンコン、と扉が叩かれた。
「どうぞ」
富実樹が顔を上げずに答えると、カチャッと音がして、人が入ってきた。
「陛下、推敲は御済みでしょうか」
それは、今年で六十六歳の戦祝大臣、ノワール・エリア・スウェールだった。
「もう少し御待ちいただけますか？　戦祝大臣殿。あと少しで終わりますので」
そして約一分後、富実樹は顔を上げ、他に誰もいないのを確かめてから小声で訊いた。
「御祖父様、何か、おありですか？　御祖父様が直接御取りに来られるはずでは……」
「ああ。……富実樹よ。重大も重大だ。大変な事件が起こった」
「何が、でしょうか……？」
富実樹は嫌な予感を覚えて、慎重に訊き返した。
「先王陛下が……其方の父が、刺客に殺されかけた」
「う、そ……そんな、まさかっ……！　御父様が、刺客に……。何故？　それよりも、御父様は？　御容態はどうですの？」
富実樹は思わず立ち上がり、掴み掛からんばかりにノワールに詰め寄った。
「そう近寄るでないっ。本当だ。私も聞いた時は耳を疑った。だが真実を信じなければ、全てが嘘にも真実にもなる。……先王陛下の御容態は、まだ何とも言えぬそうだが、午後の総票会（そうひょうかい）にはとても参

加できぬそうだ。その遣り口だが、刺客は用意周到でな、先王陛下の中級侍女一人を魔術で操り、食事の中に毒を混入させたそうだ。しかもそれは遅効性で、一時間後にその毒が回り始めるらしい。そして毒味役だが、その中級侍女がやったらしい。その侍女は今までも毒味役をやっていたので怪しまれなかったそうだ。そして先王陛下に毒が回り始めた頃、拳銃で自殺したそうだ」

「そ、そんな……。御祖父様、このことは他に……」

動揺して顔色を変える富実樹に、ノワールは落ち着かせようと強く富実樹の肩を押さえた。

「口止めはしておる。このことを知っているのは、私、由梨亜妾、侍医、先王陛下の上級侍女達のみだ。私がこれを伝えに来たのは、富実樹に事実を伝えると共に、誰にこのことを知らせてもよいのかということを相談しに来た。……富実樹、其方の意見は？」

「……わたくしは沙樹奈后、深沙祇妃、莉未亜貴、紗羅瑳侍、阿実亜女に御報せした方がよいと存じますわ。信じられるかどうかは別として。勿論、彼女達には口止めをしておいて下さいませ。弟妹達のことですが……わたくしは、彼らに無闇に報せるのは、不安なのです。なので、年長者のみ――杜歩埜と、富瑠美にのみ御報せ願えませんでしょうか」

「鴬大臣殿下に……？　しかし、彼女はあの深沙祇妃の娘――」

「いいえ！　彼女はわたくしの弟妹達の中で、最も信頼できる方なのです！　……これから御話しすること、秘密にしてもらっても宜しいでしょうか？」

富実樹の真剣な顔に、ノワールは思わず居住まいを正した。

「ええ……どうぞ」

「わたくしが富瑠美の他に信頼している方は、些南美や柚希夜（第七王子、峯慶の第十五子で十三歳の弟）など同母の弟妹と婚約者の杜歩埜、そして絶対に王位を継ぐことのない継承権の低い異母弟妹達です。けれど、彼らは心変わりをして、どうせ自分が継ぐことはないのだからと裏切る不安があります。そして、些南美には絶対に

報せられませんわ。杜歩埜は仕方がないので外せませんけれど……二人は……杜歩埜と些南美は、慕い合っているのです」

「……今、何、と、仰い、まし、た、か？　それ、は……その、本、当の……」

ノワールは、戦祝大臣というかなりの要職にあり、かなり腹芸や駆け引きに手馴れていて、滅多なことでは感情を露わにしない。だが、その彼でも度肝を抜かれるような、超衝撃的爆弾発言だった。

何しろ、自分の孫娘が、その姉の婚約者である異母兄（あに）を……。

富実樹は、無情にもあっさりと肯定し、矢継ぎ早に言葉を重ねる。

「本当ですわ。下手に些南美に報せると、この国を混乱させて、辺境の星に杜歩埜と共に逃避行をするかも知れないのです。柚希夜の場合、何故一番下の弟に報せて他の年上の信頼する方に報せないのかと後で騒動が起きる可能性があります。そして、第二王位継承権を持ち、更には鴬大臣の地位に就いている富瑠美は絶対に外せません。それに、彼女とわたくしは異母姉妹というだけでなく乳姉妹ですわ。彼女は深沙祇妃の娘とはいえ、由梨亜妾の手によって育てられました。ですから、わたくしのことは余程のことがない限り裏切るはずが御座いません。それに今回わたくしと意見が対立致しましたのも、鴬大臣は大抵、必ずこうしなければ駄目だということ以外は王と反対の意見のことが多いからですわ」

富実樹は、強い目をして言う。

「……ですが、わたくしの意見でしかありませんが、富瑠美は、御父様を暗殺しようとは絶対にしておりません。けれど、それをやったのは富瑠美派の人物でしょう。そしてその人物はきっと、こちらがこのことを直ぐ様公表すると思っているでしょうね。御父様がわたくしを生かそうと地球連邦に御送りになられたのは、一部の方限定では御座いますが、周知の事実に御座います。その御父様が、御倒れになられた……つまりこちらの陣営が危ういと、こちらに下手に肩入れすると自分の身も危ういと思わせるには充分です。そして

それをした人物は、かなりの地位と人脈のある人物でしょう。こちらに全く気付かせずに後宮の中級侍女と接触することは、とても難しいことに御座います。高度な技術を持つ魔術師を雇えるほどの金持ちで、後宮にもその人物を連れて入り御父様の中級侍女とも接触できるほどの人脈と金脈の持ち主……それほどの持ち主ならば、大した理由もなしに取り調べることは不可能です。濡れ衣と、侮辱と言われます。けれど、手がない訳では御座いません。御祖父様」

富実樹の強い言葉と視線に、ノワールは居住まいを正した。

「はい」

「黒幕の特定を御急ぎ下さいませ。御父様が暗殺されかかったとメディアに公表するのは明日に。毒が盛られたのは、今晩か明朝にするのです。その後、噂をばら撒いて下さいませ」

「それは、どのような……」

「それは、その黒幕の貴族が『どうもあの貴族は怪しい。先王陛下の暗殺を謀っていたのではないだろうか』という噂です。そうすればその人物は代替わりせざるを得ないでしょう。そのような噂に手を打てば、必ず、やはりそうかと噂が流れますから。それと、杜歩埜と富瑠美にはわたくしから御報せしておきますわ。御祖父様は、沙樹奈后達に御報せ下さいませ」

富実樹はきっぱり言い切ると、推敲した文章の入っているキエシュをノワールに渡し、

「それでは戦祝大臣殿、期待しておりますわ」

と、先程の会話が嘘かのように、至って事務的でありながら威厳のある口調で言った。

「私もこちら側の案件が御通りになられること、祈っております。それでは失礼致します」

そう言うと、ノワールは部屋を出て行った。

富実樹は小さな溜息をつくと、立ち上がって杜歩埜の元へと急いだ。

後宮の二十四階にある、杜歩埜の部屋を誰かが叩いた。
「どうぞ」
杜歩埜がそう言うと、彼の異母姉にして婚約者の、富実樹が入って来た。
「御早う御座いますわ、杜歩埜」
「御、早う、御座い、ます……富実樹異母姉上」
彼は、途惑いながら答えた。
なにしろ、本当ならば、富実樹は本宮の執務室に居るはずだからだ。
「どう、なされたのでしょうか？」
「ええ、少し……」
富実樹は、そう言い淀むと、深呼吸をして切り出した。
「あの……大声を出さないで下さいませんか？　それと、これから話すことは魔力に賭けて他言無用で――些南美にも」
杜歩埜は目を瞠った。
杜歩埜は、富実樹に魔族の力（魔族の力には人間離れした知力、体力、魔法を使えるという意味で魔力の種類がある）の魔力が宿っていることを知っている数少ない人物だ。
ちなみに、これを知っているのは峯慶、由梨亜妾、そして先日暴露した富瑠美だけだ。
そして、魔族の力を持っている者が自らの持つ力に賭けて誓約しそれを破った場合、その力の持ち主の力は失われ、破った相手は最悪の場合、死に至る。
それほどまでに、拘束力のある誓約だった。
富実樹が、そのようなことを好んでするはずがない。
杜歩埜はそれを分かっているから、驚きながらも頷いた。
「はい……了承致します」
富実樹は息を吸い込むと、たった一言だけ、告げた。

「御父様が、暗殺されかかったわ」
「え……」
あまりのことに反応できないでいる杜歩埜に、富実樹は無情にも言い放った。
「本当のことに御座います。わたくしは忙しいのです。冗談を言っている暇は御座いませんわ」
そう言うと、一息付き、続けた。
「御父様の御容態ははっきりとしておりません。去解鏡を使用するにも、上手くいかないでしょう。それなりの時間の後には使用許可が戴けるかも知れませんが、その結果を報せる者が、その時間の間で黒幕の手の者に掏り替えられたり、買収されたりしておいででしたら言い逃れができますわ。なので、戦祝大臣殿に、去解鏡を明日中に御使用を御願い致しました」
「す、少し御待ち下さい、富実樹異母姉上。許可を戴くには、御時間が掛かりますよ？　そう、簡単におできになられるはずが……」
「ですが、できますわ」
「はっ……？」
「実はわたくし、去解鏡を創ってしまいましたの。そして、それを戦祝大臣殿の御家に……」
その言葉に、杜歩埜は絶句した。
いくら、相手が自分の外祖父とはいえ――
「ふ、富実樹異母姉上……何とも、大胆不敵と言うか、何と言うか……」
「けれど、そう長く持たないので御安心を。……あと三年ほどしか持たないはずですわ」
そうにっこり笑って言うと、最後にこう付け足した。
「そうそう、この誓約は、今日限定と言うことで。明日、発表する予定ですから」
「あ……はい」
「それでは、失礼致しますわ」

富実樹は見事に要点プラスアルファのみを伝え、部屋を出て行った。

そして、その脚で本宮に戻るのかと思いきや……。

富実樹は、何と後宮の二十五階まで上がってしまったのだ。

そして、『花雲恭富実樹』から『本条由梨亜』へと変わった。

その上、下級侍女の服を着ると、厨房に一分ほど籠もり、出て来た時には、持ち運び用の小型カートに何かを乗せて出て来た。

## 第八章「あり得なかったはずの凶行」―1（後書き）

外祖父…母方の祖父。

# 第八章「あり得なかったはずの凶行」―2

富瑠美は、本宮の富実樹の執務室から離れた所にある、富瑠美専用の執務室に居た。

何をやっていたかと言えば……何と、うたた寝をしていた。

富瑠美の方も文章の推敲が終わり、既に政財大臣（せいざいだいじん）の手にキエシュは渡っていた。

今日は仕事を入れてしまうと総票会（そうひょうかい）に差し障るというので、他に仕事は入れていなかった。

なので、推敲が終われば暇である。

そしてぼんやりとして居ると、何時の間にかうたた寝をしていたという訳だ。

富実樹は、扉をノックすると、声を掛けた。

「鴬大臣殿下（おうだいじんでんか）？　御入りしても宜しいでしょうか？」

……返事がない。

「もし、鴬大臣殿下？」

……それでも、返事がない。

意を決して、勝手にロックを外し、入ることにした。

「失礼致しますわ」

富実樹が部屋に入った途端、

「……」

富実樹は固まってしまった。

何と、あの富瑠美が寝ていたのだ。

富実樹はゆっくりと歩み寄ると、肩を揺らした。

「う、う～ん……もう少しだけ……御願い致しますわ……ムニャ」

「……」

それでも、肩を揺らし続ける。

「駄目、ですわ……あと……あと、少しですから……」

「……」

富実樹の頭で、何かがプチッといった。
「富瑠美、呑気に御眠りになられている場合じゃ御座いませんわよ」
富実樹は富瑠美の耳元に顔を寄せ、低い声で言った。
その上、富瑠美の身体に手を回し、何とそのまま持ち上げたのだ！
さすがにそこまでされれば、目が覚めない訳にはいかない。
「きゃっ……あ、ら？　御早う、御座います、わ。どう、致しましたの？」
富瑠美は寝惚け眼でぼんやりと呟いた。
だが、次第に目が覚めてきたのか、
「あら、ら……夢、では……！」
と言うと、完璧に目が覚めたようで、慌てて富実樹の手から逃れると、そのままへたり込んでしまった。
「お、おね、おね……何、な、な……か、変わ、って……」
あまりにも慌て過ぎたせいで、ろくに喋れていない。
富実樹は小さく溜息をつくと、富瑠美に向かって言った。
「富瑠美、落ち着いて頂けませんか？　そして椅子に御座り下さい。御話はそれからです」
富実樹は、富瑠美を椅子に座らせ、簡単に作ったフルーツジュースを飲ませた。
そして富実樹は峯慶のことを、恐らく富瑠美派がやったということを除き話した。
富瑠美はしっかりしているからこそ、一度憤るともう手が付けられない。
……もう、誰も止められなくなる。
そして、下手をしたら富瑠美派の関わった全員を終身刑にする可能性がある。
そこまで気性の激しい富瑠美を、敢えて刺激するつもりはない。
だが話を聞き終わった富瑠美は拳を握り締め、唇を引き結び、目を怒らせ、般若のような形相になっていた。
それは、思わず富実樹が後退るほどだった。

「ふ、富瑠美……顔が怖いですわ……」
「あら、それは申し訳御座いませんわ」
全然、申し訳なく聞こえない上に、声が怖い。
富実樹が気迫を呑まれ、何も喋れないうちに、富瑠美が口を開いた。
「御異母姉様（おねえさま）。犯人は、御分かりになられて？」
「い、いいえ」
「そうですか……身内の恥を曝すようになりますが、わたくしは、鴬大臣派の方がおやりになられたことだと思いますの」
富実樹は、思わずはっと息を呑んだ。
それで、富瑠美には全て分かったようで、フゥ、と溜息をつくと、先程の表情とは打って変わり、意外なことに穏やかな目をして言った。
「やはり、そうでしたの……御父様の御生命を狙うなど、御異母姉様の陣営の人間がおやりになられるとは思えませんもの。それに、そのことを御公表されて困るのは御異母姉様ですからね。……許せませんわ。犯人の特定を御急ぎ下さいませんか？」
「す、少し御待ち下さいませ。勿論これは私論で御座いますが……わたくしも戦祝大臣殿も、富瑠美と同じ意見です。富瑠美派の人間がおやりになられたことだと思いますわ。けれど、何一つ証拠が御座いません。去解鏡を使うといっても、許可が出るまで、時間が掛かりますわ。わたくしが勅命を下せばもっと速くできるかも知れませんが、それはそれで後に不穏分子を生み出す原因にもなりかねません。そして時間があれば、結果を伝える者を買収することが可能です」
「で、ですが……何か、方法は御座いませんの？　何か……」
富実樹は少し詰まると、ヒソヒソ声で言った。
「あの……これは秘密にしておいて下さいませ。実は戦祝大臣殿の御家に去解鏡がありますの。今日、それを見て貰えるように御頼み致しましたわ。そして、わたくしは勅命を下しません。それに、去

解鏡の結果を発表するのは、戦祝大臣の管轄でもなく、政財大臣の管轄でもない宗賽大臣の管轄です。宗賽大臣殿は特にどちら派と言う訳ではないので、買収の危険があります。なので、今夜買収させます。そして戦祝大臣殿には、御父様を暗殺しようとした方が……まだ、どなたなのかは分かりませんが、その方が御父様の暗殺を謀っていたのではないか、という噂をばら撒くように指示しておりますわ。そしてこのことは他言無用に御座います。話は、以上です。何か御質問は御座いますか？」

キッパリと言い切られると、富瑠美は何を言っていいのか分からなくなり、首を横に振るしかできなかった。

本当は、訊きたいことが一杯あったのだが。

だが、富実樹はそれを見るとにっこりと笑い、

「ありがとう御座いますわ。それでは失礼致します」

と言うと、カートの上に空になったコップを乗せ、部屋を出て行った。

廊下を出ると、政財大臣にばったりと出会った。

富実樹は侍女らしく廊下の端に寄ると、頭を下げて通り過ぎるのを待った。

だが、目の前で足を止められてしまった。

「そこの者、面を上げよ」

貴族に、たかが下級侍女が逆らえるはずがない。

ゆっくりと、顔を上げた。

「見慣れぬ顔だな。其方、名は何と申す」

「……わたくしは、ユーリと申します」

あっさりと名前だけを伝える富実樹に、政財大臣は不快な顔をした。

「私は、名を申せと言ったのだ。つまり、其方の身分と全ての名を申せ。この私の命令に従えぬと抜かすか」

……ここで従う、先王付きの後宮勤めの下級侍女などいるはずがない。

なので、それに則ったやり方で、富実樹は答えた。
「あの……わたくしは、貴方様を存じ上げませんの。御無礼なことと存じますが、貴方様は一体どなた様でいらっしゃいますのでしょうか？」
あまりの答えに、政財大臣は絶句した。
「何を……」
「ほんに御無礼なことと存じ上げます。ですが、わたくしは本宮勤めの侍女では御座いません。わたくしは、後宮の先王陛下の下級侍女に御座いますので……」
「なるほど、な。あの前陛下は、自らの娘に下級侍女をさせておったのか」
政財大臣のその勘違いに、富実樹は目を瞠り慌てて言い訳を捻り出した。
「いえ、わたくしの曾祖母は、陛下の曾御祖母様にあらせられる花鴛国第百五十代国王陛下であらせられた、癒璃亜女王様の父君であらせられた、花鴛国第百四十九代国王陛下、襖祥王様の娘に御座いました。つまり、癒璃亜女王様の異母妹ですから、先王陛下との血の繋がりはありますが、娘では御座いませんわ。わたくしと先王陛下は、三従兄妹に当たります」
富実樹のその答えに、政財大臣は目を瞠り、頷いた。
「なるほど。私は、政財大臣のフォリュシェア・アメリア・シャリクだ。私が、其方の身分を訊ねたのは、王家との血の繋がりがなければ、妻にしようと思ったのだが」
富実樹はギョッとし、そして思い出した。
貴族は、王家との血の繋がりがない侍女ならば娶ることができるのだ。
富実樹の祖父であるノワールも、確か妻の内に元侍女がいたはずである。
「だが、そのようなことなら無理だな……そうだ、ユーリとやら」
「は、はい、何で御座いましょうか？」

「先王陛下は、どちらに投票するか、存じておるか」
「はっ？」
富実樹は、本気で
（こいつって……正真正銘の、大馬鹿者？）
と思った。
そのようなことは、訊かないのが礼儀である。
「い、いいえ……ですが、最終論論説で御決めになられると思いますわ」
「存じない、か……」
その口調に、違和感を覚えた富実樹は、フォリュシェアに訊き返した。
「あの、政財大臣様は、どちらに御投票なさるおつもりですの？」
どちらに自分が組していようと、敵対する陣営の意見の方がいいと思った場合は、統計は匿名化されて集計されるということもあり、そちらに投票することができる。
……まあ、フォリュシェアの場合、代表者である為それはないだろうが。
「私が、か？　勿論、鴬大臣殿下の方だ。陛下の御意見も、尊重すべき所はある。だが、現実問題として考えると、鴬大臣殿下の御意見の方が、やりやすいのだ。それに……」
フォリュシェアは、そこで一息付くと、続けた。
「私は、あの小娘の仰ることは、いまいち信用がならん！」
富実樹は、思わず腰を抜かしかけた。
「あの陛下は、まだこの国に来て間がない。だが、鴬大臣殿下は違う。まあ、陛下ももう少しすれば御分かりになられるようになるだろうが……何故戦祝大臣の方が、政財大臣よりも位が高いのか。何故、王家の妻が六人、子供が十五人必要なのか。何故、何人もの王家の人間が宗教家になるのか。そのことが御分かりになられてこそ、私はようやく陛下を信頼できる。しかし、今はまだその段階ではない」

フォリュシェアははっきりきっぱり言い切ったが、そこに富実樹は、ただ敵対心を燃やしているのではなく、王として信用できるか否か、という響きを感じた。

「わたくしは、貴方様に嫁ぐことも、何もできません。それに、わたくしは鴬大臣殿下よりも陛下の方を信頼しておりますわ。ですが、敵方におられる貴方様が、陛下を信用する可能性があり、先王陛下をとても信頼していたということが分かりましたわ」

「な、何、を……」

フォリュシェアは慌てて言ったが、ヴェールに蔽われた人の心を読む訓練を長年積んでいた富実樹には、相手をたかが侍女だと油断している人の心を読むのは朝飯前だった。

「それでは失礼致しますわ。仕事がありますので。わたくしは貴方様と出会えて良かったですわ。貴方様は、陛下の敵では御座いませんと分かりましたから」

それを言い残すと、富実樹は一礼をし、立ち去っていった。

その後姿を、フォリュシェアが見つめているとは思いもせず。

富実樹が遠ざかると、フォリュシェアは、ぽつりと呟いた。

「何と言えばいいのか……気の強そうな、娘であるな。あの娘が王家の血を引き継いでいるとは残念だ。私の好みであったのに……」

そう言うと、富瑠美の執務室をノックし、入って行った。

フォリュシェアはそこで、楽しげに『ユーリ』という下級侍女の話をしたが、それを聞いた富瑠美は、父が意識不明の重体であることを忘れ、大爆笑を堪えたり、真っ蒼になったりするのを堪えるので大変だった。

# 第九章「総票会」―1

総票会の開場はとても広く、また総票会のみに使われる所だった。席は、擂り鉢を半分に割ったような階段状で、目の前にある壇上を取り囲んでいた。

席は、下から言うと学者、普通の宗教家、修道院長クラスの宗教家、王族の宗教家、官吏、地封貴族、官封貴族、王族だった。

だが、司会として前に立っている宗賽大臣と峯慶、由梨亜妾の席が空いていた。

何故宗賽大臣が司会かというと、戦祝大臣は富実樹を、政財大臣は富瑠美を擁護するので、他に空いている高位の者は彼だからだ。

「ただ今より『地球連邦の宇宙連盟加盟要求』についての総票会を開催致します。この案件について二つの御発案が御座いました。陛下の御発案である『いきなり武力行使をするのではなく、まず話し合いの場を設け言葉により説得する』と、鴬大臣殿下の御発案である『地球連邦がいつまで経っても連盟に加盟しようとしないのは、元々加盟する意思がないということであるので、武力をもって征する』に御座います。これからこの御発案を御擁護する最終論説を始めます。それでは政財大臣殿、鴬大臣殿下の御発案を御擁護致して下さい」

そう宗賽大臣が言うと、フォリュシェアは最終論説を始めた。

「承りました。鴬大臣殿下の御意見を擁護致します。殿下は地球連邦を、武力を持って征すると仰られましたが、これには理由が御座います。地球連邦が我らに発見されたことを告げられたのは、今からおよそ五百年前。当時地球連邦は百何十国にも分かれ、言語も様々な種類があり、技術も後れておりました。その当初の状態では、加盟できないのは分かります。ですが、五百年で御座います。地球連邦の技術はそれなりの力をつけて参りましたのに、連盟に加盟しようとしない。連盟に加盟した方が技術発展や貿易には有利である

のに」

政財大臣はそこで一息つき、決然と顔を上げ、強い語調で告げた。

「ということは、全宇宙共通連盟憲章に違反したことが地球連邦では行われているのではないでしょうか。それならば陛下の御発案である話し合いには応じないでしょうし、応じたとしても加盟は拒否するはずです。ということは、さすがに警告は致しますが、武力を持って征圧し地球連邦の間違いを糺した方が、地球連邦の民にとってもよいことではないのでしょうか。それらの理由により、我らは地球連邦を連盟に加盟させた方がよいと存じます。繰り返しますが、これは我らの為でもあり、地球連邦の民の為でも御座います。どうか我らの意見を御理解頂き、我らに御投票を御願い致します」

フォリュシェアがそう弁論すると、司会である宗賽大臣が

「ありがとう御座いました。それでは戦祝大臣殿、陛下の御発案を御擁護して下さい」

と言い、ノワールの番になった。

「承りました。陛下の御意見を擁護致します。陛下は話し合いの場を設け、言葉により説得すると仰られました。無論、武力で攻め入った方が、簡単に征圧でき、あっと言う間に連盟へ加盟させられることでしょう。花鴬国（かおうこく）の民も、それがよいと、考えるかも知れませぬ。ですが、地球連邦の民は、どう思うでしょうか」

一言一言に重みを乗せたノワールの言葉に、大部分の人が、はっとした。

「大抵は、自らの国のことだけを考えることで、上手くいきます。ですが戦は違います。どんなに気を配っても、必ず死者は出ます。勝った国の方は、『名誉の戦死である』『国の為に戦った立派な英雄である』と褒め称えられます。ですが、それでもその遺族は悲しみます。自分の孫が、息子が、夫が、父が亡くなった。悲しまないはずがありません。ですが戦勝国の方は、まだ『勝った』という事実に慰められることでしょう。ですが、戦敗国はそのようなことに慰められることもなく、逆に、何故自分の孫が、息子が、夫が、父

が逝ってしまったのだろう。何故、自分の知り合いだったのだろうと悲しみに身を浸すこととなります。すると、その悲しみは同じだけの強さの憎しみへと変貌します」

ノワールは小さく溜息をついて悲しそうに言うと、不意に顔を上げ、訴えるように言った。

「武力をもって征圧致しても、何度もテロに遭遇する可能性があります。表面上は取り繕っていても、一気にその溜め込んだ物が爆発する惧れがあります。最終的には無理かも知れませんが、何度も加盟するよう働き掛けてからではないと、地球連邦の民からの信用が得られないでしょう。それに、周辺諸国からも、『いきなり攻めるのはどうだろうか』と言われかねませぬ。我が国の体面を保つ為にも、そして加盟後の信用を得る為にも、まずは話し合いの場を設けた方がよいと存じます。どうか、御投票宜しく御願い致します」

ノワールの言葉に、辺りはしんとなった。

政財大臣の言ったことは考えたことがあるが、戦祝大臣の言ったことは考えたこともなかった――という思いが満ち溢れ、静まり返っていた。

富実樹は、予想外の展開に、複雑な思いで見下ろしていた。

何故なら、さすがにこれくらいのことなら誰かは考えているだろう、と思っていたのだ。

しかし、皆の反応は違った。

この沈黙が、富実樹の期待と大幅にずれていたことを雄弁に物語っていた。

宗賽大臣すらも、自らの役目を忘れ、呆然としていたのだ。

さすがに一分以上も沈黙が続くと時間の無駄なので、富実樹は軽く咳払いをした。

それにまた皆ははっとなり、それから少しざわめき立った。

「え、えー、皆様、御静かに願います」

宗賽大臣がそう言うと、また辺りは静まり返った。

「ただ今より、投票の決まり事を御説明致します」

その言葉に、列席していた若い貴族、官吏、宗教家、学者と、初めての富実樹、富瑠美、杜歩埜（とふや）、璃枝菜（りえな）、最貴の長男で第二王子、峯慶の第五子である風絃（ふうげん）が耳を澄ます。

「まず、どちらに投票するのかを御決め致しましたら、陛下の御意見を御支持なさるならば『花』を、鴬大臣殿下の御意見を御支持なさるならば『鴬』の字を目の前のパネルに御書き下さいませ。書き終わりましても、集計する為しばらく御待ち下さい」

宗賽大臣がそう言うと、宗賽大臣も自らに与えられている席に付き書き始めた。

しばらくすると、辺りが少しざわめき出した。

そして、その中の多くの視線が、峯慶と由梨亜妾が座るはずだった席に向けられた。

一部の人はいない理由を知っているが、他の人には体調を崩したと伝えてある為、二人がいないことに心配はしているものの、不安には思っていないようだった。

だが、知っている者は気が狂いそうになるほど心配していて、富実樹もその一人だった。

それを表に出したら気付く者もいるだろうから、知っている者は表には出せなかった。

特にそれだけではなく、富実樹や富瑠美の周りの高官達はピリピリしっぱなしだ。

だが、学者や官吏、宗教家など、下の方は特に砕けた雰囲気になっている。

の、だが……何と、その元凶のはずの、富実樹と富瑠美が……喋って、いた。

普通なら厭味の報酬でもしているのだろうと思うが、微かだが笑い声すら聞こえる。

絶対に、厭味など言うはずがない。

そんな視線に曝されている富実樹と富瑠美だが、そのことには気を配っていなかった。

そして始まってから五分後、恐るべき僅差の結果が表れた。
その数、何と五十三票差。
負けた方の陣営だった人は、その結果に顎を落としたのだった。

ドッと、拍手と歓声が富実樹の周りで上げられた。
ここは、カサミアン宮の本宮にある、大広間の一つだ。
「陛下、おめでとう御座います！　私は……この歳にして……初めて感動と言う物を知ったような気が致しますっ！」
と言ったのは、どんなことにでもすぐに感動する、『感動癖』があるノワール戦祝大臣だ。
聞いた話によると、彼は少年の頃から感動すると、すぐ死ぬだの自殺するだの殺してくれだのと言い、ことによってはその手段を持ち出して来ることがあるそうだ。
彼を収めるのは、彼の長男である、マリミアンより六つ年上のシャーウィン・リシェル・スウェールと、次男でありマリミアンより二つ年上のシャーキヌ・カナージェ・スウェール、三男であるマリミアンの異母弟（おとうと）のシャーリン・ミシェル・スウェールである。
戦祝大臣であるノワールには、妻が五人いる。
そのうち貴族は第一妻と第二妻で、元総下（そうげ）は第三妻と第四妻、元侍女は第五妻である。
ただし、その元侍女は子供ができなかった為、実質上は四人の妻である。
ちなみに官封貴族は第五妻、地封貴族は第三妻、官吏や学者は第二妻まで妻が持てる。
大抵の場合、その人数ギリギリまで持つことが多い。
おまけに、正式な妻にしなくても、愛人として王宮の元侍女を入れることがある。
由梨亜妾の兄弟で例えると、第一妻の子供がシャーウィンとシュ

メリアン、第二妻の子供がシャーキヌと由梨亜妾、第三妻の子供がシュリエルとアミエル、第四妻の子供がシャーリンである。

この場に集った皆は、富実樹に向かって拍手喝采をした。

それは照れ笑いでかわしながら、ノワールに声を掛けた。

「戦祝大臣殿、感激し過ぎです。わたくし達は勝ちましたが、これからが正念場ですわ」

大部分の人々が予想し得なかったことだが、僅か五十三票差で勝ったのは富実樹だった。

その結果を聞いたフォリュシェアは唖然呆然、全く使い物にならない置物になった。

しかし、一部の他の人の反応に比べれば、まだ害がないと言えるであろう。

何故なら、高位の富瑠美派の貴族達は、ほとんど失神状態だったのだ。

その中で、異彩を放ったのが富瑠美だった。

彼女は堂々と富実樹に近付き、

「おめでとう御座います、陛下。わたくしは敗れてしまいましたが、これからのことに全力を尽くしたいと愚考致します」

と言い、にっこりと微笑んだのだ。

そのことによって、まだ立てていたフォリュシェアの身体は左斜め方向に向かってゆっくりと傾ぎ、ドシン、と言う音と共に姿が掻き消された。

また、富瑠美派の貴族達のほとんどが、そのことによって失神し、前代未聞のかなりの大騒動をもってこの総票会は終了した。

そして、富実樹の勝利を祝う為、と言う名目を持って、富実樹派の貴族と全ての王族、そして富瑠美派の主だった貴族がこの大広間に集められたのだった。

だが、取り敢えず揃っていたのはここまで、各自食事をしたり議論をしたりしていた。

そして、その中に富実樹と富瑠美の姿もあった。

「本当に参りましたわ、御異母姉様（おねえさま）。わたくし達の完敗に御座います」

富瑠美がそう言ったのは、大広間から出られるようになっている露台の一つである。

そこは今、富実樹と富瑠美で貸し切り状態になっていた。

「いいえ。そう大したことはやっておりませんわ」

と、富実樹はいけしゃあしゃあと白々しくも言った。

「わたくしは、皆様が御考えになられていなかった事実を示しただけに過ぎませんわ。もし勝因があるとすれば、それだけですわね」

富実樹がそう言うと、今度は瞳に強い光を燈し、富瑠美に向き直った。

「富瑠美、わたくしに何があったとしても、この案を御進めして貰えないでしょうか？」

「御異母姉様……？」

富瑠美の訝しげな声には答えず、富実樹はなおも迫った。

「御約束を、願えませんか？　勿論、この案を御進めしても拒否された場合、貴女方の案に移られても構いません。ですが、最初は……御願い致します」

「お、御異母姉様、少し御待ち下さいませ。勿論、貴女に何かあった場合でも、総票会で可決されたことは絶対に御座いますわ。総票会での決定を覆すことができる方法は少なく、この後に議会に掛けられて覆されるか、国民の署名活動だけに御座います。そうでない限り、喜んで守らせて頂きますとも」

富瑠美のその返答に、富実樹は肩の力を抜き、ほっとしたように呟いた。

「良かったですわ……それでは、中に戻りませんこと？　もう五月とはいえ、ここは北方の土地。まだまだ夕方は寒う御座いますから」

富実樹はそう言うと、富瑠美と共に中に戻った。
（何を御考えなさっておられるのでしょう……）
富瑠美はそう思ったが、富実樹が本当に考えていることまでには、想像が及ばなかった。
それに、そのことは、峯慶と由梨亜妾以外には、分からないに違いなかった。
この祝賀会は大規模な物ではなかったのに、終わったのは翌日の午前二時だった。
それも最後は、富実樹達兄姉弟妹が力を合わせて説得して終わらせたのだった。

# 第九章「総票会」―2

富実樹（ふみき）は、侍女達がベッドを整え、部屋を出て行くのを黙って待っていた。
そして、それを侍女達は
（きっと御疲れなのでしょうね）
と思い、サッサと部屋を出て行った。
その気配が感じられなくなった頃、富実樹は着ていた夜着を脱ぎ捨てて女官服を身に纏うと、『本条由梨亜（ほんじょうゆりあ）』に姿を変え、音もなく、誰にも見咎められずに部屋を出て行った。

富実樹は先程いた本宮に戻っていた。
そして、目的があるように見える足取りで、特に人の少ない一画へと向かっていた。
そして、着いた場所は……そこは、あの資料庫であった。
何故そこにいるのかを説明できるのは、富実樹自身と峯慶（ほうきょう）、由梨亜妾（ゆりあしょう）のみだろう。
ガッチャ
ギィ～イ～
ガッ　グッ　ガッチャン
と、またもや不気味な音を立てて、資料庫の扉が開いた。
富実樹は、ある決心をし、そして今朝見た資料庫の夢を思い出していた。
しかし、それは前の日にこっそり忍び込んだ時と違う所があった。
まず、視線が違う。
それに違和感を覚え、ふとキエシュの入っているケースに映った自分を見ると、何と『由梨亜』になっていたのだ。

富実樹の意識自体は驚いたものの、身体はさっさと歩いて行った。
そして、あの亜空間に通じる紋様の所まで来ると、千紗と一緒に千年前に行った時、病院で見つけたあの交換日記帳から出た銀色の光と同じ光がその紋様から溢れ出て、その光を浴びた『由梨亜』は全く躊躇わず、その紋様の中に足を踏み入れていた。
そして、その中にいる女性と会い、その女性が言葉を口にした時……『由梨亜』には、彼女が何を言っているのか……そして、何語で喋っているのかが解ったのだ。
彼女が示していたのは、地球連邦に還る方法――話していたのは、日本語。
そこで、富実樹は目が覚めたのだった。
富実樹は目が覚めると、今見ていた夢は真実だと、直感的に分かった。
そしてそれが、自分が喉から手が出るほどに望んでいることだということも知っていた。
だから、富実樹は決めたのだった。
総票会が、自分の……『花雲恭富実樹』としての、最後の仕事だと。
勿論、簡単に自分の生まれた国を捨ててもいいのかと問われると、言葉に詰まるだろう。
だが、富実樹は自分の出した考えは……最終論説で述べた自分の考えは、決してこの国の人達には理解してもらえない物だと感じ取っていた。
勿論、投票者は、僅差ではあったが過半数を超えた。
だが、きっとそれは、富実樹の出した、他人には考え付きもしなかった『真新しい考え』に心を動かされたのが大半だろう。
『地球連邦』と『花鴬国』……そこに住む人達の考えは、全く違っていた。
そんな花鴬国では、富実樹という平和的な考えを持った王などは、必要ない。

必要なのは、富瑠美（ふるみ）のような考えを持った勇ましい王。
富実樹は、心残りはあったものの、この国の民にとってはもう必要がなくなった自分は、地球連邦に還ってもいいだろうと思った。
それに、王としての責務は、自分などよりも富瑠美の方がよっぽど上手くやれるし、そもそも自分が十三になるまでは、そちらの方が、確定していた未来だったのだ。
心残りは、父の生死と、暗殺者の黒幕、そして杜歩埜（とふや）と些南美（さなみ）の恋愛。
だが、地球連邦に還っても父の生死は知ることができるし、暗殺者の黒幕も同じである。
杜歩埜と些南美の恋愛に関しても、富瑠美が王位に即けば、その夫は杜歩埜となり、つまりは、些南美は総下（そうげ）になれ、杜歩埜と一緒になれる。
富実樹の心残りは時間が解決するであろう問題で、自分が口出しできる問題でもない。
それらの解決を待ってから行くこともできるが、そうなると次の仕事が入ってしまう。
一旦仕事の区切りがついた今日を逃すと、次の機会はいつになるか分からない。
だから今、富実樹は資料庫へと向かったのだった。

富実樹は由梨亜の姿になると、あの紋様の所まで駆けて行き、一歩足を踏み入れた。
すると、一昨日のように突風が吹き抜け、あの亜空間に飛んだ。
そして、あの女性が現れると、地球連邦の古代語で
『貴女は何を望みますか？』
と訊ねてきた。
富実樹は、今度は激昂せずに、穏やかに地球連邦の古代語で答え

た。
「地球連邦に……還ることです」
　すると、あの女性が、また問いを重ねた。
　それは、一昨日は意味の解らない物であったが、今は、意味が解った。
『その為に、貴女は全てを捨てられますか？　その覚悟があるのなら頷いて下さい。何か質問や希望があるのなら、仰って下さい。何か仰る時は、現代の言葉で構いません』
　富実樹は静かに深呼吸すると、頷き、口を開いた。
「私は、地球連邦に戻りたいです。今まで、ここで得ていた物を全て捨て去っても。そして、地球連邦に戻った時にして欲しいことがあります。と言うより、変えて欲しいことが」
『何でしょうか？』
「それは……あの、私と千紗を、双子にして下さい。そして、千紗だけは真実を……今までの偽りの記憶も、本当の記憶も、全て覚えているようにして下さい」
『ふ……双、子？』
　その女性は、呆気に取られたように呟いた。
　だが、それに対し、富実樹は大真面目に答えた。
「ええ、そうです。今の私が地球連邦に戻っても、戸籍はないですよね？　もし本条家に戻るとしたら、千紗は彩音家に戻ってしまう。千紗の本当の両親は、本条耀太と本条瑠璃なのに。けれど、これ以上関係ない人を巻き込む訳には行かないんです。なので、私と千紗が双子になれば……そうすれば、何もかもが解決するんです」
『……そう、ですか。では、どちらを「姉」とするのですか？』
「それは、産まれた順で――の方で」
　富実樹は、内緒話をする時のように、女性の耳元で呟いた。
『はい。承りました。富実樹……わたくしの血を継ぐ者よ』
「血を……継ぐ？　貴女は……一体、何者なんですか？」
　富実樹は混乱してしまった。

この女性が、生きていた人間だということも、先祖だということも。

『わたくしは、貴女の曾祖母。何故死んだはずのわたくしがここにいるかと言うと、わたくしの孫、峯慶に頼まれてのこと』

（えっと、私の御父様の、御祖母様って……あっ。もしかしたらこの人は……）

「花雲恭、癒璃亜様……？」

花雲恭癒璃亜とは、この花鴬国の元女王で、魔族の力を全て持って産まれた前代未聞の人物であり、その時代はとても平和だったという、富実樹の曾祖母である。

『御名答。さすがですわ。さて、そろそろ行きましょうか？　……そうそう、峯慶と、わたくしと同じ名を持つ由梨亜妾になら、伝言が残せますわよ』

「ええ、それでは、御父様には――と。御母様には――と御伝え下さい。それと……親不孝者で、すみませんと」

『はい。それでは、富実樹。貴女が地球連邦に行っても、元気でいますように』

「はい。……ありがとう御座います、曾御祖母様。それでは……さようなら」

『さようなら、富実樹』

癒璃亜は富実樹のことを暖かい目で見守り、亜空間を、真っ直ぐに下に向かって落ちていく富実樹――いや、もう由梨亜の身体になっている富実樹のことを、ずっと見ていた。

そして、由梨亜の姿が消えた時……それと一緒に、癒璃亜の姿も消えていた。

由梨亜妾は、ふと目が覚めて、枕から顔を上げた。

窓の外はまだ暗く、夜明けまではまだまだ遠い。

だが、嫌な予感が……ざわざわと、胸騒ぎがする。
由梨亜妾は微々たる魔力を持っているが、このこと自体は、別に珍しくない。
何故なら、花鴛国の人間で魔族の血が流れていない人間などほとんどいないからだ。
そして、由梨亜妾が使える魔法はないが、鋭い……鋭過ぎるほどの勘を持っていた。
おまけに、その勘が外れたことは今まで一度もない。
だから、由梨亜妾は起き上がった。
由梨亜妾は鋭い勘は持っていたものの、その出来事を特定することはできない。
だから、一番懸念していたこと——峯慶に何かが起こったのではないかと思ったのだ。
そして、由梨亜妾は峯慶の枕元に行ったものの、別に何もなかった。
峯慶は穏やかな寝顔で、月光を浴びていた。
だが、その顔はよく見ると、汗が出ている。
毒を体外から出そうとする働きの為、高熱も出ている。
しかし……言い換えれば、特に変わった様子はない。
由梨亜妾は首を捻り、だが峯慶に何もなかったことに安堵し……眠ろうとその場を動いた瞬間、部屋に突風が駆け巡った。
由梨亜妾が驚き、その風の渦の中心を見詰めていると、その中から人が現れた。
「癒璃亜、女王様……」
由梨亜妾が呻くように呟くと、その人は穏やかな、慰めるような微笑を顔に浮かべた。
そのことで、由梨亜妾は何もかもを察し、その場に崩れてしまった。
そして、嗚咽を漏らし、その頬を涙が滑り落ちた。
そんな由梨亜妾の背中を、癒璃亜はそっと撫でた。

「それでは……癒璃亜女王様がここにいらっしゃるということは、つまり、富実樹はもう、地球連邦へ……！」

『はい。そうですわ。そして、貴女方に伝言を預かっております』

「伝言……？」

『はい。峯慶、目を御覚ましなさい』

癒璃亜のその言葉に、峯慶は目を開けた。

だが、それは癒璃亜の力を持って一時的にしたこと……癒璃亜が術を解くか、一定の時間が過ぎれば、また眠りに落ちてしまう。

由梨亜妾はそのことを知っていた為、手早く峯慶に今の状態を説明し、癒璃亜からの伝言を聞く体勢に入った。

『由梨亜妾には、

「御母様、御免なさい。わたくしは御母様の気持ちを知っていたのに、それに答えることはできません。どうぞ御許し下さいませ」

と。峯慶には、

「御父様、わたくしのせいで毒殺されかかってしまい、本当に申し訳ありませんでした。犯人を捕まえる前に去ってしまいますが、御祖父様に指示し、どのようにすればよいかを託しました。わたくしの代わりに、全てやって貰います」

と。そして、二人に、

「親不孝者ですみません」

との伝言でした』

癒璃亜の伝言に、由梨亜妾はそっと目を閉じて涙を流し、峯慶は静かに聞いていた。

そして、その伝言を言い終わると、癒璃亜はこう言った。

『さて、わたくしはこれで役目を終えました。逝かせて貰っても宜しいですか？』

その問いに、峯慶は頼み事をした。

「もし……もし、まだこの世にいらっしゃっても宜しいのならば、どうか、富実樹に憑いていてもらえないでしょうか」

『富実樹に……？　しかし、あの子は』

「はい。だからこそ憑いていて欲しいのです。もし大臣の座を得ている者が暴走したら、そのことを伝えて欲しいのです。あの子の護りとなって欲しい……守護霊として」

『守護霊、ですか……いいでしょう。富実樹には、確か守護霊が憑いていませんでしたから。地球連邦に行くのは少し骨ですが、やってみましょう』

「嗚呼……ありがとう御座います、御祖母、様」

峯慶はそう言うと、ガクッと頭を垂れ、眠りに付いた。

由梨亜妾はその突然のことに目を丸くしていたが、峯慶の身体を元通りにベッドに横たえると、癒璃亜に向き直った。

「癒璃亜女王様、どうぞ御願い致します。どうか……富実樹を、御護り下さいませ」

『由梨亜妾、其方は、このことに不満ですね』

「ゆ……癒璃亜、様……！」

由梨亜妾は、狼狽えた。

自分の心の真実を見事に言い当てられたからだった。

由梨亜妾は、富実樹のことを目に入れても痛くないと思っているが、それは峯慶の前でも露わにしてはいけない感情だった。

富実樹は未成年だが、既に被保護者ではなく、この国の国民全ての保護者なのだ。

だから、そんな富実樹に占有物のように接することは、断じて許されない。

だが、そんな由梨亜妾に、癒璃亜は笑って答えた。

『その気持ちは、母ならば誰にでも共通する想いです。わたくしにも息子が二人、娘が一人いますが、後を継いだ籐聯も、鴬大臣になった奨砥も、他国の王子に嫁いだ梨美亜も、手放したくないほど可愛がっていましたから。そのことを思うと、貴女と富実樹を引き離したのは、可哀想なことでした』

「いいえ、わたくしは、富実樹のことを手放したくないと、一生傍にいて欲しいと思っています。ですが、それはわたくしの自儘な考

えでした。富実樹は、わたくし達よりも、地球連邦の友の方が大事なのです。仕方がありません。ですが、それとわたくしがあの子を愛するのとでは、全くもって話が違いますわ。ですから、今までこの国に留まってくれたことに、感謝したいと思います」

『そうですか……それでは、わたくしは富実樹の所に参ります。御元気で、由梨亜妾』

「はい。癒璃亜女王様も、どうか御元気で」

違う字ながら、同じ読みの名を持つ実体と幽体の二人――同じ花雲恭の名を持つ二人は、しばらく見詰め合い、そして癒璃亜は消えた。

由梨亜妾は、そっと涙を流しながら、眠りに戻った。

明日から、富実樹女王が消えたことで様々な懸案が出て来ることは、確実なことだったから。

由梨亜妾にとって血の繋がらない娘、嶌大臣である富瑠美のことも考え、眠りについた。

# 第九章「総票会」―3

翌朝、とても慌てた顔をした、由梨亜妾（ゆりあしょう）の上級侍女であり従姉でもある、リーシェ・マリヌ・キルテットが慌てた様子で起こしに来た。

「由梨亜妾様……御起き下さいませっ。一大事で御座いますっ！」

「どうしたのです……？　リーシェ。総票会（そうひょうかい）の結果ならば、昨晩聞きましたよ？　それとも、峯慶（ほうきょう）様に、何か御座いましたか？」

「いいえっ。違いますっ！　その……それが……」

リーシェは大分躊躇った後、喉の奥から絞り出すような声で告げた。

「陛下が……富実樹（ふみき）様が、行方不明になられましたっ！」

その言葉に、由梨亜妾の顔から、音を立てて血の気が退いた。

「富実、樹が……富実樹が、行方不明……？」

「はい。今日になってから祝賀会は御開きになったのですが、その後、陛下の上級侍女達の証言によると、御部屋まで御戻りになられ、夜着にも御着替えになられたそうですが、ベッドには寝た形跡が御座いませんでした。もしこれが誘拐ならばそれを直して行ったのかもしれませんが……もしかしたら、御覚悟の上での御失踪かと」

リーシェの言葉に、由梨亜妾は間髪を容れずに叫んだ。

「そんなはずは御座いません！　これからなのですよ？　地球連邦に、連盟に加盟させる為に話し合いをすると提案したのは富実樹なのですよ？　それなのに、それをやり遂げずに失踪するなど……わたくし達の元からいなくなるはずが御座いません！　リーシェ、ミリュア、富瑠美（ふるみ）と話し合う必要があります。すぐに富瑠美をわたくしの部屋に御呼び下さいませっ！　ルーシェ、アルアはわたくしの着替えを手伝って！」

「はい」

ちなみに、このミリュア・ルリアン・トーチェとルーシェ・クリ

ル・フュートとアルア・ルザート・ジョートは、由梨亜妾の従姉妹達で、上級侍女である。

その由梨亜妾は、誰が見ても本当のことを知っているとは思わせないような様子だった。

そして準備は整い、僅か三十分後には富瑠美と対峙していた。

「そんな……まさか、御異母姉様（おねえさま）がいなくなられるなんて……」

顔を押さえて呻いた富瑠美に、由梨亜妾は慰めるように言った。

「富瑠美、それは今言うべきことでは御座いませんわ。早急に手を打たねばなりません。貴女は鴬大臣（おうだいじん）であり、第二王位継承者。ここで貴女が動かなければ、皆が付いて行けませんわ」

そんな由梨亜妾に、富瑠美は疲れたような笑みを浮かべて答えた。

「由梨亜妾、わたくしは、自らの意思で、御異母姉様は出て行かれたのだと思いますわ。何故かと言うと、あの祝賀会で御異母姉様はわたくしにこう仰いましたの。

『もし、わたくしに何かあったとしても、この案を御進めして貰えないでしょうか』

と。つまり、いなくなる決意をしていたのではないでしょうか。あの御異母姉様が、このような重要なことを置いて出て行くとはとても考えられないのですが、あの御様子からすると、御自分で出て行ったのではないかと思ってしまったのです。残念ながら、この後宮には防犯カメラは存在しません。そんな物、設置する意味が御座いませんでしたから。ですが、本宮の人がよく出入りする場所にはあります。至急、それを確認してもらいましょう。そして、去解鏡（きょかいきょう）の申請を致します。由梨亜妾、御異母姉様は、絶対にわたくしが探し出して見せますわっ！」

富瑠美はそう宣言すると、部屋を颯爽と出て行った。

恐らく本宮に行き、鴬大臣の権限で昨夜の全ての防犯カメラを見

て、その一方で峯慶の暗殺者を視るよりも大事な、第一級緊急事項として去解鏡の使用を申請するのだろう。

由梨亜妾はそんな富瑠美の姿に由梨亜妾は苦笑し、思った。

（富瑠美ったら……何て可愛いのかしら。素直で、純真で……残念ですが、富実樹は防犯カメラに映っていないわ。あの癒璃亜女王様が憑いていて下さったのですもの。それに、去解鏡は人の質問に答えるだけ。富実樹が夜どこに行ったかという質問には、寝室に行ったということしか映し出さないでしょうし……正しい質問の仕方としては、富実樹は最後に花鴛国のどこに行くのを望んだのか、もしくは、『本条由梨亜』が花雲恭癒璃亜女王様と会ったのは何故か、という質問でないとね……けれど、真実の断片を知らない人では、そのような質問は思い浮かばないでしょう。……富実樹）

由梨亜妾は、窓から空を見上げた。

空は、今日も高く青く澄んでいる。

（富実樹、貴女はこの空と通じる所にはもういない。けれど、時空を隔てた宇宙の果てに、あの子は元気でいる……。わたくしは、それだけで充分です。あと、峯慶様が御無事でおられるならば……わたくしは、それだけでいいです。神様、この世に、もし神が――そのような名でなくても、わたくしの願いを叶えてくれる力を持った方がいらっしゃるのなら、峯慶様の御生命を御助け下さいませ。どうか、御願い致します……）

由梨亜妾は一心に祈り、願い、願い続けた。

「由梨亜妾様……」

由梨亜妾は祈り続けていたが、その声でふと現実に引き戻された。

だが、目を上げた先には、富実樹の上級侍女がいた。

「あら……？　貴女は、シリュィでは御座いませんか。どうなされましたの？」

そう、由梨亜妾に、富実樹の侍女が会いに来たのである。

由梨亜妾と富実樹は親子だが、今の富実樹は王である。

だから、生活する階が違ってくる為、本人同士ならばともかく、

侍女が会いに来るなんてことはほとんどないのである。
「由梨亜妾様、富瑠美様からの伝言に御座います。分かったことが御座いますので、本宮に御越し下さいませとのことで――」
由梨亜妾はシリュィの言葉が終わる前に立ち上がり、
「リーシェ、ミリュア！　わたくしと共に本宮へ来て下さいっ！　ルーシェ、アルアはここで待機し、連絡係となって下さい！」
「はいっ」
「仰せのままに」
「承りましたわ」
「それでは早速参りましょう」
「ええ。ありがとう御座いました、シリュィ。それではリーシェ、ミリュア。参りましょうっ！」
「はいっ！」
三人は、驚異的な速さで歩き去っていった。
シリュィは唖然として伯母の姿を見送っていたが、自分の役目を思い出し、慌てて部屋を出た。

次の日、由梨亜妾は暗い顔付きだった。
富実樹のことは何も分かっていないし、防犯カメラも去解鏡も、何の役にも立たなかった。
そして、峯慶は未だ意識不明である。
だが、それは分かっていたことなので、それが原因ではない別の……重要なことだった。
「ゆり……マリミアン様、御荷物は全てまとめ終わりました」
それを言ったリーシェの顔も暗いが、それよりも重大なことがある。
由梨亜妾は――もう、妾（めかけ）ではなくなった。
ただの、マリミアン・カナージェ・スウェールに戻ったのだ。

その理由は公表するわけにはいかず、表向きは、『ノワール・エリア・スウェールが体調を崩してしまい、心細くなり、無理とは承知しながらも由梨亜妾の帰還を求め、それに富瑠美が同意した』となっているが、本当は『決して大きな声では言えないような大罪をノワール・エリア・スウェールが犯してしまった。よって、戦祝大臣の地位を剥奪、長男のシャーウィン・リシェル・スウェールにその座を譲る。また花雲恭由梨亜の妾の地位剥奪と王宮からの追放、王籍からの削除、また花雲恭由梨亜の侍女侍従の王宮追放をする』という物である。

つまり、由梨亜妾が花雲恭由梨亜でなくなると同時に、上級侍女のリーシェ、ミリュア、ルーシェ、アルアだけではなく、その下の階級にある、総下の血を――つまり、王族の血を引く侍女も侍従も、王宮から出されるのだ。

「失礼致します、御母様……」

由梨亜妾――いや、マリミアンはその声に顔を上げた。

すると、目の前には富瑠美、杜歩埜、些南美、柚希夜がいた。

「貴方、達……」

「ゆ……マリミアン様、本当に、行かれてしまうのですか？」

富瑠美のその不安げな声に、マリミアンは悲しげな微笑みを浮かべて答えた。

「富瑠美、貴女にも分かっているでしょう？　それが、決定したことですわ」

「御母様っ！」

些南美は耐え切れずにマリミアンに抱き付き、涙を流した。

「本当に……本当に、御別れなのですねっ……」

「ええ。わたくしは一人で行きます。富瑠美、杜歩埜、些南美、柚希夜。貴方達は、ここで幸せになりなさい。まあ、柚希夜は成人したらここを出るでしょうけれど……」

「はい、母上……」

王族は、王やその伴侶、そして嶌大臣になる以外に、この王宮に

留まる術はない。
なので、個々の才能に応じて運動の世界に行ったり、科学研究・学者の分野に行ったり、芸能・芸術方面に行ったり、商売人や官吏になったり、宗教の世界に入ったりする。
柚希夜は教師という職に興味があったので、成人したら、柚希夜は城を出ることになるだろう。
その時だった。
ノックの音がしたかと思うと、いきなり扉が開いた。
「失礼致しますわ、マリミアン」
そう、居丈高に言い、深沙祇妃（みさぎひ）が入って来た。
だが、その姿を見て些南美と柚希夜が抑え切れずに
「うっ」
と声を漏らし、顔を歪めてしまった。
何故なら、これから王宮を出る為、質素な服装をしているマリミアンに対する当て付けのように、年齢に似合わない豪華なふわふわのドレスを身に纏い、それには様々なずっしりとした刺繍を施した挙句レースをふんだんに巻き付け、透明と黄色と青の金剛石（ダイヤモンド）を無数に縫い付け、髪は豪奢に最近の流行に則ってアイロンで細い巻きを大量に作り、それを幾つかの束に纏め、それぞれの束に金糸銀糸を大量に編み込み、珊瑚（コーラル）、翡翠（ジェイド）、瑠璃（ラピスラズリ）などの宝石を埋め込んだティアラを被り、ネックレスは、粒を丁寧に揃えた涙型の真っ白な真珠（パール）と、綺麗に澄んだ翠玉（エメラルド）をそれぞれ一連ずつ首に掛け、ブレスレットには大粒の水晶（クォーツ）と淡い色の青玉（サファイア）、指輪には大粒な紅玉（ルビー）と桃色をした金剛石（ダイヤモンド）を嵌めていたのだ。
いや、よくよく見ると、ドレスには様々な色の小粒の宝石が、もっと大量に付いているようだ。
今のこの世の中、人工でない本物の宝石など金持ちにしか手に入らないのに、全て天然物で、おまけに大粒であり、厭味な宝石の展覧会である。
これからどこのパーティーに行くのかと突っ込みたくなるような

格好でもあり、そしてそのパーティーでも浮くこと間違いなしの恰好である。

そして何よりも、既に四十代になっている『オバサン』のする格好ではない。

「御機嫌よう、マリミアン。貴女、王宮から立ち去ることになったのですってね。嫁いだ女性は、滅多に実家へ長期滞在できぬのに、御帰りになられるのですって？　それは大変御喜ばしいことに御座いますわね。戦祝大臣が御倒れになったことは残念でしたが」

深沙祇妃は真実を知っているのに、相変わらず図々しい物言いだ。

あまりなことに、富瑠美の頭のどこかがブチッという大きな音を立てて吹っ飛んだ。

「小母様、邪魔ですから何処かへ行って下さりませんこと？　わたくし達は御母様との御別れを悲しんでいるのですから。そして、姉が行方不明になったことも悲しく思っているのですから。部外者の小母様なんかに、邪魔されたくは御座いませんのよ」

そのあまりな言葉に、深沙祇妃は絶句し、次いで、見る見るうちに頭に血が上った。

「あ、貴女という娘は！　わたくしという母を持ちながら、よくもそんなことを……！」

「生憎ですが、貴女がわたくしを産んだ者でも、わたくしを育てて下さったのは由梨亜妾です。血が繋がっていない？　それが何です。由梨亜妾がわたくしを育てて下さったのは、深沙祇妃、貴女がわたくしを育てることを拒否なさったからでしょう。貴女がこのことについて文句を言う資格は御座いません。……さあ、ここから出て行きなさい」

富瑠美はそう言うと、煩そうに深沙祇妃を部屋から追い払った。

その様子を杜歩埜、些南美、柚希夜は唖然として、マリミアンは静かに見守っていた。

「富瑠美、御願いがあるのですが……」

不意に、マリミアンが言った。

「何でしょうか？」
「些南美が成人したら……その頃には、貴女と杜歩埜は結婚しているでしょう？」
「はい。それが、何か？」
富瑠美も杜歩埜も、それを全く変に思っていなかった。
それは、富瑠美がこの国の王族として産まれたことと、富実樹が還ってくるまでは、富瑠美は杜歩埜と結婚して王位に即くことが決まっていたからだ。
「それならば、些南美を総下にして欲しいのです。それが、富実樹の願いでもあります」
富瑠美は目を瞠って絶句し、杜歩埜と些南美は居心地悪そうに身動ぎした。
一般的に、『総下』とは日蔭者であり、仮にも王家の姫君がなりたいと思う物ではないと知っている富瑠美は、呆然と口を開いた。
「何故……総下、などに……」
「些南美と杜歩埜が両想いだからですわ。どうか、御願い致します」
大事な異母妹（いもうと）の一人である些南美を、そんな者にはしたくないとは思ったが、真剣なマリミアンの表情と、杜歩埜と些南美の懇願するような表情に、ゆっくりと頷いた。
「……分かりましたわ。それくらいならば、容易いことです。元々些南美には婚約者がおりませんし、官吏になる気も市井で働く意思もありません。些南美は宗教家になるという意思を示しておりましたので、何の問題も御座いませんわ」
「富瑠美御異母姉様……」
杜歩埜と些南美は椅子から立ち上がると、その場に膝を付いた。
「ありがとう御座います、富瑠美御異母姉様。この御恩は決して忘れませんわ」
「私もです。本当に、ありがとう御座います」
「いいえ。でも、貴方達がそのことを何年も秘密にしておいたことは、とても驚きましたわ」

「大したことでは御座いませんわ。ただ『賢い異母兄(あに)を慕う純粋な異母妹(いもうと)』と『異母妹の面倒見のよい優しい異母兄』を演じていただけですわ」

その場にいた皆がクスッと笑ったその瞬間、リーシェが部屋に入ってきた。

「マリミアン様、そろそろ、時間で御座います」

「まあ……もうそんな時間。それでは富瑠美、杜歩埜、些南美、柚希夜……幸せになりなさい。それが、わたくしの願いです。それと……どうか、峯慶様を――貴方達の父を、宜しく頼みます。それでは、さようなら」

「御母様……さようなら」

「私は、絶対に忘れません。御元気で、母上」

「きっと……また会って見せます。その時までは、さようならですわね」

「さようなら……御元気で」

多種多様の別れの言葉を耳にし、マリミアンは部屋を出て行った。

マリミアンが部屋を出て行くと、些南美が長椅子に座り込んだ。

「御母様……」

些南美の目から、涙が零れ落ちた。

そんな些南美の姿を、誰も慰めることができなかった。

何故なら、彼らも同じように打ちのめされていたからだ。

特に富瑠美は、視線を床に落とし、涙を必死で堪えていた。

(御異母姉様も、御父様も、マリミアン様もいなくなってしまった……御異母姉様には、何も手掛かりがない。御父様は昏睡状態。マリミアン様は、王宮追放……そして、わたくしが王位へ……。まるで、呪われているようですわ。御願いです。御願いですから、御異母姉様……戻って来て下さいっ!)

だが、そんな富瑠美の生命を賭けるかのような必死の願いは……決して、叶えられることがなかった。

# 第十章「再会」―1

「千紗(ちさ)～！　じゃあ、また明日部活でねっ！」
「うんっ！　藍南(あいな)、尚鈷(しょうこ)、素香(もとか)っ！　じゃあねっ！」
そう言い、千紗はその四人と別れた。
彼女達は千紗の部活の仲間であり、副部長が素香、金管楽器の代表的な役割を担っている金管セクションが尚鈷、木管楽器の代表的な役割を担っているコンサートミストレルが藍南で、他に副部長に睦月(むつき)、もう一人の金管セクションに涼斗(りょうと)、コンサートマスターに奏(そう)谷(や)がいる。
嶺郷(れいごう)高校吹奏楽部の幹部は、この七人で形成されていた。
その中ではこの上げた女子四人男子三人とプラス一名で仲のよいグループを作っている。
八人は、他の部員が苦笑するほど仲が良かった。
この日は、女子四人でカラオケに行って来た所だった。
（遅くなっちゃったな……うっわ、もう五時三十分になる～！　休みの日の門限六時なのにっ！）
千紗は慌てて走っていたが、声を掛けられて足を止めた。
「おい、千紗！」
「睦月っ！　どうしたの？　こんな時間に……」
「それはこっちの台詞だよ。千紗って門限厳しいだろ？　俺車あるからさ。近くまで乗っけてくよ」
「ありがとう！　睦月っ！　嗚呼、これで救われた……」
「何だよ、そこまで悲観することないだろう？」
その言葉に、千紗は気まずそうな顔をする。
「実は今日逃げて来ちゃったんだよね。それで、机の上に『門限までには帰ります』ってメモ置いて来ちゃったからさ。
『サボっただけならまだしも自ら示したことすら破るとは何事か！　お前は本条(ほんじょう)家の人間としての自覚はあるのか！』

ってお父様に怒鳴られるに決まってるもん」
千紗は肩を竦めて言うと、睦月の車に乗り、家まで帰って行った。
そして家に帰るとやはり、耀太の怒鳴り声が屋敷を揺るがした。
「お前という娘は！　今日は聡殿、護殿、早宮殿が来てくれると前々から言っておいただろうが！　彼らに無駄足を踏ませてしまった私の世間体はどうなると言うのだっ！」
その延々と続きそうな耀太の言葉を、煩そうに千紗は途中で遮った。
「んなもん知らないし。第一前々って何。言われたの昨日だよ？しかも夜。あたしはもう友達と約束してたんだから。先に約束した方が大事だって、最初に約束したことは守らなくてはならないって言ってたのはどこの誰だったっけ？　お父様じゃないの？」
「うっ……うぐっ……」
確かに、言った覚えがあるので言い返せない。
「あたしは最初の約束を守って遊びに行ったの。お父様の言うことには逆らってない。それに、お父様はあの人達に会えって言わなかったでしょ？『明日は婚約者候補達が来る』としか言ってないもん。それにあたし、メモ残したよ？　六時までに帰るって。あたしはちゃんとそれを守った。あたしはお父様に怒られるようなことは何一つやってないわ。なのに怒るの？」
正論過ぎて……反論も何もできない。
だが、立ち去ろうとする千紗に、耀太は思い切って声を掛けた。
「千紗、お前は明日の午後、何も予定はないか？」
「……ないけど」
「それでは、応接室に来い」
「……分かったわ。でも、午前は部活あるから駄目だからね」
そう言い置くと、千紗は部屋へと行った。
千紗の姿が見えなくなると、耀太は大きな溜息をついた。
「何故……小学校の頃は、もっと言うことを聞く、素直な子だったのに……」

当たり前だ。
それは、千紗ではなく由梨亜（ゆりあ）だったのだから。
だが、それを知らない耀太は、嘆いていた。
「一体、どこで育て方を間違ったというのだ……」

千紗は、ベッドの上に倒れ込むと、溜息をついた。
（何でお父様はあんなに頑固なの？　昔は優しかっ、た？　あれ？　何か違う……？）
千紗は今までに何度も感じていた違和感を覚えた。
今までは気にせずに通り過ぎていたのだが、今は無性に気になった。
『千紗、ご飯よ～。そろそろ降りてきなさ～い』
『は～い、お母さんっ！』
今まで一度もなかったことだが、記憶の底からそんな会話が飛び上がってきた。
普通は、自分が勝手に考え出したのか、話の中にでも出て来たのかと思うが、妙な胸騒ぎがした。
これは他人事ではない、自分のことだと……そう、直感的に感じた。
だからと言って、どうにかできる物でもない。
妙な胸騒ぎに鼓動が速くなるのを感じ、千紗は起き上がり呼吸を整えようとした。
その時、いきなり自分の部屋の一つから、オルゴールの音が聞こえてきたのだ。
隣の部屋と言っても、今ここの近くには千紗以外人がいない。
だから、聞こえたのだった。
（一体、何だろう……まさか、あたしの部屋に勝手に人が入ってくるわけないしね）

と思いながら千紗はその部屋に行った。
すると、部屋の隅に置いてある本棚の上のオルゴールが勝手に開いていた。
それは六年生の時の誕生日プレゼントとして、手作りの特注品として頼んだ物だった。
それは千紗のイメージとは全く違う、繊細で可憐な、基調が青の可愛らしい物だった。
その中には、赤系の色のビーズで作られたブレスレットとネックレスが入っていた。
何故、そんな物を持っているのか分からない。
だが、とても大切な物だということは分かっていた。
ふと、そのアクセサリーを手に取った千紗の脳裏に、声と顔が浮かび上がってきた。
『うわあ。千紗、ありがとう！　丁度着るドレスが青いんだよね』
そう言って微笑んだ、明るく澄んだ声の持ち主……柔らかく波打った茶色い髪に、緑がかった黒の瞳の美少女――そう、本条由梨亜の顔が浮かび上がってきた。
（これ……由梨亜っ！　あたしの……親友っ！）
そして、それに答えるかのように、自分の、今とは少し違う、幼い声が聞こえた。
『何言ってんの！　お礼を言うのはあたしの方だよ！　赤はあたしの色って言われるし……本当にありがとう！』
（あたし達は、彩音千紗と、本条由梨亜……そして、今は本条千紗と、花雲恭富実樹！）
千紗の脳裏に、偽りの記憶ではなく、本当の記憶が雪崩れ込んで来た。
（……あたしは、由梨亜のことを忘れてた……だけど、今思い出せた……由梨亜！）
千紗の胸に喜びが湧き出て、気付けば、頬を涙が伝っていた。
千紗は微笑むと涙を拭い、そのオルゴールを閉めると、部屋を出

て行った。
（今大事なのは婚約者候補をどうにかすること。あの賢い由梨亜でさえもてこずった問題だし、すぐに上手くいくとは思わないけど、あたしはあいつらとは結婚しない。絶対に）
千紗の決意は固く、どんなに重い物でも動かせる梃子でも、絶対に動かない物だった。

「ここって……」
由梨亜は、途惑ったかのように小さく呟いた。
シャンクランと日本州では時差があり、日本州が午後七時の時、シャンクランでは午前三時である。
つまり、日本州の方が十六時間進んでいるのである。
由梨亜は寝ていないが、それでもまだ日が昇る前と日が沈んだばかりでは違う。
おまけにシャンクランの五月は日本州の三月の気候と同じであり、日本州の五月の気候はシャンクランの六月の気候と同じである。
さすがに、そのせいで一瞬くらっと来たが、何とか立て直して自分の服装を見直した。
由梨亜は、ついさっきまでカサミアン宮の中級侍女の女官服を着ていたはずだが、今は七分丈の白いパンツに淡い水色のティーシャツと上着を着て、そして千紗に貰ったアクセサリーを付けている。
（何だか、便利だか便利じゃないのかよく分からないわねぇ……この魔力って）
と首を傾げて、辺りを見渡した。
そこは、由梨亜の通っていた中学校の校門の前だった。
由梨亜はそっと溜息をつくと、ふと自分が荷物の入った鞄を……それも大きい鞄と小さい鞄を持っているのに気付き、近くの公園まで行って中身を開けてみた。

大きい方には着替えや洗面用具など、しばらく暮らしていく分に必要そうな道具類が入っており、小さい方には財布や身分証明書など、盗まれたら大変な重要な物が入っていた。

（これがあれば、当分は困らないで暮らせるわ。けど、ずっとは無理……じゃあ、ある程度情報を仕入れてから家に帰ろう。……それまでは、千紗には秘密にしてよう。もうそろそろ千紗の記憶も戻ってるだろうし、いきなり行って驚かせた方が面白いもの）

由梨亜はそう覚悟を決めると、お腹が空いてくるのが分かった。

（……そう言えば、あの祝賀会では大して食べれなかったんだった。あともうしばらくすればこっちでは夕ご飯の時間になるから、コンビニでちょっと買ってこっと）

由梨亜はそう決めると、近くにあるコンビニに向かって行った。

（うわ～。しばらく来てないと、こんなに商品って変わるもんなんだ～。あ、私のお気に入りのパンなくなってる！　あっでもこのパン美味しそうっ！　どれにしよう。迷っちゃう。そういえば、千紗と一緒に初めてコンビニに行った時もはしゃいで、千紗に呆れられたっけ）

そんなことを思いながら由梨亜が品物を選んでいると、

「いらっしゃいませー」

という声がして、由梨亜が振り返ると二人の少女が入って来た所だった。

すると、二人の少女が笑い喋りながらこちらに向かってきた。

（うわ～。大荷物抱えてここに居たら、邪魔かも……？）

と由梨亜が思った瞬間、案の定二人が由梨亜をまじまじと見詰めてきた。

「あの……邪魔、でしたか……？」

と由梨亜が恐る恐る訊ねると、二人は首を横に振ったが、穴が開

くほど見詰めてくる。
「あの、間違ってたらごめんなさい。貴女ってもしかして……千紗の親戚か何か？」
と、一人の少女が言い、由梨亜は思考停止した。
（そんなに私と千紗って……似てるかしら……？）
由梨亜の沈黙を別の意味に取ったのか、その少女が謝ってきた。
「やっぱり、人違いだったのね。ごめんなさい」
由梨亜の頭は、そこでようやく通常活動を始めた。
「あ、あの……千紗って、本条千紗のことですか……？」
「うん。そうだけど？」
「それなら、私と千紗は血が繋がっています。でも……そんなに似てますか……？」
「そっくりだよ。千紗がもっと大人びて、髪形と髪の色を変えて目の色も違ってたら、実の姉妹って言われても納得するぐらい似てるよ。つまりは、顔立ちが似てるってこと、かな？　あと、どっか雰囲気も似てるよね」
「……あの、っていうことは、千紗のことをよく知ってるんですよね？」
「そりゃあそうよ。だって同じ高校の同じ部活、同じ幹部の、周りが苦笑いするぐらいとっても仲良しの四人組だもん」
……自分で分かっていれば、世話はない。
だが、その得意げな口調を無視して、由梨亜は急いた口調で言った。
「じゃあ、買い物を済ませたら、千紗の話を訊かせて貰えませんか？　私、ついさっき戻って来たばっかりで、三年間と半年ぐらい千紗に会ってないんです。だから、貴女達の知っている千紗の話を訊かせて貰えればと……」
「うん、いいよ。貴女と千紗の関係を教えてくれればだけど」
「ええ。それぐらいのことなら」
「じゃあ、決定ね。それじゃあ、ちょっと待っててね。買い物済ま

せるから」
「ええ」
由梨亜はにっこりと笑った。
（うまくいけば、明日にも千紗に会えるかも知れない……）
そう思えば、楽しくなった。

「へ～。そうだったんだあ。でも、千紗があんなに頭のいい高校に入るだなんて思ってもみなかったな。やっぱり千紗、頭いいんだよ」
「何言ってんの？　千紗、日本州の中でも常に上位百位の中に入ってるのよ。部活もやっていつ勉強してんだか。本人に訊くと『効率良くやれば誰でも簡単にできるよ』って言うし。ほんと、凄いんだからっ！」
「へ～。ありがと。こんなに詳しく教えてもらって……」
「いいって。あたし達にとってもいい暇つぶしだったし。だって千紗の家、すっごい門限厳しいんだよ。あたし達は、まだ遊び足りないのに……」
「ね、由梨亜。貴女は、千紗からみたら何なの？　血が繋がってるって言ってたよね？」
と、素香が言った。
「私？　私は、千紗の双子よ」
二人が絶句するのを面白く見ながら、由梨亜は嘘とも真実とも言えることを口にした。
「やっぱりびっくりされちゃった。私達って二卵性の双子だから、普通の姉妹並みにしか似てないのよね。だから、誰に話しても驚かれちゃうの」
「い、いや……それ、論点が違う……」
何とか藍南が喉を振り絞っていったが、由梨亜には全く意味が通じなかった。

「えっ？　どこが違うの？」
（こりゃ、言っても無駄だ……）
（さすが千紗の姉妹。呆け方が似てるっていうか、天然だっていうか……あたし達が驚くのは、こ～んな楚々としたお嬢様風……っていうか、ほんとのお嬢様なんだけど……とにかくこんな人と元気と無茶無鉄砲の代名詞みたいなお嬢様とは到底思えない千紗が同じ環境で育っただなんて信じらんないっていうことで……双子の中では二卵性よりは一卵性の方が多いから珍しいかも知れないけど、あり得ない訳ではなくて……って何考えてんだ、あたし。っていうかっ！　どうしたら同じ環境でこんな違いが出る訳っ？！）
と、二人が思っていると、由梨亜がすまなそうに言った。
「あの、ごめんなさい。私、ちょっと用事があるから……別れてもいい？」
「あっ、ううん。あたし達ももう戻らないときついから。それじゃ、じゃあね、由梨亜」
「じゃあねっ！」
「ええ。また会えるといいわね」
そう言うと、三人は別れた。
そして、由梨亜は小さなホテルのような所に行った。
そこは、よく家に居辛くて出てきた中高生達や、お金のない大学生が泊まっていて、公認の家出場所にもなっている。
つまり、自分の娘や息子が家出をして戻って来なかったら、そこに行けば九十パーセントに近い確率でいるという訳だ。
まあ、その家出と言うのも、むしゃくしゃして家を出て来たものの、他に行く所がないといって泊まるということの方が多いが。
由梨亜はそこで軽い食事を摂り、眠りについた。
辺りは、静けさと闇だけが蔽っていた。

千紗は、寝返りを打つと、溜息をついた。
由梨亜のことを思い出してから胸騒ぎがする。
そして、千紗は起き上がると呟いた。
「やだ、どうして眠れないんだろ……明日、行かなきゃならないのに……」
そして起き上がると、千紗は勉強部屋へ行った。
「どうせ寝られないんなら、勉強したほうがいいよね。それに、明日は午前中から部活だし」
千紗は勉強を始めたが、それもあまり手に付かなかった。
「あ～あ。もうやだ……」
しかし、いくら胸騒ぎがしても、人の身体は眠らないといけないようになっている。
それが、特にしぶとい千紗ならば尚更だ。
翌日の朝、千紗は気が付いたら机の上にもたれて眠っていた。
「千紗様……千紗様、起きて下さい」
「あ……おはよう、鈴南（すずな）」
「おはようございます、お嬢様。旦那様からですが、二時までに応接室に来いとのことです」
「ありがと」
そう言うと、千紗はダイニングに向かった。
耀太がそう言うのなら、朝は恐らく一人だろう。

# 第十章「再会」―2

「お父様？　来たけど」
千紗（ちさ）がそう言って中に入ると、そこには既に耀太（ようた）と聡（さとる）、護（まもる）、早宮（さみや）が来ていた。
千紗は、内心ゲッと思うのを抑えられなかった。
（何でこの三人がここにいる訳?!　確か週に一度だよね？　昨日来たばっかじゃ！）
「千紗、お前が何と言おうと、この三人がお前の婚約者候補だ。期限もあと一年半。今のうちに決めておいたほうが楽だぞ」
耀太のその勝手な言い分に、千紗は頭に来たが黙っていた。
すると、益々図に乗ってまくし立てた。
「お前は何かと言うと逃げようとするからな。時間がある内に捕まえておかねばならん」
千紗は小さく溜息をつくと、耀太を真正面から見据えて言った。
「お父様。あたしはこの人達とは婚約者にならない。第一、人には結婚する人を選ぶ自由があるのよ。この三人の中から選べなんて、地球連邦の憲法に違反することになる」
「それは大丈夫だ。候補が一人だけなら問題だが、三人いるからな。違憲ではない」
いわゆるグレーゾーンの理論を胸を張って言う耀太に、千紗は怒りを堪えて、努めて冷静な口調で言った。
「だけど、あたしに他に好きな人がいるとしたら？」
「はっ？」
「千紗さん、今、何と言ったのです」
「そ……そんな暴言、見逃せませんよ？」
「虚偽偽りを言うのにも、ほどがあるという物です」
「嘘じゃないけど。あたしにはちゃ～んと好きで、付き合ってる人がいるんだから」

「ち……千紗っ！　お、お前という娘は……まだ選ばないのは許す。だが、この三人以外と付き合うのは断じて許さんっ！　即刻別れろっ！　さもないと、その彼に不利なことが起こるぞ！」
「不利なことって？」
「うう、つまりその……例えば、彼の親が勤めている会社を経営難にするとかだなっ」
「公務員だったら？　強大な力を持つ敵対会社だったら？　何も考えてないね。このままじゃ埒が明かないから彼呼んで来るわ。ちょっと待ってて」
と千紗は言うと、耀太にねだっても「絶対買わんっ！」と言われたので部活と両立という涙ぐましい努力の元、バイトをして溜めたお金で買った携帯端末で、ある一人の人物を呼び出した。
するとその十分後、その彼がやってきた。
「いらっしゃい。ごめんね、こんなことに巻き込んじゃって……」
「いいって。俺は千紗のことが好きだし、千紗の気の強さのことも分かってるしな」
「やっぱあんたの方が、お父様よりあたしのことをよく分かってる気がする」
と千紗は言うと、応接室に彼を連れて行った。

「お父様、聡さん、護さん、早宮さん。戻ったよ」
千紗はそう言うと、彼を中に入れた。
「じゃあ、中に入って」
「失礼します」
そして、二人が椅子に落ち着くと、耀太はこちらを睨むようにして言った。
「お前は……誰だ」
「俺は睦月（むつき）と言います。荘傲睦月（そうごう）です」

「それで？　お前は千紗と付き合っているのか」
「当たり前でしょう？　でなかったら、一体何の為にここまで来たって言うんですか」
睦月と耀太の間で、密かに火花が散った。
「ああっ。ちょっと二人とも落ち着いて……ってかそこっ！　お父様に味方しようとしてんだか混ざりたいんだか分かんないけどとにかく混ざんないっ！　そこ、こっそり逃げないっ！　そっちはサッサと退くっ！　邪魔っ！！」
と千紗に怒鳴られた、味方しようとした護と逃げ出そうとした早宮と固まって動かなかった聡は、並んで壁際に立たされた。
まるで悪戯を見つかり、罰として廊下に立たされている小学生のようだった。
そんなてんてこ舞いの中でも、睦月と耀太の舌戦は繰り広げられている。
千紗は軽く呻いて額を押さえると、部屋を出て行った。
そして玄関ホールに辿り着くと、大きな大きな溜息をついた。
「は～あ、何か疲れた……」
そして玄関を出て庭に行き、深呼吸を繰り返した。
「ほんっと、生き返る……しばらくここにいていいよね……」
「全く千紗ったら、何でそんな死んでるの？　千紗でもそんな顔するんだぁ」
「……えっ？」
「千紗ったら、もう私のことを忘れたの？　たったの四年足らずで？」
「……まさかね。空耳だよ、空耳。昨日由梨亜（ゆりあ）のことを思い出したからそれで由梨亜の声が聴こえるんだよね。きっとそれだよ。あたしちょっと疲れてるし」
「空耳だと思うんなら、後ろ見てみたら？　千紗」
確かに人の気配を感じ、千紗は意を決して後ろを振り返った。
すると、由梨亜の姿が見えた。

「夢、じゃ……ないの？」
「勿論よ。私は還って来たの。私は花鴬国には不要な人間だってこと分かったし、千紗に逢いたかったし。だから……ね」
「で、でも……由梨亜、髪の毛が……」
「ええ、そうよ。私、髪が長かったじゃない？　それで、富実樹の時もずっと髪が長かったの。だからね、ちょっと短くしてみたかったんだ」
「ちょっと短くって……短くし過ぎ……由梨亜」
千紗のその呟きに構わず、由梨亜は千紗に宣言した。
「さっ。じゃあ乗り込むわよ。千紗」
「の……乗り込むって、どこに？」
「鈍いわねえ、千紗。今この状況で言ったら、お父様の所しかないじゃないの」
由梨亜は悪戯を思いついた子供のようにニンマリと笑った。

「だから、私が言っているのはそのようなことではない！」
「ではどんなことだと？　第一本人の気持ちを無視するこのやり方、大昔ならともかく今のこの世の中でやったら時代錯誤としか言いようがないですよ。それに、恥ずかしくないんですか？」
「……何だと」
「可哀想ですねぇ、千紗みたいな気の強い娘を持って。娘の言いなりになる父親だなんて、恥ずかしくて外に出られませんねえ」
「き、貴様！　言いたいことを言わせておけば！」
「これはどうも。貴様と呼ぶということは、俺を親しい間柄の対等な者、もしくは少し目下の者、それか目上の相手として認めているということでしょう？　本来『貴様』とはそういう意味です。極端に相手を貶める意味合いは、本来含んでおりませんが？」
……さすがは、進学校に通っていることはある――のか？

睦月は頭脳をフル回転し、素晴らしい舌戦を繰り広げていた。
「〜〜っの、こう言えばああ言う揚げ足取りめっ！」
「何だって？　俺は単なる事実を述べただけに過ぎませんが。反論できないのはそちらの責任でしょう？」
またもや壮絶な火花が散る。
この繰り返しが、既に十分以上続いていた。
まあ、やっている本人達は時間を気にしていないからいい。
可哀想なのはこの婚約者候補達三人で……永遠とも思えるような時間を感じていた。
（も、もう……お願いですから、誰か止めて下さい……）
というのが、三人の共通した思いだった。
「だ……旦那様っ！　大変ですっ！」
その時、召し使い達が駆け込んで来た。
「何だ？　何事だ」
と腰を浮かせた耀太に、混乱した召し使い達は必死の説明を試みるが、パニックに陥っている為、何を言っているのか分からない。
「みんな邪魔！　あっち行ってて！　あっ、でも鈴南、苓華、陵多、章平は残ってっ！」
と千紗が大声で指示を出すと、ようやく辺りは静まってきた。
だがそのお蔭で、皆ここにいるはずのない姿を目にすることになった。
（ま、まさか……）
（嘘……あり得ないだろ、これっ！）
（ど……どうして、どうしてあの人がここにっ？！）
その中で平然としているのは、千紗と由梨亜だけだった。
「お父様。お久しぶりです」
由梨亜のその声に、耀太は目を丸くして答えた。
「ゆ……由梨亜、か？」
「ええ。そうよ？」
「本当に……由梨亜なのか」

「見れば分かるでしょう？　まさか、四年も経ってないのに忘れたんじゃないでしょうね？」
「で、でも……由梨亜の髪は、そんな短くは……」
そう、耀太が絶句したのには、由梨亜が現れたのと他に、もう一つ理由があった。
それは由梨亜の髪が、肩に付くか付かないかまでバッサリと切られてしまっていたからだ。
いわゆる、ショートカットである。
「ええ。家出した時はそうだったわ。だけど、邪魔だったから切ったのよ」
（家、出……？　由梨亜が富実樹になったのを、家出……）
記憶を探ってみると、確かにその記憶はある。
それに、自分は家出に協力していたようだ。
微妙な寒気が背筋を這ったが、不気味な感じよりも呆れや脱力感の方が勝った。
千紗は変な所で考え込んでしまったが、由梨亜と耀太の言い争い（？）は続いている。
「邪魔とは……邪魔って……何故、邪魔に……邪魔……私は……」
既に耀太の言動は支離滅裂だった。
「あら、だって長いと働きにくいでしょう？」
「は……働、く？」
「ええ。生きていく為にはお金が必要不可欠だもの。幸い、地球連邦に近いレイリア国の義務教育は四歳から十二歳だからね。全体の十分の一の人がその初等教育だけで働くから、そこに行けば働けたわよ。勿論偽名を使って、だけどね。ああ、だけどその後の中等教育から通信制とか定時制の学校があるから、勉強は続けてたわよ」
耀太は、由梨亜の言葉の後半を聞き取れなかったらしい。
前半の言葉を繰り返し呟いていた。
「……そんな……本条（ほんじょう）家の娘が……貴族の娘が……家出をしただけならともかく、生計を立てる為に働く……？　それも、他星に行っ

て……偽名まで使って……？」
「だって、偽名を使わなくちゃ、お父様達に見つかっちゃうかも知れないじゃない」
「そ、それも、そうか……って、違う！　私はそんな話をしたいんじゃないっ！　ええい、忌々しいっ！」
「ところで、言いたいことがあるんだけど。いい？」
「ああ、言ってみろ」
「私は地球連邦には戻ってきたけど、ただじゃあ家には戻らないわよ」
「どういうこと？　由梨亜。今家にいるじゃん」
「いや、あの……千紗、そういう意味じゃなくて、ここでは暮らさないわよってことよ」
「ああ、なるほど。そういうことか」
千紗はすんなりと納得したが、耀太はそうはいかない。
警戒しながら言った。
「では、その条件とは何だ。言ってみろ」
「それでは遠慮なく」
と由梨亜は楽しげに言うと、悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。
「千紗とこの荘傲睦月君が付き合うのを、認めること」
「そ、それならば、お前は家に戻るんだな？」
「ええ。勿論」
「それでは、千紗と睦月とやらが付き合うのを認める」
「ええっ！　そんなあ」
とは、皆から忘れ去られていた婚約者候補達三人の中の一人、聡である。
「何か、文句でもあるのか？　私の決めたことに」
と、凄味を持たせて耀太は言った。
「い、いえ……何も」
「そうか」
さすがに、まだ年若く未熟な聡は、耀太に逆らえなかった。

「それじゃあ、絶対に認めてくれるのね？　お父様」
「ああ。それに今まではお前だけが私の子供だったが、次女の由梨亜が戻って来た。由梨亜、お前はこの中の誰かを今すぐ婚約者と決めろ。お前に拒否権はない。そうだろう？」
（次女……ってことは、あたし長女なの？　つまり、あたしが家を継ぐっ？！）
唖然とする千紗を尻目に、話はどんどん進んで行く。
「いいえ。そんな、とんでもない。私、家出する時に置き手紙にこう書いたわよ？　『藤咲香麻と付き合うのを認めてくれなければ、この家には二度と戻ってきません』って。だから、私が付き合うのを認めてくれなければ、もう一度家出するわ」
「なっ……！　そんなこと、聞いてないぞ……！」
「でも、確かに書いたわよ。多分、まだそれ取ってあるでしょう？　出してみれば分かることだわ。それに、もしそれを認めてもらえなかったら、最初の約束を破ったということで二番目の約束は無効となり、私は千紗と睦月君を連れて家出するわ。お父様、貴方が選べる道は二つよ。私が香麻と付き合うのと千紗が睦月君と付き合うのを認めるか、それを認めず私達を家出させるのか。あっ、そうそう、次の家出場所は花鴛国にしようかしら。遠いとこだけど、確かあそこはそういう人権に対しては、すっごい厳しい国だったわよねえ？」
「うっ……うぐ……」
耀太は何も言い返せなかった。
もしこの三人を抑えようとすれば必ずコテンパンにやられてしまうだろうし、由梨亜がここまで自信たっぷりに言うからには、既に花鴛国に飛ぶ準備はできているはずだ。
「世間体を気にしてこの三人と結婚させようとしても、逆に私達がいなくなったら、もっと世間体は悪くなるわよ？　目先のことだけ考えてやるのか、後々のことまで考えてやるのか……」
由梨亜の問い掛けに、耀太は深い溜息をついた。

そんなほとんど選択権のない二者択一など、答えは決まっている。
耀太は聡、護、早宮の方を向くと、
「すまないっ！」
と大声で言い、頭を下げた。
「そ、そんな……では、我らは一体何の為に、今までここに来ていたというのですかっ？　この中の誰か一人が選ばれるのはまだいい。それは三分の一の確率ですからね、諦めるとしましょう。ですが、こんな粗野な庶民と付きあわせるだなんてっ！　娘は親の言うことを聞かなければならないのですから、命令すれば済むことでしょうっ！　何故、命令しないのです？」
護が激昂して言うと、
「そ……そうですよ。我々は……父に、本条家とのよいパイプ役になるよう、命じられて、来ているんですよ？　なのに、そんなことを言われても……困ります。迷惑、ですよ」
震える声で、早宮までもが抗議した。
そして、とうとう聡が地雷を踏んだ。
「ええ。それに、そんな野蛮人のどこがいいのです？　そんなのより、僕の方が相応しい。貴女は野蛮人ではないのだから。半人でも獣でもない、純潔で純血のお嬢様なのですから。そんな人ではない『物』の血が貴族の家系に――それも大貴族の、百何十代と続く本条家の中に入るなど、同じ貴族として到底許せることではありませんよ、千紗さん、それに由梨亜さん」
プツッという音と共に、千紗の頭の血管が切れた。
「上っ等じゃないの眞湖聡（まうみ）。よくもここまであたしを切れさせてくれたわね。野蛮人？　純潔で純血？　あたしが貴族なのは否定しないけど、あたしを流れている血の中にあんたの言う野蛮人の血が入っていることも否定しないわ。それにあたしは小学校の途中から高校までその野蛮人が沢山通ってる公立学校に通ってる。そのあたしが純潔？　穢れてないって？　だったらそこに通ってる人や教えてる人は野蛮人でも半人でも獣でもないってことになるでしょ？　だ

からあたしは、貴族の身分を鼻に掛けた貴族の連中が嫌いなのよ。あたしが好きになるとしたらそういうことを鼻に掛けない貴族か、貴族じゃない人達。そして、あたしは睦月が好きになった。何か文句でも？」

誰も、何も言い返せなかった。

もしも『全宇宙図太さ大会』という物があったとして、そこで一位を取るような人でないと言い返せない気迫が、その言葉には満ちていた。

そして、更にそこに追い討ちを掛けるように由梨亜がのんびりと言った。

「逆らわない方がいいわよ。そんなことしたら、千紗本気で切れちゃうから」

（今ので本気じゃなかったのか？！）

と、婚約者候補達三人は胸中で呟き――いや、喚き散らした。

それでも何も喋らない三人に対し、千紗は冷酷に言い放った。

「分かったんなら、帰って。そして、二度とここに来ないで」

その言葉に逆らえる人が、この宇宙にいるのかどうか。

三人は、すごすごと引き返す他がなかった。

そしてその三人がいなくなると、千紗は満面の笑みで由梨亜を振り返り、言った。

「お帰り……お帰りなさいっ、由梨亜っ！」

「ええ……ただいま、千紗！」

# 終章「そして、二人は……」

「由梨亜、そういえばさ、どうしてこっちに還ってきたのか、詳しい理由訊いてなかったよね？　何で？」

由梨亜が戻ってきた次の日、千紗は庭で訊いた。

「ええ。あのね、私は今、こうして千紗と普通に喋ってるでしょ？」

「うん。それが？」

「そのこと自体が、花鴬国じゃ……その中でも、王族、貴族とかでは信じられないことなの」

「はあっ？」

千紗が目を瞠って裏返った声を上げると、由梨亜はくすくすと笑い、冗談めかして言った。

「びっくりでしょ。私はカサミアン宮で、王族としての言葉遣いやら儀礼作法やらを色々叩き込まれたわ。異母妹の富瑠美や私の婚約者で異母弟の杜歩埜、あと妹の些南美とか、弟の柚希夜とか、とっても私に親切な弟妹達から教えて貰ったんだけど、その中でもこういう風には喋らなかったわ。どんなに仲のいい兄弟でも、『～で御座いますわ』とか『～ではないでしょうか』とか『～ですわ』とか、女性だったら『わたくしが～』とか、男性だったら『私が～』とか、ほんっとうに舌噛みそうになる言葉遣いなの。それが窮屈だったのが理由の一つ。あと、私達地球連邦の考え方と、花鴬国の考え方がすっごい違ってたのも。私達が普通って思う考え方は、花鴬国じゃ平和的な考え方、消極的な考え方なの。私が花鴬国に来てからそういうことは感じ取ってたけど……あのね、花鴬国にはどうしても意見が纏まらなくって二つに割れちゃった場合、総票会っていうのが行われるの」

「総票会？　何？　それ」

千紗は、眉を寄せて首を傾げる。

由梨亜は少し眉根を寄せてから、千紗の為に、わざわざ噛み砕い

た説明をした。
「総票会っていうのは、最終的にどっちの意見を支持するかっていうのを決める場で……まあ、普通の選挙を小規模にしたような感じね。けど、それに投票できるのは十五歳以上の王族、宗教家、貴族、官吏、学者だけ。その前には色々意見交換とかあるんだけど、その大人数が全部揃うのは総票会が最初で最後。そこで最終論説を行って、最終的にどちらかに投票するの。そして……三日前ね、『地球連邦を宇宙連盟に加盟させる為、武力か話し合いか』というテーマの総票会があったわ。だけど、そこで私が示した考えは、他の誰も考え付かなかった考えだったの」
「どういうことを言ったの？　由梨亜は」
「『もし戦争が起こったとしたら、必ず戦死者が出る。そしてその身内は嘆き悲しむことになる。まだ戦勝国は勝ったという事実に慰められるが、戦敗国は違う。必ず憎しみが襲い掛かってくる。だからそういったことの前に、できれば話し合いで解決すべきだ』って」
由梨亜はそれを言ってから、少し顔を顰める。
その時のことを、そしてその意見を言った時の周囲の反応を、思い出したのかも知れない。
けれど、千紗はそれが分からなかったのか、怪訝そうに首を傾げ、唇を尖らせた。
「まあ、それは……普通じゃん。頭がいい人なら、想像力が豊かな人なら、誰でも考え付くでしょ？」
千紗の疑問に、由梨亜は静かに首を振り、しんみりと告げた。
「だけど、花鴛国では違うのよ。花鴛国の辿って来た歴史上には、戦争に負けるという史実がほとんどないから。だから、花鴛国で必要とされるのは、富瑠美みたいな考え方を持った王なのよ。私はあの総票会では勝ったけど、それはきっと、みんなが目新しい考え方に惹かれただけのことだわ。私は、あの国には必要ない。それに千紗に逢いたかったし、香麻（こうま）にも逢いたかったし、何より戻る方法が見付かったんだもの。戻らない人がいたら、そっちの方が可笑しい

わよ。千紗もそう思うでしょ？」
　由梨亜が肩を竦めて訊ねると、千紗は笑い、由梨亜と同じように肩を竦めてみせた。
「だね。でも、由梨亜のお陰であたしは、元の記憶を取り戻せて良かったよ。そういえばさ、由梨亜。一体いつの間に、香麻と付き合うだの何だのっていう話になったの？　あたし何にも聞いてなかったから、すっごくびっくりしたよ」
「ああ、そう言えば、すっかり忘れちゃってたわね」
　千紗は、思いっきりずっこけた。
　その突然の動作に、由梨亜は思わず目を瞠る。
「だ、大丈夫？　千紗」
　千紗はしばらく呻いていたが、キッと由梨亜を睨み付けるように見上げ、うっすらと目に涙を滲ませながら叫んだ。
「由梨亜！　忘れちゃってたはいくら何でもないでしょっ！」
　千紗に怒鳴り付けられた由梨亜は、首を竦めた。
「ご、ごめん……でもね、私が香麻に告白したの、過去に行った、丁度あの日なの。お父様に婚約者候補達のことを聞かされて、あの時、ちょっと自棄になっちゃってね。それで朝、もう振られてもいいって思って、決死の覚悟で香麻を呼び出して告白したら、受けてもらえたのよ。とっても……とっても、嬉しかったわ」
「へ～え。そうだったんだあ。良かったね、由梨亜」
「ええ。だから、本当はあの時、屋上で言うつもりだったの。だけど、言う前に過去に飛ばされるし、そこで本当の出生を知って、もう地球連邦に戻れないって……香麻にも、もう二度と逢えないって知るし――。……本当は、もう諦めてたの。でも、こうして戻って来ることができたし……正直言って、嬉しいわ。花鴛国の家族を、見捨てた、ってことには、なるんだけど……でも、それでも、戻って来て、良かったって……そう思う」
　しんみりと言った由梨亜に、千紗は少し気まずげな表情をした後で、わざと笑い飛ばすように、由梨亜の背中を一回はたいた。

「まあ、『終わり良ければ全てよし』って言うし、今がいいんだからいいんだよ、きっと！　花鴛国の人達には気の毒だけど、由梨亜は、こっちの方がいいんでしょ？　だったら、それで間違いはないよ。由梨亜が家族でも、全部を義理立てする必要なんかないもん」

千紗はそう言うと、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「……それにしても、由梨亜、あんな状況でよく香麻に告白したよね。信っじられない。あの、清楚で優雅なお嬢様が、さ」

その言葉に、由梨亜が頬を膨らませた。

「べ、別に、いいじゃないの。告白くらい。個人の勝手でしょ？　それとも何？　私が香麻に告白して付き合うことになったこと、一度も千紗に言ってなかったからって僻んでるの？」

由梨亜がふざけて喧嘩腰で言うと、千紗は苦笑して両手を上げた。

「僻んでなんかないよ、由梨亜。だけど、ちょっとは拗ねたくなったけど。でもまあ、しょうがないっては分かってるよ？　確かにあの状況じゃあ、そんなことは言えないしさ。あたし、あの時はもう、何が何だか分からなかったもん」

千紗はそう言うと、芝生の上に寝っ転がった。

「う〜ん。気持ち〜い！」

「そう言えば千紗」

「何？　由梨亜」

「私、嶺郷（れいごう）高校に途中入学しようと思うんだぁ」

「へ〜。嶺郷高校って……へっ？　嶺郷高校？　あたしの通ってる、あの嶺郷高校？」

「そうよ。他にあるっていうの？」

「な……何でっ？」

千紗が思わず大声を出すと、由梨亜にケロリと言い返されてしまった。

「だって千紗も香麻もいるし、吹奏楽強いし、何てったってその吹奏楽に香麻がいるんだもの！　それに千紗、私がいなくなってから、結構テストとかの順位上がったでしょ？」

「うん……まあ」
千紗は『彩音千紗』から『本条千紗』に戻った時に受けた、耀太と家庭教師の容赦ない猛攻を思い出し、思わず言葉を濁らせてしまった。
「だからね、千紗と競ってみたいの」
「……ってか由梨亜、その口調だともしかして……」
「もしかしなくても吹奏楽に入るわよ」
「な……何でっ！　ってか、由梨亜楽器吹けんの？」
千紗は、思わず盛大に顔を引き攣らせた。
「勿論。私、本当は吹奏楽部に入りたかったの知ってるわよね？」
「うん」
「それで、私が花鳶国の御父様に訊いてみたら、別に楽器吹いてもいいって言われたから、今までトランペット吹いてたの。勿論ちゃんと先生付けて貰ってね。だから、それなりの実力はあるはずよ」
「そっか。何か、王女様らしくないなぁ。王女様って言うと、ピアノとかフルートとか……でもさ、由梨亜。途中入学の試験は七月だよ？　夏休み中。あと二ヶ月もないんだから、勉強頑張んないとっ！　言っとくけど、うちの学校、結構難しいからね」
「分かってるわよ。私は、ここにずっといるつもりだもん。受かるように頑張るわよ」
由梨亜が肩を竦めると、千紗はふと思い付いたように由梨亜に詰め寄った。
「でもさ、よくやってくれたよね、由梨亜。あたしが長女って。責任押し付けないでよ」
千紗は凄味を効かせて言ったが、由梨亜はあっさりと答えてしまった。
「あら、でも産まれた早さは、千紗の方が先よ。私は千紗よりも後に産まれたもの」
そう言うと、由梨亜は強制的に会話を終わらせ、そっと目を閉じた。

地球連邦は宇宙連盟に加盟していない為、あまり他国の情報が流れてこない。
だが、しばらくすれば、必ず富瑠美の即位という情報が流れてくるだろう。
由梨亜は、空を見上げた。
青く、澄み切った空。
それは、花鴬国と同じ色でありながら、違う空。
由梨亜も芝生に寝っ転がると、高い高い空を見詰めた。
ここでは今、途中入学テスト以外に気掛かりなことは何もない。
『富実樹（ふみき）』とは、大違いだ。
平和な、平和な国――それが、今の地球連邦。
花鴬国が連盟に加盟するよう働き掛けてくるのも、まだ先のことだろう。
由梨亜は、横の千紗を見た。
すると、穏やかな寝顔を浮かべて眠っていた。
由梨亜は小さく笑うと、自分もそっと目を閉じた。
まだ、この国は平和でいられるだろう。
そして……自分も。

（続）

## 終章「そして、二人は……」（後書き）

ここまで読んで頂き、本当にありがとうございました！　『時と宇宙を越えて』の第?部は、ここで完結となります。この後、しばらく時間が飛んで第?部が始まる予定ですので、どうぞそちらの方も宜しくお願いします！

# 序章「密談」

そこには、十名ほどの人がいた。

「御決断下さいませ、陛下」

「ですが……もう少し御願い致します。そうすれば、変わるかも知れません」

「そう仰って、既に一年が経とうとしておりますぞ、陛下。どうか、御決断を。第一、陛下は鴬大臣であらせられた時、こちらの意見を提示した張本人では御座いませぬか」

「ですが……」

富瑠美の、躊躇うような、迷うような声音に、自信たっぷりの声が答えた。

「我らがかの国へと通達してから、既に一年が経ちます。しかし、彼らは未だに返事を致しておりません。新戦祝大臣と成られたシャーウィン・リシェル・スウェールも準備を進めており、新兵器も開発を重ね、充分に力を発揮できます。ですから陛下、御許可を。御許可を頂けるのでしたら、私は、貴女の願いを一つだけ叶えて差し上げましょう。――陛下、これは取り引きに御座います」

宗賽大臣、シュールの言葉に、富瑠美はガタッと立ち上がった。

新兵器の開発は、寝耳に水の話らしい。

「それが……それが御前の思惑なのですか！　宗賽大臣っ！」

眦をきつくする富瑠美に、シュールは嘲笑した。

「思惑とはまた、人聞きの悪い。私は元々、富実樹先王陛下が御提案なされた方ではなく、陛下が御提案なされた方の支持者だったということですよ。事実、総票会で私は、陛下の方に票を入れましたし」

「陛下。貴女は、もう引き返せませぬぞ。拒否などをするのにも、既に時が経ち過ぎております。残念ながら、それは御気付きにならなかった陛下の御怠慢とでも言うべき物に御座います。御諦め下さ

いませ」
　追い打ちのように官僚が声を掛けると、富瑠美は拳を震わせて吐き捨てた。
「もう、いいっ！　どうせ、わたくしは飾り物の王。先王陛下ほどの実行力も決断力もありませんっ！　どうせ飾り物なのだから、わたくしに断らず、御前達で好きになされば宜しいでしょうっ！」
　富瑠美はそう言い捨てて部屋を出て行き、部屋に残った面々はほくそ笑んだ。
　……計画が、動き出した。
　二年前から、練りに練られた計画が。
「さて、と。陛下を黙らせたことだし……次は、地球連邦の反応が楽しみであるな？」
「はっ。仰せの通りに御座います」
　その場には、新戦祝大臣のシャーウィンも、新政財大臣のウォルトもいない。
　だからこそ、このように本来なら三番目の地位にあるシュールが一番権力を握っている。
　彼を止められる人物は、今の所唯一人――先々王に当たる花雲恭峯慶だけであったが、彼は植物状態で、一年ほど前に暗殺されかかってから、一度も目を開けたことはない。
　その為、既に王宮ではなく国立病院にいた。
　他のまだ生きている王族で、王や嶌大臣を勤めたことのある――つまり、政の経験が豊富な人物は、もう、誰もいない。
「どう料理しようかな？　地球連邦の民を」
　独り呟いたシュールの言葉に、誰もが頭を垂れた。
　今、この王宮では、彼の言うことが絶対だった。

# 第一章「婚約式」―1

「由梨亜(ゆりあ)～！」

バン！　という音と共に、千紗(ちさ)が部屋の中に走り込んで来た。

「ちょっと千紗っ！　そんなドレス着てまで走らないのっ！　いつもの服でなら走り回っても何も問題ないけど、ドレスで走られたら破けちゃうわよ。今日は婚約式だっていうのに」

由梨亜が溜息をついた先には、走って来たというのが丸分かりの様子の千紗がいた。

「え～。でも、何でドレスって弱いの？」

「天然繊維を使ってるからでしょうがっ！　化学繊維は丈夫だけどこれは弱いんだからねっ！　千紗と違って！」

すると、よろよろとしたノックと共に、扉が開いた。

「ち、千紗、様……！　は、速いですよぅ。つ、疲れましたぁ」

千紗付きの召し使い、苓華(れいか)が、ぜいぜいと喘ぎながら言った。

「それは苓華が遅いのよ。あたしは普通だから」

「千紗と苓華を比べたら可哀想よ。何てったって、苓華は千紗と違って生粋のお嬢様だもの」

「由梨亜、一応、あたしもお嬢様なんだけど。んでもって、由梨亜の双子の姉ですが」

「ですが、千紗様はあまり姉といった雰囲気はありませんねえ。逆に由梨亜様の方が姉らしいです。この際、由梨亜様が跡取りになってはいかがです？」

と、由梨亜付きの召し使い、鈴南(すずな)が言った。

「何？　鈴南。あんたあたしに喧嘩売ってんの？」

「とんでもありません。第一、私が千紗様に喧嘩を売っても勝てる訳ないです」

「まあ、そうだけどさ……」

「とにかく千紗！　その格好で暴れないこと！　いいわね？」

「は～い……」
千紗はしょんぼりと項垂れた。
二人は、この冬休みが明けたらレイメーア国立大学の一年生になる。
そこは国立大学だが、将来社長や総帥、またそれに近い職に就くであろう人の為の経営学部がある。
「お願いだから、せめて経営学部に入ってくれっ！」
という必死の耀太の嘆願で、二人はレイメーア大学の経営学部に入学したのだった。
そして、二人は今日一月三日、婚約式を執り行おうとしている。
勿論千紗の相手は荘傲睦月だし、由梨亜の相手は藤咲香麻である。
その時、扉が開いた。
「二人とも、そんなに騒ぐなよ。外にいる俺らにも丸聞こえだぞ」
「あっ、睦月っ！」
「あっ、香麻っ！」
「やあ、二人とも」
「ってか、そんなにあたし騒いでないよ、睦月」
千紗は唇を尖らせて言ったが、睦月は首を横に振った。
「いいや、充分聞こえてたぞ。なっ、香麻」
「ああ、睦月。由梨亜は、そんなに聞こえてなかったけどな、俺にとっては」
「香麻……」
「ちょっとそこ！　二人だけの世界に行かないっ！　さっさと現実に立ち戻る！」
「チェッ。折角いい雰囲気になったのに……」
「いい雰囲気って……由梨亜」
すると、いきなり扉が開いた。
「おやおや、もうみんな揃ってしまっていたの？」
「お母様っ！」
と、千紗が言った。

「ゴホン。私の存在も、忘れてもらっては困るな」
「あ、お父様もいたんだ」
その素っ気ない由梨亜の言葉に、耀太は脱力しかけた。
「いたんだ……いたんだって……」
「まあまあ貴方。いいじゃないですか。私の方が先に入ったんですから」
「まあ、そうだが……」
「でもお父様、一体いつ東京から戻って来たんですか？」
そう、耀太と瑠璃（るり）は、昨日天皇に呼ばれて、昼に出て行ったのだった。
勿論そう時間は掛からず、皇居と屋敷は一時間もしないで往復できる距離である。
だが、今の時間は朝の十時。
二人が起きたのは七時だが、それから今までで二人が帰ってきた様子はなかった。
しかし、耀太と瑠璃は礼装である。
一体、いつ着替えたのであろうか。
「ああ、家に着いたのはつい五分前だよ」
「はあっ？！」
「どういうこと？」
「東京を出る時に着替えて置いたんだよ。天皇陛下も我らの事情を理解して頂けたのでね。それで他の方よりも早く出られてのだよ」
「でもね、お父様」
「何だい？　千紗」
「あたし達の婚約式、十二時からでしょっ！　そこまでしなくてもいいじゃない！」
「ああ、そうだが、婚約式の前にできるだけ長く娘に会って置きたい父の気持ち、分かるだろう？」
「ううん」
「全然分からないわ」

と、身も蓋もない千紗と由梨亜の言葉に、睦月と香麻が反論した。
「いいや、俺は分かるぞ」
「俺もだ」
「何？　睦月、香麻。あたし達を見捨てる気？」
「お父様についちゃうの？」
千紗と由梨亜の非難に、二人は苦笑し顔を見合わせた。
「千紗、由梨亜、こういうのは、だな」
「男でないと分からないもんなんだよな」
「え～っ。でも、そういうので男女を分けるのって可笑しいよ。ねぇ？　由梨亜」
「そうよ。第一、私達に対する感想って物はないの？」
と、まあ、ドレスを着た少女が言いそうな台詞を言った途端、
「「「「「……」」」」」
全員、沈黙した。
「な、何でお父様もお母様も香麻も睦月も鈴南も苓華も黙るの！」
「あたし達、そんなに変かなぁ」
千紗は自分の着ているドレスを見下ろすと、溜息をついた。
ちなみに、千紗は濃い藤紫という色のイヴニングドレスを着ていて、由梨亜は同じデザインの、少し薄めの群青色のドレスを着ていた。
「いや……可愛いと、思うぞ？」
「ああ。特に千紗の方が可愛い」
「何言ってんだ、睦月。由梨亜のほうが可愛いぞ」
「そうですよ。絶対由梨亜様の方が可愛いです」
「何言ってんですか鈴南さん。千紗様の方が可愛いですよ」
「いいや、違うね。絶対由梨亜だ。よく言ったな、鈴南さん」
「ありがとうございます、香麻さん」
「何言ってんだよ、香麻に鈴南さんっ！　絶対に千紗の方が可愛いっ！　な、苓華さん」
「はい。その通りです」

「ああっ、もうそんな言い争いやめてってばっ！」
　由梨亜のその一言で、ようやく静かになった。
「もう、私達はただ感想を聞いただけなんだよ？　なのにそんな言い争いしなくていいじゃんっ！　全くもう。これじゃあ落ち着けないよ」
「……ねえ、由梨亜」
「何？　千紗」
「由梨亜は緊張してないの？」
「へっ？」
　由梨亜のその間が抜けたような返事に、千紗だけではなく周りの皆も溜息をついた。
「みんなが色々言ってんのは、緊張してるから。だって、あと二時間もないんだよ？　婚約式まで」
「あ～……そういえば」
「全くもう、一体何の為にあたし達がこ～んなドレス着てると思ってんのよ」
　千紗は近くの椅子に座り込んでしまった。
「あっ、そうだ。忘れてたわ」
　と、急に瑠璃が言った。
「えっ？　何？　お母様」
「ほら、貴方」
「し、しかしだな……お前が言ってくれ」
「嫌よ。それに、貴方が言ったんじゃない。『私が言うから、安心しろ』って」
「うっ……分かった。千紗、由梨亜、睦月君、香麻君、婚約式が終わったら……そうだな、私の部屋の近くにある、私的な時に使う応接室に来てくれないか」
「ええ」
「……？　うん」
「はい」

「……何でですか？」
千紗と由梨亜と香麻が比較的あっさりと頷いたのにも拘らず、睦月は訊ねた。
「それは、ここでは言えぬ。分かったな」
「……はい」
その様子を眺めていた千紗は、ふと笑った。
二年ほど前、由梨亜が地球連邦に戻ってきてからは、ずっと平和だった。
由梨亜からは、宇宙連盟加盟の働き掛けが絶対に花鴛国（かおうこく）からあるという話は聞いていたが、今の所、そのような話はニュースで流れていない。
まだ、大丈夫であろう。
千紗は、何故婚約式の後に耀太に呼ばれたのかは分からない。
だが、天皇から何か重要なことが言われたのだろうということは想像がつく。
（由梨亜は……何か分かるかな？）
と思い由梨亜の方を見ると、俯いていた。
（何か考えてんのかな？）
そっと由梨亜の顔を覗き込むと、千紗ははっと息を呑んだ。
由梨亜の顔は蒼白で、思い詰めているようだったからだ。
（一体、どうしたんだろ……何かあったのかな？　聞きたいけど……でも、そろそろ婚約式の方の準備に行かなくちゃなんないし……大丈夫かな？　由梨亜）
「由梨亜……ちょっと、大丈夫？」
小声で千紗が訊くと、由梨亜ははっと顔を上げた。
「大丈夫よ。ただ、二年前までいた国に関係あるんじゃないかって……心当たりが、ね」
「由梨亜……？」
千紗が眉を顰めると、由梨亜はちょっと笑って言った。
「大丈夫。本当に、大丈夫だから」

その時、耀太が言った。
「さて、そろそろ行くか。睦月君、香麻君、それでは、また」
「はい」
耀太と瑠璃は、来客の対応をする為、部屋を出て行った。
部屋には、千紗、由梨亜、睦月、香麻、苓華、鈴南が残された。
「それでは、私達も向かった方がいいですね。千紗様、由梨亜様は私に付いて来て下さい。睦月さん、香麻さんは苓華さんに付いて行って下さい」
「はい」
「ええ」
「うん」
「分かった」
六人は、それぞれ動き出した。
「じゃあまたね、睦月、香麻」
「ああ、そっちこそ」
そう言い交わすと、六人は部屋を出て行った。

# 第一章「婚約式」―2

「あ～……疲れたぁ」
「千紗、情けないわよ。たかがあれだけの長さの式とパーティーで、ばてるなんて」
「パーティーの長さはいいんだよ、長さは……ハァ」
千紗が情けない溜息をつきまくる理由は簡単である。
千紗は毎年最低でも六回はパーティーに出ていて、今更それで疲れるということはない。
そして、親戚達も今まで婚約者候補だった三人から結婚相手を選ぶものとしていて、特に相手の身分にも文句がなかったので、パーティーでも微妙な厭味や軽い妬みとしか取れないような言葉しか口にしてこなかった。
その中以外から選ぶということは、その人達の考え付かないことだったのだ。
睦月と香麻を耀太が認めたということもあり、今更
「認める訳にはいきませんっ！　即刻別れなさいっ！」
と言う訳にもいかず……というので、もうパーティーでは厭味が物凄かったのだ。
例えば、このような物があった。
「まあまあ、千紗さんがあんなに男っぽい人とご婚約するとは思いませんでしたねぇ」
「あら、男っぽいというより……まあ、あれですわね？　つまり、野生的、というか？」
「ええ。それに千紗さん、ちょっとだけ、思慮不足ではありません？」
「お家を継がれる方ですのにねぇ」
「長女という自覚が、跡取り娘だという自覚はありますか？」
「せめてねぇ……どちらかだけで、良かったんだけど」

「まあ、いわゆる――ではありませんか？」
彼女は、声を出さずに唇で『我儘』と言った。
「まあ、言い得て妙、ですわね」
「それにしても……あの由梨亜さんが家出したのにも驚きましたね」
「ええ。行方を完璧に眩ましてこの本条家にも足跡が掴めなかったなんて、凄いですねぇ」
「戻ってきたのは良かったですけど……」
「でも、あれでしょう？　他星にまで行って、おまけに働いてただなんて」
「しかも……実の父親を騙して引っ掛けて、婚約者候補達を退けたって」
「まあぁ……どこまでも、貴女達姉妹は、貴族とはちょっと違うようですねぇ」
とまあ、婚約式に言うべきことではない厭味を次々に連発したのだ。
しかも、その言い相手は全部千紗であった。
（由梨亜……睦月……香麻……誰でもいいから、助けて……）
と思いながら、適当な相槌を打ちそのパーティーを過ごしていたのだった。
式自体は一時頃に終わり、その後から七時までパーティーだったのだが、その内の半分以上を厭味で潰されてしまい、由梨亜と話す時間が全くなかった。
おまけに厭味を言われていた時間帯は丁度お昼とかぶってもいたので、正直食べた気はしなかったし、食べる量もいつもと比べたら驚異的に少なかった。
もし由梨亜か睦月か香麻がいたら直ぐにその場から連れて行ってくれただろうが、由梨亜は耀太や瑠璃と共に、あまり親しいとは言えないような客の接待に当たっていたし、睦月と香麻は貴族との交流が全くなかったので、本条家に親しい人達の接待に当たっていた。
だから、千紗を救うのは到底無理な話だったのだ。

そしてパーティーが終わり、着替え終わった千紗は心置きなく伸びていたのだった。
「これからもあんな調子でパーティーやるんだったら逃げよっかな……それにしてもさ、由梨亜。何であんなきっついドレス着て平気でいられんの？　しかもあんな長時間。あたし、あんなに長くドレス着たことないよ」
「だって花鴬国（かおうこく）では、王族とか貴族だったら、いっつもあんな感じよ？　下手したら、あれよりももっと豪華だったかも」
「へ～。つまりは、慣れ？」
「ええ。そんな感じよ」
「凄いなぁ……あたしなんて、ドレスはこういうパーティー以外着たくないもん」
千紗はそう言うと、ぱっと立ち上がった。
「そう言えばさ、何かお父様に呼ばれてなかったっけ？」
「あっ、そういえばそうだね。じゃあ、行こっか」
と、二人が部屋を出ようとした瞬間、扉が叩かれた。
「……？　どうぞ」
すると、そこには睦月と香麻がいた。
「おお、そっちももう着替え終わってたか。早いな」
「だって、あ～んなきっついの着てらんないよ。いいよねぇ、男子は。そう思わない？　睦月」
「いやあ、分かんないや」
「……そっか」
「そういえば、どうして二人ともこっちに来たの？」
「ああ、二人を誘ってこうって、睦月がさ。俺はどっちでも良かったんだけどねぇ～」
「ばっ……！　お前も賛成したじゃないか！」
「だけど提案したのはそっちだよ」
ここでもまた言い争いが始まろうとしていたので、千紗が慌ててストップを掛けた。

「ここで言い争わないでっ。さっさとお父様のとこ行かなきゃなんないから出て！」
千紗はそう二人を急き立てて部屋を出た。
すると、由梨亜が何かを思い付いたかのように手を叩いた。
「あっ、そうだ」
「何？　由梨亜」
「ねえ、三人とも。競走しない？」
「えっ？」
「はっ？」
「はいっ？」
三人は、固まってしまった。
「だ～か～ら、競走よ、競走。誰がお父様の所まで速く行けるかを競うのっ！」
「いいねぇ、面白そうっ！　さっすが由梨亜っ！」
「ああ、俺も賛成だ。楽しそうだしな」
「ありがと、千紗、睦月」
三人がそう喜んでいる中で、香麻だけが少し慌てている様子だった。
「あ、あの……ちょっとま――」
精一杯、というような、喉から絞り出した声で香麻が言ったが、誰も気付かなかった。
いや、故意に無視した。
「じゃあさ、罰ゲームとかもつけようよ！　そっちの方が断然面白いよっ！」
「いいわねぇ。じゃあ、二位の人は一位の人の言うことを聞いて、三位の人は二位の人の言うことを聞いて、四位の人は三位の人の言うことを聞くのは？　言うことを聞くのは一回限定で」
「面白そうっ！　でもさ、それじゃあ一位の人以外はみんな同じじゃないのかなぁ」
「う～ん……そう言われればそうよねぇ……」

千紗と由梨亜と睦月が真剣に考え込んでいると、香麻がまたもや言った。
「あっ……あのさっ、俺、これやるの――」
「ちょっと黙れよ、香麻。なぁ、お前だけ仲間外れってのは……承知しねぇぞ？」
睦月が小声で言い、香麻は口を噤む羽目になったが千紗と由梨亜は何も言わない。
婚約者にさえ無視されるとは、何とも可哀想な香麻であった。
「あっ、そうだ。こんなのはどうだ？」
と、不意に睦月が言った。
「何？　睦月」
「由梨亜が言ったのに付け加えるみたいな感じなんだけど、二位の奴は一位の奴の言うことを聞く、三位の奴は一位と二位の奴の言うことを聞く、四位の奴は一位と二位と三位の奴の言うことを聞くってのは？　勿論、一回だけ。そうすれば、下の順位になるほどリスクはでかくなるぞ」
「うっわ、睦月すごいっ！　頭いいねぇ」
「まあな」
睦月は、少し自慢げに胸を反らした。
「それじゃあ、これでいい人は手を上げてっ！」
と由梨亜が言うと、香麻を除く三人が手を上げた。
「よっし、決まりね！　それじゃあ、全員一列に並んで！　……行くよ。スタート！」
千紗の元気な声が響き、全員が一度に走り出した……かのように見えた。
事実、千紗と由梨亜と睦月はほとんど横に並んでいる。
だが、香麻はそれよりも三歩ほど遅れていた。
どうやら、香麻はこの三人より足が遅いようだ。
けれど、だからと言って香麻が遅いと言う訳ではない。
香麻はこの年代の百メートルの記録の平均より、一秒速いのだ。

だが、この三人はその標準よりも二、三秒速い。
結果、香麻が遅く見えるのだった。

ダダダダダダダ、という、凄まじい音がした。
「んっ……？　何事だ？」
耀太は、思わず目を見開いた。
その音は、しばらく経ってもやまない。
「むっ……？」
さすがに、耀太は狼狽えてきた。
「何が起こっている？　……おい、沙羅（さら）？　いるか？　零斗（れいと）？　……誰か？　誰か、いないのか？」
耀太が狼狽えて問う言葉に誰も答えなかったが、そのダダダダという音は更に大きくなり、しかもこちらに近づいてきているようだ。
「一体……」
耀太が立ち上がり扉を凝視していると、いきなりガッと開いた。
そのことに、耀太は目を丸くした。
家の扉は基本的に自動で開くが、万が一の為に常日頃から手動でも開くようになっている。
……しかも、今の動きは紛れもなく手動で開けられた物だった。
あまりにも勢い良く扉が開けられたものだから、扉の開く限界まで開き、壁にゴン、という音を立ててぶつかり跳ね返った。
そのせいで壁には小さなへこみができ、二人の人物が部屋に駆け込んだ後、三番目に入ろうとしていた人物に扉が激突した。
「フグッ」
奇妙な音と共に床に沈没したのは、睦月であった。
「よっしゃぁ！　ち、千紗に、勝ったぁ～！！」
「由……由梨、亜……は、速い、よぉ……チェッ、あたし……二位、か……ま、前は……あたしの方、速かったのに……」

「ふ～んだ。たまには私が勝ってもいいでしょ？」
「お、俺を……無視しないでくれ……っ！」
悲痛な悲鳴を上げた睦月は、どうやらぶつけたらしい額を押さえ、座って呻いていた。
「全くもう、大丈夫？　睦月」
由梨亜が呆れ返ったように言うと、睦月が怨めしそうに睨んで来た。
「……これが大丈夫に見えるか……っ！」
「見えない」
身も蓋もなくズバリと言い切ったのは千紗である。
「千紗……ちょっとは遠慮しようよ」
「だって、由梨亜が勢い良くドアを開けたのが原因でしょ？　あたしには何の罪もないよ」
「千紗……ちょっとは気にして、くれ……」
その時、睦月は半分ほど開いた扉の前に座り込んでいた。
それが、更なる災難を招くとも思わずに。
コンコン、とノックの音がした。
「失礼致しま……すっ？！」
どうやらお茶の用意を持ってきた、耀太付きの召し使い、沙羅が開けた扉が睦月にぶつかった。
しかも、頭に直撃した。
「ちょっ……睦月、大丈夫なの？　そんなにぶつけて」
「……痛い……ウウッ」
「す、すみませんっ！　睦月さん」
沙羅は慌てて中に入ると扉を軽く押し戻し、無意識にだろうが、またもや少し開いた状態にすると、睦月の前にしゃがみ込んだ。
しかし、悪いことは重なると言うべきか、二度あることは三度あるというべきか――またもや扉が、由梨亜が最初に開けたのに優るとも劣らない素晴らしい勢いで開き――睦月の背中に扉が直撃して睦月が倒れ、その前にいた沙羅も引っ繰り返り、更に沙羅にぶつか

られた千紗が後ろによろめいて、それを踏みとどまろうとして横に動いた結果由梨亜にぶつかり、その由梨亜は綺麗に真後ろに倒れ、そこには耀太がいて――その耀太はテーブルの角に身体を打ち付け、ソファーに倒れ込み、そこで視線を扉に戻すと、扉は何事もなかったかのように限界まで開き、更に睦月の上に香麻が倒れ込んでいた。

全員、苦痛と疲労で一言も発していない。

その中でも気の毒なのが耀太で、変な所を打ち付けたらしく顔を苦痛で歪ませている。

そして、最初に言葉を発したのは睦月だった。

「お、前、ら、な……俺を……どれだけ、痛めつけてると、思ってんだよ……！」

由梨亜、沙羅、香麻への非難になったことは、言うまでもない。

「いたたっ……でも、睦月、全員何かしらされたってのは、一緒だよ。あたしと由梨亜と沙羅は倒れるだけで済んだけどさ……香麻は疲れて倒れてるし、睦月は見ての通りだし、お父様なんか……変なとこぶつけてるし……」

その千紗の言葉に全員が見てみると、耀太はフラフラしながらも何とか立ち上がり、息を大きく吸い込んだ。

「ゲッ」

「ウッ」

千紗と由梨亜がそう奇妙な音を残し逃げ出そうとしたが、耀太はそれを許さなかった。

「……私は、確かに来いと言った。だが……しかしっ。走って来いとは一言も言ってない！　何故走って来るっ！　そして、何故ぶつかりにぶつかりぶつかりまくって全員将棋倒しとなるのだっ！　これから大事な話をしようとする時に、そんなにふざけたいか～！！」

「別に、ふざけてた訳じゃ……」

「何だと？　千紗。では、訊く。何故ここまで走って来た？」

「……競走」

長い、沈黙が降りた。

「……はっ？」
耀太が搾り出すように声を出すと、由梨亜は唇を尖らせて言った。
「だから、競走よ、お父様。私達は罰ゲームありの競争をしてきたの。それで私は一位だから何もなしで、千紗は二位だから私の言うことを聞いて、睦月は三位だから私と千紗の言うことを聞いて、香麻は四位だから私と千紗と睦月の言うことを聞くの。そういうルールで競走したのよ。で、そうしたらこうなった訳」
「お、お前ら……二度と、この屋敷で走るなぁ～！！」
その耀太の怒号に、千紗と由梨亜は平然と言い返した。
「無理よ、そんなの」
「そうそう。絶対に無理」
「何だとぅ？」
「だって、約束に遅れそうな時とかどうしても急がなきゃいけないって時、どうしても走るでしょ？　だからね、あたし達に走るなってのが無理なのよ」
「だが……無意味に走るなぁ！」
「だ、か、ら！　そんなの約束できないよ！　それよりもお父様、何か話すことあったんじゃない？」
「それを邪魔したのは……お前達じゃないかぁ！　さっさと私に話させろ！！」
「はいはい。ってことだから沙羅、ちょっとあっち行ってて貰っていい？」
「は……はい、由梨亜お嬢様」
沙羅はそう言うと、よろよろとお茶を机に並べて出て行った。
「ふぅ……さ、睦月、香麻、さっさと起きて」
千紗はそう言うと、二人を引き上げた。
「……ったく、重いねぇ」
「……ったりめえだろ……チェッ、まだ、頭がフラフラしてやがる……」
「全くもう、情けないんだからぁ。さ、立って立って！」

「ほらほら、さっさと座る！」
由梨亜がそう急き立て、ようやく全員ソファーに座った。
「……さて、時間がないからな、さっさと本題に入るぞ」
「時間がない？」
「お前ら……今何時だと思っている？　八時だぞ、八時。近所迷惑だとは思わんのか。一応防音はされてはいるが、お前達のその大声では……」
「……すみません」
「別に香麻は謝らなくてもいいんじゃない？　どうせ提案したのは由梨亜だし、それに賛成したのはあたしと睦月だし」
「……そうなのかっ！　千紗」
「うん……そうだけど？」
「なっ……」
耀太は、頭を抱えてソファーに沈み込んだ。

# 第一章「婚約式」―3

「お……お父様？」
千紗（ちさ）が耀太（ようた）の顔を覗き込むと、耀太は呻くように言った。
「……私はてっきり、千紗が提案したものだと……変なことを仕出かすのは、いつも千紗の方だから……」
「どっちでも大した違いはないわ。さ、お父様。さっさと話して下さい」
「ああ……私は昨日、天皇陛下に呼ばれ、皇居まで行った。このことは知っておるな？」
「はい」
「その時、陛下は決して公表できないとても重要なことを口になされた」
「それは……」
「この国……地球連邦と、花鳶国（かおうこく）についてだ」
その言葉に、皆はっと息を呑んだ。
そして、その中でも特に由梨亜（ゆりあ）は、拳を固く握り締め、唇を噛み締め俯いていた。
何を言われるのか……ついに花鳶国が行動を起こそうとしているのが分かったからだ。
「花鳶国は、地球連邦に宇宙連盟へ加盟するようにと、イギリスのオレアン四世陛下に働き掛けて来たそうだ。だが、それは即断できないと仰った。……それもそのはずだろう。何しろ地球連邦は、昔の国の単位で分けるという考え方が一般的で、一応イギリスが首都となっているが、それでも、オレアン四世陛下には、地球連邦に対しての独裁権は全くないのだからな」
耀太はそう言うと、深い溜息をついた。
「だからおよそ一年前に、それぞれの地域の議会の上級議員を呼び寄せた大会議を行ったそうだ。だがその結果は割れに割れ、結局は

まだ加盟には早いという結果に落ち着き、それを花鴬国に伝えたそうだ。そして連盟に加盟するのに好意的だった地域の代表は、花鴬国単品で説得に来るのではなく、『宇宙連盟』で来てくれれば、否定的な地域も賛成してくれるだろうと言ったそうだ。そして一年。花鴬国は、こちらが予想もしていなかったことを打ち出して来た。それは、この国の存亡に関わることだ」

そういうと、耀太はグルッと見渡した。

「皆、衝撃的な内容となるが、どうか心して聞いて欲しい」

「……分かりました。お父様」

そう答えたのは、千紗だった。

千紗は由梨亜から聞いていたので、それほど驚くといったことはなかった。

これから花鴬国が行おうとしていることには、あまり想像が及ばなかったものの。

しかし、睦月と香麻にとってはそんな簡単な問題ではない。

なにしろそんな話があったことすら、彼ら庶民はもとより貴族も知らないことだったからだ。

そして地球連邦の混乱期が治まってから今までの数百年間、地球連邦はずっと平和であった。

戦争や争い事など、様々な混乱事は既に過去の遺物であったのだ。

そして情報公開制度により、『特別な事情』のない限り情報は公表されるようになっている。

だから、その争いの火種が一年も前からあったこと、そしてそんなことが公表されていなかったということに衝撃を覚えたのだった。

そして、『地球連邦の存亡に関わる問題』と言われたことで、言葉を発せないほど打ちのめされた。

由梨亜の方はと言えば、次に耀太が何を言うのかも既に予想が付いていたので、その悲しみによって、言葉を失っていた。

「それは……『花鴬国が、地球連邦を攻めて来る』、ということだ」

重々しい耀太の言葉に、全員言葉を失った。

さすがの千紗でさえも、少しは予想していたとはいえ改めて耀太の口から断言されると、やはりショックで顔色を失っていた。
そして、耀太を除いた全員が蒼ざめていた。
千紗がふと横を見ると、由梨亜が俯いていた。
その顔は思い詰めていて、まるで自分を責めているようだ。
「ちょっと由梨亜、来て」
「……うん」
由梨亜の声には、やはり力がない。
まだ誰も無気力状態なのをいいことに、自分達の部屋まで連れて行った。
「どういうこと？　由梨亜」
千紗はきつい声で由梨亜に言った。
「どういう……って？」
「とぼけないでよ。何で花鴛国が攻めてくるの。まだ一回しか言ってきてないのに。それも話し合いと言えるかどうかも微妙みたいな話し方だったし。ねえ、由梨亜が言ってたことと違うよね？　由梨亜の異母妹（いもうと）の富瑠美（ふるみ）は、由梨亜が感じてた通りの人じゃないんじゃないの？」
「違うわ！　富瑠美は……そんな人なんかじゃないっ！　それに、王というのは国の統括者ではなく、象徴的な存在……まずは大臣が主導権を握ってるのよ。それを考えると戦祝大臣（せんしゅくだいじん）か政財大臣（せいざいだいじん）のどちらか……でも、その二人もやっぱりそんな人じゃないと思う」
「何故？」
「……貴女には教えられないわ。きっと、理解できないでしょうから……」
「だから、あたしには、話せないって言うの？」
千紗の強い口調に、由梨亜は目を逸らして小さく頷いた。
その途端、由梨亜の左頬がピシャリと鳴った。
由梨亜が顔を上げると、千紗は悲しみとも怒りとも言えるような表情を顔に浮かべていた。

「千、紗……？」
「あたしは……もう嫌。前に由梨亜があたしに隠し事した時……覚えてるよね？　由梨亜」
「忘れる訳……ないわ。あの時のことは……」
　由梨亜は、千紗から目を逸らしながら言った。
「だったら、覚えてるよね。あたしは別に、由梨亜があたしに隠したことは恨んでない。あたしも、あんな状況だったらそうするから。だけど、それが原因で口聞かなくなって……結局仲直りしたけど、すぐに由梨亜は花鳶国に行っちゃって……こっちに戻ってきてから、すっごい後悔した。何でさっさと仲直りしなかったんだろって。最初っから、無理にでも訊き出しておけば良かったって。……人に知られたくない傷は、みんな持ってると思う。あたしはそんなこと話して欲しくないし、無理に訊こうとも思わない。けど、そうじゃないのは隠して欲しくないの。由梨亜が今あたしに言えないって言ったのがそういう物だったら、訊こうとは思わない。だけど……そうじゃないのなら、もう隠さないで……お願い、由梨亜」
「千紗……」
　由梨亜は、少し考え込むと、驚くほど真剣な眼差しで言った。
「私が今から言うこと、笑わない？　疑ったりしない？　私が言わないのは、千紗が信じてくれるかどうか自信がないから。千紗にとっては嘘にしか感じられないかも知れないけど、私にとっては、それが真実。それを疑われたら、何も話せなくなるわ。……勿論、私は人間だから嘘をつくし、誤魔化しもする。冗談も言う。だけど、そうじゃないのに、そういうことにとられたら……私は、千紗を信じることが難しくなるわ。……ねえ、千紗。誓える？　今から言うことを、最初は信じられなくて、呆然としてもいい。だけど、絶対に信じるって」
　由梨亜の問いに、千紗は即答した。
「誓うよ。絶対に。さすがに全部信じるのは、あたしは無理。そんな人もいるかも知れないけど、あたしはそこまで真っ白じゃないか

らね。だけど、もし由梨亜が最初にそう言ってくれるなら……あたしは、なるべく信じる――ううん、絶対に、由梨亜が言うこと、信じる。だから由梨亜も、悪用しないでね。そしたら絶対、由梨亜のこと信じらんなくなるから」

「ええ。分かったわ。あの……ね、馬鹿にしないで聞いて欲しいんだけど……まず、戦祝大臣の方からね。あの人は、富実樹と血の繋がりがあるの。今の戦祝大臣は、母方の伯父様なのよ。だから、裏切る可能性が、とっても低い。そして政財大臣の方なんだけど……あのね、彼は、富実樹と何の繋がりもないし、逆に先代の政財大臣は、富実樹のことをほとんど信用してなかったわ。だけど、今の政財大臣は絶対に裏切らないって、言い切れる。あのね……ごめん、千紗。こんなこと言うと、変に思うと思うけど……今の花鳶国の王様は誰か、分かるよね？」

「そりゃぁ勿論。花雲恭富瑠美、でしょ？　富実樹の異母妹。王女時代は鳶大臣。そして第二王女。花雲恭峯慶と花雲恭深沙祇の娘。花雲恭峯慶の第二子で、妃の娘」

「ええ。その通りよ。その前の王は？」

「花雲恭富実樹。第一王女。花雲恭峯慶と花雲恭由梨亜の娘。花雲恭峯慶の第一子で、妾の娘」

「その前の王は？」

「花雲恭峯慶。第一王子。花雲恭籐聯と花雲恭沙羅狭の息子。花雲恭籐聯の第一子で、后の息子」

「その前は？」

「花雲恭籐聯。えっと、第一王子で……花雲恭、斑都？　と、花雲恭癒璃亜の、第一子」

千紗は、内心いつまで続くのだろうと思いながら答えた。

「その前は？」

「……えっと、その前は花雲恭癒璃亜。由梨亜とか由梨亜妾の名前と同じ読みをするけど、違う字を書く女王様で、その統治していた時代から、既に賢帝と呼ばれていた名君……」

「ええ。詳しく言うと、花雲恭癒璃亜は第一王女で、王女時代は第二王位継承者だったが、異母兄が病気で亡くなった為、すぐ下の異母弟である花雲恭斑都と結婚し、王位を継ぐ。花雲恭襖祥と花雲恭早莉阿の娘。花雲恭襖祥の第二子で、最女の娘。今でも賢帝、名君の名を欲しい儘にし、おまけに当時からも名高かった女王。そして魔族の力を全て得ていた、前代未聞の人」

「でも、それが何の関係があるの？　あたしには、全然……」

由梨亜は軽く目を瞑ると、千紗を見詰めて言った。

「その癒璃亜女王……富実樹の曾祖母が、今冥界にいるのではなく、この現世にいると言ったら？　もう、何十年も前に死んだ女王が。そして、その人が私に花鴬国の情報を渡しているって言ったら？」

千紗は、後半の台詞が耳に入らなかったかのように呆然と呟いた。

「……えっ？　つ、つまり……幽霊って、やつ？」

「まあ、幽霊って言うか……何て言うか……まあ、視た方が早いわね」

「み、……視えるの？！」

「ええ。ただ……明日の夜を待って頂戴。私には、そこまでの力がないから……」

「由梨、亜……？」

千紗は全く訳が分からずに呆然としていたが、そこに睦月と香麻が入って来た。

「お前ら、さっさと部屋出てくなよ。まだ話は終わってなかったんだぞ」

「香麻……」

いつもよりぶっきらぼうに言った香麻を、睦月がたしなめた。

「少し遠慮しろよ。千紗の心臓にはぶっとい鉄パイプが生えてるから心配ないけどな、由梨亜のことを考えろよ。あんな状態なの、ほっとける訳ないだろうが」

「睦月……」

千紗の地を這うような低い声に、睦月は何とも場違いに朗らかで

明るい声で返事をした。
「何だぁ？　千紗」
「ほんっきであたしを怒らせたいのね、荘傲睦月。喜んで乗って差し上げるわ。真剣勝負よ」
「なっ……！」
睦月が慌てて逃げようとしたが、香麻によって扉が塞がれてしまった。
「お、おい、香麻っ！」
「自業自得だ、睦月。諦めてお縄に付け」
「ちょっ……それ意味違うって！　正しい言葉使えよっ！　っていうかそこ退け、退けっ！」
「もう遅いわよ、睦月。心臓に毛が生えてるっていうだけでも腹立たしく思うのに……それをよりにもよって鉄パイプだなんて……。ねぇ、睦月。こ～れ～は～。殴られても仕方ないって、思わないかな？　あたしだったら、そう思うんだけどなぁ？　それにその台詞は、仮にも婚約者に対する適切な言葉って言えるのかどうか、よく分からないんだけど？　さぁ、睦月。覚悟は、決めたよ、ねぇ？」
千紗の優しい、けれど恐ろしい声に、睦月は生唾を飲み込んだ。
その後起こった出来事は……言うまでもない。
しかし、そのあまりの酷さに、それを見た召し使い達は極一部の胆力のある者を除き皆卒倒し、生き残った召し使い達はその世話に明け暮れ、主人夫婦もあまりのことに倒れてしまったという。
この日の婚約パーティーに参加した人達はあまりに大人数だった為、誰もこの屋敷に泊まらず、そして誰も残っていなかったことが、唯一幸いだったと言えるであろう……。

# 第二章「事実と覚悟」―1

「全く、馬鹿じゃないですか？」
鈴南の言葉に、睦月はウッと呻いた。
だが、それでも鈴南は容赦しない。
「あんなに落ち着いてない千紗様を、気付いていない訳がないのに、わざと怒らせるなんて……一種の天才ですねぇ」
一見褒め言葉にも聞こえそうだが、単なる皮肉である。
それも、最大級の。
「ほんと、見た時は呆れましたよ、ええ。本気で。あれを見て私と苓華が卒倒しなかったのは、あの千紗様と由梨亜様がお産まれになった時から付き合っているからです。全くもう、好い加減にして欲しいものです。貴方様は仮にも千紗様の婚約者。将来はこの本条家を担ってもらうお方なのですから」
「まあまあ、鈴南さん。そこら辺にして置いて下さいよ。もう充分お説教してるじゃないですか。本当は関係ない俺も怒られるのは、割が合わないですよ」
香麻のその台詞に、鈴南がジロッと睨んだ。
「関係がない？　ほほう、この人の暴言を止めもせず、喧嘩も止めもせず……それで、関係がないと？　確かに、見事なまでに、関係がないですねぇ、香麻さん？　本当にねぇ」
「うっ……だって鈴南さん、じゃあ逆に訊きますが、睦月の暴言を止めるだけならともかく、あの千紗を止めれますか？　俺には無理ですよ、ええ、千パーセント無理ですね、本気で」
香麻の言い分に言い返す言葉が見つからなかったのか、鈴南はフン、と顔を背けた。
「ほらほら、いい歳して拗ねないのよ、鈴南」
おっとりと、鈴南と共に睦月の手当てをしている、鈴南の先輩である召し使い、唱奈が言った。

と言っても、唱奈は四十二歳、鈴南は四十歳なのだが。
その後、しばらく静かだったが、睦月の手当てが終わる頃、苓華が入って来た。
「あの、皆さん。ちょっといいですか？」
「ええ、どうぞ。苓華。丁度この千紗様の導火線となった超大迷惑男の手当ては終わった所ですし。そちらも、千紗様の手当ては終わりましたか？」
「ええ。何しろ仕掛けたのは千紗様の方ですし、実力が違い過ぎますからね。特に大きな怪我はなかったです」
苓華はチラ、と睦月を意味あり気な目付きで見ると、視線を鈴南と唱奈に戻した。
睦月が、
（俺ってもしかして……いや、もしかしなくても、苓華さんに馬鹿にされてる……？）
と思ったのは、言うまでもない。
「それで、何の用なのかしら？　苓華」
「はい、唱奈さん。旦那様からですが、睦月さんと香麻さんに、明日の午後、今日と同じ部屋まで来て欲しいとのことでした。さっきのお話の続きみたいです」
苓華がそう言うと、香麻が手を挙げた。
「あ～、ちょっといいかな？　苓華さん」
「はい。何でしょうか？」
「なんで、午後からなんだ？　午前中、何か予定でも？」
「ええ。午前中は大事な商談があるそうなんです。なので、午後からと」
「ああ、なるほど。ありがとう、苓華さん」
「んっ？　どうかしたのか？　香麻」
睦月がそう訊ねると、香麻は笑って言った。
「あ、教えてなかったっけ？　明日の午前中、あの新しくできたアウトレットに遊びに行かないかって、藍南（あいな）と尚鈷（しょうこ）と素香（もとか）と涼斗（りょうと）と奏（そう）

谷に今朝誘われたんだよ。これから大学入っちまうから、今の内に遊んどいた方がいいんじゃないかってさ」
「へぇ～。いいんじゃねぇか？　じゃあ、あとで千紗と由梨亜に言いに行くか」
「ああ」
この時、まだ二人は知らなかった。
本当に、遊べる時は『今の内』しか、ないことを。
その入学式は……決して一週間後に、来ないことを。
そして、二人は後に後悔することとなる。
先程、耀太から聞いた話を、自らの少し離れた未来と位置づけてしまったことを。
自らの、本当に近い未来として考えることができなかったことを……。

コンコン、というノックの音と共に、睦月と香麻が入ってきた。
「おい、千紗、由梨亜。ちょっといいか？」
「うん……何の用？」
「ああ。明日の午前中、あの新しくできたアウトレットに遊びに行かないかって、藍南と尚鈷と素香と涼斗と奏谷に誘われたんだよ、今朝。どうせ、入学式までもうちょっとだからさ、今の内に遊んどいた方がいいんじゃないかなってさ。どうだ？」
「『今の内』、ねぇ……」
由梨亜がそう呟いたが、千紗はそれを無視した。
「いいんじゃないかな？　少なくとも、あたしは行きたいな。でもさあ、こういうのはもっと早く言ってよ」
千紗の珍しくも真っ当な非難に、香麻は軽く頭を下げた。
「ああ、ごめん。由梨亜はどう思う？」
「ええ。いいんじゃない？　確かに、『今の内』だもんねぇ……」

由梨亜は意味深に言ったが、それには誰も気が付かなかった。
「ああ、分かった。じゃ、俺らは涼斗と奏谷に連絡すっから、そっちは藍南と尚鈷と素香に連絡して？」
「うん。分かった。じゃあ睦月、香麻、また明日ね」
「ああ。また明日」
「じゃあな」
「またね」
四人はそう言うと、睦月と香麻は部屋を出て行った。
二人が出て行くと、千紗は由梨亜を振り返って言った。
「じゃあさ、由梨亜。あたしが藍南と尚鈷に電話するから、由梨亜は素香に電話して貰ってもいい？」
「ええ。分かったわ」
二人はそれぞれ三人に電話をすると、三人とも即答で
「やった！　滅茶苦茶久しぶりだもん！　すっごく嬉しい！　じゃあ、明日ね！」
とはしゃいだ楽しげな声で言ったのだった。
ちなみに、涼斗と奏谷も似たような反応だったという。

「うっわ～！　ちょっと見てよ素香！　これ可愛くない？　素香に絶対似合うって～！」
「ほんとだぁ～！　ちょ～可愛い！　あっじゃあさ、これは尚鈷に似合うんじゃない？　尚鈷、こういうの好きでしょ？」
「うんうん！　ありがと、素香！」
「ちょっと来て！　由梨亜、千紗！　こっちのどうかなぁ？」
「あっ、いいんじゃない？　藍南」
「うん、すっごい似合ってるわ」
「それじゃあさ、千紗はあれどう？　由梨亜はそっちの！」
「うっわぁ～！　すっごい！　藍南ってやっぱりコーディネーター

としての才能あるわねぇ！　ほんっと感心するわ」
「ふふ、ありがと、由梨亜。それにしても、どうしよっかなぁ……ここ結構可愛いの沢山あるから、すっごい迷っちゃう！」
「うんうん！　だからって全部買ってるとお金なくなっちゃうんだけどねぇ……」
「な～に言ってんの？　千紗。あんた達はお嬢様でしょ？　お小遣いぐらい沢山貰ってるでしょうが！　それに、買って欲しい物はいくらでも買ってくれるでしょ？　いいよねぇ……あたしなんか、バリッバリの庶民だから！」
「ねぇちょっと！　そういう『お金持ち』の偏見、やめて貰える？　そりゃあ私達のお父様はお金持ちだけど、お小遣いのこととかお金の無駄遣いとか、めっちゃ厳しいんだから！」
「そうそう。この前なんて、『お前達にはもう沢山服があるんだから、これ以上買わなくてもいいだろう』って言って、すっごい気に入った服だったのに買ってくれなかったんだよ！」
「え～！　信じらんない！　交渉とか何もしなかったの？　例えば、お小遣いを来月分減らすとか、前借りだとか……」
「したけど、『駄目な物は駄目だ！』だってさ」
「だったら、あたしの方がよっぽど恵まれてるよ」
「アハハ！」
「あっ、ねぇ、藍南、由梨亜、千紗！　もうそろそろ時間になるよぉ！　さっさと決めないと！」
「あ、ほんとだぁ！　ありがと、尚鈷！」
「どういたしまして！」
……実に、賑やかで楽しそうである。
九人は、少し遠出をして買い物をしていた。
今は、女子五人組の方はアクセサリーや服などが売っているコーナーで思いっ切りはしゃいでいて、男子四人組の方は早々に付いていけなくなり、一足先にゲームセンターで遊んでいた。
「ったく、女のあの勢いには、付いて行けねぇよ……」

「全くだな」
「だけど、今は男四人で平和に遊べてるから、いいんじゃないのか？」
「ああ、同感だな。だけど、あいつらが合流してきたら、絶対こっちは付き合わせられるぞ」
その時、睦月の携帯端末が鳴った。
掛けて来た相手は千紗のようだ。
そして二十秒ほど話すと、睦月は難しそうな、変な顔をしてこちらを見た。
「あと十分ぐらいしたら、五人ともこっちに来るみたいだぞ」
「ゲッ……」
「んじゃ、今の内に休んどくか」
「賛成だな」
「俺もだ」

四人の予想通り、千紗と由梨亜と藍南と尚鈷と素香が合流すると、思いっ切りはしゃいで遊び回り、四人はヘトヘトにさせられた。
「なぁ、千紗。俺らもう、限界なんだけど……」
「お願いだから、ちょっと休ませてもらえねえか……？」
その男達の嘆願に、千紗は思いっ切り馬鹿にしたような目で見て、言った。
「あんた達って、ほんとに男？　全然体力ないじゃん」
「うっ……」
「すみません……」
「でも、女の方がこういうでは力があるっていうか……」
「男はそういうのに付いていけるようになってないっていうか……」
「あっきれたぁ。あんた達、男なのにそんな泣き言言っていいの？　名が廃るよ」

「そうそう。あたし達は普通よ、普通。それに付いて行けてないあんた達は、ほんっと情けないわ」
「まあまあ、千紗、尚鈷、藍南。ちょっと落ち着いてよ」
「そうよ。それにいつの時代も、女の方が力ないけど、こういう時のパワフルさはいっつも女の方が勝ってるんだから。まぁ、物にもよるけどね」
「ひっど〜い！　素香、由梨亜！　あたし達を見捨てる気ぃ〜！」
「う〜ん……でもさ、時計見てよ」
「ハッ？」
由梨亜の声で皆が時計を見ると、時刻は十一時三十分だった。
「そろそろお昼にしない？　十二時過ぎると沢山人来ちゃって席なくなっちゃうもん」
「まあ、そうだけど……」
それでも渋る藍南と尚鈷に、千紗が元気良く言った。
「それじゃあ、多数決採ろ！　今からお昼食べに行くのに賛成の人、手ぇ挙げて！」
結果、七対二で、お昼を食べに行くことになった。
そして昼食を終えると、九人はそれぞれ帰ることになった。
千紗、由梨亜、睦月、香麻の四人は、急いで本条家の屋敷に行った。
耀太から、昨日の話の続きを聞く為に。

# 第二章「事実と覚悟」―2

「たっだいまぁ、お父様」
「ただいま。ちゃ～んと今日は走んないで来たわよ？　お父様」
「プッ……それが今言うことかよ、千紗、由梨亜」
「ああ、同感だな」
多種多様な言い方に、耀太は苦笑すると四人を座らせた。
「さあ、さっさと座りなさい。今日はお茶も何も出さないぞ。どうせ昼は食べてきて、お腹一杯だろう？」
「うん」
「だから、すぐに本題に入るぞ。……花鴛国はおよそ一週間前、地球連邦の王族や皇族、議会に向かい、通信文書で宣戦布告した。その送り主の名は、花鴛国の王、花雲恭富瑠美陛下だった」
その言葉に、由梨亜ははっと息を呑んだ。
（やっぱり……誰かに押し切られた？　でも、富瑠美を動かせるようなほどの力を持つ人は、三ヶ月前の報告では誰もいなかったはずなのに……！　今の花鴛国では、御祖父様も政財大臣殿も代替わりをして、恐らく、今花鴛国で一番権力を持っているのは宗賽大臣殿……）
由梨亜は、小さく顔を歪めた。
（でも、彼は権力に何の興味もなくて、世襲制の大臣家に産まれて、長男だったから王宮に仕えて大臣もやってるけど、いつも、ただ神に仕えられるほどの力があれば、それで充分だと……そういうすっごい宗教的で穏やかな考えを持って、しかも明言してる、花鴛国の中では滅多にいない超貴重で希少価値の高い重要人物なのに……。だから、彼は多分違う。だけど、他に誰が伯父様と政財大臣殿と宗賽大臣殿を動かせるって言うの……？！　分からない……分からないよっ！）
由梨亜がそう考えていると、耀太が話を進めた。

「彼女は、こう述べていた。……ここに、それの写しがある」
耀太はそう言うと、端末を起動させ、そこにその文書の写しを映し出した。
そこに書いてあったことを要約すると、こう述べてあった。

『わたくし達花鳶国の、宇宙連盟加盟への再三の問い合わせに全く何も返答がないとはどういうことで御座いましょうか。連盟に加盟したくないのであれば、そう仰れば宜しいのです。わたくし達は必ず御認めになられると思い申し上げたのでは御座いません。勿論、御断りになられることも考えてはおります。ですが、わたくし達は何度も何度もそちらに問い合わせました。そして、何も御返事がない場合は、武力を持って征する可能性があるとも申し上げました。けれど、今までの一年間、何の御返事もないままに過ぎ去っていきました。ただわたくし達が言われた言葉は、
「今は即答できかねます。地球連邦の総意がなければ、このことに返答はできませぬ。ここイギリスが首都となっておりますが、私には何の独裁権もありませぬので、今回は御引取り願います」
とだけ。花鳶国の国民の不満は高まりに高まっております。そして、幾ら何でも一年間何の動きも見せぬままで「検討中」などと仰せられても、こちらは疑わざるを得ません。よって、花鳶国は宇宙連盟の長としてではなく、ただ花鳶国一国として、地球連邦に宣戦布告致します。この文書が届く頃には、こちらの準備は既に始まっているでしょう。花鳶国が地球連邦に攻め込むのは時間の問題となります。それでは、これから始まるであろう戦いの、条約制定の時に御会い致しましょう。皆様の御幸運を御祈り申し上げております』

読み終わった四人の顔は、蒼かった。
信じられない内容に、睦月と香麻は顔を引き攣らせ、千紗は心を

落ち着かせようとしているのか、胸に手を当てて軽く喘ぎ、由梨亜は瞑想するかのように目を閉じ、何を思っているのか全く読めなかった。

「戦争が、既に確定事項だったなんて……拒否権がないだなんて、思いもしなかったな……」

「ああ……戦争が起こるとすれば、この国は滅茶苦茶になっちまう……俺らの入学式が延期になるどころの話じゃない。下手をすれば、この国の指導者的存在とか、政治家とか、みんないなくなるぞ」

「ああ。だから、私達が天皇陛下に呼ばれたのだよ、睦月君、香麻君。そして、いざという時になったらこの国の大勢の人達を守る為に、天皇陛下達は、既に意志を固めている。だから、関係ない人達と、そうでない人達を、引き離すことになった。勿論我が本条家は『関係がある』方だ。睦月君、香麻君、君達は、その『どちらでもない、微妙な立場』となる。好きな方を、決めておいてくれ」

その言葉に、睦月と香麻は顔を見合わせる。

耀太は、追い打ちを掛けるように言葉を重ねた。

「日本州は小さな州だ。花鴛国も狙いにくいだろう。だから、もし私達に付くとしたら、二度とこの地を訪れる可能性がなくなることも、覚悟しておいてほしい。勿論、全ての王族や貴族や政治家達が行く訳ではない。それでは、戦争が終わっても、この国は立ち行かなくなる。だが、本条家は無理であろう。もし付いてくるならば……死を、覚悟して欲しい。生半可な気持ちで来るならば、この国に残った方がマシだ」

「そう、ですか……でも、死なない可能性もあるんですよね？」

「ああ。どれほどかは、言えぬがな」

耀太の不吉な言葉にも拘らず、睦月も香麻も力強く頷いた。

「じゃあ、俺は一緒に行きます。俺は、由梨亜が好きなんです。だから、護ってやりたいと思っている。それに、もう俺と由梨亜は婚約している。だから、半分は本条家の人間となっています。それを理由にすれば、家族を説得できます」

「俺もです。俺は父さんも母さんもいないから、心配してくれるのは兄貴と妹だけ。けど、その二人はきっと説得できます。だから、一緒に行きます」

その言葉に、耀太は息を呑み、ホウッ、と溜息をついて言った。

「分かった。ならば、君達は一緒についてくるがいい。……だが、くれぐれも無茶な真似はしないでくれ。そうしたら、私は君達の家族に顔が向けられない」

「……お父様っ！　本当に、いいのっ？」

千紗のその悲鳴に、睦月は穏やかに微笑んで言った。

「千紗……。お前は、本条家の跡取りだ。だから、もしその要求が来たら、突っぱねることは無理だろ？　だから、俺は行くんだ。もし止められるのなら止める。止められなくっても、少しでも長い間は千紗と一緒にいたいしな。香麻も、そうだろ？」

「ああ。由梨亜も千紗も、色々と無茶をするからな。止められるのなら、止めてみせるよ」

睦月と香麻の意気込みに、千紗と由梨亜は唖然としたが、釘を刺すのは忘れなかった。

「でも……本当に、その時が来たら、止めないでよ。私達は、その為に行くんだから。それに……その時が来て私達が死んでも、香麻も睦月も日本州に還ってね。それだけは、約束して頂戴。あの……昨日の約束を、これで一つ使うわ。私の分だけで、香麻と睦月にね」

由梨亜の、その真面目なのかふざけているのだか分からない言葉に、睦月と香麻の顔は一瞬緩んだ。

「……ああ。約束、する」

その顔とは対照的に、絞り出すような声で二人が約束すると、由梨亜は溜息をついた。

（香麻と睦月は、一緒に来て欲しくなかったな……御母様とか富瑠美とか、身近にいた人が私に会えば、ばれちゃうかも知れないし。もし、他の王族だったら……例えば、今嶌大臣（おうだいじん）になっていて、御父様の十一番目の子供で紗羅瑳侍（しゃらさじ）の娘、第六王女の麻箕華（まみか）か何かだと、

絶対にばれない。麻箕華は兄弟の中でも頭いいけど、私の持ってる力を知らないから。そして……もしばれたら、私はきっと花鴛国に連れ戻されて、王位を再び継がされることになるわ）

由梨亜は、横目でちらりと千紗を窺った。

（千紗はそのことを知ってるから、問題ない。お父様とお母様はそれを知ったら茫然自失になるだろうけど……あの二人は事情を知らない上に、茫然自失になるほど根性なしでもないから、絶対に止められるわ。そうすると、二人の生命が危ないのよね……いざとなったら、二人を千紗ごと置いてきぼりにするしかないわ……）

由梨亜がそう考えている内に、話は進んでいた。

「さて、これで話は終わった。四人とも、好きにしていいぞ」

耀太のその言葉にはっと我に返ると、千紗がそっと由梨亜の腕を引いた。

「由梨亜……ちょっと、出よ？」

「うん……分かった」

由梨亜はそう言うと、千紗に引きずられるようにして部屋を出た。

## 第二章「事実と覚悟」―3

（一体、千紗はどこまで行く気なの……？）

由梨亜はそう思い、隣をスタスタと歩いて行く千紗の顔をチラッと見た。

二人は、外の道を歩いていた。

だが、由梨亜は一体どこに行くか知らなかった。

ただ、千紗に付いて行くだけで精一杯だった。

「あ、あの、さ……ど、どこ――」

由梨亜はそこまで言い掛けてやめてしまった。

千紗が睨んで来たからだ。

由梨亜が言うのをやめると、千紗はふっと笑い視線を完全に前に向けた。

（ったく、千紗ったら……ほんとに、どこまで行くのよ……）

今、由梨亜は嫌な予感に襲われていた。

（この道、通ってるって……もしかして……いや、もしかしなくても……いや、でも……やっぱり……あそこかも……）

やはり、由梨亜の予感が当たった。

着いたのは、近くの臨海公園だった。

千紗と由梨亜は、小学生の頃よくここで遊んでいた。

二人が初めて会ったのも……ここだった。

「千紗……」

「……うん？」

千紗は、海の方をじっと見詰めていた。

「どうして、私を連れて来たの？　ここに」

「……あのね、由梨亜。これから、地球連邦は花鴬国と戦うでしょ？」

「ええ。もう、宣戦布告されたみたいだから……」

「ねえ、由梨亜。地球連邦が花鴬国と戦って、勝算はどれぐらいだ

と思う？」
「それ、は――」
　由梨亜は言葉に詰まった。
（千紗は……どこまで知ってるの？　私が、覚悟していることを。だけど……それなら、私は――）
「由梨亜。正直に、答えて。あたしは、ほんとに勝算は少ないと思う。由梨亜。花鳶国の元女王としての考えは？」
「……じゃあ、言うよ。私は……詳しくはよく分からないけど、多分、良くて十パーセント。悪くて……一パーセント未満。それぐらい、今はすっごい無謀な状態。ただ……地球連邦の上の人達は……勝算は最低でも三十パーセントはあるはずだって思ってるはずよ。地球連邦の隠してる力は、絶対それぐらいの力を持っているはずだって。そして、花鳶国はそれに不意打ちを食らうはずだって、信じてる」
　由梨亜は、瞳を閉じて吐き捨てた。
「けど、花鳶国はその情報を得られる。そして、仮にその情報が僅かにしか得られなくても、花鳶国の力の方が強いわ。中央諸国なら知っていることも、地球連邦は知らないっていうことは沢山あるの。おまけに、花鳶国が他国に隠してることも沢山ある。そこからみると、地球連邦の勝算は、絶望的に低いわ」
「そっか……じゃあ、地球連邦が負けたら、ここに花鳶国の人が来るんだよね」
　千紗の確認するような、そして妙に穏やかな口調に、由梨亜は気付いた。
（そんな……千紗は、全部気付いてたっていうの……？）
　だから、答えることが……できなかった。
「やっぱり……そうなんだね。もしここに王族が来たとすれば……由梨亜のこと、花雲恭富実樹（かうんきょうふみき）だって気付く人、いるんでしょう？　それで、もし気付かれたら……由梨亜はあたし達に黙って、花鳶国に戻るつもりでしょう？　そうすれば、富瑠美（ふるみ）は富実樹に王位を戻

す。そして、富実樹なら地球連邦に対して悪いようにはしない――つまり地球連邦は、宇宙連盟に加盟する以外の無茶な要求は、あまり呑まないことができる……。そういうことなんでしょ？　由梨亜。貴女は、人身御供になろうとしている。……違う？」

「……ええ。そうよ。ただし、ばれたらね」

由梨亜は、そっと溜息をついた。

そう、ばれたら、なのだ。

もしばれなければ、由梨亜はずっと地球連邦にいられる。

千紗と、香麻と、父と、母と、沢山の友達と。

だけど、ばれたら……由梨亜は富実樹になるしかない。

それ以外、何一つ道は残っていない。

地球連邦が、花嶌国と戦う以外に何一つ道が残っていないのと同じように。

「もしばれなきゃ、私はここにいれるわ。私はここにず～っといたいから、ばれないように努力する。だけど、もしばれたとしたら……」

由梨亜は、千紗の背中を真っ直ぐに見詰めて言った。

「その時の覚悟は、私にはあるわ。だから……止めようとはしないで。誰に止められようと、その覚悟は揺るがないわ。止めても無駄なの。だから、このことは誰にも言わないでくれると嬉しい。特に、香麻と睦月には。お父様とお母様にも言わないで欲しいけど……でも、香麻と睦月の方なんかは、それこそ力に物を言わせて無理矢理止める気がするのよ……ううん、気がするだけじゃないわ。本気でする。だから、もしばれた時はお願い。二人を止めて頂戴。これは、千紗にしか頼めないことだから」

由梨亜がそう言い終わると、千紗は振り返り、穏やかに微笑みながら言った。

「嫌」

……由梨亜の、思考が止まった。

（な、に……？　千紗、今何て言ったの……？）

「……な、んて、言っ」
「だから、聞こえなかった？　『い・や』」
千紗は、由梨亜の語尾に被せるようにすかさず言った。
……やはり、由梨亜の聞き間違いではなかったようだ。
「……ど、して」
「ん～？　嫌だから」
「……だ……から、理由、は」
由梨亜は、途切れ途切れにしか言葉を発せなかったが、千紗はくすりと笑い、実に滑らかに、楽しそうに言った。
「だってさ。由梨亜、ほんとは嫌なんでしょ？　花鴛国に戻るの。だって、ここには由梨亜が愛する、香麻がいる。そして、あたしとか藍南（あいな）とか、尚鈷（しょうこ）とか、素香（もとか）とか、睦月とか涼斗（りょうと）とか、奏谷（そうや）とか、あと他にも沢山の友達――親友がいる。お父様も、お母様も。なのに、どうして由梨亜が花鴛国に戻りたがってるなんて思えるの？」
「千紗」
由梨亜の声に、軽く肯定するような感情が思わず混じってしまった。
そのことに気付いたのか、千紗は真剣な口調で言った。
「由梨亜は、ほんとは戻るのが嫌。そして、あたしは由梨亜に行ってほしくない。だったら、止めるのが一番いい方法なんだよ？　由梨亜。睦月と香麻には、富実樹のことは絶対に言わない。っていうか、それこそ絶対に言えない。だってあの二人、一体何仕出かすか分かったもんじゃないもん。だけど、もし止めるのなら二人の力を借りるよ。だって、あたしはずっと由梨亜と一緒にいたいもん」
「……」
由梨亜は、何て言ったらいいのか全く分からなかった。
だが、何とか言葉を捻り出して言った。
「……その、千紗……さ……これを訊く為に……この為だけに、わざわざここまで……来たの？」
「う～ん……もう一つだけあるんだけど……いい？」

「……いいも何も、この状況で私に拒否権なんてないと思うんだけど……？」

由梨亜の少し呆れたような、脱力したような声に、千紗は軽く笑って答えた。

「あたしが訊きたいのは、由梨亜の――ううん、富実樹の曾お祖母さんの、癒璃亜（ゆりあ）女王のことなんだ」

「曾御祖母様の……？」

「うん。今夜、その癒璃亜女王に会うんだよね」

「ええ。今夜、花鴬国から曾御祖母様が戻って来るから」

「じゃあさ、その人に訊きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「ええ。勿論よ。その前に私に報告があると思うけど……何しろ、曾御祖母様にお会いするの三ヶ月ぶりだから」

「……そうなの？」

千紗の口調には、純粋に驚いたような響きがあった。

そんなに長い間会ってないとは、思っていなかったようだ。

「だって、あんまり長い間花鴬国にいても目新しい情報が入るとも限らないけど、あまり短くても大して情報が入らないもの。だから三ヶ月交代みたいな感じで、地球連邦と花鴬国を行き来しているのよ」

「ふ～ん……。じゃあ、あたしの訊きたいことはみんな訊き終わったし、戻る？」

千紗の珍しくも真っ当な問いに、由梨亜は笑って答えた。

「折角ここまで来たのに、遊ばないで帰るの？　勿体ないわよ。遊んで行きましょ？」

「うん！」

千紗の元気な答えに、由梨亜は頬が綻ぶのを抑えることができなかった。

千紗が元気だと、嬉しいと――自分まで元気になる、嬉しくなる。

結局、二人はいつもそうだ。

心の奥底で……繋がっている。

その夜、千紗はこっそり由梨亜の部屋を訪ねた。
「由梨亜……来たよ？」
「いらっしゃい、千紗」
今の時刻は真夜中の午前二時。
夜更かしをしていない限り、いつもなら起きていない時間である。
千紗と由梨亜は双子ということになっているが、さすがに部屋は離れている。
さて、千紗は由梨亜の部屋に入ったが、しばらく何もせずにベッドの上に腰掛けていた。
由梨亜も、千紗とは少し離れた場所に腰掛けてぼんやりしていた。
五分が過ぎ、十分が過ぎた頃……部屋の空気が、揺らいだ。
由梨亜が立ち上がって虚空を見詰め、それを見た千紗もはっとして立ち上がり、由梨亜の様子をじっと見守った。
そして……由梨亜が口を開いた。
「お久しぶりです、曾御祖母様」
由梨亜の口調はいつもより少しは改まってはいるものの、『富実樹』だった頃よりは大分砕けた口調で、何もない所に声を掛けた。
すると、その由梨亜の視線の先が揺らぎ……二十代前半ほどの姿をした、軽く波打った漆黒の髪に、目が覚めるような、とても濃い紫――貝紫、ロイヤルパープルと言われる高貴な色、王者の色と呼ばれる紫色の瞳をした女性が、目の前に浮いていた。
いきなり現れた上に妙に立体的で、だけど宙にも浮いているということで、千紗の思考は完全停止した。
（な、に……誰？　癒璃亜女王ってのは、分かってる、けど……でも……こんないきなりって……こっちの心がついていかないんですけど……）
そのことだけが、千紗の頭をグルグルグルグルグルグルグルグル

回っていた。
『ええ。お久し振りですね、富実樹。全然変わっていないようで、安心しました』
（うっわ……すっごい丁寧な喋り方……）
そう千紗は思ったが、これでもまだ砕けている方である。
「曾御祖母様、紹介致します。この方は本条千紗。今は、私の双子の姉となっている方です。そして、私の無二の親友ですわ」
『ええ。千紗さん、初めまして。わたくしは富実樹の曾祖母の花雲恭癒璃亜と申します。どうぞ宜しくお願い致します』
「えっ、あっ、はい。こちらこそ宜しくお願いします……」
千紗は反射で頭を下げていた。
そして、その頃にはようやく頭が動き始めていた。
「あの、あたし、訊きたいことがあるんですけど、いいですか？」
『ええ。どうぞ』
「えっと……癒璃亜様って、元々花鴬国の女王様だったんですよね？」
『ええ。第百五十代花鴬国国王でしたが』
「それなら、このことはご存知のはずでしょう？」
千紗はそう言うと、今までずっと隠し持っていた物を差し出した。
それを見た癒璃亜は、顔色を変えた。
『これっ……！　何故……何故、これを貴女が……！』
千紗が持っていた物は、片手より一回りほど大きい、四角い小さな黒いケースだった。
「これは、だいたい半年ぐらい前にあたしが発見した物です。これが何なのか、由梨亜は知らなかったみたいでした。本当に、何の心当たりもなかったみたいですけど。そうだよね、由梨亜」
「え～っとぉ、ま、待って、ちょっと待ってねぇ……ええっと……う～ん……う～ん……あっ！　思い出したわ！
そう言えば、こんなのあったわね……確かにこれが何なのか、私には全く分からなかったわ。……今も、全然分からないけど」

由梨亜は、半年ほど前にこれを見せられていた。
と言っても、
『ねぇ、由梨亜。今日これ見つけたんだけどさ、何だか分かる？』
『ううん、分からないわ。でも、どこで見つけたの？』
『え～、っとね……うん、すぐそこの庭の植え込みの陰っていうか、とにかく樹とか草とかに隠れてよく見えないとこ』
『ふ～ん……一応お父様に訊いといたら？』
『いいよ。ただあたしが気になっただけだから。じゃあこれ、捨てとくように苓華（れいか）に言っとくね』
『ええ』
といった物で、特に何の変哲もない、ごく在り来りの日常的な会話だった。
由梨亜も、それを見てもすぐには思い出せず、思い出すのにもかなりの時間を要した。
「それ……捨ててなかったんだ」
「うん。実はこれね、庭で見つけたんじゃないんだ」
「そ……そうなの？」
途惑ったように目を瞬く由梨亜に、千紗は申し訳なさそうに首を竦めた。
「嘘付いてごめん。これ、家の客室の中で見つけたの。メモも、一緒にあった。それを由梨亜に言わないままにしたのは悪いと思う。だけどそのメモは、花鴛国に関係する物だったから。だから、由梨亜には言わない方がいいと思って。で、由梨亜はこれを知らなかった。だったら、そのメモを見せて不安にさせることはないと思って、今まで隠してたの」
『そうだったのですか。ですが、それは花鴛国に対する立派な武器となります。今まで、よく隠して置きましたね。本当に立派です。これはもしかしたら、地球連邦が勝てるかもしれません。勿論、これを利用したらの話ですが』
「そうなんですか？　そこまでとは思わなかったな……それでは癒

璃亜様、これを利用した場合、勝算は何パーセントぐらいですか？」
『恐らく……六十パーセントぐらいではないでしょうか』
「あ、あの！　曾御祖母様！！」
由梨亜が、勇気を振り絞ったかのように声を出した。
『何ですか？　富実樹』
「えっと……その、これって、一体何なんですか？！　私だけ、話に付いてけないって言うか……とにかく、置いてきぼりにしないで下さいっ！」
『ああ、ごめんなさい、富実樹。わたくし、富実樹がこれを知らないことをつい忘れてしまいましたわ』
「右に同じ」
千紗はそう言うと、由梨亜に向かって一枚の紙を渡した。
それは、植物の繊維で作られた物で、由梨亜は破れないようにそっと受け取った。
「これっ……！　……何だ。そういうこと……」
由梨亜の、半分納得したような、半分脱力したような声を聞き、千紗は苦笑した。
「やっぱり、これだけで分かったか……。さすが、花鴬国の王様をやってただけあるね」
その千紗に対し、由梨亜はきっぱり過ぎるほどきっぱりと言い放った。
「ええ。これが分からなかったら、花鴬国の王たる資格はないわ。ところで曾御祖母様、そろそろ花鴬国のことについて伺いたいのですが……」
『随分と面白い情報が得られましたわよ。これをどうするかは、貴女達次第です』
「それでは、お聞かせ願えますか。曾御祖母様」
『宜しいでしょう。それでは……』
その後、一時間ほど由梨亜の部屋の明かりは点きっ放しだった。

# 第三章「花鴛国の現在（いま）」―1

「ちょっとマリミアンさん！　こっち来て下さい！　早く行きましょうよぉ～！　あたし、生で初めて見るんですから～！　これを見逃すだなんて、勿体ないですってばぁ！」

「少し待っていなさい、レイシャ。まだ帳簿付けが終わってないわ。もう少しで終わるから……」

マリミアンはそう彼女に言い返した。

マリミアン・カナージェ・スウェール。

それは彼女の名前だったが、ここではただ、マリミアン・カナージェとしか名乗っていない。

マリミアンの異母兄は、花鴛国の貴族の中でトップの位の戦祝大臣である。

またこの大臣職は世襲制である為、官封貴族の『スウェール家』とは、この国の国民にとって有名過ぎるほど有名な家であった。

だからマリミアンが本当の苗字を名乗ることは、スウェール家の世間体にとっても、この国の貴族に対する目にとっても、何よりマリミアンの為にも良くない。

なのでマリミアンは今、夫に先立たれた未亡人の庶民として生活していた。

そして、マリミアンがいる所は、花鴛国の首都、シャンクランではない。

その首都がある、リィウォン大陸でもない。

そのリィウォン大陸は北半球に属していて、その北半球にはもう一つ、シューリック大陸という大陸があるが、そこにもいない。

マリミアンがいるのは、南半球唯一の大陸、ルーシャック大陸の地方である。

とはいってもそれなりに活気のある、国内便限定とはいえ空港まである街ではあるが。

そこはスウェール家とそれなりの縁がある、地封貴族の治める土地だった。

だから、マリミアンはその貴族に融通してもらって、家と店が一つになった中古の物件を譲り受けたのだ。

そうして、一年。

マリミアンは刺繍や縫い物などが得意なので、そういう物を自分で作り、店先やインターネットの通販で売っていた。

商売は順調で、その商品はとても高い値が付けられることもしばしばあった。

「……ちょっとマリミアンさん！　何消えよ～としてるんですかぁ？　ほら、さっさと来て下さい！」

こっそりと二階の自室に戻ろうとしていたマリミアンは、早速捕まってしまった。

「わ、私……遠慮したいのですけれど……」

「何言ってんですか！　こんなの生で一生に一度見れるかど～か分かんないですよぉ？　こ～んな田舎まで、滅多に来る訳ないじゃないですかぁ。ほら、早く！」

「ちょ……レイシャ、ですから、わたく……私、そういうのは……」

「ほらほら！　興味がないだなんて、言わせませんよぉ～」

レイシャのその言葉に、マリミアンは口を噤んだ。

（本当は見慣れている訳ですし……それに顔を見られて、あの方にわたくしの正体があちらに御分かりになられてしまわれるのも、本当はいけないことであって……）

マリミアンの理性がそれを叫んでいるが、レイシャの勢いに全て飲み込まれてしまう。

元々押しの強い性格でないことが災いし、日常生活の面では、全てレイシャ達大学生の同居人が主導権を握っていた。

「あ～！　やっと来た、レイシャ！」

「お待たせ～！　マリミアンさん引っ張って来んの大変だったんだから、場所取るの大変だったって言わせないわよ！　マレイ、ミア、

ユリア！」

そう呼ばれた女性達は、皆十九歳から二十歳の大学生だった。

彼女達は、マリミアンと共に働き生活をしていて離れた所に実家のある、つまりはマリミアンの所で下宿をしている扱いでもある女性達である。

ちなみに、このユリアという女性の名前が呼ばれる度に、マリミアンは少し反応してしまうのであった。

「あっ！　来たよ！　ほらほら！　あ～、やっぱり本物はちょっと渋いけどかっこいい小父様！」

「ほんと～！　ちょっと遠くて、よく見えないのが残念……」

「ねえ、ミア。貴女どっちの方が好み？」

「え？　どっちってやっぱり、シャーウィン様かウォルト様？」

「当ったり前でしょ！　だってあのシュールって……ねぇ？」

「そうそう。まだシャーウィン様とウォルト様はまだオジサン世代だし滅茶苦茶カッコイイからキャアキャア言うことできるけどさ……あのシュールって……もうオジサン通り越してお爺ちゃんでしょお？」

「しかも、あんまり見栄えしないしねぇ」

そう、今日ここには、戦祝大臣のシャーウィン、政財大臣のウォルト、宗賽大臣のシュールが来ているのだった。

彼らは、広場に造られた演台の上に乗って、手を振っていた。

三人の目的は、自らの姿を見せることで戦争に賛成してもらい、技術、人共に協力してもらう為だった。

そして、これが終わった後、戦争に対する説明会が講堂で開かれることになっていた。

マリミアンは、ほぼ一年ぶりに生で見る異母兄の姿に目頭が熱くなった。

（シャーウィン御異母兄様……御元気そうで、良かったですわ……ですが、この国の実権は全て、宗賽大臣が握っていて……嗚呼、この国はどうなるのでしょう。軍隊の管轄は戦祝省……つまり、シャ

ーウィン御異母兄様の下にあります。シャーウィン御異母兄様は、一体どこまで宗賽大臣に抵抗できるのか……嗚呼、家族に……わたくしの血の繋がっている兄弟に会いたい。わたくしの子供達に……富瑠美達も含めた、仲の良かった子供達に会いたい。そして……峯慶様に、御逢いしたい……！）

いつの間にか、マリミアンは堅く拳を握り締めていた。

（峯慶様……まさか、峯慶様とまで御別れするなんて、全く思いもしませんでしたわ……それに、峯慶様は今も意識不明……峯慶様、どうか、貴方だけでいい。貴方だけでいいですから……どうか、御元気になられて下さいませ……！　そして、御逢いしたい……いいえ、それはわたくしの我儘。峯慶様には、宗賽大臣を御止め戴いて、富瑠美を……陛下を御助け頂かねばならないのですから……峯慶様！　どうか一刻でも早く、御目覚め下さいませ……！）

マリミアンは自分の考えでぼんやりとしていたので、ユリアから声を掛けられたのに気付かなかった。

「マリミアンさん……マリミアンさん？　……ちょっと！　マリミアンさん！　聞いて下さいってば！！」

「……あ、あら、ごめんなさい、ユリア。どうかしたの？」

「マリミアンさん、マリミアンさんって、シャーウィン様やウォルト様と、ほとんど同じ世代ですよねっ？」

「え、ええ……そうだけど？」

「だったら、シャーウィン様とウォルト様、どっちが好みですか？」

「……えっ？」

意表を突かれたマリミアンが、思わず目を瞬かせると、

「レイシャとあたしはウォルト様の方がかっこいいって言ってるのに、マレイとミアはシャーウィン様の方がかっこいいって言って譲らないんですよぉ。それで、同じ世代のマリミアン様なら、どっちが好みかなぁって」

「ああ、そういうこと」

マリミアンはくすりと笑った。

つまりは、マリミアンが好みだった方がよりかっこいいという訳だ。

「私は、どちらともそれほど好みではないわ。私の中で最高なのは、今は亡き夫ですもの」

さらりとマリミアンは言ってのけたが、途端に四人が不満そうな顔になって振り返った。

「え～っ！　じゃあ、どっちかって言うと、どっちですか？　それだけは答えて下さい！」

「ん～、そうねぇ……二人ともあの方とは似てないけど……どちらかと言うと、シャーウィン――様の方かしらね？」

マリミアンは危うく『御異母兄様』を付けそうになり、言葉を飲み込んだ。

だが、四人はそれに気付いていなかったようだ。

「やったぁ！　や～っぱりシャーウィン様の方がかっこいいのよ！」

「え～！　マリミアンさん、ひど～い！」

「えっ？　でも、私がシャーウィン様の方が好みだって言ったのは、シャーウィン様が、私の夫のお義兄さんに似ているから言ったのよ？　だから、あまりかっこよさでは決めていないわ。というか、かっこよさではどっちもどっちでしょう」

（ええ。わたくしは、嘘なんて吐いていないわ。わたくしの夫……つまり峯慶様のお義兄様の一人は、シャーウィン御異母兄様ですものね……）

「え～っ！　そんなぁっ！」

「ほらほら、前を向きなさい。もうそろそろ移動してしまいますよ？」

マリミアンが注意を促すと、四人は一斉にザッと振り向き、歓声を上げた。

「きゃ～っ！シャーウィン様ぁ！　頑張って下さ～い！！」

「ちょっと何言ってんの！　ウォルト様ぁ！　シャーウィン様に負けないで頑張ってぇ～！！」

「ウォルト様、かっこいい～～！！」
「シャーウィン様の方が、かっこいいですよぉ～！！」
マリミアンは苦笑しながら、真っ直ぐシャーウィンを見上げた。
辺りは歓声を上げたりする人が多いのでそれなりに煩いのだが、その中でも特に四人の声は響いたらしい。
シャーウィンとウォルトがこっちを振り返り、手を振って来た。
「んきゃ～～～～～！！！」
……凄まじい、悲鳴が上がった。
あまりの声の大きさに、マリミアンは思わず耳を塞いでしまった。
それが目に留まったのだろう、マリミアンとシャーウィンの目が合った。
シャーウィンは微かに目を瞠り、それで何とか抑えたようだ。
マリミアンはそんな異母兄の姿に仄かに微笑み、首の辺りで指を立て、小さく振った。
それは、マリミアンが小さな時から気に入っている仕種で、シャーウィンならば気付いてくれるはずの仕種でもあった。
シャーウィンはそれを見たからだろう、やはりそうかとの確信を深めたようで、にっこりと笑って視線を他に移した。
そして、その微笑みを目にしたのだろう、マレイとミアは、更に
「ギャ～～～～～！！」
と意味不明な叫び声を発した。
そして、彼らが講堂に移動すると、マリミアンは声を掛けた。
「さ、そろそろ戻るわよ？」
「え～……まだ、後ろ姿が……」
「もう顔は見えないでしょう。まあ……貴女達はここにいてもいいけど、私はお店に戻るわね」
マリミアンはそう言うと、店に戻って行った。

# 第三章「花鴛国の現在（いま）」―2

「戦祝大臣殿……戦祝大臣殿？　どうかなされましたか？」
「あ、いえ……少し気を抜いていただけですから、御気になさらず、政財大臣殿」
「まあ、確かにあの人出は今まで以上でしたからね……それに、あの少女達の悲鳴は……」
ウォルトは苦笑した。
あそこには沢山の人がいたが、その中でも凄まじい悲鳴を上げていた四人の女性のことは、よく覚えていた。
「私達のことを見ようとして沢山の人が集まるのはよく分かりますが……それにしても、あそこまで悲鳴を上げられるとは、思いもしませんでしたね」
「ええ。そう言えば戦祝大臣殿、覚えておいでですか？　あの少女達の後ろに、我らと同年代であろう女性が御立ちになられていたのを」
「ええ、勿論です。恐らくあの女性は、あの少女達の誰かの母親ではないでしょうか？　それか、近所の顔見知りの女性だとか」
誤魔化そうと、敢えて曖昧なことを言ったシャーウィンだったが、ウォルトはそれに乗せられなかった。
「ああ……なるほど。戦祝大臣殿はそう御考えになられたのですね」
「……？　ということは、政財大臣殿は、違うことを御思いになられたのでしょうか？」
シャーウィンが警戒しながら言うと、
「ええ。あの女性には、些南美王女殿下の面影が窺えました。先王陛下とも、僅かでしたが似ておいででしたね」
そのウォルトの鋭い観察眼に、シャーウィンはすぐには声が出なかった。
「……さすが政財大臣殿ですね。鋭い観察眼です。ほんの僅かしか

御覧になられていない御婦人の御顔を憶えておいでで、おまけにあまり見知ってはいらっしゃらない人物との類似点まで見出すとは。貴殿の五人の奥方達が、揃いも揃って美女揃いで、おまけに顔立ちも似通っていることもあるのですかな」

その鋭い反撃に、ウォルトはサラリと言い返した。

「何の。第五妻まで持てるというのに、第二妻までしか持たない貴方の方が、素晴らしい観察眼を御持ちでいらっしゃいますよ。審美眼と言い換えてもよいかも知れませんね。私の妻は確かに美しいですが、それだけに争いが絶えなくて。いつの世も、女の争いほど大変な物はありませんよ。貴方の家は、平和そうで羨ましい」

またもや、シャーウィンは詰まった。

確かに、シャーウィンには妻がたったの二人だけだ。

第一妻の方が貴族の娘で、第二妻が、何と普通の庶民の娘だった。勿論、庶民の娘を娶る貴族がいない訳ではない。

だが、それは身分の低い貴族がほとんどで、その中でも第四妻や第五妻が大抵である。

しかも、大貴族なのに第二妻までしか娶らないというのも、大変珍しかったりする。

つまり、シャーウィンは貴族の中では珍獣中の珍獣だったりするのだ。

「ええ。無駄に大勢の妻を娶るよりも、数は少ないながらも、真実愛している女性を娶る方が私の主義に沿っていますからね」

「ほほう、それでは話を戻しますが、貴方はあの女性が似ていたと、御思いですかな?」

「いえ、私はそこまでじっくりと御顔を拝見してはおりませんでしたからね。そこまではよく分かりませんな」

と、和やかに、あまり和やかとは言えないような話をしていた二人の元に、闖入者が入り込んで来た。

「おやおや、御若い人はよいですね。あれほどの人混みを潜り抜けてもまだ、話をする余裕があるのですから。私のように七十代にも

なってくると、そこまでの余裕は失われてきておりましてな」
「何を仰られるのでしょうか。貴方は今現役で働いていらっしゃる大臣の中では最高齢でいらっしゃるではありませんか。まだまだ現役で御働きになられますよ、宗賽大臣殿」
その言葉に、シュールは皺の浮いた顔に笑みを浮かべる。
「ふふ、やはり御若い人に励まされると元気が出ますね。ありがとう御座います」
「おや、それをいうのなら、私達もやはり若くはありませんよ。私はもう四十代の後半ですし、戦祝大臣殿も既に五十代に入っておりますから」
ウォルトの言葉に、シュールは苦笑した。
「そうですか……つまりは、私達は皆年寄り、という訳ですな」
「……ですが、宗賽大臣殿、何かあったのですか？　無駄に御喋りをする為に、貴方が来るとは思えませんし」
「ええ。確かに、私はそのような性格ではありませんね。それでは、戦祝大臣殿、政財大臣殿。明日の八時三十分に、ここを出発するようです。そして、ここの地封貴族との対談を致します」
「そうですか。宗賽大臣殿、わざわざありがとう御座います」
「ありがとう御座います。宗賽大臣殿、ゆっくりと御休み下さい。それこそ、私達は年寄りなのですから」
「ええ。そちらこそ」
そう言うと、シュールは部屋を出て行った。
この三人では、シャーウィンとウォルトで、仕切られているとはいえ、結局は続いている一つの部屋を、シュールで一つの部屋を使っていた。
その理由は、シュールの方が二人とは歳が離れているので会話もしにくいだろうし、雰囲気も気まずくなるだろうということと、シャーウィンとウォルトが続き部屋の方が気楽だし、お金も掛からないから、ということになっている。
だが本当の理由は、戦費に使う分の費用を捻り出す為と、シュー

ルが今王宮と政治を牛耳っているので、それに配慮をした結果である。

シャーウィンが、ほんの少し溜息をつくと、ウォルトがくすりと笑って言った。

「それで、戦祝大臣殿？　先程の女性について、私の考えを述べても宜しいでしょうか？」

「おや、まだ終わっていなかったのですか……ええ、どうぞ」

軽く辟易して言うと、

「それでは申しますが、戦祝大臣殿。あの女性は……貴方の異母妹である花雲恭由梨亜様、マリミアン・カナージェ・スウェール様では御座いませんか？　そうすれば、富実樹先王陛下や些南美王女殿下の面影が微かにあるのも、納得がいきます。生憎、私は何年も前に、遠目ながらも御顔を拝見致しただけに過ぎませんからね」

「……まさか。我が異母妹、マリミアンはシャンクランの屋敷におります。もし異母妹が屋敷を出てこんな国の外れにいるとなれば、現在当主である私の耳に入っていない方が可笑しい」

（……政財大臣……！　どこまで鋭いのだろうか、この男はっ！　だが……まさか、マリミアンがこれを見に来るとは思わなかったな。いいや、大方、あの同居人の少女達に引き摺り込まれたのだろう。昔から、御転婆かと思えば妙に自己主張が少なかったりして……特に、当時王子であらせられた峯慶王と初めて御会い致した時から、本当に大人しくなってしまって……）

シャーウィンは内心穏やかではなかったが、それを何とか誤魔化して見せた。

今はただの官封貴族という地位にあるマリミアンだが、元はと言えば先々代国王の妻、妾。

今は除籍されているものの、かつては花雲恭由梨亜、由梨亜妾の名を得ていた人物である。

そんなマリミアンが、いくら強く希望しそれを渋々ながらも強引に認めさせたとはいえ、庶民として働いていると知られれば、国内

では貴族全体が呆れられ、軽蔑されかねない。
貴族の中でも、スウェール家もこんなものか、零落れた家に成り下がったものだ、と言われかねない。
国外では、花鴬国（かおうこく）王家は、何故かつての王の妻を（国内外共に、マリミアンが王籍から除籍されていると発表していない為）、離婚もしていないのに庶民と同等に扱うのか、と言われかねない。
つまり、どの面から見ても、何もいいことはないのである。
「ほほう……そこまで貴方が仰るのであれば、そうなのでしょうな」
ウォルトはうっすらと笑い、呟くように言った。
「ええ。そうですとも。私の異母妹は四人おりますが、マリミアン以外は全て貴族の家に嫁いでおります。そして、いずれも決して御金に困らないだけの身代を持つ家柄です。マリミアンは今現在スウェール家におりますが、勿論困ることなどありません。なので、わざわざこんな僻地にまで赴き、働く意味がありません。恐らく、他人の空似か……可能性としては低いと思いますが、政財大臣殿の見間違いかと思います」
シャーウィンは声に力を込め、確信を持って言った。

その次の日の夜、シャーウィンは眠らずにしきりと寝返りを打っていた。
（あいつめ……あいつめっ！　あんな顔をして……よくも抜け抜けと！）
普段はそんな言葉遣いをしないのに、その頭はシャーウィンの知り得る最上級の汚い言葉で一杯だった。
そうでもしないと気が休まらないし、それでもまだまだ不充分なくらいだったからだ。
本当は、大声で喚きたい気分だった。
（あいつめ……あいつめ！！）

シャーウィンの脳裏に、シュールの顔と、今日の午前中に行っていた演説が蘇って来た。

（畜生……畜生！　何で、あいつがあんなことを言うのだ?!　自分が……自分がやったくせに!!）

今日の午前中、三人は地封貴族に会った後、公会堂に向かった。

そして、そこで一人ずつの演説を行ったのだ。

順番は、シャーウィン、ウォルト、シュールだった。

自分の演説が終わり、ウォルトの演説も、シャーウィンにとって問題なく終わった。

問題だったのは、シュールの演説だった。

シャーウィンが絶句した場面が、彼の脳裏に焼き付いていた。

「つまり、昨年ですね。その年、峯慶王が暗殺者の毒に御倒れになられ、先王陛下も行方不明にならせられました。この国にとって、凶事が重なった悪夢の年と言えましょう。そして、そんな先王陛下が御提案なされ、峯慶王が後押しなされた案件が、『地球連邦の宇宙連盟への加盟』であったのです。先王陛下は戦をできるだけ回避したいと御考えであらせられたので、今回の結果をもしも御知りになったとしたら、御悲しみになられるでしょう。ですが、これはその御二人の願いなのです。それに御協力下されば、きっとまだ御眠りになられている峯慶王も、御喜びになるでしょう。皆様、峯慶王が御無事に御目覚めになられるよう、先王陛下が御無事に見付かられるよう、御祈り下さい。そして、この度の戦に、どうぞ御協力を、御願い致します」

そう、シュールは言ったのだ！

自分が、峯慶に毒を盛る手配を整えたのに！

そして、その当時戦祝大臣だったノワールと政財大臣だったフォリュシェアに濡れ衣を被せ、終身刑を負わせたくせに！

去解鏡（きょかいきょう）の結果を捻じ曲げるという、人として信じがたい悪事をやったくせに！

（よくもそこまで……！　確かに、私の義弟（おとうと）と姪の悲願は『地球連

邦の宇宙連盟への加盟』だった。だが、それを利用し自らの野心を叶えようとしている御前に、そんなことを言う資格など、ない！

だが……私には、そんなことを言う権利さえ、ない……。私がそんなことを言えば、戦祝大臣の地位剥奪、戦祝大臣の地位は私の息子、レイウォン・ミシュー・スウェールに譲ることになる。今でさえも、宗賽大臣とは親子ほどに歳が離れていて逆らうことも難しいというのに……これが更に離れてしまったら、逆らうことなど事実上不可能に近い。宗賽大臣ではなくても、あまりにも若過ぎる大臣にすんなりと従う貴族や官吏などいる訳がない。それに……政財大臣殿は、宗賽大臣に、気付いていらっしゃらない！）

そう、確かに前戦祝大臣のノワールと前政財大臣のフォリュシェアは、真実を知ったが為に濡れ衣を着せられた。

だが、シャーウィンは投獄される前のノワールと少しだけ言葉を交わす時間があった。

そこで、シャーウィンは『去解鏡を視ろ』と言われた。

家のどこに去解鏡が隠してあるか、どのような質問をすれば、正しい答えが引き出されるかも言われた。

そして……投獄された次の日の、まだ日も昇っていない早朝に視ること、そして視終わったらただちに去解鏡を壊し、処分することも。

シャーウィンは、たった独りでそれを行い、そして涙を流しながら去解鏡を壊した。

（父上と政財大臣殿は、無実だったのだ。だから、あの投獄は、冤罪……！）

だが、シャーウィンはそれを公表しなかった――いいや、公表できなかった。

真実を明らかにするのは簡単だ。

生放送の記者会見でも開き、そこで言えばいい。

だが、それを聞いた国民は、宗賽大臣の圧政に苦しむことになる。

去解鏡でシャーウィンは、その為の根回しまでとっくの昔に済ん

でいることを、知っていた。
だから、公表できなかったし、誰にも話すことができなかった。
そして、去解鏡を処分していたので、家宅捜索で新たな罪を認めるようなことにはならなかった。
その一方、ウォルトは何も知らない。
本当に、ノワールとフォリュシェアが罪を犯したと、信じ切っていた。
そして、国の為に自分の一切を捧げることによって、父の贖罪をしようとしていた。
（本当は……貴方の父は、何も罪を犯していないのに！）
だから、シャーウィンはそんなウォルトの姿を見る度に、腹立たしいような、苛々するような、真実を語りたいような気分に襲われる。
本当は、ノワールもフォリュシェアも、悪くはないのだから。
悪いのは、宗賽大臣、シュールなのだから……。

# 第三章「花鴛国の現在（いま）」―3

「陛下ぁ！　こちらも御願い致します！」
「はい！　あ、レーン！　ここに積み上げているキエシュを、各省に配って頂けるかしら？」
「えっ！　私は後宮の侍従で……」
「他に人がいないのですから、代わりにやって下さいませ！　今は人員不足なので御座います！　これでは、他の人が戻ってくる前に溢れ返ってしまいますわ！　ほら、さっさと持って御行き下さいませ！」
富瑠美（ふるみ）の怒号に、その若い侍従は飛び上がった。
「は、はいぃ～！」
その僅か一分後。
再び執務室の扉が開いた。
「陛下！　本日締め切りの案件にはもう御署名を――」
「その前に、貴方は外務省の人間ですね？」
「は、はい！」
その返事に、富瑠美は一つのキエシュを、王とは思えない凄まじい形相で投げ付け、それを危うい所で目の前の人物が受け取った。
「だったらこれは一体何なのですかっ？　これでは諸外国が納得致しません！　これが外国から送られて来られた物として考え、さっさと作り直してこちらに御持ち下さいませ！　締め切りは本日ですっ！」
「そ、そんな無茶」
その言葉が言い終わらないうちに、富瑠美は言い募った。
「何が無茶ですかっ？　本日締め切りの物を昨夜御提出なさるような常識外れの省の人間に言われたくは御座いません！　幸い、今は午前十時。これをしっかりと練り直し作り直して、夕方の五時までで、延長しても六時までには御提出下さい！」

「そ、それをどうやって上司に言えって言うのですか、陛下！」
その言葉に、今まで会話を交わしながら書類を捌いていた富瑠美は、視線を上げた。
「貴方の上官は、一体誰ですか？」
「あ、貴族の副大臣の、シェイ殿です」
「……ということは、貴方は官吏ですね」
この王宮では、貴族と官吏が共に働いている。
その見分け方は、貴族は王宮で働いている貴族のことを『官封貴族』と言い、官吏はただ『貴族』と言うことだ。
その理由は、庶民にとって官封貴族も地封貴族も貴族だが、貴族にとっては官封貴族と地封貴族は違うからだ。
そして、互いに官封貴族であること、地封貴族であることを誇りに思っている。
けれど庶民にとっては、そんなことは『どうでもいい』ことなので、このような見分けが付くのだ。
「それでは、わたくしが言っていたと仰り、御伝え下さい。それでもし御不満を訴えるようでしたら、貴方を官吏の副大臣であるマレイ殿の部下に致します。そしてシェイ殿の省の移動、降格を致します。そんな我儘を仰る方は、副大臣として不適格ですので。なので、そうでしたらわたくしに御伝え下さいませ」
「は、はい。それでは失礼致します」
そう言うと、彼は部屋を出て行った。
その途端、富瑠美は再び厖大な量の資料に目を通し始めた。
何故、富瑠美がこんなことになっているのか。
その理由は、簡単過ぎるほど簡単だ。
何故なら、ここにシャーウィンも、ウォルトも、シュールもいないからだ。
それぞれの省で対応できる程度の物は、副大臣で対応できる。
だが、その副大臣にも本来の仕事があり、そこに無理矢理押し込める量という物も限度がある。

その結果、富瑠美や麻箕華、その他の王族達で分担してその分の仕事をし、おまけに富瑠美には、三人の代わりに最後の署名をしなければならないという役割までである。

だから、富瑠美は目の回るような忙しさの中にある。

そしてもう一つ、今花嶌国が地球連邦と戦おうとしていることも、その原因の一つだ。

他国には、貿易などでその影響が出る為、その説明が必要になってくる。

また軍備を整えたり、いざと言う時に徴兵や志願兵を募ったりする時、それに備えて国民に理解を求め、協力して貰うということもある。

シャーウィン達が今、国中を回っているのもそのうちの一つだ。

（……早く、御帰りになって頂けないでしょうか。このままでは、わたくしが保ちませんわ。あまり長い間大臣三人の仕事を分担するのも、考え物ですわね。三人揃って御出掛けになるのに反対しておけば良かったですわ）

富瑠美は頭の片隅でそんなことを考え、その考えに自嘲した。

（わたくしったら……何てことを考えているのかしら。宗賽大臣に反対しても、その意見は無視されるだけだと言うのに。わたくしは、もう……逆らえやしないのに。嗚呼……御父様、御母様、御異母姉様……逢いたいですわ。そして、御助けして頂きたい。わたくしには、確かに政治の才能がありますが、それは頂点に立つ政治家という意味ではなく、その補佐をする人間としての才能ですわ。誰かに御助けして頂かないと、わたくしは、わたくしを活かせない……）

富瑠美は、書類を捌く手を止め自嘲した。

（わたくしは御父様にとって二番目の子供ですが、御異母姉様がいない今、わたくしが一番上の子供……。もう、誰にも頼れません。弟妹達には、精々兄弟としての助けしか求めることしかできませんし、年長者の助けが必要でも、あの深沙祇妃には決して頼れない。大臣達には、精々臣下に対する相談事ぐらいしか……。もう……わ

たくしは、駄目……！）

強く噛み締めた唇から、血の味がする。

もう、自分が限界に近いことは、理解していた。

（けれど、宗賽大臣にあの御約束を取り付けて置いて良かったですわ。一つだけ、どんな願いでも叶えるという、約束……。あの約束を使えば、わたくしは休むことができる。……そうですわ！　こうすればいいのです。そう、こうすれば絶対に休めますし、わたくしは楽しいですし、一応御仕事もできます。……そう、このことを望みましょう。これは、わたくしを最も有効活用でき、それでいて休みの取れ仕事もできる、宗賽大臣から逃れる唯一の策ですから……）

富瑠美はそう考えると、ふっと心が軽くなった。

（……そうですわ。そうしましょう。それが、一番いいですわ）

富瑠美は先程までの殺気立った様子とは反対に、ウキウキと仕事をしていった。

そのせいで、先程までの富瑠美の様子を知っていた官吏や貴族がその様子を見た時、一体陛下に何があったのか、と心底怖ろしく思ったのだった。

ふと、扉を叩く音がして、杜歩埜（とふや）は顔を上げた。

「……杜歩埜御異母兄様（おにいさま）？　今、御時間宜しいでしょうか？」

「……些南美（さなみ）か？」

杜歩埜が自室の扉を開けると、些南美がキエシュを胸に抱えて立っていた。

「些南美？　一体、どうしたのかい？」

「……私のことも忘れられては困りますよ、杜歩埜異母兄上（あにうえ）。いくら杜歩埜異母兄上が些南美姉上のことが御好きでいらっしゃっても、そのことは周りの誰にも覚られてはなりませんから」

そう言ったのは、柚希夜（ゆきや）だ。

「……おや。柚希夜もいたのか」
その声には、先程些南美を見た時ほどの覇気はなかった。
それに柚希夜は苦笑し、言った。
「ですから、そういった物言いは、他に人がいない場合のみにして下さい。まだこのことは秘密なのですから」
柚希夜はついこの前、十五歳になった。
富実樹（ふみき）と別れた時、まだ十三歳という幼さの残っていた柚希夜だったが、富実樹と別れてから背がグンと伸び、声変わりをし、大分大人っぽくなって来た。
既に身長は姉の些南美を抜き、百七十を超えている。
富実樹の身長が百六十センチ台後半で、些南美の身長が百六十五センチほどというそれなりに背の高い姉がいることを考えると、柚希夜はこれからももっと伸びるだろう。
杜歩埜は微妙な笑いを柚希夜に返すと、二人を部屋に入れた。
「……とにかく、部屋に。そう言えば、何故二人はここへ？」
その問いに、手近なソファーに座り、キエシュを目の前のテーブルに置いた些南美が笑って答えた。
「ええ。わたくし達、今まで最低限の政治の知識しか持ち合わせて来ませんでしたの。わたくしも柚希夜も、この王宮に留まり政治をする気など更々なかったものですから。今まではそれで充分だったのです。ですから、いきなりこんなに書類を処理しろと言われましても、困ってしまって……それで、杜歩埜御異母兄様に御手伝いして頂けないかと思いまして……ねぇ、杜歩埜御異母兄様。御手伝い頂けませんか？」
些南美の甘えるような問いに、杜歩埜は苦笑して答えた。
「ふふ、そんな声を出されたら、私が断りにくいではないか。まあ、私に断る気はないし。いいよ」
「まあ！　杜歩埜御異母兄様、ありがとう御座いますわ！　これで皆も救われます！」
「えっ？」

「はっ？」

その答えに、杜歩埜も柚希夜も間抜けな声を出した。

だがその二人に構わず、些南美は扉を開け、外に向かって声を掛けた。

「皆、いいですわよ？　どうぞ、御入り下さいな」

その言葉で、大勢の弟妹達が一緒に入って来たのだ！

「んな……風絃に、早理恵に、涼聯に、羅緯拿に……私は、六人も相手にしなければならないのか……！」

ちなみに、涼聯は莉未亜貴の次男で第六王子、峯慶の第十二子で、羅緯拿は沙樹奈后の次女で第七王女、峯慶の第十三子である。

今政治の道に今いるのは富瑠美と麻箕華だけだが、麻箕華が嶌大臣なので、その麻箕華の兄である篠諺は、将来建築デザイン関連の企業に就こうと思っていたが、政治に詳しい。

そして富瑠美以外の深沙祇妃の子供達は、富瑠美とそれほど仲がよいとは言えずに、妾の子供達とは仲が悪い為、こちらは声を掛けようとすらもしなかった。

そして阿実亜女の娘の璃枝菜と、息子の第五王子、峯慶の第十子である鳳蓮の姉弟は官吏志望だったので、このような書類が来ても慌てることはない。

結果、その他の弟妹達が集結した訳である。

その後、六人の異母弟妹を相手に自分の書類も片付けなくてはならず、杜歩埜はとても忙しい日々に突入したのであった……。

# 第四章「再会」―1

「お～い、由梨亜(ゆりあ)！　もう荷物の準備は終わったのか？」
「終わったわ！　千紗(ちさ)の方手伝って来るから、香麻(こうま)と睦月(むつき)も一緒に来て！」
「ちょっと由梨亜！　何言ってんのよ？　あたしももう終わりましたぁ！」
「あら、千紗にしては珍しいじゃない。何？　天変地異の前触れ？　あ、花鴛国(かおうこく)がもう攻めてくるとか？」
「そっちこそふざけたこと言わないでよ。言霊って知ってる？　口にした言葉通りのことが起こるっていう力。もし本当に今日とか明日とかに花鴛国が攻めて来たら、由梨亜の責任だよ？」
「はぁ？　何言ってんのよ。そんなの関係ないじゃない。私はそんな言い掛かりに責任を持つ気はありませんっ！」
二人が睨み合うと、睦月と香麻が割り込んで来た。
「まあまあ二人とも、ちょっと落ち着きなよ」
「今は時間ないんだろ？　ほら、さっさとお義父(とう)さんに報告に行くぜ」
「はいはい」
「は～い……」
四人は耀太(ようた)の元へと急いだ。
今は、耀太からの衝撃的な話があってから一週間経っていた。
彼らは地球連邦の首都、イギリスに集まることになっていた。
最初はアメリカの方が、土地があるからいいのではないかとなっていたらしいが、やはり首都の方がいいとなり、日本州の上流貴族の中でも最も影響力の強い一族の直系数家族と、直系の皇族と天皇がイギリスに行くことになった。

「お父様！　あたし達準備終わったよ！」
「ああ。早いな」
「早くなんかないわよ。それより、お父様とお母様は終わったの？」
「い、いや、その……」
「まだ終わりません。私はこれぐらいでよいと思うんですが……」
「奥様はこれでは多いから減らすようにと仰ったのですが、旦那様はこれでは少ないと仰って……」
「まあ、意見の相違ってやつね」
「う～ん……あたしは沙羅が妥当だと思うなぁ。これ以上増やしても余るだけだと思うし、減らすのもいざとなったら大変かも知れないし……」
「そうだなぁ。俺も千紗に賛成だ。というより、これだったら増やすよりも減らす方が妥当だろう」
「俺も同感だ」
そう言われ、耀太は詰まり、瑠璃も少し嬉しそうな顔ながらも詰まった。
「さあ、お嬢様方の賛成は頂けましたから、これでいいですね？旦那様、奥様」
と、長らくこの屋敷に仕えている、古参となってしまった執事の風斗が言った。
彼は耀太が産まれた時から仕えているので、耀太でも迂闊に逆らいがたい人物でもあった。
「ほら、お父様、お母様。お返事は？」
「……はい。これで、頼む」
「ええ。宜しくお願いします」
その二人に風斗は頭を下げると、四人に向き直った。
「ところでお嬢様、お坊ちゃま、荷物はご用意できましたか？」
「あ、はい。できてます」
身分で言えば千紗や由梨亜の方がこの風斗よりは高いが、どうも

この執事だけには反射的に敬語を使わざるを得ないような雰囲気があり、二人は風斗に無意識で敬語を使っていた。
「……それより風斗さん。俺らにお坊ちゃまは、やめて下さいって何度も言ってるんですが……」
「お気になさらず、お坊ちゃま。これはわたくしの趣味ですので」
……ズバリと言い切られた。
睦月は言葉の持って行き先をなくし、ただただ沈黙していた。
その二人の様子に、由梨亜はプッと吹きだして言った。
「さあ、二人とも。時間ないんだから、さっさと荷物取りに行きましょ？」
「あ、ああ」
「はい。畏まりました」
そう言うと、沙羅と勇という召し使いが耀太と瑠璃の荷物を持ち、そして四人の荷物を苓華、鈴南、陵多、章平に持つように言い、彼らを階下に送り出した。
「それでは、皆様。出発まであと一時間ほどありますから、お茶でも飲みますか？」
「ええ。風斗。お願いします」
そう言うと、六人はソファーに座った。
「それにしても……とうとう、日本州を出るのね」
「うん……レイメーア大学はアメリカの方にあるから、その時に久し振りに出るのかと思ったけどさ……」
「ああ。俺も、日本の外には修学旅行とか……あと、家族旅行で一、二回？　ぐらいかな？」
「俺もだ。何か、アメリカもイギリスも日本と同じ地球連邦っていう一つの国だけどさ……何て言うかな、滅多に行かないから、結構近い外国って感じすんだよね」
「まあ、それには地球連邦の歴史が関係しているだろうな。何しろこの星には、かつて二百国近い国々が存在していたし、この国は連邦制だから、そのせいだろう。だがそれと比べると、他の国はもっ

と『一つの星が一つの国』という意識が強いな」
「ふ～ん……じゃあ、地球連邦の方が、花鴛国と比べると不利だわ」
「あら、どうして？　由梨亜」
「だって、花鴛国は同じ国って意識強いから、戦いに協力しやすいでしょ？　国が協力を呼びかければ、それに愛国心の強い人はすぐ協力する。でも地球連邦の場合、州内での結び付きが強過ぎて、自分の住んでる州に対する愛情は強い。でも、国全体での結び付きとか、愛情とか……そういうのは、他国と比べると驚くほど稀薄なのよ。だから、まだ他国と比べると建国約四百年っていう新興国だっていうこともあるけど、国内の結び付きが弱いせいで、他国から侮られやすい。っていうか、完璧侮られてるわ」
「由梨亜、すご～い！」
「ああ。さすがだな。千紗より頭がいいだけある」
「こんなに頭がいい娘がいるって、何だか嬉しいわねぇ」
「ちょっと香麻、何よ。あたしと由梨亜はおんなじぐらいの頭の良さですからねぇ～」
　千紗と香麻と瑠璃の素直な称讃に対し、睦月と耀太の顔は険しくなった。
「なあ、由梨亜……どうして、そこまで知ってるんだ？」
　睦月のその問いに、由梨亜は少し間を空け、あっさりと答えた。
「ほら、私、中一の頃から三年半……だいたい四年ぐらい、かな？
　レイリア国で働いてたでしょ？　その時地球連邦の出身だって言って働いてたんだけど、私の年齢での差別よりも、地球連邦出身だってことでの差別の方が強かったわ。他国出身の同い年の子と私が同じとこで働きたいって言ったことがあるんだけど、あと一人しか雇えないって言われてね、試験を受けたんだけど、結局その子の方が採用されたの。それは純粋にそこで必要とされていた才能での問題だったんだけど、そこを出る時にその子が言ったの。
『結局、あたしの方が採用されたわね。所詮は地球連邦出身ってことなのかな。貴女は知らないようだから、教えるわ。あたしも最初

は、貴女が地球連邦出身だってことで貴女に対する差別感はあった。だけど、貴女自身を知って、それは偏見だって分かった。でもね、みんながみんな、そういう人だとは限らないわ。貴女が地球連邦出身ってだけで、貴女自身を見ようともしない。差別される。いじめられる。だから、こういう採用関係以外では、信用できる人以外には地球連邦出身だってこと、自分から積極的に話さない方がいいわよ』

って。確かに、それは正しかった。私はその後も採用試験を三回受けたんだけど、そのうちの二回は、地球連邦出身だってことで断られたわ。つまり、地球連邦に対する諸外国の見方は、それぐらいまで厳しいってこと」

「……由梨亜。よく、そこまで悟ったな」

「ありがと。でもこれぐらい、外国に長期滞在した地球連邦人なら、全員分かるはずよ。よっぽど鈍い人じゃない限りね」

由梨亜はそう悪戯っぽく言い、誤魔化した。

花鴛国を出て、早二年。

たまに地球連邦の人が知らないようなことを口走ることがよくあったが、由梨亜はそれを誤魔化す術を身に付けていた。

花鴛国では、自分の考えは受け入れられない。

だが、花鴛国で過ごした日々のせいで、由梨亜の中には花鴛国の考えも入っていた。

そのせいで、時々このように感心されたり、奇異の目で見られたりする。

大勢の人に、異端視されるのは辛い。

深い悲しみを覚えもする。

だが、自分の大切な人が認めてくれるのなら、決して不幸せではない。

（私は……私の大切なものを護る。たとえ危害を加える者が、血を分けた兄弟や、父や母であろうとも、決して、私は……）

そして、穏やかな一時は、流れ去って行った……。

「皆様、着きました。ここが、これから私達が泊まる所です」
風斗の声で、乗り込んでいた人は車を降りた。
千紗は降り立ってすぐに辺りを眺め回したが、誰も道を歩いていなかった。
それもそのはず、この州に住んでいた庶民は、最低限必要な人を残し……と言っても、ほんの数百人程度を残し、他の州に移っていたのだ。
なので、ここの住民はほとんど貴族という、離れ小島になっていた。
ただ、彼らは自らの栄華を極める為ではなく、いざとなったら生命を投げ出す為――ノブレス・オブリージュを果たす為に来ているのだが。
他の、多くの人達を護る為に……。

千紗は、用意された部屋に入ると、ベッドの上に倒れた。
「ねぇ、由梨亜！　ここのベッド、フカフカで気持ちぃ～！」
「はいはい。ほら、さっさと荷解きしちゃいなさい」
「は～い」
二人の為に用意されたのは、二十畳ほどの洋室だった。
もともとここはホテルだったらしく、部屋の中にトイレとお風呂も付いていて、特別用のない時はずっと部屋の中にいれた。
さて、ここに来たメンバーだが、『本条家』という括りで見ると、本条家として来たのは僅か八人、千紗、由梨亜、睦月、香麻、耀太、瑠璃、風斗、澪という、女性の中で最も古参の召し使いだけだった。
ちなみに他の部屋は、睦月と香麻、耀太と瑠璃、風斗と澪という

部屋割りになっていて、他にも日本州から来た人も泊まっていた。

「ふぁ～あ～。退屈ぅ～……」

「千紗、そんなこと言っちゃ駄目じゃない。だって、お父様やお母様達は、連日ご挨拶に行ってるのよ？　私達が暇なのは、まだ平和な証拠。いつ、花鴛国が攻めて来るのか分からないんだからね」

「由梨亜はそう言うけど、香麻に逢えなくて淋しくないの？」

千紗の拗ねたような問い掛けに、由梨亜は詰まった。

「そ、そりゃぁ、寂しいわよ。でも、二人はお父様とお母様に付いてなきゃいけないし……私達がぐうたらしてられんのも、あともうちょっとだけだし……」

由梨亜は呟くようにして言うと、窓の外を眺め続けた。

「何よ、あともうちょっとって」

「何、お父様から聞いてなかった？」

「何が」

「私達、あと何日かすれば天皇陛下のご一族と面会するんですって」

「え……そうなの？」

固まってしまった千紗に、由梨亜は笑って答えた。

「ええ、そうよ。お父様達が今いないのは、他の貴族の人の挨拶回りに行ってるからだけど、他の貴族もやってるし、天皇陛下もやらないって誰が決めたの？　さすがに天皇陛下が挨拶して回るのは無理だから、少しずつ呼んでるんですって。で、確か……そうそう、明々後日だったっけ？　明々後日の、午後にうちが面会予定だって言ってたわよ」

「……何で、もっと早く言ってくれなかったのぉ？」

「あ、ごめん。完璧、忘れてた」

由梨亜のその言葉に、千紗はガクッと脱力した。

「ねぇ、由梨亜。それって忘れることじゃないでしょうっ！　あん

た、わざと黙ってたね！」
「え～。何のこと～？」
そう言いながらも、由梨亜は千紗と距離を取っている。
顔はニコニコ笑っているが、目線は鋭い。
千紗はそんな由梨亜の様子を見て、こちらもまた顔はニコニコ笑いながら言った。
「ふぅ～ん……そこまでの覚悟があるってんなら、上等じゃないの。あたしと勝負したいって訳？」
「ええ。やっぱり千紗の言う通り、ちょっと暇で身体が鈍りそうだったもんでねぇ」
二人はそう言うと、部屋を出ようとした。
この部屋で取っ組み合いをするには、少々狭かったのである。
だが、由梨亜が扉を開けた途端、目の前に澪がいた。
「あら？　澪、どうしたの？」
「ええ。お嬢様達に、お客様がいらっしゃってます」
「お客様……？」
「どう言うこと？　澪。あたし達にお客様って」
千紗の疑問に、澪も首を傾げた。
「さぁ……？　どなたかまでは私も分かりませんが、お嬢様達と同年代のご令嬢達です」
「あたし達と、同年代って……どう言うこと？」
「取り敢えず会ってみましょうよ。その人は、名前を言わなかったの？」
「はい。誰が来たか分からなくして、ちょっと驚かせてみたいと……」
「ふぅ～ん。じゃあ、行きましょ、千紗」
「うん、由梨亜」
二人は先程の言い争いを忘れたかのように、仲良く澪の先導について行った。

# 第四章「再会」―2

「失礼致します。千紗様と由梨亜様をお連れ致しました」
「ありがとうございます、澪さん。貴女はどうぞ、下がっていて下さい。私達はお二人とお話がありますから、誰かに聞かれたくはないのです」
「はい。承りました。それでは千紗様、由梨亜様、どうぞお入り下さい」
「失礼します」
二人がそう言い入り、澪が部屋を出て行った。
そして、部屋の中にいる人物を見た途端、千紗と由梨亜は固まり、笑顔を顔に浮かべた。
「まあ、双葉に若葉じゃないの！　お久し振り。何年振りかしら。本当に、懐かしいわ！」
「ええ。由梨亜。本当にお久し振り。千紗もお久し振り」
「うん。双葉も若葉も、ほんとに懐かしい！　あたし達、途中で――小五の時に転校しちゃったからねぇ」
千紗は沁々と呟いた。
と言っても、千紗には、その時の記憶が他人事のように感じられる程度であるが。
千紗には、今までの記憶が三種類ある。
『彩音千紗』としての……つまり、自分が本当に歩んで来た記憶。
『本条由梨亜』のいない、『本条千紗』としての記憶。
『本条由梨亜』のいる、『本条千紗』としての記憶。
『本条千紗』としての二つの記憶は、どれも他人事にしか感じられない。
一方、『彩音千紗』の記憶は、自分の物だという意識が強い。
そのせいで、『本条千紗』が会ったことのある人と会っても、あまり過去のことを語りにくいのだ。

だから、ほとんど由梨亜が話すことになっていた。
「そうねぇ……まあ、お家の事情では、しょうがないのだけれど」
昔、由梨亜は私立の小学校に通っていた。
その小学校は幼稚園から大学まであり、ずっと一緒という人も珍しくはない。
由梨亜は、小さい頃はその学校に何の不満もなかった。
洗練された学校に、洗練された先生、生徒達。
何の問題もない。
だが、それは外から見た話で、中にいる人物にとってはこれが『普通』だ。
由梨亜は、小学校の中学年の時に気付いた。
『外』が異常なのではなく、『中』が異常なのだと。
そして気付いたからには、『中』にいるのが苦しくなった。
その時、丁度引っ越すことになったのだ。
由梨亜は、思った。
また、この息の詰まる場所に入るのはごめんだ、と。
そこで、無理矢理耀太と瑠璃を説き伏せ、公立の小学校に入った。
そこで、千紗と出会ったのだった。
咲にいじめられる、千紗に……。
「ええ。私も、まさか引っ越すとまでは思ってもみなかったわ。お父様がまた新しく力を入れる事業を展開させるとは聞いていたけど、まさか、その影響で引っ越すだなんて……」
「そうねぇ……私達も思ってなかったわ。特に、私達は双子同士だもん。他に双子はいなかったから、学年の中で双子は私達だけになっちゃって……とっても淋しかったわ」
「それにしても……大分印象変わったじゃない。あの頃、ぱっと見では見分けつかなかったけど、今はぱっと見でも何でも見分けられるわ。それぐらい、違ってる」
そう、双葉と若葉は双子で、しかも一卵性双生児だが、双子の姉である双葉はお洒落にとても気を使っていて、少し派手である。

それに対して双子の妹である若葉は、お洒落はお洒落なのだが、もっとスッキリとまとめていた。

「まあね……けど、貴女達は昔からすぐ見分けがついたわね。二卵性だし、千紗はいっつも元気で、由梨亜はいっつも大人しくて……なのに、滅茶苦茶仲がいいんだもの。誰でも見分けがついたわ」

若葉は苦笑しながら言った。

千紗と由梨亜も顔を見合わせて苦笑したが、その意味は若葉とは違っていた。

そして、いきなり千紗が口を開いた。

「そう言えば……そこにいるのって、誰？　誰か……いるよね？」

柱の陰を指して言う千紗に、由梨亜は驚いて目を瞠った。

「えっ？」

「へぇ～。よく気付いたわね、千紗。やっぱり、そういう勘だけはいいのねぇ。いいわ。義彰（よしあき）、出て来なさい」

そう言われて物陰から出て来たのは、十四、五歳ほどの少年だった。

だがその身長は高く、この中で一番背の高かった千紗の身長は百六十四センチあったが、その千紗よりも高かった。

だいたい、百七十センチほどだろうか。

由梨亜は彼を見て、懐かしい思いに駆られた。

顔も雰囲気も全然違うが、年頃が弟の柚希夜（ゆきや）と似ているのだ。

癒璃亜（ゆりあ）の話に聞いていた柚希夜の身長も、丁度同じぐらいだ。

由梨亜は義彰を見詰め、しばらく呆けていた。

「ふ～ん。じゃ、彼って貴女達の弟？」

「ええ、そうよ。ほら、義彰。ご挨拶なさい」

「……初めまして。僕は、義彰と言います。宜しくお願いします」

彼はそう言うと、軽く会釈をした。

「初めまして、義彰。あたしは本条千紗。で、こっちは本条由梨亜。宜しくね」

千紗はニコッと義彰に笑い掛けたが、義彰は穴の開くほどジッと

千紗を見詰め、それからスッと視線を逸らした。
「……？」
千紗が首を傾げると、横から若葉が言った。
「こら義彰。無愛想にしないの！　ごめんなさいね、千紗、由梨亜。この子ったら、ほんとに……」
「いっつもお父様やお母様やお祖母様達に言われてるのにねぇ……全然変わらないんだから」
「へぇ～。でもさ、彼って長男だよね？」
「ええ。私達には、義彰の他に兄弟なんていないもの」
「じゃあ、大変だねぇ。そんな無愛想じゃ……」
「そうよ！　そうなのよ！！」
いきなり双葉が大声を出し、千紗と由梨亜と義彰は、思わず仰け反ってしまった。
しかし、双葉と若葉は益々身を乗り出し、力説した。
「ほらほら！　初対面の千紗までが言うのよ！？　サッサと愛想良くしなさい！　このままお父様の後を継いだら、日本州の恥よ！」
「そうそう！　貴方だけが恥ずかしい思いをするんじゃないわ！私達みんなが恥ずかしいのよ？！」
その勢いに義彰はたじろいだが、またもやスッと視線を逸らした。
と、その時、由梨亜と視線が合った。
義彰は、その由梨亜の顔を見ると、怪訝な顔をした。
由梨亜が、クスクス笑っていたからだ。
「……？」
義彰が顔と雰囲気のみで疑問を伝えると、由梨亜は口を開いた。
「貴方……義彰って、ほんとに天皇陛下のご子息？　双葉と若葉も天皇陛下のご令嬢とはちょっと思えないけど……。でも、貴方の方がらしくないわ」
そう、彼らの父親は現在の天皇。
彼らは、天皇の娘と息子、つまりは内親王と皇太子なのだ。
由梨亜のそのあからさまな厭味に、義彰は真っ赤になった。

「ふ～ん。感情の制御もできないのかぁ。ちょっとからかっただけでそこまで真っ赤になるなんて……ほんと、日本州の未来が不安だわ。でも……もしかして私、図星をついちゃったかしら？」

「あるかもねぇ。つまり、貴方が皇太子な訳でしょう？　自分でも、その引っ込み思案なその性格を気にしている……違う？　義彰」

その千紗の言葉に、義彰は軽く呻くと背を背けてしまった。

まさに、図星をつかれたようだった。

「へぇ～……そうだったの、義彰」

「全然気付かなかったわ」

「そんなに考え込む前に、この頼りがいのあるお姉様に相談すれば良かったのに！」

「ちょ、双葉！　自分で『頼りがいのある』『お姉様』って言わない！　このナルシスト！」

「何、ほんとのことじゃない。あ、それとも若葉は、そこまで自信がないの？　全く、双子の姉として情けないわ。仮にも天皇陛下の娘ともあろう人が」

「それを貴女にだけは言われたくないわよ！　貴女ねぇ、派手過ぎるのよ、分かる？　派・手！　貴女がいつもの格好でお客様の前に出たら、何で庶民がここにいるんだって追い出されるわよ！　お洒落なのはいいけど、せめて品格、格式があるお洒落にして欲しいわ！　貴女の妹として、恥ずかしいわよ！」

千紗と由梨亜は呆れながらもそれを眺めて、止めようともしていなかったが、義彰は違った。

この姉妹喧嘩はかなり頻繁に起こっており、千紗と由梨亜は知っていたのでのほほんと眺めていたが、義彰は他人のいる前でこんな言い争いを繰り広げられるとは思っていなかったようで、必死で止めようとしていた。

「ちょ、双葉姉上！　若葉姉上！　やめろよ！　誰が前に……」

「煩い！」

「お黙り！　ちょっと双葉！　こういう所で襤褸が出るのよ、貴女

は！！」

「ふん、何よ！　そっちこそ『お黙り』ってカッコつけて！　恥ずかしいとは思わないのかしらね！」

「は、品格がないよりマシよ！　それに貴女は全然私の『お姉様』とは思えないわ！」

「何言ってるのよ若葉。私達双子なのよ？　貴女の方が先に産まれてたかも知れない可能性も半分あったんだからね！」

……この二人の口喧嘩は、いつも妙な所で食い違い、矛盾することが多い。

おまけに、放って置くといつまでも繰り広げられる。

由梨亜は、二人の言い争いを聞き飽きてから、ようやく止めに掛かった。

「ねぇ、もうそろそろいいんじゃないの？　折角久し振りに会ったのに、つまらない喧嘩で終わらせたくはないわ。貴女達だって、来客あるんじゃないの？」

由梨亜のそのおっとりとした言葉に、双葉と若葉は気まずそうに顔を逸らした。

その様子を見ていた義彰は、思わず吹き出して由梨亜に言った。

「慣れてますね……僕が止めようとすると、必ず火に油を注いだような結果になってしまって、どうも駄目なんです。貴女のように適確に水を注すことなんて、僕にはできません」

「どうも。でも、それは貴方の前だからじゃないかしら？」

「……？」

全く分からない、という顔をした義彰に、由梨亜は悪戯っぽく言った。

「つまりね、この二人は貴方のお姉さんでしょ？　だから、弟の前だとどうしても甘えてしまうのよ。だから、益々ヒートアップしちゃうって訳。分かった？」

「……は、はい」

義彰が何となく押し切られてしまうと、今度は千紗が双葉と若葉

に問い掛けた。
「そういえばさ、何で三人はここに来たの？　どっちにしろ、明々後日には会うじゃない」
　その千紗の当然の疑問に、双葉はあっさりと答えた。
「えっ？　だって、明々後日は他の州の貴族とかも来るでしょう？　そしたら友達じゃなくって、皇族とその州の貴族としてじゃなくちゃ会えないじゃない。それは、結構淋しいから。何て言ったって、八年振りですもん」
「だからお父様と相談して、そしたらここの時間は空いてるって言われたから、義彰も連れて来たの」
「……でもさ、どうして義彰まで？　貴女達だけでも良かったじゃない」
　由梨亜は更に質問を重ねた。
「うん。それがねぇ、義彰この頃悩んでることがあるらしいのよ」
「ふ……双葉姉上！　な……何言ってんだよっ？！」
「何惚けたことを言ってるのよ、義彰。何年、貴方の姉をやっていると思うの？　この頃、様子が違うなぁって思ってたし、鎌掛けても何にも言わないし……だったら、他の人が訊き出した方がいいでしょ？　でもそうすると、ここに来ている人達の中で、私達が信用している人なんて、ほとんどいなくってねぇ……」
「しかも、この子今思春期真っ盛りだし、どうせ訊くなら同年代かそれに近い方がいいでしょ？　貴方もその方が話しやすいでしょうし」
「それで私と双葉と相談したら、貴女達がいいんじゃないかって結論に達してね」
「だから義彰、私達はちょっと途中退場させて貰うわ。心行くまで二人に相談してね」
「私達、貴女達の部屋で待ってるから、相談が終わったら来て？　久し振りに会うから、話したいことが山積みなのよ」
　若葉はそう言うと、本当に双葉と共に部屋を出て行ってしまった。

千紗はただぽかんと目を丸くして見送り、由梨亜は小さく溜息をついた。
「はぁ～。ほんっと、変わってないわねぇ、あの二人……。それで？　何？　悩みって」
「な……。しょ、初対面の方に、話せる訳ないじゃないですか……」
「ま、それもそうよね」
由梨亜はそう言うと、さっさと部屋を出て行こうとした。
だが、それを千紗が止めた。
「待って、由梨亜。……ねえ、義彰。ちょっと、当ててみてもいい？」
「……？」
「だから、貴方の悩み」
「……」
義彰が無言で促すと、千紗は悪戯っぽく微笑みながら言った。
「ずばり、恋でしょ？」
「……。……？　……！　……？！　……！？」
義彰の顔色が、面白いようにクルクルと変わった。
千紗はそれを楽しみながら眺めていた。
「千紗……あんた、こういうとこだけは、鋭いんだから……」
由梨亜の呆れた声に、千紗は自信たっぷりげに言った。
「え？　だって、分かんなかった？　双葉と若葉の様子から。あと、言い方がね。何か含んでるような感じがしたから、ああ、この二人絶対知ってるなって。で、思春期の悩みって言ったら限られてくるし……それで、双葉と若葉がいたら話しにくい内容って言ったら、恋かなぁって」
……まさに、図星をついたらしく、義彰は脱力して床にへたり込んだ。
「ちょっと義彰、大丈夫？　ああもう、ほんっとにあの二人ったら……」

千紗はそうぼやくと、義彰を引っ張り上げた。
「ほら、とっとと白状なさい」
その言葉に義彰は益々脱力したようだが、大きな溜息をつくと話し始めた。
「ええ……あの、お訊きしたいんですが、貴女達には、婚約者がいますよね？」
「ええ、そうよ」
「まあ、それが慣習だからね」
「そう、ですか……」
義彰は、千紗の『慣習』という言葉を聞いて、ガックリしたようだ。
だが、千紗はそんな義彰の様子を見て確信したらしく、諭すように言った。
「でもね、義彰。あたし達の婚約者は、貴族じゃないわ」
その言葉に余程驚いたらしく、義彰は勢い良く項垂れていた顔を上げた。
「貴族じゃ……ない？　それでは……富豪か、何かで？」
義彰の声には、微かな希望と諦めが入り混じっていた。
「いいえ。そんなことないわ。バリッバリの庶民よ。あたし達には、前に三人の婚約者候補がいたの。眞湖聡さん、蔡条護さん、紺城早宮さん。三人とも、本条家と身分の吊り合う立派な家柄の貴族の直系か、かなり近い傍系だった。だけど、あたし達はその三人が嫌いだったわ。まさに貴族その物っ！　って感じで」
千紗は、面白そうにくすくすと笑った。
事実、千紗にとってそれは、既に思い出だった。
「その時、あたしには好きな人がいなかったけど、由梨亜にはいた。同じ中学校の男子で、しかも初恋だった。で、由梨亜は諦めるのは無理だったし、あたしも絶対諦めて欲しくなんかなかった。だって……そんなの、悲しいじゃない？　好きな人がいるのに、それを諦めるだなんて？　だから……由梨亜は家出したの。レイリア国に、

十三歳の時に。それからだいたい四年間音信不通だったんだけど、二年前に戻って来て、あたしとあたしの婚約者を救ってくれたのよ。それで……ちょっと騙し討ちに近かったんだけど、何とかお父様を黙らせて、あたしと由梨亜は、婚約者候補とではなく本当に好きな人と婚約者になれたの」

千紗が嬉しそうに言うと、今度は由梨亜も笑い、身を乗り出して言った。

「だから、貴方も諦めることはないわ。好きな人がそれほどでもなくなるのはともかくとして、無理矢理諦めるのは可笑しい。人じゃないし、生き物でもない。ただの、利用されている機械に等しいわ。ただの物よ。一人一人が上げる声は、確かに小さいかも知れない。でも、声を上げる人が増えれば、それはとても大きな物になっていく。それを……忘れないでね。これは、身分が高いほとんどの人に忘れ去られてしまう、一番大切な物だから」

その言葉に義彰は目を瞠り、寂しげに微笑んだ。

「僕も……そこまで強くなれると、いいんですけどね……」

義彰はそう言うと、軽く頭を下げた。

「……ありがとうございます。僕も、少しは頑張りたいと思います。本当に、ありがとうございました」

由梨亜は軽く息をつくと言った。

「それじゃあ、部屋に戻りましょ。義彰も一緒にどうぞ」

「……いいんですか？」

「ええ、勿論」

その言葉に、義彰は初めて笑った。

それはまるで、凍った氷が暖かい太陽によって融け出し、周りの地面に染み込んでいくような、そんな暖かい微笑みだった。

見ているこちらが、ポッと心の奥が暖まるような——心に陽溜まりを見つけたような、そんな暖かい気持ちにさせる笑顔だった……。

# 第五章「富瑠美の企み」―1

「お帰りなさいませ、戦祝大臣殿、政財大臣殿、宗賽大臣殿。年が変わる前に御戻りになられて、本当に安心致しましたわ」

「ええ。こちらもです。日程がずれ込んだ時には驚きましたが……」

そう言ったのは、シュールである。

実は、演説会に来た人数が予想以上に多かった為日程がずれ、そのせいで次の場所がなくなり、急遽場所を用意してといったことが繰り返され、結局予定よりも一週間遅れたのだった。

「本当に。もし年を越してしまえば、戦争の予定すらも狂ってしまいかねませんもの。良かったですわ」

富瑠美は、沁々と溜息をついた。

「それで？　皆さんの反応は、どうでしたか？」

「ええ。大変良好な物でして、大勢の賛同を頂けました。これでしたら、我が花鴬国は大変やりやすくなることでしょう。それに対し、私が得ました地球連邦の情報によりますと……」

このような会話が三十分ほど続けられ、やがて終わりになった。

ちなみに、富瑠美と話したのはほとんどシュールであった。

「そうですか。三人御揃いになり、ありがとう御座いましたわ。戦祝大臣殿、政財大臣殿、貴方方は執務に御戻り下さい。皆さん、貴方方の帰還を心より御待ち申し上げておりましたもの。ですが、宗賽大臣殿には、少し御相談があります。少しばかり、御時間を頂いても宜しいでしょうか？」

「ええ。勿論で御座います」

シュールが頷き、シャーウィンとウォルトは富瑠美に向かい会釈した。

「それでは陛下、失礼致します」

二人は部屋を出て行き、残ったのは富瑠美とシュールのみになった。

「それで陛下、御相談とは一体何なのでしょうか？　戦争に対しては、私が責任を持ち御決め致しますと申し上げたはずですが？」

二人だけになると、シュールの口調は変わり、態度も変わった。

富瑠美の目線も自然と鋭くなり、親の仇を睨むような目線だった。

まあ、確かに死にはしていないものの、仇であることには間違いないのだが……。

「ええ、勿論わたくしには戦争のことなど全く分かりません。なので、そこは御任せ致しますと、それこそ大分前に申し上げたはずです。わたくしが貴方を御止めしたのは、それでは御座いません。二人には怪しまれないように相談事とは申しましたが、御相談でも御座いません」

「ほほぅ……それでは、何の御用ですかな？　私も宗賽省の大臣。仕事があるので、できる限り御早めに御話とやらを終わらせて頂きたいのですが」

「ふふ。それは貴方の返答次第で御座います」

「……？」

富瑠美の怪しげな笑いに、シュールは何とも形容しがたい顔になった。

「確か貴方、わたくしとあの約束を取り付けた時に仰いましたよね？　一つだけ、どんな御願いでも叶えると。ですから、その御約束の御履行を今、求めたいと思います。宜しいですね？」

その富瑠美の言葉には、有無を言わせぬ響きがあった。

それは、まさに王者の風格が漂っていた。

貴族とはいえ、戦祝大臣家のスウェール家ほど家格が高くないウィレット家の人間であるシュールには、逆らうことができなかった。

「御願い、聞いて頂けますわよね、宗賽大臣殿？」

「……」

「それでは、御願いを致しますわ」

その富瑠美の『お願い』を聞いたシュールは、目を剥いた。

その場で卒倒しなかったのが不思議なぐらいだった。

「へ……陛下！　そのようなこと、いくら何でも聞けませぬ！　今がどんな時だか、御承知なされておるのでしょうか？！　いくら貴女が花鴛国の女王であろうと……いえ、だからこそ、そのようなことは聞けませぬ！」

シュールの必死の言葉に、富瑠美は薄っすらと、ひんやりと笑って言った。

「今更、忠義面ですか？　本当に可笑しいこと。それでは、あのことを表に出されても宜しいと？」

「な、何を……」

（まさか……気付かれた？　まさか！　私は細心の注意を払い、あの計画を立て実行したのだぞ？　こんな小娘に、暴けるはずがない！）

「『何を』？　あれほどまでにも賢い宗賽大臣殿の御言葉とも思えませんわ。誰よりもそのことを知っておられるのは、貴方自身でしょうに」

「な……何を仰られるのです？　陛下。そのような戯れ言を……」

「戯れ言などでは御座いませんわ。第一に、当時の先王である、第百五十二代花鴛国国王、花雲恭峯慶を暗殺しようとした罪。第二に、去解鏡の結果を捻じ曲げた罪。第三に、それを無実の、当時の戦祝大臣殿と政財大臣殿に濡れ衣を被せた罪……」

富瑠美の言葉に、シュールは絶句した。

そんな様子に、富瑠美はクスクス笑う。

「わたくしがこの二年間、何もしないでいたと御思いですの？　掴める証拠は全て掴みましたわ。前戦祝大臣殿は、わたくしが、大好きで最も信頼している異母姉、花雲恭富実樹の外祖父ですよ？　信頼致さないでどうするのです。それに、わたくしを護り育てて下さったのは、深沙祇妃ではなく由梨亜妾に御座います。そのような意味では、彼はわたくしの義理の祖父ですわ。それに、戦祝大臣殿と政財大臣殿の仲の悪さは折り紙付きですもの。あの二人は、とんでもないことや決まりきったこと以外、どんなことがあろうとも対極

にありますから。しかも、『その忠誠心を疑うのなら、私ももう年老いたということだ』と、内祖父の花雲恭籐聯(とうれん)が仰られたほど忠誠心の篤い御方ですわ。わたくしが貴方を疑ったのは、当然で御座いましょう」

富瑠美はくすくすと笑い続け、シュールの顔色は紙よりも白くなった。

「さあ、御誓いを。貴方が言の葉に賭けて御誓いになられたあの誓約を、今ここで果たすのです。勿論、わたくしもあまり御無理は言いませんわ。年が明けてからで結構です。ですが、その下準備は全て年が明ける前に終わらせるように。宜しいですね？　宗賽大臣殿。それから、これを果たして貰わなかった場合、また他人に御漏らしになられた場合、貴方の罪を、花鴛国国王の名に賭け、国賊として告発致します。御分かりになられましたでしょうか？」

シュールは、答えることができなかった。

彼には既に、決定権はなかったのだ。

富瑠美は、今までその切り札を隠し持ってきた。

本当に、深くシュールを恨んでいたから。

だが、その切り札が切られた。

形勢は逆転し、富瑠美が決定権を握るようになったのだ。

「ふふ、御返事がないということは、御承知なされたことだと解釈致しますわ。それでは宗賽大臣殿、御下がりなさい。よい成果を、御待ち申し上げておりますわ」

富瑠美はそう言うと、シュールを部屋から追い出した。

シュールは、茫然自失のままフラフラと部屋から出た。

その脳裏は、疑問符だらけだった。

(何故……何故、あの小娘がそこまで知られる。何故……しかし……もし、これがばらされたら、私は一巻の終わりだ。あの陛下は人が宜しいから、口にした約束を決して破らないであろう。だから、ばらされない為には……言うことを聞くしかない。しかし……何故？　何故なんだ？　あんな小娘が……。癪に触る。私は、あんな小

娘に手玉に取られて……威厳も何も、あった物ではない。それにしても……何故？　何故、何だ？　一体、何故……何故、ここまで……）

その後、城の執務室に戻ったシュールだったが、周りの人間が声を掛けてもすぐには気が付かず、結局誰も何にも言わなくなったというあり様だった。

「ふふ……ふふふふ。やったわ。やりましたわ。あの宗賽大臣を負かせることができましたわ！　これで、わたくしは……行けますわ。あの国へ……！」

富瑠美は、満面の笑みを顔に浮かべた。

本当に、嬉しかったのだ。

「ふ……富瑠美、御異母姉様（おねえさま）？　いかが致しましたか？　富瑠美御異母姉様？」

「ふふふ……これで、ゆ～っくりと休めますわ！　それに、あいつを言い負かすことができて嬉しいです！　な～んて、清々しい気分なのかしら！」

「……富瑠美御異母姉様っ！」

「きゃっ！」

富瑠美は、いきなり至近距離で大声を出され、びっくりして固まってしまった。

「あ……あら？　些南美（さなみ）では御座いませんの。どうかなされました？」

「『どうかなされました』、では御座いません！　富瑠美御異母姉様こそ御様子が可笑しいですわ！　一体どうなされたのです？！」

「も……申し訳御座いませんわ。ただ……あの宗賽大臣を言い負かすことができたので、とても嬉しくて……」

「まあ、あいつを？」

今度は、二人揃ってくすくすと笑った。
二人とも、嬉しくて仕方がないという顔だ。
何しろ些南美は、シュールがノワールとフォリュシェアをはめたということを知っていて、富瑠美がその裏付けを取ろうとしていた時に、協力もしていたのだ。
嬉しくないはずがない。
「それで……どうなされたのですか？　あの国に行けるとは？」
（そ……そこまで、聞いていたのですね……些南美……）
「え、ええ。そのっ……それは機密事項ですから、御話しできませんわ」
「……富瑠美御異母姉様。わたくしに、隠し事をなさると？　折角情報を差し上げましたのに……わたくし、とても悲しいですわ」
「さ……些南美？」
富瑠美が目を瞬かせると、些南美は実に哀しそうに溜息をついてみせた。
「ええ、ええ、悲しいですとも。富瑠美御異母姉様は、富実樹御姉様ほど、わたくしを信用なさってはおられなかったのですわ……。そこまで御信じになられていないとは、わたくし、思いもしませんでしたもの」
「お……御話し致します！　分かりましたわっ！」
「あら、ありがとう御座いますわ、富瑠美御異母姉様。やはり、富瑠美御異母姉様は頼れる御異母姉様ですわね」
（さ、些南美……。やはり、このような所はよく御異母姉様と似ていらっしゃいますわ……さすが、姉妹というべきか……柚希夜（ゆきや）にはこのような所がありませんのに……。本当に、血は争えませんわ）
富瑠美は小さく溜息をつくと、自分の計画を話し始めた。
それを聞き終った些南美は、首を傾げて言った。
「ですが……危険ではありませんの？」
「そこは恐らく大丈夫でしょう。勿論、わたくしの身分は隠しますわ。そうすれば、きっと大丈夫です。顔も変えますし」

「はあ……。ねえ、富瑠美御異母姉様。わたくしも御一緒してはいけませんか？」

「な……何を仰いますの？　些南美。それは、いくらなんでも無理ですわ。そこまでは、いくら何でもできません」

富瑠美が狼狽えて言うと、些南美は悲しそうに、それでいて期待を込めて言った。

「……そうですか。でも……わたくしも、御一緒したいですわ。何だか……そんな気が致しますの。何か……よいことがある気が致しますわ」

「よいこと……？　それは、幸先がいいですわね」

富瑠美は、言葉に少し注意を払って言った。

富瑠美は、マリミアンに『鋭い勘』という形で顕れている魔力があり、富実樹にはそれよりも強いものの、一般的に見ると普通か少し弱い程度の魔力があることを知っている、数少ない人物の一人だ。

しかも、自分達の曾祖母には、前代未聞、空前絶後のとてつもなく強大な魔族の力を持っていた女王、花雲恭癒璃亜（ゆりあ）がいるのである。

些南美に、少し鈍い程度の『勘』の魔力があっても可笑しくはない。

だが大抵の人物は、勘程度だったら本人すらも気が付かないことが多い。

「ええ。そうでしょう？　ですから……叶うならば、わたくしも御一緒したいと思ったのです」

「そうですわね……貴女がそれほど強く望まれるのであれば、御連れ致すことも、可能かとは思いますわ」

富瑠美が負けてそう言うと、些南美は実に嬉しそうに言った。

「本当ですかっ？」

「ええ。あと、柚希夜もいいでしょうね。どうせ、柚希夜は弟妹達の中でも末っ子です。少しの間いなくなられても、国民の多くは気が付きませんわ。さすがに杜歩埜（とふや）までは無理ですけど、些南美と柚希夜だけならば、可能かと」

「まあ！　嬉しいですわ！　富瑠美御異母姉様、ありがとう御座いますわ！　早速、柚希夜にも報せて参ります！」
「あ、少し御待ちなさい！　些南美っ」
「はい？」
「あの、このことは柚希夜以外、絶対に誰にも仰らないで下さい。わたくし達の持っている宗賽大臣に関する情報と、わたくし達の御父様、御母様、御異母姉様に賭けて」
「はい。分かりましたわ」
　些南美はそう言うと、部屋を出て行った。
　富瑠美は、しばらく目を瞑り物思いに耽った後、目を開けて呟いた。
「よし。明日、宗賽大臣にこのことも御願い致しましょう。そうすれば……そうすれば、わたくし達は……」
　富瑠美は、強い決意を胸に秘めて言った。
「地球連邦に、行けますわ。御異母姉様が御育ちになられた、あの国へ……！」

## 第五章「富瑠美の企み」―2

「陛下、些南美王女殿下、柚希夜殿下。これでいかがでしょうか……？」

シュールがその計画書を提出したのは、その五日後だった。

「そうですわね……。ええ。これで結構で御座いますわ。宗賽大臣殿、貴方はこのような人物に、心当たりがありますの？」

「はい。それで、御出発の日はいつに致しましょうか？」

「……どう致します？」

「えっと……私は、三日が宜しいのではないかと思います。私達は、直接地球連邦に行くのではなく、リャウラン国に向かってから地球連邦に行くのでしょう？　それでしたら、できるだけ早めに出発した方がよいと存じます」

「ええ。わたくしもそう思いますわ」

にこにこと笑う姉弟と、それを同じく微笑みながら見詰める異母姉に、それを蒼褪めた表情で窺う老いた男。

その様子は、男の孫ほどの彼らの方が、明らかに力が強いということを窺わせる。

富瑠美は、どこか怯えた表情のシュールに、どこか満足気な表情を浮かべた。

「さすがは姉弟ですわね。以心伝心ですわ。では宗賽大臣殿、それで御願い致します」

「はい、承りました。それでは、詳しい御報告は三日後に御報せ致します……」

「御願い致しますわ、宗賽大臣殿」

「それでは、下がって宜しいです」

「はい。失礼致します」

シュールが部屋を出て行くと、三人は顔を見合わせてくすくすと笑った。

「宗賽大臣ったら、本当に公にされたくありませんのね。本当にやりやすいですわ。富瑠美御異母姉様に感謝です」

「ふふ、ありがとう御座いますわ、些南美。それにしても、宗賽大臣に頼んだのは正解でしたわ。彼は本当に素晴らしい計画を立てて下さいましたもの。さて……この調子で行くと、かなりスムーズにことが運びそうですわ。今からもう、楽しみで仕方がありません」

「ええ、私もです。私も些南美姉上も、今まで花鴬国から出たことはほとんどありませんから。本当に楽しみですけど、同時にとても緊張しますね」

「まあ、そうですわよね……わたくしは他国に頻繁に行きますが、ほとんどの弟妹達は、滅多に遠くまで出ませんものね」

「ええ……本当に、楽しみですわ。富瑠美御異母姉様。でも……ふふ、ここを見て下さいな」

「何でしょう？　……まぁ、これは……」

「どうかなされましたか？」

首を傾げる柚希夜に、些南美はシュールが置いて行った計画表を手渡した。

「柚希夜、これを御覧下さいな。そうすれば、貴方にも分かりますわ」

「はい……えーっと……おやおや、これは……私達が地球連邦に行っている間、私達の不在を父上と母上に御会いしに出掛けていると誤魔化すのですか？　いくら何でも、そこまでの時間はないでしょう。誤魔化せるとしても、精々一ヶ月……」

「ええ。ですから、怪しまれない内にさっさと戻って来いということですね」

「まぁ……何と申しますか、宗賽大臣は、そこまで御考えになられていないのでしょうかしら？　本当に一ヶ月しかないのであれば、地球連邦には二、三日もいられませんわ。まぁ、富瑠美御異母姉様がいらっしゃらなければ、戦争も始められないのですけれど……」

そう言って眉を顰める些南美に、富瑠美はにっこりと笑って言っ

た。
「ええ。ですから、ここは王宮に戻らず、直接現場に行ったことにすれば、大丈夫ですわ」
「直接っ？」
　些南美と柚希夜は、驚いた顔をして富瑠美を見詰めた。
「ええ。御父様に御会いして、御母様にも御会い致しましたら、そのまま地球連邦の近くまで行くことにするのですわ。そして、地球連邦のある太陽系には、地球連邦しか人の住む星が御座いませんから、あの太陽系の星で採掘できる資源は、全て地球連邦の物ですわ。それと同時に、その星で採掘作業をしている機械に攻撃を仕掛けても、結局地球連邦側の損失にしかなりません。ですから、そこに軍を呼び寄せれば宜しいでしょう」
　その言葉に、柚希夜は眉を寄せる。
「……ということは、富瑠美異母姉上（あねうえ）は、地球連邦に直接攻撃を仕掛けないと？」
　すると、富瑠美は苦笑して言った。
「いいえ。さすがにそこまでは申しません。ですが、それはあくまでも最終手段として取って置き、基本的には機械操作の戦闘機で戦うつもりですわ。そうすれば、死傷者はより少なくなります。御異母姉様は、どんな時でも、人の生命が最も大切な物だとよく仰っておりましたものね」
「そうですわね……富実樹（ふみき）御姉様、今、どこにいらっしゃるのでしょう。わたくし達に何も言わないまま……」
　悲しげに眉を顰めて俯く些南美に、柚希夜が励ましの言葉を掛けた。
「些南美姉上、富実樹姉上が自ら行方不明になったという可能性だけではなく、誘拐されたという可能性もあります。あの富実樹姉上が、私達に何も言わないまま、出て行くはずが御座いません」
「ええ……そうですわね……。あっ！　富瑠美御異母姉様！　富実樹御姉様は、地球連邦で御育ちになられたのですよね？　でしたら、

富実樹御姉様は地球連邦にいらっしゃるかも知れませんわ！」
　些南美の期待に満ちた表情に、富瑠美は苦笑した。
「それは無理ですわよ。この国を出て行くならば、宇宙船を使わなければなりませんわ。そうでなくては、花鴛国を出るなどほんとんど不可能です。そして、この国を出る人は全員顔写真を取られますわ。髪や目の色を変えることはできますが、顔の形を変えるのは不可能です」
「え……？　どういう意味ですか？　全く分かりません」
「えっ？　柚希夜、御存知ないのですか？」
「ごめんなさい、富瑠美御異母姉様、わたくしも分かりません」
「あら……そうですか。まあ、あれは極秘事項ですから、知っているのは一握りの人間しかいませんが……けれど、わたくしはもう、御異母姉様が御話しになられていると思っていましたわ」
　富実樹とこの二人は母を同じくする姉弟だから、接する機会も富瑠美よりは多かった。
　そして、富実樹は弟妹達に優しい。
　だから、いくら機密事項とはいえ、概要は世間話にでも話していると思っていたのだ。
「ですから、何をでしょうか？」
　些南美が焦れったそうに言うと、
「ええ。宇宙船に乗る前には、金属探知機は勿論、薬物検査など様々な検査を致しますが、その中に、顔を特殊メイクなどで変えていないかどうかを調べる物もあります。これは、指名手配犯の国外逃亡を防ぐ為ですわ。勿論、その後に写真を撮ります」
「まあ、そんな物があったのですか？　知りませんでしたわ。それで、どのように調べるのですか？」
「ええ、わたくしも詳しくは分からないのですが、どんな素材を使いましても、必ず使われている物質があるらしいのです。そして、その物質を探知する機械が四年ほど前に開発されまして、それを花鴛国全ての宇宙港に設置することに決まりましたの。勿論その対策

の為に、このことは大臣や副大臣など高位の人間と技術者ぐらいしか知りませんし、その物質が何なのかも、技術者と御異母姉様と科学特許省の大臣と副大臣しか知りませんわ。そして、これを全部の宇宙港に設置すると決めたのも、御異母姉様なのです。一応その写真も全て調べましたが、御異母姉様と一致する方はいらっしゃいませんでした」

富瑠美の言葉に、些南美と柚希夜は溜息をついた。

「でしたら……無理、ですわねぇ……」

「……す、少し御待ち下さいませ。ということは、私達はこの顔のまま花鴬国を出るのですか？　いくらなんでも無理があります！すぐに覚られてしまわれます！」

「ふふ。わたくしがそれを考えていないとでも？」

「それならば……一体どうやって……」

「『魔法』を使いますわ」

富瑠美の言葉に、些南美と柚希夜の思考は停止した。

「えっ……ま……魔法？　魔法で……外見を変えられるのですか？」

「ええ。とても力のおありになる方ならば、簡単におできになられるそうですわ。既に、その手配はしてあります。わたくし達が成り代わる人達の姿にここで変え、そして花鴬国を出ようと思います。そうすれば、決して覚られませんわ」

富瑠美の言葉に、些南美と柚希夜は呆然としてしまった。

それもそのはずだ。

今生きている王族の中で、魔族の力を持った人間は一人もいない。一番近い血筋では、曾祖母の癒璃亜（ゆりあ）女王のみだが、彼女は峯慶（ほうきょう）とマリミアン達が結婚するよりも前に亡くなっている。

つまり、富実樹を除き、直接は魔族の力を持った人間に会ったことがないのだった。

だから、そう言われてもあまり実感がないようだった。

「さあ、そろそろ御仕事に戻らなければいけませんわ。ほら、些南美と柚希夜も、怪しまれる前に後宮に御戻りなさい。ほら、早く」

「……はい、分かりましたわ、富瑠美御異母姉様。さ、柚希夜、参りましょう」
「はい、些南美姉上。それでは、失礼致します、富瑠美異母姉上」
二人はそう言うと、執務室を出て行った。

## 第五章「富瑠美の企み」―3

三十分後、その部屋に二人の人物が入って来た。
「失礼致しますわ、富瑠美御異母姉様」
「いらっしゃい、早理恵、麻箕華」
「……それで、富瑠美御異母姉様……本当に、宜しいのですね？」
麻箕華の言葉に、富瑠美は頷く。
「ええ。早理恵、御願い致しますわ。本当は、このようなことを貴女に御頼みするのは、心苦しいのですけれど……」
「いいえ、富瑠美御異母姉様。わたくしも望んでやることです。大丈夫です、富瑠美御異母姉様。わたくし、きちんと身代わりを務めますわ。杜歩埜御兄様と羅緯拿には、わたくしがこの戦いに興味を持ち、強引に御連れ頂くと御話し致します」
「そう……本当に、宜しく御頼み致します」
この王族の兄弟達は、似ていることが多い。
特に、富実樹と富瑠美は、髪と目の色を除けば双子のように瓜二つだった。
だが、それは他の兄弟にしても言えることで、例えば些南美と羅緯拿もよく似ている。
麻箕華と、妃の次女で第八王女、峯慶の第十四子である苓奈も似ている。
鳳蓮と涼聯もそっくりである。
全員、髪の色や目の色や身長が違ってきたりはするが、顔――骨格が、似ているのだ。
だから、身代わりが必要な時、似ている兄弟がいると便利なのである。
そして、富瑠美が似ている姉妹は、富実樹の他にも早理恵がいるのだ。
つまり、珍しいことに、早理恵は富実樹や富瑠美とは二歳違うが、

三人は揃いも揃って似ていた訳である。
勿論、三人とも身長や髪、目の色は違ってきていたが。
「それにしても……富瑠美御異母姉様と些南美御異母姉様と柚希夜（ゆきや）が、こんな大それた計画を御持ちでしたとは……本当に、凄いですわね。わたくしには……そこまでの勇気がありませんもの。いくら鴬大臣（おうだいじん）の地位を頂いているとはいえ……わたくしでは、富実樹御異母姉様や富瑠美御異母姉様と同等の頭も、勇気も……。何一つ、敵いませんわ」
麻箕華は、溜息をつきながら言った。
確かに、富実樹と富瑠美に勝るほどの能力を有した異母弟妹は数少ない。
だから、麻箕華が劣等感を抱くのも当然のことだった。
勿論、早理恵も。
「そんなことは御座いませんわ。わたくしは……わたくしには、深く物事を考えるのが苦手だという欠点が御座いますもの。ですから、道を誤る可能性が、御異母姉様よりもずっと高いですわ。御父様にも、御母様にも、御異母姉様にも……幾度となく注意を頂いて来たのですが、結局、未だに直っておりませんわ。ですから、今……この国は宗賽大臣（しゅさいだいじん）に、全て掌握されているのです」
富瑠美は俯き、自らの握り締めた拳を見詰めた。
その話に、早理恵と麻箕華が聞き入る。
富瑠美のこの想いは……些南美以外、誰も知らないことだったから。
「わたくしは……できれば、御異母姉様の御望み通り……戦いたくは御座いませんでした。もっと、何度も、何度も……話し合いに話し合いを重ねられれば……もしかしたら、御互いに譲歩し合えば、加盟に漕ぎ着けられたかも知れません。ですが、わたくしはあの時、あれほど訊ねてみれば充分だと思ってしまいました。そして、丸一年、何の行動も起こしませんでした。あの頃、そこまですることはないと宗賽大臣に御止めされたのですが……それが、宗賽大臣の計

略だとは気が付かずに、まんまとそれに乗せられて……今のこの国の状況は、わたくしがあの宗賽大臣を信じたことで招いた物です。御父様と御母様と、前戦祝大臣殿と、前政財大臣殿の仇。宗賽大臣を。言い訳に聞こえるかも知れませんが……」

「かた、き……？　それは、どういうことで御座いますか、富瑠美御異母姉様。それに……マリミアン様を、『御母様』と？　貴女の御母様は、深沙祇妃のはずでは御座いませんでしたか？」

早理恵の鋭い糾弾に、富瑠美は曖昧な笑みを浮かべた。

「そうですわね……早理恵は、御存知ありませんものね……。まあ、確かに沙樹奈后も、杜歩埜も、羅緯拿も御存知ありませんがね……」

そんな富瑠美に、早理恵が詰め寄った。

「富瑠美御異母姉様！　どういうことですかっ？　それに……麻箕華？　何を知っているのです？　わたくしに御教え下さいませ！　一体……御父様、マリミアン様、前戦祝大臣殿、前政財大臣殿、宗賽大臣殿に、何があったというのですか！　それに……この国が、花鴬国が……宗賽大臣殿の、傀儡？　どういうことですか？　マリミアン様、富瑠美御異母姉様、些南美、麻箕華、柚希夜だけが知っていて、他の方が誰も知らないこととは……一体何なのですかっ？」

「早理恵御異母姉様……一つだけ、違いますわ。あと、もう一人……現戦祝大臣殿も、御存知のことですわ……」

「えっ……麻箕華？　それは一体どういうことですか？　戦祝大臣殿も、御存知とは？」

驚いて目を瞬く富瑠美に、麻箕華も驚いて目を丸くした。

「えっ……？　まさか富瑠美御異母姉様、御存知ありませんでしたの？　……わたくし、もう富瑠美御異母姉様は御存知だと思いまして、今まで御話しせずに来たのですが……」

「……はぁ、全く……」

富瑠美は、大きな溜息をついた。

「やはり、御異母姉様がいらっしゃらないと、駄目ですわ。もし御異母姉様がここにいらっしゃっていたなら、このように、情報を全

員が握れないといった状況はないでしょうに……」

「ええ、そうですわね……でも、戦祝大臣殿が富瑠美御異母姉様に御話しにならなかったことは、僅かながらも納得がいきますわ。富瑠美御異母姉様御自身の後ろ楯は、政財大臣殿が御務めになられておりますが、深沙祇妃の後見人はレイシャート家が御務めになられておりますもの。そして、そのレイシャート家は、宗賽大臣の属しているウィレット家と遠戚の関係上にありますわ。それに、富瑠美御異母姉様は今、宗賽大臣の言い成りですもの。戦祝大臣殿が、富瑠美御異母姉様を御信用なさらなくても不思議では御座いませんわ」

麻箕華の言葉に、富瑠美も頷いた。

そして、大きな大きな溜息をついた。

だが、そこにはその話についていけていない人物がいた。

「ですから！　富瑠美御異母姉様！　麻箕華！　一体全体、何の御話しをなされているのですかっ？　わたくしにも分かるように御話し下さいっ！」

「早理恵……これは、貴女には御話しできませんわ。貴女には、それほど深く立ち入る権利が御座いませんもの。こればかりは、御容赦下さいませ」

「……どうしてですか？　何故……何故、わたくし達他の兄弟を、寄せ付けないのです。わたくし達は、そこまで信用がなりませんか？　頼りないですか？　……確かに、わたくしは王でも、鴬大臣でも御座いません。御母様が、王宮を追放なされたという訳でも御座いません。ですが……貴女達の御父様は、わたくし達の御父様でもあるのです。わたくし達が……何故御父様があのようになってしまわれたのかと、胸を痛めていないとでも御考えですか？　何故……何故、全てを御隠しになられるのです？」

早理恵の言葉には、切なく哀しい想いが秘められていた。

それに、富瑠美はとても悲しい気持ちが込み上げて来るのを感じた。

だが……いくら何でも、早理恵にまでは話せない。

それが、富実樹とは違う、富瑠美の限界だった。

「早理恵……違いますわ。わたくしはもう、これ以上の人を巻き込みたくはないのです。もう、沢山です。こんな秘密を抱えるのは……わたくし達だけで充分です。もし、このことが国民に知られてしまわれたら……その時、王族全てが加担していたと思われたなら、一体どうするおつもりなのですか？　花鴛国の王族が……そこまで情けないと知らしめるのと同じですわ。ですが、知らない人がいれば、それだけで救われるのです。ですから、早理恵……どうか、御訊きにならないで下さいませ……」

「そんな……そんな説明で、納得などできやしませんわ！」

早理恵はそう叫ぶと、部屋を出て行こうとした。

「御待ちなさい！　早理恵！」

「御安心下さいませ、陛下。御役目は果たします。それでは失礼致しますわ」

早理恵は感情を抑えた声で吐き捨て、部屋を出て行ってしまった。

その様子を、富瑠美は悲しく思いながら呆然と見ていた。

「富瑠美御異母姉様……」

「致し方ありませんわ。わたくしには、あの子までもを巻き込むことができませんもの。わたくしは……御異母姉様とは違います。御異母姉様ほど、他人を信用できません。それがたとえ、血を分けた兄弟であっても。人は誰でも、裏切れるものですから……」

そんな富瑠美を、麻箕華はただ悲しそうな目で見詰めていた。

確かに……教えられないのは、しょうがないかも知れない。

だが、それだけではないと……早理恵の、やり切れない気持ちを、麻箕華は感じ取っていた。

麻箕華は、他人の気持ちを感じ取るのがとても得意である。

そんな麻箕華だからこそ、その早理恵の深く隠した感情を感じ取ることができたが、富瑠美はその表面上の早理恵の感情しか読み取ることができず、結局擦れ違ってしまった。

麻箕華は、自分の気持ちが塞ぎ込むのを、抑えることができなか

った。

（何故……何故、こうなってしまうのでしょう。嗚呼……わたくしにもっと力があれば……！　でも、わたくしはまだ十五歳の子供。鴬大臣となってもう一年が過ぎますが……それでもまだ、子供であることに違いありませんわ……ですから、富瑠美御異母姉様と、深沙祇妃、柚菟羅（ゆうら）御異母兄様（おにいさま）、苓奈の仲違いを御止め致すことができなかったのですわよね……あの時、わたくしは鴬大臣でしたが、それでも富瑠美御異母姉様から鴬大臣の御仕事を引き継いだばかりで……わたくしの初めての御仕事が、あのようになるなんて、思ってもみませんでしたわ……）

麻箕華は、二年前の自分が鴬大臣になったばかりの頃のことを思い出した。

麻箕華は、まさか自分が鴬大臣になるなどとは思ってもみなかった挙句、深沙祇妃達の親子喧嘩に巻き込まれたのだ。

その時の親子喧嘩は凄まじく、言い争いがもう聞いていられないような物に達しただけではなく、物を投げ、取っ組み合いをし、窓を割り、調度品を全て台無しにして、冗談ではなく卒倒する人が出てしまったのだった。

特に沙樹奈后は圧巻で、

「嗚呼！　それは……国宝っ！　……そちらは重要文化財っ！　嗚呼……嗚呼！　先祖代々伝わって参りましたのに……それを！　何てことを！　深沙祇妃、富瑠美、柚菟羅、苓奈！　嗚呼！　駄目です駄目です！　それは……それは御父様の遺品でっ……嗚呼！！」

と、まさに騒ぎに騒ぎまくり、一年半ほど前にあった総票会の、およそ二ヵ月後に崩御した籐聯（とうれん）が最も好み、亡くなる前にこの絵を見たいと言い、部屋の中まで持ってこさせた大事な遺品である絵画が、苓奈の手により吹っ飛んで、巻き添えを食らった娘の羅緯拿に激突するのを目の当たりにした途端、沙樹奈后は悲痛な叫び声を上げてぶっ倒れてしまった。

ちなみにその絵は無事だったが、重要文化財や国宝と指定されて

いた美術工芸品など、約六点が破損してしまった。
これは国民には秘密にされたが、後の調査の結果、最初に手を出したのは深沙祇妃だったということが判明し、結局富瑠美は深沙祇妃と縁を切った。
そして麻箕華の初めての仕事は、この後始末という何とも情けなく悲惨な物になったのであった……。

# 第六章「天皇家主催パーティー」―1

「皆様、本日はわざわざここまでいらっしゃって下さり、本当にありがとうございます。どうぞ、ごゆっくりお楽しみ下さい」

義彰（よしあき）がそう言ってお辞儀をし、その小さなパーティーは始まった。

だが、いくら小さくても天皇家主催パーティーだからということで、来ている人は皆正装している。

ちなみに、日本州から来ているのは本条（ほんじょう）家のみで、あとは別の州から来ていた。

これも、挨拶回りに出掛ける家を減らす為の、天皇の努力であろう。

ここに来ている人達の中で、同年代に近い人はほんの十五人程度しかいなかったが、千紗（ちさ）と由梨亜（ゆりあ）はご機嫌だった。

何故なら、久しぶりに睦月（むつき）や香麻（こうま）とゆっくりできるからだ。

だが、自分達も一応は挨拶をしなければならない。

なので、双葉（ふたば）と若葉（わかば）と義彰を含めた七人で連れ立って、まず向こう側に固まっている六人のグループに行った。

大人達は皆、それぞれ天皇に挨拶をしたり、別の州の貴族と話したりしている。

子供達の動きに注意を払っている大人は、一人もいなかった。

そしてそれが、由梨亜にとって幸いなこととなった。

「こんにちは。ようこそ、いらっしゃいました」

最初に、双葉がそう声を掛け、その六人と話し始めた。

その六人は、どうやら二つに分かれるようで、そのうちの一つである四人の方は、アメリカ州から来ている男三人女一人の四人姉弟だ。

そしてもう一つの二人の方は、南アフリカ州から来た兄妹である。

三十分ほど和やかに話をした後、そこの人達とは別れて別のグループの所に行った。

そこにはブラジル州から来た二人の姉妹と一人の少年、オーストラリア州から来た少年が一人いた。
そこでもしばらく話した後、最後のグループに行った。
そこには、中華州から来た二人兄弟と、ロシア州から来た女二人男一人の三人姉弟がいた。
由梨亜は何故か、その三人を見た途端、心の奥が大きく揺さ振られるような感覚がした。
何故かは、よく分からない。
だが、軽い衝撃――動揺とも言えるような物が胸の奥を衝き抜けて行くのを感じ、そのことに自分でも驚いていた。
「こんにちは。初めまして。私は日本州から来ました天皇の娘、双葉と言います」
「初めまして。私は双葉の双子の妹の、若葉と言います」
「初めまして。僕はこの二人の弟の、義彰です」
「初めまして。あたしは日本州から来た、本条千紗と言います」
「……初めまして。私は千紗の双子の妹の、由梨亜と言います」
「初めまして。俺は千紗の婚約者の、荘傲睦月と言います」
「初めまして。俺は由梨亜の婚約者の、藤咲香麻と言います」
七人が挨拶をすると、向こうも挨拶を返してきた。
「初めまして。僕は中華州から来た、聯流旺と言います」
「初めまして。僕は流旺の弟の、秀旺と言います」
「……初めまして。私は、ロシア州から来ました……ルーレ・ウォンレットと申しますわ」
その時、横にいた妹らしき人物が軽くルーレを抓った。
それに首を傾げているうちに、その少女はにっこりと笑って言う。
「初めまして。私はルーレの妹の、ルーリと言います」
「初めまして。僕は、この二人の弟の、ルーマと言います」
そうして自己紹介が終わると、流旺が目を瞠って言った。
「貴方達は、婚約者ですか？　その……睦月さんと香麻さんは、本条家の方ではないのに、ここにいらっしゃっているのです？」

「あ、はい。俺達は別にイギリス州にこなくても良かったんですが、俺達は付いて来る方を選んだんです。それで、俺達は貴族じゃないから、本条家と一緒に行動しているんです」
「え……貴族では、ないのですか？」
「はい、よく言われます」
香麻はそう言うと、苦笑した。
「それでは……富豪か何かで？」
「いいえ、富豪でもありません。俺達は、バリッバリの庶民です」
その言葉に、今度こそ全員が目を瞠った。
そして、ルーリが軽く叫んだ。
「まあっ！　庶民が名門である本条家の婚約者にっ？　一体どうすればそのようなことになったのですっ？」
「え～っと、まあ、何だ？　その……」
睦月が詰まると、千紗が実に軽い口調で言った。
「ふふ、それは簡単な事よ、ルーリさん。あのね、あたしは睦月を好きだったのよ。本当に。心の底から。婚約者候補何か比べ物にならないくらい。由梨亜もそう。由梨亜なんか、それで家出しちゃたくらいね。それで、由梨亜が家出してしばらくしてから、あたしは婚約者候補達の中から婚約者を選べってお父様に迫られてね。それでその時、由梨亜が助けてくれたの。そして、あたしも由梨亜も、お互いに好きな人と婚約者になるのをお父様に認めさせたの。ねえ？　由梨亜」
千紗が由梨亜に笑い掛けると、由梨亜もにっこりと笑って言った。
「ええ、そうね。何だか懐かしいわ。それに私達は、たとえ相手が庶民であろうと、富豪であろうと、王侯貴族であろうと、そんな身分なんかで人を好きになんてならないわ。そんな身分のせいで恋愛を限られるなんて……私には、耐えられないもの。だから、お父様を引っ掛け――じゃなくて何とか説き伏せて、私は香麻と、千紗は睦月と婚約者になったのよ」
「はぁ……大恋愛ですねぇ。何だか羨ましいですよ。僕は婚約者候

補とは、それほどの恋愛をしてはいませんから……」
　秀旺が、羨ましそうに溜息をつきながら言った。
「羨ましいのですか？　僕には、そうは思えません。逆に、苦労することばかりなのではないでしょうか？」
　ルーマがそう言うと、ルーリがたしなめた。
「ルーマ！　何てことを言うの？　いくら身分が違っていても、苦労することばかりでも、恋をするっていうことは、本当に素晴らしいことだわ。ルーマは恋愛をしたことがないから、そのようなことが言えるのよ」
「ルーリ姉上……まぁ、ルーリ姉上は、何年前でしたっけ？　かなり前から、あの人のことをずっと好きでしたよね？　本当、周りが呆れ返るぐらい」
「ちょ……こんな所で言わないで下さいな！　恥ずかしい！」
　突如始まった言い争いに、千紗は吹き出して止めた。
「待った待った！　ほら、そんな言い争いは周りにあまり人がいない所でやってね。ここがどこで、何をしに来たのか忘れたの？　ルーリさん、ルーマさん」
　千紗の言葉に、若葉も便乗して来た。
「そうよ。今日は親交を深めにやって来たのであって、口喧嘩をする為に来たのではないでしょう？　それに、あんまり堅苦しいから、敬語も使わないようにしましょうよ。そうすれば、もっと話しやすくなるわ」
「あら、たまにはいいこと言うじゃない、若葉。じゃ、これから敬語禁止！　ねっ、千紗！」
　さすが双子と言うべきか、双葉も身を乗り出して嬉しそうに笑う。
「うん！　あたしも、簡単なの――先輩とか先生とか、とにかく年上の相手に使うような敬語は普通に使えんだけど、同い年とか年下に使うのは、なんかねぇ……」
「そうそう。私もよ。若葉はそれこそどんな時でもどんな人が相手でも敬語使えるけど、私は無理。相手が若葉だったり、千紗だった

り、由梨亜だったり……顔見知りでいっつも敬語使ってないような相手だと、うまく敬語って使えないのよねぇ……。気を付けても、必ずどこかで襤褸が出るって言うか。今もだけど、タメ口になっちゃったり、変なアクセントとか、間を空けちゃったり……」

そう言って溜息をつく双葉に、義彰はからかうように笑った。

「双葉姉上は、本当に敬語が下手だからなぁ……時々、『本当にこの人は僕の姉なのか？』って思うぜ。僕はその気になればいつどこでも敬語はバンバン使えるからな」

「あっら、義彰？　後で痛い目にあっても知らないからねぇ？」

「ごめんなさい。ほら、話を続けようぜ」

この話のテンポの良さに、ルーレとルーリとルーマは、ぽかんと目を丸くしていた。

あまりのテンポの良さに、付いて行けなくなったようだ。

だが、双葉の『敬語禁止令』に流旺と秀旺は喜び、そこからしばらく会話が弾んだ。

話が続いていくうちに、千紗は何となく違和感を覚えた。

何故だろうと考え、ふと視線を巡らせると、それに気が付いた。

由梨亜の口数が、物凄く減っているのだ。

しかも半分上の空といった風情で、誰も話していなかったら、あっと言う間に自分の世界に引き篭もってしまうような気がした。

そして、ルーレもだ。

由梨亜ほどあからさまに違うという訳ではないが、何となく違和感を覚える。

そして、気付いた。

（あっ……！　この人、由梨亜ばっかり見てる……！）

それは、千紗だからこそ気付けたのかも知れない。

ルーレは由梨亜と話してはいないが、時折、チラッ、チラッ、と、

由梨亜を盗み見ているのだ。
その回数は少なく、しかも一瞬、ほんの瞬きをするほどの時間しか見てはいないが、紛れもなく、由梨亜を見ていた。
（何……？　どうして……？　何なの？　この人……。変。変よ。可笑しいわ。しかも、盗み見てるってことは……由梨亜に、気が付かれたくない？　周りの人にも？　一体……何なの？　何が目的……？）
千紗は、頭で半分そんなことを考えながら、ルーリと流旺と話していた。
だから、気が付かなかった。
ルーレが、由梨亜だけではなく、千紗も、香麻も見ていたことを……。

「お帰りなさいませ」
ルーレ達は、そう言われながらウォンレット家の別荘へ帰って来た。
「ええ、ただ今戻りましたわ。お留守番、ご苦労様です」
彼らが部屋に戻ると、彼らの父であるウェンリス・ウォンレットが訊ねた。
「本日はどうでしたか？」
何と、彼は実の娘と息子である人物に対し、敬語を使って話していた。
「ええ。とても面白かったですわ。ですが……やはり、国が違うと、ここまで違う物なのですね。本当に、目を瞠らせられることばかりでしたわ」
ルーリは、先程よりもかなり丁寧な言葉遣いにしていた。
しかも、こちらの方が話しやすそうである。
「そうですね。特に……本日は、日本州の天皇陛下とやらに呼ばれ

たのですが……。あの、ウェリンス殿。日本州とは元々『日本国』で、天皇陛下は国主であらせられたのですよね？」

そう『ルーリ』にそっくりな少女が言うと、ウェンリスは頷いた。

「ええ。厳密に申せば、国主であったのは、今から千と数百年前でありますが……」

「そうですか……。ですが、その元国主の子孫が、あのように無礼講でよい物なのでしょうか？」

「無礼講……ですか？」

「ええ、そうです。仮にも元国主の子孫である娘が、そして貴族が、あのように庶民のような言葉遣いを致しましても宜しいので御座いますか？　わたくしには、とてもとても信じられませんわ」

「そうですか……。やはり、貴女は王の娘ですね。地球連邦となんて違う……」

ウェンリスは、後の言葉を飲み込んだ。

「ええ。そうですわね。わたくし達は王女と王子。陛下から地球連邦の様子を探るようにとは言われて参りましたが……あまり、耳新しいことは聞けませんでしたわね」

「まあ……それは仕方のないことです。詳しい情報は、議員や、イギリス州に住めるような貴族や、各地の王皇族でないと、得られませんからね……」

その言葉に、ウェンリスの息子、『ルーマ』とそっくりの人物が驚いて言った。

「おや、ウォンレット家ほどの、大貴族の家柄でもですか？　私達が本日行ったパーティーで、ウォンレット家よりも家格の高い家柄は、天皇家しかなかったはずです。それなのに、ですか？」

「ええ。情報は、あまりこちらには来ません。もしかしたら……貴方方のような人を警戒しているのかもしれませんね」

ウェンリスの言葉に、『ルーリ』そっくりの人物がころころと笑いながら言った。

「あら、わたくし達は諜報員では御座いませんわよ？　母国である

リャウラン国は地球連邦ととても関係のよい国で御座いますし、社会勉強と情報収集を兼ねてもいますわ。けれど、貴方には感謝致します。貴方のような人がいなければ、わたくし達はここへは来られませんでしたもの」

「まあ、親馬鹿と笑って下さっても構いませんが、私は、娘や息子をここまで連れて来たくはなかったので貴方方を受け入れたのです。もしこれがばれてしまったら、ウォンレット家はお終いです。どうか、くれぐれも他に洩らさぬようお願い致しますよ」

「ええ。勿論ですわ。それが分からぬわたくし達では御座いません」

『ルーリ』にそっくりな人物はそう言うと、部屋を出て行った。

# 第六章「天皇家主催パーティー」―2

「はあ、やはり、こちらの方が落ち着きますわ。そうは思いません？　富瑠美御異母姉様」

「こら、些南美。その名前は言ってはならないと……」

「そう仰る富瑠美御異母姉様こそ、わたくしの名を御呼びしているではありませんか」

「うっ……まあ、仕方ありませんわね」

ルーレ・ウォンレットにそっくりの姿になった富瑠美は、諦めたように呟いた。

そう、『ルーレ』にそっくりなのは富瑠美、『ルーリ』にそっくりなのは些南美、『ルーマ』にそっくりなのは柚希夜である。

彼らは花嶌国からリャウラン国に渡り、更にそこから地球連邦へ来たのである。

このウォンレット家には、丁度十八歳の娘、十六歳の娘、十五歳の息子がいて、更にその子供達までをイギリス州に連れて行くのを渋っていたので、シュールによってこの家が選ばれたのだった。

更に、イギリス州に住んでいる貴族ほどの力はないものの、かなり上位に食い込んでいるということも、選ばれた理由の一つである。

「……富瑠美御異母姉様？　富瑠美御異母姉様。……富瑠美御異母姉様っ？」

「はっ、はい！　えっ……些南美？　どうか致しましたか？」

「富瑠美御異母姉様、一体どうしたのですか？　あのパーティーを終えてから、何だか変ですわよ。意識がどこかに飛んで行ってしまっているようですわ」

些南美は少し眉根を寄せた。

「大丈夫ですわよ、些南美。ただ……あの方達の毒気に中てられたと申しますか……少し、感心してしまいましたわ。御異母姉様があのように御育ちになられたのも、納得が行きました」

富瑠美が、富実樹が戻って来た後に施した教育の事を思い出して苦笑すると、些南美も思わずといった様子で苦笑いを浮かべた。
「まあ、そうですわね……。ところで、富瑠美御異母姉様、先程御会いした――確か、本条由梨亜さん。あの方、富実樹御姉様とどことなく似ていらっしゃいませんでしたか？」
「えっ？」
富瑠美は、一瞬ぎくりと身体を揺らした。
だが、些南美はそれに気が付かなかったようだ。
富瑠美は、少し考え込むようにして、ゆっくりと言った。
「まあ、確かに似ていらっしゃると言えば似ていらっしゃったとも思いますが……あそこでは、わたくしは気が付きませんでしたわ」
「あら、そうですか……」
些南美は、少し残念そうな声を出した。
だが、富瑠美はまるで聞いていないようだった。

夜も更けた頃、富瑠美は些南美と同じ部屋で寝ていた。
耳を澄ませば、些南美の穏やかな寝息が聞こえる。
ぐっすりと寝入っているようだ。
それに対して富瑠美は、何度も何度も寝返りを打っていた。
あのパーティーでのことが、頭から離れないのだった。
いや、むしろ、わざとそのことを考えているようだ。
（やはり……わたくしの見間違いでは御座いませんわ。あの『本条由梨亜』は……あの夜に、御父様と御母様の所に参りました時に、御異母姉様が御自分の御姿を変えられた時の、あのユーリ・ウェルナ・シェヴィという名を名乗った時の御姿その物ですわ。一年以上も前のこととはいえ、それぐらいは分かります。あの御姿――見間違いようは御座いません。あの『本条由梨亜』は……やはり、御異母姉様で御座いますわ。些南美も、どことなく似ていらっしゃった

と仰いましたもの。それに……『本条由梨亜』に、『本条千紗』――。やはり、そうですわ。わたくしの記憶違いでなければ……）

富瑠美には、他の弟妹達に隠していることが沢山ある。

その中の一つに、富実樹のこともあった。

王族も高官の貴族や官吏も、富実樹が地球連邦の日本州で育ったということは知っている。

だが、その富実樹が何と名乗っていたかは、前戦祝大臣であるノワール、峯慶、マリミアン、富瑠美しか知らない。

そして、名前が同じだけではなく、更に富瑠美には覚えていることがあった。

（御異母姉様が、たった一人だけの親友――大切な友達だと仰っていた相手は……『本条千紗』。もしくは『彩音千紗』。そして、『本条由梨亜』の双子の姉と名乗っていた人は……『本条千紗』。それに御異母姉様は、地球連邦にいらっしゃった時に、御好きな方がいらっしゃったと仰っていましたわ。そして、その方の名前は……確か、『香麻』。そして、『本条由梨亜』の婚約者として来ていた人は……『藤咲香麻』！　やはりそうですわ。御異母姉様は、ずっと地球連邦にいらっしゃったのです……！　全く、誤算でしたわ。わたくしが、あのように訊ねてしまったからっ……！）

富瑠美は、二年近く前のことを思い出した。

富瑠美は、もしかしたら富実樹が何とかして地球連邦に行ってしまったのかも知れないと思い、人を使って調べさせたのだ。

地球連邦の日本州の本条家に、本条千紗という人物がいるのかどうかを。

もし富実樹が地球連邦に戻っているとしたら、恐らく本条家に戻るだろう。

だがその時、本条の名を持っているのは千紗である。

ならば、富実樹は本条由梨亜となり、千紗は彩音千紗になっているはずである。

そう思い、富瑠美は本条千紗が本条家にいるかどうかを調べさせ

たのだ。
その結果は、いる、だった。
富瑠美は、その報せを聞いた時、驚いて固まってしまった。
つまり、このことは富実樹が本条家にいないということを示すと、そう富瑠美は考えたのだ。
そして次に、その本条千紗と親しい友達を調べさせたのだ。
富実樹は、千紗のことを『親友』と言っていた。
だから、もし本条家にいないのなら、別の所にいるのかも知れないと思って。
その結果を見た時、またしても富瑠美は絶句した。
本条千紗とかなり親しい人物は、澤本藍南、金谷尚鈷、仲埜素香、荘傲睦月、篠崎涼斗、阿本奏谷、藤咲香麻で、どうやら本条千紗は荘傲睦月と付き合っているようだ、と述べてあった。
そう、この中で女性は、澤本藍南、金谷尚鈷、仲埜素香だけ。
富実樹が日本で名乗っていた名は、『由梨亜』。
一応確認の為に顔写真も送らせたが、誰も見覚えはなかった。
つまり、この中に富実樹はいない。
富瑠美はずっと、そのように考えて来たのだった。
そして、今日のパーティーで本条千紗の婚約者だったのは、荘傲睦月だった。
(誤算でしたわ……！　まさか、『双子』だったなんてっ……！)
まあ、富瑠美が思い付かなかったのも、無理はない。
何故なら、花鴬国の血を引く人間には、遺伝子上の問題により、何故か多胎児が産まれないのだ。
つまり、富瑠美には『双子』や『三つ子』という存在が身近に感じられないので、知識としては知っていても、現実に反映することはできなかったのである。
(どうして……？　何故御異母姉様は、わたくし達を御棄てになられてしまいましたの……？　何故、花鴬国を御見捨てになったのです……？　嗚呼、どうして……。ですが、些南美と柚希夜は気付い

ていない……これは、嬉しいことですわ。もし、気付かれてしまわれたのなら、御止めすることは非常に難しい……。何故なら、御異母姉様は……ほとんどの方から、好かれておりましたから……）

富瑠美は、苛々と寝返りを打った。

（あの前政財大臣殿も、御異母姉様の未熟な部分を除いては、御認めになられておりましたし……唯一の例外が、宗賽大臣ですわ。……とにかく、御異母姉様は、ほとんどの方から好かれて、愛されておりましたわ。そんな御異母姉様を――しかも、実の姉をこんな所に捨て置く弟妹だなんて、わたくしを含め、いませんもの……）

富瑠美は再び寝返りを打つと、些南美の寝顔をじっと見詰めた。

些南美は、相変わらず穏やかな寝顔を浮かべていた。

その顔は、富瑠美の知らない顔だ。

けれど、彼女はまさしく富瑠美の異母妹なのだ。

（魔法、か……ここまで便利な物だとは、思いもしませんでしたわ。現に、誰もわたくし達のことを御疑いになられておりませんもの。ですが、その能力は人によってまちまち……。それに、他国に知られてはならない為、秘密裏にしなければなりませんわ。おまけに、強い能力を持って産まれてくる人物の数は、本当に少ない……。はあ。わたくしは今まで、こんなに脆い所が花鴬国にあるとは、思いもしませんでしたわ……ここを衝かれれば、花鴬国はぼろぼろになってしまいます。特に今、宗賽大臣の言い成りの、この花鴬国の状態では……）

夜は、静かに更けていく。

色々な人の思惑を、孕みながら……。

# 第六章「天皇家主催パーティー」―3

その夜、由梨亜（ゆりあ）もまた、眠れなかった。

パーティーで見た、ルーレ、ルーリ、ルーマの顔――いいや、物腰や雰囲気といった物が、何だか気になって仕方ないのだった。

どこかで、似たような物を見たことがあるような気がする……だが、その顔に見覚えはない。

（何なの……一体、何なの……？　それに、この胸騒ぎ……落ち着かない。落ち着かないわ……何か、考えなくちゃいけない気がするのに、考えちゃ駄目なような気もする……一体、どっちなの？　それに……何で？　何で、あの三人姉弟が気になるの？　あの人達は、私と何の関係もないはずなのにっ……！　一体、どうして？　何で？　何で、ここまで気になるの？　一体、私……は……）

由梨亜は、とてももどかしい思いに駆られていた。

あともう少しで答えが出そうなのに、出ない。

知りたいのに、知るべきではない。

興味があるのに、怖い、怯える。

相反する思いが、由梨亜の胸を掻き乱していた。

（嫌だ……怖いっ……！　でも、知りたい……全てを！　私は……）

『眠れないようですね、富実樹（ふみき）』

由梨亜の脳裏で、癒璃亜（ゆりあ）の声が響いた。

（曾御祖母様……）

二人は普段、頭の中で会話をしている。

この前は千紗（ちさ）に見せる為、癒璃亜は実体化し、口で会話したのだ。

（曾御祖母様……何だか、昼間に会ったウォンレット家の三人姉弟のことが気になって……それで、眠れなかったんです）

『そうですか……それに関して、とても面白い情報を仕入れて来ましたが……聞きたいですか？　富実樹』

（えっ……情報、ですか？）

『ええ。情報です。聞きたいですか？』
（私、は……）
由梨亜は、返事に困った。
自分の気持ちが、よく分からなかったのだ。
（よく、分かりませ――）
『本当に？　分からない？』
（えっ……？）
由梨亜は、驚いた。
まるで、自分の気持ちが分かっているような答えだった。
『まあ、分からないというのであれば、仕方ないですね。それでは、絶対に聞かなければならない時に、聞かせましょう』
癒璃亜の声は、少しずつ遠ざかって行った。
「待ってっ！」
思わず、由梨亜は声を出していた。
そのことに自分でも驚き、慌てて起き上がって千紗を見た。
だが、千紗は何も気が付かなかったようだ。
相変わらず熟睡している。
穏やかな寝息が、絶え間なく続いている。
由梨亜はほっとして、再び横になった。
『それでは富実樹、聞きたいのですね？』
（ええ……多分、そうなんでしょうね……。私、時々自分でも、自分の気持ちがよく分からなくなるんです。一番よく分かっていなければならないのは、私自身だというのに……）
『富実樹、それは違います。人の心は、誰にも詳しくは分からない物です。……そう、自分自身でさえも』
（曾御祖母様……）
『それでは、富実樹、お聞かせ致しましょう。わたくしが得た、真実を』
癒璃亜は少し間を取ってから、由梨亜にこう告げた。
『富実樹、あのウォンレット家のルーレ、ルーリ、ルーマは、本物

ではありません』
（……嘘っ！　そんな……まさかっ！）
『本当ですわ。今日――もう、昨日かしら？　あのパーティーで三人に会った時、違和感を覚えませんでしたか？』
（ええ……感じました。何だか、周りから浮いていると言うか……何だか、変な感じがしたんです）
由梨亜は、思わず顔を歪めた。
あの感触は、決して快いとは言えない感覚だったのだ。
『富実樹、教えて置きましょう。魔力を持った人間が魔力によって変質、変容させられた物の傍に近づくと、必ず何かを感じるものです。わたくしも、あの三人から何かを感じました』
（えっ……ってことは、あの三人は……）
『ええ、恐らくは』
（そんな……まさか。花鴛国（かおうこく）からの、諜報員ってことですか？）
『わたくしもそう思いました。でも富実樹、あの三人が諜報員だとしたら、何か可笑しいことがありますよね？』
（可笑しい、こと……？　でも、貴族に化けるのは普通じゃないですか？　貴族じゃないと、正確な情報を得ることはできませんし……）
『そう、それですわ』
癒璃亜は、可笑しそうに言った。
（それ……？）
『ええ。だって、貴族に偽装するだなんて、無理でしょう？　誰も知らない貴族なんて、いる訳ないですもの』
（あっ……！　そっかぁ！）
『そうですわ。ということは、本物の貴族に化けているということになります。さて、富実樹。ここでまた可笑しなことが持ち上がって来ます。それは一体何でしょう？』
癒璃亜の楽しそうな言葉に、由梨亜も楽しげに答えた。
（簡単だわ。彼女達が偽者なら、親はどうなのか？）

『御名答。わたくしもそう思って、あの三人の父親や母親の所へ行きました。そうしたら、二人からはそのような気配は何もしませんでした』

（じゃあ、こっそり入れ代わったか、親も知ってるってこと……？　もし知ってるとしたら、裏切りじゃないの！）

『ええ。ですから、それも調べてみましたわ』

（えっ……？　どうやって？）

由梨亜が思わず目を瞬くと、茶目っ気に満ちた声が返って来た。

『彼女達に憑いて行ったのです。そうしたら、親は彼女達のことを知っていて、リャウラン国の王子と王女だそうです。でも、彼らが使っているのは間違いなく、花鴛国の魔族の力です。ですから、しばらく待ってみました。そうしたら、もっと面白いことが分かったのです』

（もっと、面白いこと……？）

『ええ。ルーレ・ウォンレットと名乗っていた少女は、花雲恭富瑠美。ルーリ・ウォンレットと名乗っていた少女は、花雲恭些南美。ルーマ・ウォンレットと名乗っていた少年は、花雲恭柚希夜。全員、花鴛国の女王、王女、王子という身分の少年少女達であり、わたくしの曾孫達でもあり、富実樹、貴女の弟妹達でもありますわ』

（う、そ……っ！　そんな……富瑠美と些南美と柚希夜が、来てたなんてっ……！）

由梨亜は、あまりのことに愕然とした。

癒璃亜も、呆れた声で返す。

『ええ、わたくしも驚きましたわ。特に、富瑠美なんて女王でしょう？　全く何を考えているのやら……』

（ええ……。前によく、『御異母姉様はいつも意表を突くことばかりなさいます』と言われたことがありますが……富瑠美の方が無茶し過ぎです）

『それは仕方ないですわ。それは花雲恭家の血ですもの。わたくしも峯慶も、皆同じですわ。まあ、籐聯も梨美亜も奨砥も――わたく

しの子供達は誰も、わたくしの無鉄砲さを受け継ぎませんでしたけどね』

（あら、そうなんですか……。あ、曾御祖母様、お願いがあるのですが）

『ええ。分かっております。それでは、花鴛国に行って参ります』

癒璃亜の返答に、由梨亜は思わず笑みを浮かべる。

（ふふ……以心伝心ですね）

『まあ、これは仕方ないですわ。これが分からないのは、ただのお馬鹿さんです』

（ええ。そうですね。それでは曾御祖母様、いってらっしゃいませ）

由梨亜は、癒璃亜がそっと離れて行くのを感じ取った。

（富瑠美……まさか、貴女が来ているなんて……）

由梨亜は、はっと息を呑んだ。

（そうだったわ！　富瑠美は、『本条由梨亜（ほんじょうゆりあ）』を『ユーリ・ウェルナ・シェヴィ』って名前で知ってたんだ！　っていうことは……ばれてる？　私が、富実樹だってこと……。うん。そうだ。絶対にばれてる。だから……だから、あんな視線を感じたんだ……）

そう、千紗だけでなく、由梨亜も気付いていた。

ルーレと名乗っていた少女の、不思議なほどに細く、けれどもしつこい視線を。

（じゃあ、私はどうすればいいの……？　……ううん、私には、どうすることもできない。だけど……一応、千紗にも話して置こう。富瑠美達のこと……）

由梨亜はそう思うと、目を瞑った。

明日の朝、千紗にどう話そうかと考えながら……。

# 第七章「想い」―1

「……えっ？　また、パーティーですか？」
「また、ではありませんよ」
ウェンリスは苦笑すると、言い諭すように言った。
「昨日は天皇陛下が主催でした。ですが今回は、天皇陛下の娘御、双葉内親王と若葉内親王が主催の、しかもパーティーとも呼べないような小さな物です。つまり、平服で宜しいということです。そして、参加も自由ということですが、私としては参加した方が宜しいと思います」
「ええ、分かりました。私も参加した方がよいと存じます」
柚希夜はそう言い、富瑠美と些南美も頷いた。
そして、恐る恐る富瑠美は訊いた。
「……あの、それでは、あんな服を着なければならないと仰るのですか？」
「ええ。他の方が皆平服で来られる中で、礼服――つまりドレスで行かれれば、とても目立ちます」
「まあ、それでしたら仕方ないですね。……でも、私はとても楽しみですよ。今まで見ることしかできなかった服を、実際に着ることができるのです。前に着てみたいと言ったことはあるのですが、『みっともない』と絶対に着せて貰えなくて……本当に、楽しみです」
柚希夜は嬉しそうに言ったが、富瑠美は暗い顔だった。
「ルーマはいいですわね……。わたくしなんて……ドレス以外着たことはありませんわ。勿論、運動する時は別ですけれど。……あの、ウェンリス殿。わたくし達は、一体何を着るのです？　スカートですか？　それとも、ズボンです？」
「ああ……お好きな方をどうぞ。どちらも持って来ておりますから」
「そうですか……では、わたくしはスカートに致しますわ。わたくしにはまだ、ズボンを穿く勇気は御座いません」

「あら、お姉様はそうなのですか？」
「えっ？　ルーリは違いますの？」
「ええ。わたくしはズボンの方に致しますわ」
「どうしてですか？」
「だって、スカートは短いじゃないですか。ズボンは脚を全て覆いますから、スカートよりは寒くないはずです。それに……以前から、ズボンを穿いてみたかったので」
　些南美は、どこかワクワクとしているようだった。
　さすがは富実樹（ふみき）の妹であり、マリミアンの娘である。
「まぁ……」
　富瑠美は絶句したが、ウェンリスに追い立てられた。
「さあ、何を着て行くか決めなければなりません。行きましょう」
「はい、分かりましたわ」
　外を見ると、雪が深々と降っていた。

「へぇ～！　今度は堅苦しくないカジュアルパーティーかぁ！　いいねぇ！」
「うん。ねぇ、千紗（ちさ）。私達も行くでいいよね？」
「何言ってんの？　当たり前じゃん！　それに……」
　千紗はそう言うと辺りを見渡し、誰もいないことを確認してから声を潜めていった。
「それに、『本条千紗（ほんじょう）』の記憶だと、小さい頃双葉と若葉と結構楽しく遊んだってなってるからね。特に用もないし、行きたいなって思う。偽物の記憶では友達になってるけど、あたしの本当の記憶では、まだ二回しか会ってないってことになるから」
「あ……そっかぁ……そう言えばそうだよねぇ……。何か、ずっと『本条千紗と本条由梨亜（ゆりあ）』の記憶でやって来たからさ、ちょっと忘れちゃうことがあるなぁ……」

「まあ、由梨亜にとってはそうだよね。由梨亜にとっては、あたしがいるかいないかの違いだから」
「千紗……」
「じゃあさ、あたしが睦月達に電話掛けるからさ、由梨亜は双葉達に返事してよ！」
「うん……分かったわ」
由梨亜は、少し反省しているような口調で言った。
確かに、由梨亜にとっては二種類の記憶しかない。
千紗が双子としているか、いないかの違いだ。
だが、千紗はもっと沢山の記憶を持っているのだ。
しばらくして、睦月達に携帯端末を掛け終わり、ふと窓を見た千紗は突然声を上げた。
「あっ……！　ねぇ、由梨亜！　ちょっと、窓の外見て！」
「えっ？　何ですって？」
「だ・か・ら！　窓の外！」
「あ～、はいはい……」
由梨亜はそう言うと携帯端末を片付け、立ち上がって千紗の所まで行った。
「あ……！　雪だぁ！」
「うん！　綺麗……あたし達の家があるとこじゃあ、あんま雪降らないもんねぇ……」
「ええ……ほんと、綺麗……」
「やっぱり、日本州より、緯度高いからかなぁ？　わぁ……これじゃあ結構つもりそうだよ。ねぇ、由梨亜。これだと、雪合戦に雪ダルマ、かまくらも作れるよ！　うわぁ……こんなに雪がつもるのを見るって、何年ぶりだろぉ……」
うっとりと外を眺めている千紗に、由梨亜は思い切って声を掛けた。
「あ……あのね、千紗。ちょっといい？」
「ん？　何が？」

「あの……昨日、曾御祖母様が調べて来てくれたことがあるの」
「曾御祖母様……癒璃亜様が？」
「うん……あのね……昨日のパーティーで会った、あのウォンレット家の三人姉弟のことなんだけど――」
由梨亜はそれでもしばらく躊躇った後、昨夜癒璃亜から聞いたことを、ぽつりぽつりと話し出した。

「おい、睦月！　見ろよ、雪が降ってるぜ！」
「あっ、ほんとだ。なるほど、寒い訳だよ」
「……おいおい、睦月。もう少し詩人的な表現をしてくれよ。雪を見て感じることは、『寒い』だけなのか？」
「え……う～ん……『食べたら冷たい』」
あまりに適当な返答に、香麻はずっこけた。
「……おい、睦月。他にあるだろっ」
「そうよぉ、睦月君。もっと他に考えを巡らせてっ」
「え～っと……あっ、『食べたら美味しそう』って子供の頃は思ってたな」
その言葉に、車中に沈黙が降りた。
「えっと……？　みんな……？　俺、何か変なこと言ったか……？」
その言葉に、香麻が真っ先に溜息をついた。
「……お前に詩的表現及び風流風雅さを求めた俺が馬鹿だったよ。この小学生並み――いや、それ以下の下等生物並みの表現技法の持ち主がっ！」
「なっ……！　俺はそこまで頭悪くないぞ！　それに、子供みたいな振る舞いなんか、全然してないし……」
「ふふ、面白い睦月さん。問題はそれではないわ。もっと別の物よ。まぁ……貴方には言っても分からないとは思いますけれどね」
瑠璃は、そう言って笑った。

「……何か俺、馬鹿にされてたり……する？」
「されてないと思うのか、この馬鹿が」
「……そんなこと言われてもなぁ……」
睦月は、思わず鼻に皺を寄せる。
その時、主達の会話を全く気にも留めずに、穏やかに風斗が告げた。
「旦那様、奥様、お坊ちゃま。もうそろそろご到着します」
「ああ、分かった。ほら、忘れ物をして行かぬよう気を付けなさい。それに、少し服装を整える」
「あ、はい。……そう言えば風斗さん。好い加減お坊ちゃま呼ばわりをやめてくれませんか？」
「申し訳ありません、お坊ちゃま。これはわたくしの癖ですから。そうそう、言い忘れておりましたが、貴方方をお坊ちゃまと呼ばなくなるのは、お嬢様とご成婚なされてからの話ですから、今仰っても無駄な話です」
風斗は運転しながら、器用にも頭を下げて申し訳なさそうに言った。
……いや、本心がどうなのかは、全く読み取れないのだが。
「……そぉですか……」
その香麻の気の抜けた声に、耀太は笑って言った。
「これ以上言っても無駄だぞ。私も結婚するまでは、お坊ちゃまと呼ばれていたからな」
「ええ、勿論ですとも。旦那様のお父上は最初から旦那様でしたが、旦那様と初めてお会いした時、旦那様はお坊ちゃまでしたから。勿論、今は貴方方がお坊ちゃまですが」
「はぁ……」
睦月が、気が抜けたような声で返事をした途端、睦月の携帯端末が鳴った。
睦月がディスプレイを起動させると、千紗からの電話だった。
「あれ？　どうかしたか？　千紗」

「あ、うん。あのね、明々後日に、今度は双葉と若葉がカジュアルパーティー開くんだって。で、それはあたし達とほぼ同年代の人が招待されてるんだ。で、あたしと由梨亜は行くつもりなんだけど、睦月と香麻はどう？　都合付くかな？」
「え～っと……明々後日？　明々後日は……？」
「ああ、確か予定はあったな。だが、二人が行きたいのならば、行ってもいいぞ」
耀太の言葉に、睦月が顔を輝かせた。
「本当ですか？　じゃあ、俺は行くよ！　な～んかさ、毎日毎日俺が典型的貴族だと思っていたような貴族と会ってるとさ……何だか息抜きしたくなっちゃってさぁ」
その言葉に、千紗はプッと吹き出した。
「そこは同感。で、睦月は行くのね。香麻は？」
「ああ、俺も行くよ。睦月が楽しくやってるのに、俺だけ仲間外れにされちゃあ堪んないよ」
「うん、分かった。それじゃあ、睦月と香麻、両方とも行くのね？　ってことだから、由梨亜、宜しく」
「ええ、分かったわ」
という由梨亜の声が、遠くの方から小さく聞こえた。
「お坊ちゃま、到着致しました」
風斗の声が千紗にも聞こえたのか、千紗が慌てて言った。
「それじゃあ、睦月、香麻、頑張ってね？　じゃあね」
「ああ、じゃあな」
睦月はそう言うと、端末を切った。
「それでは、行くぞ」
「あ、はい」

「ん～？　何だって？　若葉」

双葉は部屋に戻って来ていきなり、そう訊いた。
「あ、あのね、千紗と由梨亜と睦月君と香麻君、来れるってよ？」
「そっかぁ……良かった。あんまり知らない人だらけだとさ、嫌になるもん。日本州から来てて同年代ぐらいの子供がいるのってさ、うちと本条家だけだしね」
「うん……そうなんだよねぇ……」
若葉がそう言うと、またもや連絡が入った。
そして僅か一時間以内に、招待した人全ての返事が返って来た。
するとそこに、義彰（よしあき）が入って来た。
「……双葉姉上？　若葉姉上？　もしかして、もう結果が分かったのか？」
義彰は、眉を顰めて言った。
何故なら、双葉と若葉は暗い顔をしていたからだ。
「ええ……。あのねぇ、本条家とウォンレット家、シャンレイ家、ウィオン家の合計十一人は来れるんだけど、後の……だいたい十家ぐらい、かな？　そこは来れないってさ」
「えっ……？　予想よりも、かなり少ないな」
「ええ……。それに、純粋に貴族と呼べるのは、本条家とウォンレット家だけだからね。シャンレイ家とウィオン家は、地方王家の分家だもの」
「う～ん……。結構厳しいなぁ……」
「やっぱり、子供は子供で子供らしくしてろってことか、心配だから外に出したくないか、かなぁ……」
双葉がそうぼやくと、視線を落とした。
「私は、私達にできることをしたいだけなのに……。だって、それが目的でしょう？　『どうして私達がここにいるの？』って気がする。私達、ただ滅多に会わない人達と喋って親交を深めてるだけじゃない。重要なことは、み～んなイギリスに元々住んでる人達と議会だけで決めてるじゃない。『ノブレス・オブリージュ』とかって、かっこつけて言ってるけどさ、私達……ここに来る意味あったのか

なぁ……？」

双葉の声に、若葉も義彰も視線を落とした。

それは、二人にも共通した想いだったからだ。

何か、自分達にもできることがあるはずだ……だからこのパーティーでは、今自分達に何ができるのかを考えようという目的もあった。

だが、それは受け入れられない物だった。

「私達……一体、どうしてここに来なくちゃならなかったんだろぉ……？」

双葉の、問いとも独り言とも取れるような自嘲的な響きの声に、答える人は誰もいなかった……。

（まあ……何て、寒いのでしょう……）

富瑠美はそう思うと、マフラーをキッチリと首に巻き直した。

「お姉様、大丈夫ですか？　本当に、寒そうですわ」

「ええ……本当に寒いですわ。わたくしは、あまり寒さに強くはないので……。ここまで寒いと、いっそズボンにすれば良かったですわ。スカートがこんなに短いだなんて……聞いていませんわ」

富瑠美は、少し頬を膨らませた。

何故なら、そのスカートは膝丈だったのだ。

富瑠美は、こんな長さのスカートは、夏にも穿いたことがなかった。

「あら、普通はそんな長さですわ。夏なんか、もっともっと短いスカートを穿いている方もおりますわよ。冬でも、短い物を穿いていらっしゃる方も大勢おります。そのような情報に疎かったお姉様がお悪いのですわ」

些南美のもっとも過ぎる指摘に、富瑠美は益々機嫌が悪くなった。

「こんなの……聞いていませんわ……」

富瑠美はそう言うと、窓の外に顔を向けた。
外は三日前からずっと雪が降っていたが、富瑠美の目にはそれが映っていなかった。
（御異母姉様（おねえさま）……御異母姉様までこれにいらっしゃるなんて、聞いていませんわ。御異母姉様……）
富瑠美は、富実樹のことを想い、目を閉じた。
（何故……何故、わたくし達を御棄てになられてしまわれたのでしょう……？　わたくし達の、どこがいけなかったのでしょう……？　どうすれば……一体、どうすれば、御異母姉様はわたくし達の所に還って頂けるの……？　それに……）
富瑠美は、一つのことを思い出した。
（そういえば御母様――由梨亜妾（ゆりあしょう）は、あの時……今から思えば、少し、変でしたかも……）
あの時、マリミアンは取り乱した。
最初はパニックに襲われたかのようだったらしいが、すぐに自分を取り戻し、富瑠美を叩き起こし、あらゆる手段を講じるように手配をした。
だが……それは、いくら二度目とはいえ――いや、だからこそ、可笑しい。
最初に取り乱したことは分かる。
だが、普通はそれを受け入れた途端、泣くだとか、嘆くだとか、気を失うだとか――そういう反応をするものである。
なのに、それがなかった。
富瑠美はそのことを思い出し、身を震わせた。
（もしかして……御母様は、気付いていらしたの？　それを……あのように演技をして、わたくし達を、誤魔化した？）
そう思うと、確かにそうかも知れないと思った。
（だったら、あれは……！　御母様も、御認めになられていた？　それに……もしかしたら、御父様も……？　だとしたら、証拠が何一つ出て来ないはずですわ。あの三人が企んだのであれば、わたく

しなどの凡人に暴けるはずが御座いませんもの。嗚呼、御母様……今、御話ししたい……！　でも、無理ですわ……ここから花嶌国（かおうこく）に連絡を取ろうものなら、絶対にばれて――）

「お姉様？　本当に、大丈夫ですか？」

「え、ええ、大丈夫ですわ」

「……まったく、本当にルーレ姉上は、意地っ張りでいらっしゃいますね。私達は姉弟なのですよ？　もっと心を打ち明けられても宜しいとは思いませんか？」

「ええ……確かにそうですけれど……。ですが、わたくしは大丈夫ですわ。本当に、大丈夫です」

富瑠美はキッパリと言い放つと、真っ直ぐ前を向いた。

些南美と柚希夜は諦めたのか、そっと溜息をついた。

ただ、外には雪が降るばかりである。

そして、人の心も、同じように雪のような物で蔽（おお）われ始めていた……。

# 第七章「想い」―2

「ようこそ、いらっしゃい」
「ええ、本日はお招き頂き、本当にありがとうございます」
富瑠美（ふるみ）がそう言い会釈をすると、双葉（ふたば）は片手を振って言った。
「だから、あまり敬語は使わないようにしよう？　初対面なんかじゃないんだし、それに貴女は私と同い年じゃない」
「え、ええ……分かり――分か、ったわ」
富瑠美は、大分ぎこちないながらも敬語を使わない話し方をした。
（本当は、敬語の方が遣い慣れていて、話しやすいなんて……この状況では、きっと言えませんわよね……）
「あら、いらっしゃい、ルーレさん、ルーリさん、ルーマさん。貴女達で最後よ？　ほら、みんなもう集まってるわ」
若葉（わかば）はそう言うと、三人を中に招き入れた。

「う～ん……なるほどねぇ、そういうつもりで私達を呼んだって訳かぁ……何か、不思議だわ。やっぱり、親はそう思ってるのかなぁ……」
そう言ったのは、何と些南美（さなみ）である。
敬語を使わない話し方を、些南美と柚希夜（ゆきや）はあっと言う間にマスターし、かなり普通に喋っている。
「うん、あたしもそう思うな、ルーリ。だって、そうでしょ？　子供は子供らしく何にもするな。お前達はただここにいればいい。そうすれば国民みんなが納得するから、ってことでしょ？　……何か、あったまくるなぁ」
「ああ、僕もそう思うよ。まあ、この面で見ると、僕は一応王族の端くれで良かったと思うな。だって、そうじゃなかったら、親は僕

をここに送り込まなかっただろうからね。これでも大分渋ったんだぜ？」

そう言ったのは、ウォリュム・シャンレイである。

彼はこのことを親から知らされていなかったが、それでもこれに参加することを喜んだ。

好都合だと言って。

だが、彼の妹のライ・シャンレイは『こんなことなら来るんじゃなかった』という顔をしてブスッと座り込んでいるし、富瑠美も『一体どうすればいいのか分からない』という途方に暮れたような顔をしている。

だが、他の千紗、由梨亜、睦月、香麻、些南美、柚希夜、ウォリュム、ヴァン・ウィオンとヴィクス・ウィオンの兄弟は、双葉と若葉と義彰の話に興味を持ったようだった。

このことは、双葉達姉弟にとって、意外だったようだ。

目を瞠ってはいたが、楽しげに会話を交わしていた。

話がしばらく進んだ後、千紗が双葉に言った。

「あのさ、双葉。これ、天皇陛下にお渡ししてもらってもいいかな？」

「……何、これ……？」

双葉は、その差し出された物を怪しげに見詰めた。

確かに、それは一見『変』としか言いようのない物だった。

片手より一回りほど大きく正方形をしていて、厚さは一センチほどと、少し厚めである。

そして、黒い。

真っ黒だ。

見ていると、どこまでも吸い込まれてしまいそうな色であり、光の具合によっては紫紺に見えなくもない、不思議な色合いである。

そう、それは、癒璃亜（ゆりあ）が『武器になる』と言った、あの物だった。
「あのね、これお父様から預かって来たんだ。何か、天皇陛下に直接お渡ししたいみたい。それで、この中にお父様が書いたメモが入ってるって」
「『この中』……？　何、これケースになってるの？」
「あ、うん……って駄目駄目！　それここで開けちゃぁ！」
千紗は、それを開けようとした双葉を慌てて止めた。
「え～……？　でもこの中、滅茶苦茶気になるんだけど……」
「気になっても開けちゃ駄目。とにかく、それ直接天皇陛下にお渡しして。その後、もし見せてくれるって言うんなら見てもいいと思うけど……取り敢えず、今はやめてね？」
「うん……分かったわ」
双葉はそう言うと、それをバッグの中に仕舞い込んだ。
「じゃあさ、千紗はこの中って見た？」
若葉の問いに、千紗は考え込んでしまった。
「う～ん……そうだなぁ……それらしき物は見たことがあるかも知れないけど、本当にそれが中に入っているかどうかまでは知らない。ただあたしは、その中にとっても大事な物が入っていること、それを直接天皇陛下にお渡しするように頼むこと、それとその中にメモが入ってることしか聞いてないな」
そう簡単に答えると、若葉は何となく納得したらしい。
「ふぅ～ん……。でも何か不思議よね。この前来た時に、渡しちゃえば良かったのに」
「うん。そこがあたしも不思議なんだよねぇ……。ま、よく分かんない『大人の事情』って奴でしょ？　どうせ」
千紗の言葉に、由梨亜も頷いた。
「そうそう。で、そのせいで私達と貴女達が運搬係として使われるってこと」
その言葉に、途端に場に笑いが毀れた。
たった一人……富瑠美を残して。

その話し合いは、何故かとんでもない方向に進んで行っていた。
もしここに貴族階級の大人がいれば、真っ蒼になって止めていたはずだ。
だが、幸いと言うべきか、不幸と言うべきか、ここにはそのような大人は誰一人いなかった。
その内容というのは……『今の貴族階級の常識の可笑しな点』と言う物だった。
それは貴族階級と庶民階級の待遇の差から、更には婚約者や婚約者候補のことにまでも話が及んだ。
しかも、幸か不幸か、ここにいたのは千紗に由梨亜に睦月に香麻。
婚約者候補の制度について、嫌悪感を持っている人物だったのだ。
「ええ……やっぱり変よ。確かに私にも婚約者候補が何人かいるけど……その人達はみんな、私を第二婚約者にしてるし、結婚しない可能性もあるわ。しかも……月に一、二回程度しか会わないのよ？
あんま愛情湧かないって言うか……まあ、その人達が第一婚約者に選ばれなかったら結婚するしか道はないけど……でも、私としては誰も私と結婚しない方がいいわ。そしたら、私は社会に出て働くの。誰かの家に仕えるだなんて真っ平。私は私の好きな道を進んで行くの。もしその途中で好きな人と結婚できる機会があったらするかも知れないけど……でも、それでもずっと仕事は続けるわ。それが……私が望んでいる道。未来なの」
「またまた。その好きな人と結婚することは、『もしも』じゃなくて『絶対確実』の決定事項じゃないか、ルーリ姉上。そこを誤魔化したら駄目だろ？」
「う……でもル～マァ……もしほんとに結婚できなかったらどぉしよぉ……」
些南美のその不安げな声に、千紗は笑って言った。

「ほら、嘆かないの。でも……そういう意味で考えると、あたし達が好き勝手できたのは奇跡だったのかもねぇ……」
「まあ、奇跡と言えば奇跡だけど、でもそこで諦めちゃったらただの夢。実際に行動してこその『奇跡』なのよ？　ね、だからルーリ、諦めちゃったらそこでお終い。諦めたら駄目なのよ」
　由梨亜の言葉に、些南美の顔はぱっと明るくなった。
「……そうだよね、諦めたら終わりなんだよね。ありがとう、由梨亜さん。私、頑張るわね！　絶対に、あの人のこと……諦めたりなんかしないっ！」
「うん、そうそう。偉いわ」
　由梨亜がにっこりと笑い掛けると、些南美もにっこりと笑い返して来た。
　些南美は由梨亜が富実樹（ふみき）だということを知らないが、由梨亜はルーリが些南美だということを知っている。
　そして、些南美が今言っていた『あの人』が、杜歩埜（とふや）であることも。
　だから、花鴬国（かおうこく）にいた頃によく些南美に対して向けていた笑顔を向けてしまった。
　その笑顔が『富実樹』と重なったのか、些南美は不思議そうな顔をして目を瞬かせた。
　だが、その状況に不服を唱える人もいた。
　他ならない、富瑠美とライ・シャンレイである。
　ライは思いっ切り『不機嫌』の顔であるし、富瑠美はもっとあからさまだった。
　一言言わなければ、気が済まないほどに。
「あまり勝手なこと、言わないで貰えるかしら？　千紗さん、由梨亜さん」
　そう言い、二人を――特に、千紗の方を鋭く睨んだ。
「お、お姉様……？」
　些南美の怯えた声を尻目に、富瑠美は鋭く言った。

「婚約者候補が気に入らないだの、婚約者にけちをつけるだの、本当に信じられません。私達貴族の子供は、相手の家との婚姻によって自らの家の権威を高め、有利に導くこと。それが役目。それが筋という物ではありませんか？　余程相手が気に入らないのでなければ、従うのが常というものです。これ以上、私の妹に変な考えを植えつけないで下さい」

富瑠美は、それほど政略結婚に大賛成という訳ではない。

逆に、王族でも何でもないのにそういうことをさせている地球連邦のやり方には、嫌悪を抱いている。

だが、花鴬国の王族である些南美に、これ以上変な考えを植え付けられては堪らない。

そして、富実樹から聞いた地球連邦の貴族の様子だと、これぐらい言っても当然である。

そう考えたのが、富瑠美の過ちだった。

「あんた、人を好きになったこと、ないでしょ。当然、初恋なんか夢のまた夢の話かしら」

千紗の声は、氷のように冷たかった。

中学生の頃、千紗はあまりに切れ過ぎると、ふざけたようでありながら、静かで、穏やかで、丹念に毒を塗した言葉を放っていた。

だが、今はそこからふざけたような言い方が綺麗サッパリ拭い取られ、ただ冷静に、着実に、相手を追い詰めて行くようになっていた。

「えっ……？」

富瑠美は訳が分からず、きょとんとしてしまった。

そして、そのせいで千紗を更にムカつかせてしまった。

「聞こえなかった？　じゃあ、もう一回だけ言ってあげる。貴女は、人を好きになったことなんてない。勿論、この好きって言うのは、人に恋する、愛する気持ちよ」

千紗の顔は、怖いほど真剣だった。

由梨亜でさえも、その顔を直視できなかった。

ただ、視線を床に落としていた。

「わ、私が……人を、愛したことが、ない、ですって？」

富瑠美は何とかそこまで言えたが、それでも声が震えることを抑えることができなかった。

「ええ、そうよ。じゃなかったら、あんな無神経なこと、言えるはずがないもの。あたしね、あんたみたいなバリッバリの貴族、この世で一番大っ嫌いなの。人を愛することが何だ。そんな物、何の役にも立たない。捨ててしまえ。諦めてしまえ。そんな物、無駄だ。要らない。必要ない。そんな物が必要なのは、庶民みたいな野蛮人、大昔の、野生に近い状態のケダモノだけだ……」

千紗の言葉に、富瑠美の顔がどんどん蒼くなっていった。

それだけではない。

他の関係ないはずの、この部屋にいる全ての人間の顔色も、真っ蒼だった。

自分は言われていないのに、それでも自分に言われているように、心の奥に響く、突き刺さって来る。

千紗は、ただただ淡々と言った。

「ここまで明け透けには言わないかも知れないけど……でも、ほとんどの貴族はそう思ってるよ？　そういうの、ほんっとウンザリする。人を好きになって、それで自分が幸せになれる。どうしてそんな簡単なこと、貴族のお偉方には分からないのかな？　あたしには、それが全然分からない。そして、貴族が生まれ育った環境っていうのは、愛だの恋だの、そんな物を必要としないように創られてる。そして、そこで生まれ育った恋を知らない人間は、恋を知らないからこそ、また、そういう環境を自らの子供達に造る。そして、その子供達は、また……」

千紗はそこで言葉を区切ると、瞳に鋭い光を燈し、富瑠美を睨み付けて言った。

富瑠美は蒼ざめながらも、千紗の瞳から目を逸らすことが全くできなかった。

ほんの少しも、身動ぎできなかった。

「また、同じ世界を造る」

その声は冷徹で、喉元に刃を付き付けられたかのように、聴き入る相手に恐怖を与えた。

「分かる？　あたしは、あんたみたいなの、大っ嫌いなの。そういう、傲慢で、人を人扱いしないようなのは。勿論、全部が全部、あんたの責任っていう訳じゃない。誰も、そんなこと言えない。だけど……小さい、幼い頃はそれで良くても――今は、全部があんたの責任になっても可笑しくない。だって、あんたと同じ環境で育ったはずのルーリは、人を愛することを知ってる。あの、未来を、夢を話すルーリの顔は、愛しい人を想う人間の顔。希望を持った人間の顔」

千紗は、小さく溜息をついた。

「……同じように、同じような環境で育ったのに、どうしてそういう風に違って来るのかは、よく分かんない。あたしと由梨亜が、それほど似てないのと同じように。だけどね、ルーレ。貴女もルーリみたいになる可能性はあった。それをふいにしたのは、他でもないルーレ、貴女の責任よ。そして……あたしは、人を好きになること、愛することが下らないだなんて、勝手なことだなんて――絶対に言わせない。たとえ、貴女が、誰であろうとも」

千紗はそう言うと、真っ直ぐに富瑠美を見詰めた。

「あたしは……睦月が好き。高校生の時から……ずっと。だから――」

千紗はそう言うと、俯いた。

「こういうとこで言うの、ちょっと……ううん、すっごく恥ずかしいけど……。でも、だからこそ、あたしはお父様に反抗した。それに、あんな婚約者候補達……あたしは、あんな奴らなんか、最初っから大っ嫌いだった。ルーレ、貴女と、おんなじような奴らだったから。そして、あたしは高校に行って、好きな人ができた。だから、余計……もっと、あいつらが大っ嫌いになった」

その言葉に驚いて、由梨亜は顔を上げ、千紗を見詰めた。
その話を聞くのは、由梨亜も初めてだったからだ。
その反対に、睦月と香麻は居心地悪そうにもじもじとした。
香麻は中学生の頃から千紗を知っていたし、睦月はその当事者である。
千紗は、毅然と顔を上げて言った。
「あいつらは、あたしのことなんてどうでも良かった。あたし自身を、見ていなかった。ただ、あたしの血筋に惹かれただけだった。あの見るからになっさけない典型的な男の紺城早宮（こんじょうさみや）でさえ、『本条家のパイプ役』となる為、あたしの婚約者候補になったんだと……そう言った。言い切った。後の二人も、庶民なんか粗野で、野蛮人で、人じゃないって言い切った。貴女は、そんなあいつらと同じよ。最低。相手の、もしくは自分の血筋でしか相手を見ようとはしない。そんなの、何の意味もないのに……」
千紗は、呟くように、溜息をつくように言った。
それっきり、千紗は何も喋らなかった。
そして、誰も、何も喋らなかった。
全員、固まっていた。
そんな中、由梨亜だけ、気が付いた。
千紗の瞳に、うっすらと涙が浮かんでいたことを。
その涙が瞳から零れ落ちることはなかったが、それでも千紗は泣いていた。
人知れず、心の中で。
由梨亜はそんな千紗の姿から、気まずそうに目を逸らした。
何故なら、千紗がそんな想いをしなければならないのは……自分のせいだから。
峯慶（ほうきょう）とマリミアンが、富実樹を日本州に送ったから。
そして、千紗を本条家の娘ではなく、庶民の、彩音（さいいん）家の娘にしてしまったから。
もし、そうでなければ、千紗はこんな想いをしなくても済んだか

も知れないのだ。
どこまでも原因を突き詰めていくと、それはマリミアン達を迫害し、峯慶達に富実樹の生命が危ないと思わせた深沙祇妃（みさぎひ）、そして富実樹を地球連邦へ送った峯慶とマリミアンにまで辿り着く。
だが、だからと言って由梨亜には、峯慶とマリミアンを怨むことはできなかった。
何故なら、彼らは自分に対して、確かな、深い愛情を注いでくれていることを、感じていたから。
そして、何より……彼らは、自分の両親だから。

# 終章「変化」

その日、富瑠美はずっと落ち込んでいた。

千紗に言われた言葉が、ずっと気になっていたのだ。

（人を、好きになったことがない……愛したことがない……。確かに、その通りですわ。わたくしは、恋をしたことがありません。でも、確かに、わたくしは……些南美と共に、十歳になるまで育ちました。でも……些南美は、杜歩埜を心の底から愛しています。異母妹としてではなく、一人の女性として、杜歩埜を。そして杜歩埜も、異母兄としてではなく、一人の男性として些南美を愛している。だけど、わたくしは……誰も、そのように愛したことがない）

富瑠美は、唇を引き結んだ。

（確かに、あの人が仰られた通りですわ。初恋なんか、したことはありません。御母様と共に暮らしていた時も、御別れして深沙祇妃と暮らし始めてからも……わたくしに求められていたのは、もしも御異母姉様が戻って来られなかった時、女王として振舞うのに申し分のない教養。そして……もしそうなったのであれば、わたくしは杜歩埜と結婚しますから、恋愛だなんて、する必要がなくて……御異母姉様が戻って来られてからも、恋なんてしなくて、する余裕もなくて……それから鴬大臣として色々働いて……）

そこまで考えた途端、富瑠美の胸が痛んだ。

（わたくしは……国の政治に、比重を置き過ぎたのかしら？　確かに、人は……恋をする。それは、太古の昔からの、子孫を残そうとする本能から。だけど、わたくしは……そんなこと、必要ないと切り捨てていた。あの人から、あんな風に言われても仕方ありませんわ……わたくしは、それぐらい価値のない人間ですもの）

富瑠美には、自信がすっかりなくなっていた。

その時、些南美が部屋に入って来た。

「富瑠美御異母姉様……大丈夫ですか？」

「駄目……もう、わたくしは駄目です……」
「そんな、富瑠美御異母姉様っ！」
些南美が富瑠美の足元に膝を付き、その顔を見上げた。
そして、少し気まずそうに目を逸らした。
何故なら、富瑠美はポロポロと涙を零していたから。
王族は皆、幼い時から自分の気持ちを抑えるようにと教育を受けて来た。
だから、滅多なことがなければ、富瑠美が涙を零すことはなかった。
特に、大きく成長してからは。
「わたくしに……価値など、あるのでしょうか？　確かにあれは、千紗さん一人の考えです。でも……それでも、わたくしは……その御考えが全く分かりません。わたくしは、全ての人の気持ちを推し測るようにと教わって来ました。そして、それはわたくしにとって、とても容易いことでした。でも……その自信は、間違いだったのですね。宮廷人の気持ちや、国民の総意といった物は理解できます。でも……人を愛するという感情を……理解できません」
「それ、は……」
些南美は、思わず目を泳がせた。
確かに、この異母姉（あね）が他人と『恋愛』する所を、些南美は想像できなかった。
「わたくしは……物知らずでしたわ。知らないことは山ほどあるというのに、全てを知っていると思い込んで、傲慢で……こういう性格だから、いけないのですわ。深沙祇妃の性格を受け継いで……思い込んだらもう一直線で……。わたくしに、王位に即いている資格など、あるのでしょうか？」
すると、些南美は、突然富瑠美の肩を揺さ振り、必死に言い募った。
「富瑠美御異母姉様っ！　それは悪いことでは御座いませんわ！　富瑠美御異母姉様がそのような性格なのは、深沙祇妃の娘だという

何よりの証拠！　深沙祇妃がいらっしゃらなければ、富瑠美御異母姉様は御産まれになられておりませんでした！　富瑠美御異母姉様が深沙祇妃を嫌っておいでなのは御理解致します！　でも……でも！　それでも、産みの母君で御座いますっ！　あまり深沙祇妃を責めないで下さいませっ！」

　些南美の声に、富瑠美は息を呑んだ。

　そして、些南美にしがみ付いて、嗚咽を洩らして泣き始めた。

　それは、まるで幼児のようだった。

　そしてそれは、幼い時から子供でいられなかった、感情を律するようにと教わって来て、その通りに生きて来た富瑠美の想いが沢山詰まっている泣き声だった。

　些南美も、富瑠美を抱き締めたまま、ポロポロと涙を零した。

　その泣き方は、些南美の方が二歳も年下なのに、富瑠美よりも大人のようにも見えた。

「ほら、そろそろ起きなさい。朝ご飯が冷えてしまうわよ？　早く来ないなら、朝ご飯抜きでお店に出て貰うからね？」

　マリミアンの声に、慌ててレイシャ、マレイ、ミアが起き出して来た。

「ちょっとマリミアンさん！　朝ご飯抜きは厳しいですよぉ！」

「ふふ、そうでしょ？」

「え～ん！　ユリア！　マリミアンさんがいじめる～う～！」

「それは起きて来ないそっちが悪いんでしょ？」

　ユリアの批評は、身も蓋もない。

　だが、確かにその通りの正論を突いて来るので、反論しにくいのである。

　その、いつも通りの朝食が終わり、いつも通り店に出た。

　だが、そこでいつも通りではないことが待ち受けていたのである。

店を開けた途端、三人の人物が中に入って来た。
開店早々、お客が入ってくることはあまりないものの、それほど珍しいという訳ではない。
だが、その年齢と雰囲気が問題だった。
このお店は、売っている物が売っている物なので、基本的に若い女性に人気がある。
そして、そういった女性に贈り物をする、若い男性にも。
だが、入って来た彼らは、四、五十代ほどの歳に見え、更に雰囲気も、女性に贈り物をする為に来たとはとても思えない。
しかも、どのお店に行っても浮くこと間違いなしの、怖い雰囲気である。
「い、一体……何の用ですか？」
その見るからに怪しげな男達に向かって、果敢にもミアが訊ね掛けた。
だが、その男達はミアを全く見ていなかった。
見ていたのは、その奥……呆然と立ち竦んでいる、マリミアンしか見ていなかった。
「貴女は、マリミアン・カナージェ・スウェール様ですね」
その声に、少女達は驚いて男達とマリミアンを見比べた。
『カナージェ』という苗字は、この広い宇宙、探せば他にもいるかも知れない。
だが、『スウェール』という苗字は、この国にたった一つしかない、大貴族の苗字。
マリミアンは胸を張り、腰に手を当てて眉を顰め、訊ねた。
「私に、一体何の用ですか？　用がないならさっさと出て行って下さい。お店の邪魔です」
その声が聞こえなかったように、男達はただ無表情で訊ねた。
「貴女がマリミアン・カナージェ・スウェール様だとしたら……貴女は、必然的に花雲恭由梨亜（かうんきょうゆりあ）。由梨亜妾（ゆりあしょう）となりますね」
その言葉に、今度こそ少女達は絶句した。

スウェールの苗字を持つ女性は、それなりの数はいるだろう。
それぐらい、誰にだって分かる。
だが、それに『花雲恭』が付くとなると――しかも、名前を変え、『妾』まで付くとなると、これは大変な大事である。
それが意味することは、前国王、花雲恭富実樹（ふみき）の生母である、ということである。
彼女は、仮にも王族に数えられる身。
王位継承権はないものの、重要な人物であることには間違いない。
そんな人物が、普通、お店を開き、働いているものか？
それも、首都シャンクランから遠く離れた地で。
いくら何でも、あり得ない。
「ですから、一体何の用です？」
だが、マリミアンは決して動じていなかった。
動じた様子を作れば、相手に隙を与えることになる。
「ご同行を願います」
「一体、何の為に？」
マリミアンは、男達を鋭く睨み付けた。
「宗賽大臣（しゅうさいだいじん）様の御命令で御座います。従って頂きましょう」
男はそう言うと、マリミアンを捕らえようとした。
一対三で、しかも男と女。
マリミアンは、そのまま連れ去られることを覚悟した。
だが、次の瞬間、男達は皆気絶していた。
マリミアンは驚き、後ろの少女達を振り返った。
三人の少女達は、あまりのことに硬直してしまっている。
だが、その範疇から一人、外れた人物がいた。
そう……一瞬で自らの前に飛び出して来た、一人の少女。
マリミアンはゆっくりと振り向き直すと、まじまじとその少女を見詰めた。
「そんな……ユリア……」
マリミアンが絶句して突っ立っていると、ユリアはマリミアンの

顔を覗き込んだ。
「大丈夫ですか？　マリミアンさん。……いいえ、由梨亜妾様」
「どう、し、て……？」
「全く……陛下や戦祝大臣様が、何の護衛も付けずに、貴女様をふらふらさせておくとお思いですか？」
「いや……それは……その……」
マリミアンがたじろぐと、ユリアは堂々と言い放った。
「あたしは、陛下と戦祝大臣様のご命令で来ました。勿論、このような荒事をするような相手が出て来た場合のみ、護衛として働かせて頂きます」
その言葉に、四人は皆呆気に取られた。
「え、でも……今、どうやったの？」
レイシャが呆然としながら訊ねると、ユリアは笑って答えた。
「あたしには、身体機能の魔族の力があります。つまり、護衛には最適です」
その答えに、マリミアンは呻いた。
「そ、んな……貴重な人材を……どうして……わたくしなどの為に……」
「本当に……何を言うんですか？　貴女は義母として、異母妹として大切に想われています。それに、あたしは自ら望んでここにやって来たんです。それと……今まで、騙していてごめんなさい」
ユリアはすまなそうに首を竦めて言った。
「いいえ……貴女は、何も悪くはありません。……でも、この男達、どうしましょう？」
「う～ん……取り敢えず見つかりにくい所に放り出して、後で戦祝大臣様にご連絡致しましょう」
ユリアはそう言うと、あっと言う間に三人の男を抱えて出て行き、そしてまたもやあっと言う間に戻って来た。
「さて、これで一丁終わり！」
だが、そこまで呆然としていたマレイが、いきなり言った。

「終わり、じゃないわよ、ユリア。本当のこと、きっちり話して貰わなきゃ」
「ええ、それには私も賛成だわ。富瑠美とシャーウィン御異母兄様のこと、お聞かせ下さいな？」
そのマリミアンの楽しげな、期待に満ちた声に、ユリアはウッと呻いた。
「え～っと……今じゃないと、駄目、かなぁ……？」
「勿論」
「え～……でも……あっ、こいつらのこと、戦祝大臣様にお知らせしなきゃぁ！」
ユリアはそう言うと、バッと逃げ出した。
「あ、こら！　ちょっと待ちなさいよ！　ユリア！！」
大きな声が、そのお店を揺るがした。
いつも通り始まらなかった朝だが、どうやら午後はいつも通りになりそうだ。
（ほんと、ユリアには参ったわ……よし、ちゃんと富瑠美の言葉とシャーウィン御異母兄様のこと、訊き出さないと！）
「ほら、ユリア！　見苦しいわよ！　とっとと白状なさい！」
マリミアンまでもが参加し、結局ユリアは顔を引き攣らせながら、色々と話すことになった。
勿論、マリミアンも色々話させられたが。
結局、楽しげで元気な笑い声が尽きることはない。
それは、若い少女達が集まれば当然のこと。
だが、マリミアンはそのような経験がとても少ない為、少し新鮮な思いをしながら、その日を過ごした。

「ええ、それでは御願い致しますわ。わたくしは、途中で些南美と柚希夜を迎えに参ってから向かおうと思っておりますので、御先に

行かせて頂きます」
そう言ったのは、外見は富瑠美にそっくりに装った早理恵（さりえ）である。
ただ、髪の色を金色に染め、瞳に濃い桃色のカラーコンタクトを嵌めているのが、いつもとは違う。
だが、その変装は誰にもばれていなかった。
兄弟達の前にはこの姿で出ていない為、ばれていないのだ。
大臣達は、その富瑠美に化けた早理恵に頭を下げ、退出した。
「……早理恵御異母姉様」
麻箕華（まみか）の声に、早理恵は硬い顔付きで振り返った。
「何です？　麻箕華」
「……本当に、宜しいのですか？　今更ですが……本当に、今更なのですが、早理恵御異母姉様は、戦いに行く意志がおありですの？」
麻箕華の問い掛けに、早理恵は首を振った。
「何を仰るのです？　麻箕華。申し上げたはずです。御役目は果たすと。それに、今、この状態では……」
早理恵の声は震えたが、それでもキッパリと言った。
「このようなことに、一々物怖じなどをしてはいられませんわ。富瑠美御異母姉様も、些南美も柚希夜も……三人とも、地球連邦におられるのです。もし正体が発覚すれば、とても危険です。その場で生命を落としても仕方がありませんわ。三人が御生命を張られておられるのであれば、わたくしもそれに見合った行動をしなければなりません。これは、わたくしの矜持――誇りです。麻箕華が気に病む必要は御座いませんわ」
早理恵はそう言うと、麻箕華を見て、穏やかに言った。
「それにこうなってみると、富瑠美御異母姉様が、『これ以上巻き込みたくはない』と仰った意味が分かるような気が致します。わたくしは今、御異母兄様や御異母姉様、異母弟や異母妹達を危険に巻き込ませたくはないと思えますもの。だから麻箕華、貴女も付いて行きたいなどとは仰らないで。それに、王がいないだけではなく、戦祝大臣殿、政財大臣（せいざいだいじん）殿、宗賽大臣殿は、王の抜けた穴を埋める為

に奔走しなければならず、結果的に花鴛国（かおうこく）の頂点がごっそりと欠けるのですわ。鴛大臣である貴女まで行ってしまわれたら、この国は立ち往生してしまいます」

「早理恵御異母姉様……御無事で、必ず御帰り下さいませ」

麻箕華のその真摯な瞳に見詰められ、早理恵は笑って答えた。

「ええ、勿論。わたくしが花鴛国に帰る時には、富瑠美御異母姉様と些南美と柚希夜が一緒ですわ」

早理恵はそう宣言すると、部屋を立ち去って行った。

……二度と、振り返らずに。

その次の日、密かに宇宙船が宇宙港から飛び立った。

誰からの見送りも受けず、国民にも内緒にされ、密かに、足音を忍ばせて。

その宇宙船は大きく、またその数は凄まじかった。

けれど、その中に乗り込んだ者達は、一切無駄口を利かなかった。

ただただ無言で、まっすぐ見詰めていた。

何故ならば、彼らは緊張していたからだ。

この一、二世紀で、こんな大規模な戦が起こるのは、宇宙全体で見ても初めてだったから。

今までにない規模の戦争に駆り出された者達は、そういったことを、誰にも訊かなくても覚っていた。

何故なら、その宇宙船の数、それに軍備。

それらが、誰も見たことがない戦争になるということを、無言のうちに物語っていたのだ。

そして宇宙船は、進み続ける。

宇宙船の大きさが大きいと、どうしても機動力が鈍る。

だが、ゆっくりでも、着実に宇宙船は進んで行った。

地球連邦に――攻め入る為に。

（続）

# 序章「宇宙（そら）の中」

「はぁー。にしても、暇だよなぁ……」
「ああ。地球連邦ってすっごい辺境だからなぁ……全く、行くだけで一苦労って言うか……」
「しかも、あれだろ？　軍艦って図体でかいわりに動きはとろいしさ、ちっこいのだったら小さな〈時空の歪み〉を通って一週間ちょいあれば行けるけどさ、この船みたいに大きいと、それなりの大きさの〈時空の歪み〉じゃないと通れねえんだろ？　だから、一ヶ月ぐらい掛かるってさ……」
彼らは、一様に顔を曇らせた。
だが、そこに鋭い叱責が飛んだ。
「貴様らっ！　何腑抜けたことを抜かしている！　陛下もこの状況に耐えておられるのだぞっ？　それをそのようなことを申しては、陛下に失礼だとは思わぬかっ！」
「はは、はいぃっ！」
彼らは、背筋を伸ばしてビシッと立つと、敬礼した。
するとそこに、背後から淑やかな声が掛かった。
「そこまで堅苦しく縛り付けていたら、それこそ地球連邦まで保ちませんわよ？　地球連邦までは、あと三週間以上も掛かりますのに」
「へ……陛下っ！」
彼らは、瞬間的に凍り付いた。
「ですから、フェーマー中将。今はまだ、それほど厳しくなさらずに。そうですわね……あと地球連邦まで一週間を切った頃ならば、それぐらいまで厳しくなさっても宜しいかと存じますわ」
さり気なく言葉の後半部分で爆弾発言をかますと、富瑠美（ふるみ）――に扮した早理恵（さりえ）は、踵を返した。
そして、誰にも気付かれないように眉を顰めた。
（もう……花嶌国（かおうこく）を出て三日。……やはり、地球連邦は大変遠い国

ですわね。わたくしが今まで訪れた国は、一週間もしないで到着できましたもの）

そう、だから、長期間国を空けるのも初めてなのだ。

そのことは少し楽しみでもあったが、今現在地球連邦にいる、富瑠美と些南美と柚希夜のことが、心配で不安だった。

（大丈夫なのかしら……？　あと、戦争が始まるまで、最低で三週間はありますけど……でも、心配ですわ……いくら何でも、危険です。それにしても……合流するまで、大変ですわね……。わたくしと些南美と柚希夜は、この船の中でずっと部屋に閉じ籠っていることにはしてありますけれど……一刻でも早く、合流してしまわねば……。それにしても、富瑠美御異母姉様や些南美や柚希夜にしては、迂闊ですし、軽率ですわ……）

早理恵は、思わず深く考え込んでしまった。

（富実樹御異母姉様といい、富瑠美御異母姉様といい……地球連邦が、一体何だと言いますのかしら？　まあ、富実樹御異母姉様の御育ちになられた地ではありますが……それにしては、どこか妙ですわね……。それに、花鴛国を出る前の……あの、富瑠美御異母姉様と、麻箕華の会話……宗賽大臣殿――シュール殿の、こと……）

早理恵は、軽く頭を振って思考を振り払った。

（ああ、もうやめですわ。これ以上訳の分からないことをいくら考えても、どうにもなりませんもの。……わたくしには、本当に訳の分からないことだらけですわ。元々、官吏になる気もありませんでしたし……こういった政治関連は、苦手なのですもの……。とにかく、わたくしにできるのは、富瑠美御異母姉様の身代わりだけですわ。後のことは、国に残った杜歩埜御兄様達と、大臣殿達と……地球連邦の、富瑠美御異母姉様に御任せするしかできませんのね……）

早理恵は、束の間哀しげな目をすると、部屋に戻って行った。

# 第一章「智覚」―1

「些南美姉上……富瑠美異母姉上？　大丈夫ですか？」
「あ、あら……柚希夜？　ごめんなさい……わたくし達、いつの間に……眠ってしまったのかしら……？」
些南美は、柚希夜に揺り動かされて、ようやく目を覚ました。
「もうそろそろ夕餉だそうですが……」
「えっ？！　もう、そのような時間なのですかっ？」
些南美は慌てて起き上がり、窓の外を見た。
もう既に暗くなっていて、夕陽の欠片も見えない。
「わ……わたくしったら……はしたないですわ……」
些南美は、思わず頬を赤く染めた。
「ふ……富瑠美御異母姉様、御起き下さいませ」
些南美は、富瑠美の身体を揺すった。
「う……う、ん……些南、美……？　何、ですの……？」
富瑠美はゆっくりと瞳を開けたが、まだ寝惚けているのか、再び瞳を閉じ、スウスウと寝息を立てて眠ってしまった。
「まあ……富瑠美御異母姉様ったら……」
思わず些南美は、苦笑を洩らしてしまった。
「柚希夜。このまま、しばらくそっとしておきましょう？　少し、お疲れになっているようですから」
「ええ。……些南美姉上」
「何ですか？　柚希夜」
些南美は、富瑠美に掛け布団を被せながら答えた。
「先程の……あの、内親王達に呼ばれた時のことです」
些南美は、僅かに肩を強張らせて言った。
「ええ。それが、どうかしたのです？」
「あの……千紗さんと、富瑠美異母姉上のことで」
柚希夜は深呼吸を一つすると、気遣わしげな顔になって言った。

「富瑠美異母姉上……帰って来てから、泣いていましたよね？」
「……」
「誤魔化さないで下さい、些南美姉上。私……聞いてしまったのです。富瑠美異母姉上と、些南美姉上が泣いているのを」
その言葉に、些南美の肩がピクリと震えた。
「それで……思ったのですけれど……」
柚希夜は少し躊躇うと、決然と顔を上げて言った。
「あの方……単に頭にきたというだけにしては、嫌に敵愾心に溢れてはおられませんでしたか？　……まるで、仇のように」
柚希夜は、軽く息を吸った。
「でも……気遣わしそうにしていらっしゃった。……何故、でしょうか？」
その視線は、十五歳の少年にしては、あまりにも鋭い物だった。
末っ子の第七王子とはいえ、さすがは一国の王子である。
「さあ……そこまでは、わたくしも分かりませんわ」
些南美は振り返り、困惑した顔で言った。
何故、柚希夜がこんなことをいうのか、全く理解できなかった。
「そう、ですか……」
ふと、柚希夜はその視線を緩めた。
「参りましょう、些南美姉上」
「ええ」
些南美は、柚希夜の横を歩きながら思った。
（そういえば……富実樹（ふみき）御姉様がまだおられた時は、柚希夜、わたくしよりも小さくて、弟っていう感じがあったけれど……この一年半で、わたくしよりも、ずっと大きくなって……多分、富実樹御姉様よりも、ずっと大きくなっているわ……）
ちらりと、少し自分よりも上にある、まだ幼さを残す顔を見上げた。
（柚希夜は、わたくしよりも一歳だけ年下だけど、小さな頃から、ずっと背は小さいし、子供っぽくって……だから、わたくしもずっ

と子供扱いをしていたけれど……。でも、いつの間に、ここまで大きくなっていたのかしら……。それにしても、あの質問……一体、何なのかしら？　千紗さんって、感じのいい人で……まあ、富瑠美御異母姉様に突っ掛かって行ったのにはとても驚きましたけれど……柚希夜が心配するような方には、思えませんわ……）

　些南美は、ひたすら困惑しながら歩いて行った。

（……些南美姉上は、何も御存知ない、か……）

　柚希夜は少し眉根を寄せ、自分の目線よりも少し下の辺りにある、赤茶色の頭を眺めた。

　この姉は、いつもお姉さんぶっていて、その様子をいつも可笑しく思っていた。

　何故なら、そんな風にしていても、些南美は恐ろしく隠し事が下手で、素直で、可愛らしい子供で、王族とは思えないほど純真だったのだ。

　些南美は、自分と杜歩埜（とふや）のことを知っているのは、兄弟では富実樹と柚希夜と、マリミアンが城を出て行く時に告げた富瑠美だけだと、ついこの前まで思っていた。

　だが、実はもうずっと前――それこそ五、六年前から、頭がいいくせに恐ろしくこういったことには鈍過ぎる富瑠美以外には、すっかりばれていたのだ。

　そして、五年前に花鴬国（かおうこく）に還って来て、そしてまた行方知れずになってしまった富実樹にも、簡単にばれてしまった。

　その時のことを思い出すと、柚希夜は今でも笑いが込み上げてくる。

　そう……あれは、あの姉が花鴬国に戻って来て、四ヶ月ほど経った十二月の二十九日。

　柚希夜の誕生日だった。

『あのね……柚希夜。少し、いいかしら？』
悩ましげな顔をして、長姉は言ったのだ。
『その……杜歩埜と、些南美のことなのですけど……』
姉は、散々躊躇った後、恐る恐る口を開いた。
『その、貴方の誕生日に訊くようなことではないと、分かっているのですが……その、二人は――兄妹と言うには、仲が良過ぎはしませんか？　その……まるで、恋人、のような……』
その、つい四ヶ月前に会ったばかりの姉の様子に、思わず柚希夜は吹き出した。
この姉――富実樹は、産まれてすぐにこの星を離れたので、花鴬国にいる長さは、合計しても半年にすらならない。
だが、その言いにくいことを言おうとする様子は、母親そっくりだった。
母である由梨亜妾（ゆりあしょう）――マリミアンも、言いにくいことを言う時は、いつもそんな風だったのだ。
例えば、柚希夜が六歳の頃、それまでずっと一緒に育って来た富瑠美と、これからはずっと一緒にいることは許されないということを、初めて柚希夜に告げた時のように。
柚希夜はこの時、いくら離れていたとしても、血の繋がりは侮れないと思った。
柚希夜は、その日ようやく十歳になったばかりだったが、まだ十一歳の姉と十三歳の異母兄（あに）の姿を思い浮かべ、大人びた微笑を浮かべて言った。
『さすがは富実樹姉上ですね。……当たりですよ。些南美姉上と杜歩埜異母兄上（あにうえ）は、確かに恋仲です。……私達兄弟の中でこのことを知らないのは、恐らく富瑠美異母姉上だけでしょうね』
『まあ……兄妹で……』
富実樹の声は、どこか脱力しきっているようだった。
柚希夜は知らなかったのだが、恐らく富実樹は、嫌悪を感じていたのだろう。

そう……確か、杜歩埜と富実樹が婚約者同士だというのを最初に言ったのも、確か自分だったと思う。

それを聞いた時、富実樹は、酷く衝撃を受けた顔をしていた。

あの時も、自分にはよく分からなかった。

王の一番目の子供が、そのすぐ下の異性の弟妹と結婚する。

祖父の時のような例外もあったが、基本的にはそういう形でずっとやってきている。

だから、何故嫌悪を感じるのか、全く分からなかった。

今でも少しよく分からないが、知識としては、兄妹で結婚や恋愛をするのは、あまり良く思われないということだけは知っている。

そういった自分ではよく分からないことを、この一番上の姉が感じていることは、何となくではあるが知り、それから興味を持って接してきた。

あまり兄姉達の中で知る者はいないが、実は、王族の中で一番利己的で打算的で計算高いのは、実は柚希夜だった。

そして、富実樹と富瑠美の次に頭がいいのも、実は柚希夜だ。

簡単に兄弟の情など切って捨てるので、柚希夜が『本当』を見せる兄姉よりも、そうでない兄姉の方が圧倒的に多い。

一番年下の第七王子で、同腹の長姉は第一王位継承者だったが長年行方不明で、同じく同腹で次姉の些南美は大して目立つこともなく、はっきり言って積極的に柚希夜に構ってくるのは、峯慶（ほうぎょう）とマリミアンと富瑠美と杜歩埜と些南美ぐらいだったのだ。

だから、その時はまだ七歳か八歳かそこらだったが、異母兄の杜歩埜と姉の些南美が相思相愛であることを察することができたのだ。

そして、だからこそ……一番王位に遠い子供だからこそ、柚希夜が裏でこそこそやっていても、誰も気付かず、気にも留めなかった。

なので、柚希夜は誰にも気付かれていない所で、持って産まれた素質もあったのだろうが、そういった能力を磨くことができたのだ。

父と母は何となく気付いてもいるかも知れないが、柚希夜は気にしていなかった。

その自分が――利己的で、打算的で、どうしてこんな自分の母親がマリミアンで、姉が富実樹と些南美なのかは、全然分からない。

むしろ、自分よりも富瑠美がマリミアンの子供だと言った方が、余程信憑性がある。

だから初めて富実樹に会った時も、まだ自分は九歳だったが、顔は少し不安げな笑顔を取り繕い、どれほどの人物なのか品定めする気持ちだった。

なのに……それなのに、あの姉は。

『あ……』

そう言って、ぽかんと口を開けた。

はっきり言って、三つも年上の姉とは思えない。

『か……』

『か？』

『可愛いっ！』

そう言ってその姉は、まだ九歳と十一歳だった自分と姉を、ぎゅっと抱き締めた。

確かに、自分達姉弟の容姿が非常に整っているという自覚はあったが、王族ということもあり、こんな風に接せられた憶えが全くないのと、その『可愛い』と言った姉の方こそ人形のように整った容姿で可愛らしかったので、思わず度肝を抜かれたのだ。

二人が目を白黒とさせているうちに、ようやく富実樹は二人を離すと、にっこりと笑った。

その笑顔はとても素朴で、滅多に見ることのない笑顔で、思わず柚希夜は見惚れてしまった。

『貴方達が、私と同腹の弟妹ね？』

すると、突然横にいた富瑠美が口を挿んだのだ。

『御異母姉様。ですから、私ではなくわたくしと仰って下さいませ。それに、はしたないですわ。どこもかしこも。全く……先に御行儀の授業を致してから会わせるべきでしたわね』

『え……えっと、その……ごめんなさい……あ、でも、少しこれで

喋らせて？　最初だけだから。お願い、富瑠美』

『ええ、まあ……ですが、御異母姉様。明日からは……覚悟しておいて、下さいね？』

『う、はい……あ。そうだ、自己紹介、してなかったわよね。まあ、知ってるだろうけど、私は富実樹。初めまして、些南美、柚希夜。私、昨日の夜にここへ来たばっかりだから、何も分からないけど……これから、宜しくね。私、地球連邦では兄弟って一人もいなかったから……いきなり十五人兄弟の一番上って言われても、何だか実感湧かないし、頓珍漢なことばっかりすると思うけど、そこはちょっと勘弁してね？』

富実樹はそう言って、にっこりと笑った。

その時、柚希夜の心の中で、何かが動いた。

だからこの姉の、姫としての、そして次期王としての教育を手伝った。

この姉も、他の兄姉達同様、柚希夜の本性に気付くことはなかったが、それでも、柚希夜は自分の『本当』を、安心してさらけ出すことができた。

そして注意深く、この姉と一緒にいた三年半、ずっと観察してきた。

この観察眼だけは、誰にも負けない自信がある。

だから柚希夜は、些南美達兄姉や峯慶やマリミアンなどの親達が知らないこと――気付いてない、気付きたくないと思って気付いても無視していることも気付き、そして受け止めていた。

本当は、ここに来たくなかったこと。

逢いたい人が、地球連邦にいること。

自分の考えと花鴬国の考えが大きく違い過ぎて、途惑い、そして情けなく思っていること。

そして杜歩埜のことは、異母弟（おとうと）としては大切に思えるが、異性として想えず、結婚したらどうしようと悩み、そして杜歩埜と些南美のことでも悩んでいること。

別に杜歩埜のことを嫌っている訳ではないが、どうも、婚約者という言葉に嫌悪感を抱いているだろうことも。

富実樹が花鴛国に来て半年経つか経たないかのうちに、柚希夜は、そういったことを全て分かっていた。

……そして、だからこそ、気付いた。

本条由梨亜（ほんじょうゆりあ）に。

些南美は勘で『富実樹に似ている』と言ったが、柚希夜は違う。

勿論、最初のきっかけは『何となく富実樹と似ている』だが、論理的で理性的な思考と、富実樹が花鴛国にいた時の言動や行動、思考や、柚希夜が把握している限りの長姉の性格を基に考えた結果、辿り着いたのがそれだった。

自分でも、可笑しいとは思う。

こんなことが、あり得るはずはない。

だが、その一方で、この可能性が高いことも事実だ。

だから、思い切って次姉に探りを入れてみたのだ。

それも、直接本条由梨亜のことを訊ねるのではなく、本条由梨亜の双子の姉の、本条千紗のことを出して。

けれど、些南美は何も知らないようだった。

（とすると……やはり、富瑠美異母姉上にも訊いてみるしかないか。それに……富瑠美異母姉上の御様子は、ここの所ずっと変だ。そう……あの、日本州から来たという、天皇に呼ばれた、あの日――本条由梨亜や、本条千紗と会った、あの日から、ずっと……とすると、富瑠美異母姉上は、気付いているのか？　まあ、その可能性は高いだろうな……何せ、富瑠美異母姉上があのような御様子になるなど、今まで見たこともない）

柚希夜は、些南美に気付かれないように視線を鋭くした。

（やはり……明日にでも、富瑠美異母姉上に訊いてみなければ……）

そんな柚希夜に、些南美は全く気が付かなかった。

# 第一章「智覚」―2

「お帰りなさいませ、千紗様、由梨亜様、睦月様、香麻様」
「うん、ただいま、澪」
「お留守番ご苦労様」
千紗達はそう声を掛け、耀太と瑠璃の待っている部屋に入った。
「お帰りなさい、四人とも」
「今日は、どうだったかな？」
二人がそう言って迎えると、四人は笑って答えた。
「うん。大分良かったよ～。あんまり来たくなかったって人も二人ぐらいいたけど、後は普通だったし、結構面白かったんだぁ」
千紗が笑って言うと、耀太は少し不安げな表情をして、睦月と香麻を窺った。
「と、千紗は言っているが……。正直な所を言ってくれ。……二人は、どうだったか？」
この耀太の言う二人とは、勿論千紗と由梨亜の二人である。
睦月と香麻は顔を見合わせ、曖昧な表情で微笑んだ。
「うん……」
「それは……」
「やっぱり、なぁ……？」
「うん、やっぱり……」
その二人の様子に、耀太は深い溜息をついた。
「……やはり、問題を起こした、か……」
「も、問題じゃないもんっ！」
その言葉に、慌てて千紗が反論し、由梨亜も言った。
「そうよ。それにお父様、私も含めるのはやめて。今回のは千紗の独断で暴走で、私にも口を挟む隙がなかったんだから」
「ちょっ！　何よ由梨亜っ！　あたしを見捨てるのっ？！」
「見捨ててなんかないわよっ！　ただ、私は事実を言っただけっ」

「そりゃそうだけどさ！　言い方には気を付けてよっ！　あたしばっか悪いように聞こえるじゃん！　一応双子の姉妹でしょっ？　あたし達ってっ！」
「それとこれとは話が別っ！」
「別じゃないっ！」
二人が口喧嘩しているのを横に、残りの四人はのほほんと会話を交わす。
「まあ、問題っていうほどの問題でもなかったんですけどねぇ……」
「ま、ちょっと千紗が切れちゃって、啖呵切りまくったって感じですね」
「……そうか。迷惑を掛けたな」
「まあ。千紗ったら……相変わらずねぇ」
陽太は遠い目をしたが、瑠璃だけは、おっとりと微笑んでいる。
瑠璃は大人しく耀太と結婚をし、しかも互いに婚約者ではあったが、若い頃は相当気が強かったらしい。
由梨亜は五年ほど前、初めて千紗がこの二人――自分の養父母の娘だと知った時、なるほどと思った。
自分の性格はあまり母とは似ていず、どちらかと言えば父に似ているとはよく言われたが、それでも、どこか違うのだ。
だから、千紗が本当はこの二人の子供だと知って――千紗は、間違いなくこの母の娘だと思わず納得してしまったのだ。
幼い頃から、よく瑠璃は言っていたのだ。
「どうして私の娘なのに、由梨亜はこんなに大人しいのかしら？」
と。
その時はよく意味が分からなかったが、今では分かる。
千紗は、間違いなくこの母の――本条瑠璃の娘だ。
たとえ一緒に暮らし始めたのが十三になってからでも、この千紗の性格は、間違いなく瑠璃から受け継がれた物だ。
千紗は、瑠璃の娘なのだ。
だから、あの破茶滅茶で無茶苦茶で破天荒で、一度決めたことは

決して覆さずに貫き通す頑固で一途な性格も、仕方がないと言えば、仕方がないのかも知れない。

「それで？　どうして千紗は怒っちゃったのかしら？」

「えっとですね……その、いわゆる『貴族社会の常識』を主張した子が――と言っても、俺達と同い年なんですけど、いて……その、千紗がそれに切れて……」

「まあ、俺はしょうがなかったと思いますけど。何しろ、その時の話題、婚約者候補のことでしたし。多分ですけど、千紗が切れなかったら由梨亜が切れてたと思いますよ？」

その睦月と香麻の言葉に、耀太は黙り込んだ。

二人の言うことは、確かに最もだったからだ。

「まあ、でも、あの場にいた奴の性格考えれば……その二人が切れなくっても、その千紗を切れさせたルーレっていうのの妹のルーリが切れるか、双葉（ふたば）か若葉（わかば）か義彰（よしあき）の誰かもぶち切れたと思います」

「こ、皇太子殿下と、内親王殿下が……」

耀太は絶句して深く考え込み、瑠璃は面白そうに手を打った。

「あら、じゃあ千紗が切れても仕方ないじゃないの。ただでさえも短気だからねぇ、私の娘は」

その面白そうな言葉に、言い争いをしていたはずの千紗が口を出した。

「ちょっと、お母様っ！　あたし、そこまで短気じゃないよ！　そりゃあ切れる時はとことん切れるけどさ、いつもはそんなにぶち切れないもん！　今回みたいにプッツンっていっちゃうのは例外よっ！」

由梨亜と言い争いをしていたせいで、軽く息が乱れている。

まあ、言い争いだからこれで済むが――以前、千紗と由梨亜が双子になってから、とてつもない大喧嘩をした時など、本当に凄まじかったのだ。

その時は、もう思い出すのも嫌になるくらいの凄さで、事実耀太は卒倒し、瑠璃は卒倒までは何とかいかなかったが、すっかり血の

気が引いて蒼褪めてしまった顔で呟いたのだ。
「さすが、私の娘達ね……」
と。
確かに、千紗とはほんの数年しか一緒に過ごしてはいないが、自らの血を分けた実の娘で、由梨亜は十三年間も育てて来た養い子だ。
千紗と由梨亜は血が繋がっていない――つまり、本当の姉妹ではないし、知り合ってからまだ八年しか経っていないが、互いを親友とし、血が繋がっているかどうか、ずっと一緒にいたか否かは横に置いておくとして、二人とも本条瑠璃の娘なのだ。
その性格やら何やらを受け継いでいれば、自然と喧嘩の規模も大きくなる。
この時の原因が何なのかはもう忘れてしまったが、ほんの些細なことが原因だったはずだ。
だが、もう屋敷が半壊するのではないかというほどの凄まじい喧嘩で、この姉妹には慣れているはずの召し使いはほとんど使い物にならなくなり、この時はまだ婚約者ではなかった高校生の睦月と香麻は、『触らぬ神に祟りなし』のごとく、慎重に慎重にこの二人を避け、刺激しないようにしていた。
まあ、それでもこの二人が爆発することは避けられなかったが。
「あ～、はいはい。それにしても、そのルーレさんとルーリさんって……一体、どこのおうちの方なの？」
「えっと、確かウォンレット家……だったよね？　由梨亜」
「ええ。確か」
先程まで、凄まじい口喧嘩をしていたとは到底思えない。
そして……この話題の主が、今とても緊張関係にある――そして、いつ開戦しても可笑しくはなく、実はもう艦隊は敵国を出発しているような状態の国の国主とその異母弟妹だとは、全く感じられないやり取りである。
おまけにもう一つ付け加えるとすれば、由梨亜――いや、富実樹にとっては、ルーレは富瑠美であり異母妹で、ルーリは些南美であ

り妹で、ルーマは柚希夜であり弟だ。
だが、そんなことを覚らせないような口調で、態度であった。
普通なら、多少はその態度に違和感を覚えてしまうものだが、耀太も瑠璃も、睦月も香麻も、誰も気が付かなかったし、何も感じなかった。
「ウォンレット家？　あの、ロシア州の、か？」
耀太が、目を瞠って言った。
「うん。その、ロシア州のウォンレット家だよ。ついでに、その二人には弟さんがいて、その子の名前はルーマって言う」
千紗が補足説明を入れると、耀太が目を瞠ったまま言った。
「そう、か……。全くお前達、よりによってウォンレット家の令嬢に、喧嘩を売るとは……相手は、うちよりも格上のご令嬢だぞ……」
耀太はすっかり頭を抱えているが、由梨亜がのんびりと言った。
このののんびり具合は、瑠璃の物だ。
「ん～？　そこは大丈夫だとは思うわ。だって、千紗が喧嘩を売ったのはルーレだけだもの。それに、ルーリやルーマとは私達、結構意気投合してたと思うし。ルーリには好きな人がいるみたいだし、しかも将来は社会に出て働きたいみたいなことも言ってたからね。ルーマもそれを応援してるみたいだし。いくらウォンレット家が本条家より家格が高くっても、それで何かを言ってくることはないと思うわよ？　だから、そんな心配しなくって大丈夫よ、お父様。それにルーリ、千紗の言葉に結構衝撃受けてたみたいだし。何て言うの？　目から鱗が落ちるって言うか、未知の考えに遭遇したって感じ」
その言葉に、耀太は納得したように頷いた。
「なるほど、そうか……なら、心配はいらないのかな？」
「さっきから何度もそう言っているでしょう？」
と、睦月が呆れたように口を出した。
「そうですよ。お義父さんって、ほんとに心配性ですねぇ。俺も睦月も千紗も由梨亜もお義母さんも、誰もそんな心配してないですよ

？」

その言葉に、耀太が頭を抱えながら言った。

「あのな……香麻君。みんなが心配せずに、全く気にせずにどんどん進んで行ってしまうのだから、こうして心配性な人間が必要なんだよ……」

その言葉に、千紗が呆れたように言った。

「でも、お父様のは心配し過ぎなのよ」

「千紗っ！　お前が心配しなさ過ぎなんだっ！　少しは後ろを振り返って反省しろっ！」

その怒声に、思わず由梨亜と睦月と香麻はビクッとしたが、千紗と瑠璃だけはけろりとしている。

……さすがは、血の繋がった母娘（おやこ）である。

「失礼ねぇ。あたしだって反省はしてるわよ。ここ、こうすれば良かったなぁとか、どうしてこんなことしちゃったんだろう、とか……」

千紗は、俯いて唇を尖らせた。

（うん……特に、由梨亜とのこと……五年前、千年前に飛ばされた時の――あの時と、あの時のことを思い出した時……ほんとに、後悔ばっかりしてた。どうして、何で、って……）

千紗の心境に全く構わずに……というよりも気付かずに、瑠璃がのほほんと言った。

「それに貴方、それを千紗に言うだけ無駄なのよ。千紗は私によく似ているからねぇ。貴方みたいに心配性だったら、それこそ大変だわ。ある程度の反省はするけど、基本的にその場のノリで、猪突猛進するのが普通よ。やっぱり、血かしらね？　私もそんな感じだし……あ、お姉様――貴女達の伯母様もそんな感じよ？　子供の頃から、色んな悪戯をお姉様と一緒に仕掛けて……面白かったわねぇ、あの時は」

昔を思い出して、（物騒で）柔らかい微笑みを浮かべる瑠璃に、思わず睦月と香麻は溜息を吐いた。

まさに、この母にして娘あり、である。

# 第二章「兄弟姉妹達」―1

早理恵は、いきなり部屋の端末が鳴って驚いた。
もうそろそろ休もうとしていた所で、結っていた髪も下ろされているし、服装も寝間着だ。
取り敢えず、寝間着の上に長袖のカーディガンを羽織ると、今は見事な金髪に染めている髪を軽く撫で付けて、瞳に桃色のカラーコンタクトがはまっているのを確認してから通信に出た。
すると、驚いたことに――そこには、兄の杜歩埜が映っていた。
つい癖で『杜歩埜御兄様』と呼びそうになるのを抑えながら、早理恵は小首を傾げて言った。
「あら？　どうか致しましたの？　杜歩埜」
すると、その杜歩埜は少し目を瞠って言った。
「申し訳ありません。起こしましたか？　富瑠美異母姉上」
「いいえ。休もうとしていたのは事実ですが……」
早理恵は、視線だけでどうかしたのかを訊ねた。
すると、杜歩埜は真剣な顔になって言った。
「その前に、富瑠美異母姉上。周りに、誰か人はいますか？」
その言葉に、早理恵はきょとんとして言った。
「いいえ、杜歩埜。誰もおりませんが？」
すると、杜歩埜は悪戯っぽく笑いながら言ったのだ。
「早理恵、無理することはないよ。いつも通りに話しなさい」
その言葉に、思わず早理恵は呆気に取られた。
「えっ……？」
「誤魔化さなくてもいいよ、早理恵。もう、私には全て分かっているから」
「え、違……違い、ますわ。わたくしは、富瑠美です。早理恵では御座いませんわ。ふざけるのも大概になさいませ、杜歩埜」
早理恵は、緊張しながら真面目な顔を作って言った。

「そちらこそ、何を言っているのだい？　早理恵。私は、富瑠美異母姉上と産まれて来てからずっと――それこそ、十八年間も付き合って来た。富瑠美異母姉上は深沙祇妃の長女ではあるが、御前も知っての通り、幼い頃はマリミアン様に育てられた。そしてマリミアン様は、私達の母上、沙樹奈后と、とても仲が良くていらっしゃった。そして早理恵、御前とも、御前が産まれてからずっと……そう、もう十七年になるか、その長い間ずっと一緒に育って来た。それを忘れて貰っては困るな」

杜歩埜は、穏やかに微笑みながら言った。

思わず、早理恵は絶句した。

どうしてばれてしまったのか……早理恵には、全く分からなかった。

頭の中は凄まじい大混乱を起こしていたが、顔だけは妙に冷静だった。

これは、早理恵のいつもの癖だった。

どんなに焦っても、動揺しても、それが面に出ることはない。

これは、母親の沙樹奈后の血だろう。

沙樹奈后は、産まれた時からずっと『花雲恭沙樹奈』で、かつてはこの花鴛国の第一王女であり、第四位の王位継承権を持っていた。

つまり、生まれながらの、かなり王位継承権の高い花鴛国の王族なのだ。

そして、現在でも第十六位の王位継承権を保持している。

その娘である早理恵も、その母の性質を見事に受け継いでおり、感情をコントロールする術を生まれながらに持っているのだった。

しかし、羅緯拿もその両親は沙樹奈后と峯慶なのだが、母や姉と違ってすぐに感情が面に出る。

同じ両親から生まれた姉妹なのに、不思議である。

羅緯拿の性格は、むしろ一歳年上の腹違いの姉に当たる、些南美の方が近い。

そして、その顔立ちも。

「……ですから、あまりふざけないで下さいな、杜歩埜。戯れ言を言うにもほどという物があります。確かに、わたくしと早理恵はよく似ておりますわ。……まあ、わたくしと御異母姉様（おねえさま）ほど似てはおりませんが」

そして、軽く睨み付けるようにして言った。

「杜歩埜。わたくしが、もしも……もしも、ですよ？　早理恵であるとしたら、その証拠は、一体どこにあると言いますの？　そして、そうだとするのならば。一つ、矛盾があるでしょう？　もしわたくしが早理恵なのならば、『花雲恭富瑠美』は、一体どこへ消えたと仰るのかしら？」

そう言うと、通信画面の向こうの杜歩埜は苦笑した。

「……分かったよ。降参だ、早理恵」

「ですから、わたくしは早理恵ではないと――」

「誰が何と言おうと……たとえ御前が言ったとしても、御前は富瑠美異母姉上ではない。早理恵だよ。私を騙そうなんて、百年早い。たとえ他の全員を騙し遂せたとしても、兄である私の目だけは誤魔化せないよ、早理恵。では、御気を付け。御前は、これから戦場へ行くのだから」

杜歩埜はそう一方的に言うと、これまた一方的に通信を切った。

通信画面が灰色になり、そしてしばらく経つと、自動的に黒い画面になる。

早理恵はしばらくその場に立ち尽くしていたが、ぽつりと呟いた。

「……御兄様……杜歩埜、御兄様……」

早理恵は、ぎゅっと瞳を閉じ、拳を握り締めた。

「どうして……？　どうして、どうしてっ……？！　何故、御分かりになられてしまったのっ？　杜歩埜御兄様っ……！　わたくしは……わたくしは、誰も巻き込みたくはなかったのにっ……！」

早理恵は、思わずその場に跪いてしまった。

「わた、くしはっ……！　誰も、巻き込みたく、ないっ……！」

そして、涙が零れ落ちそうになるのを必死で堪えた。

「富瑠美、御異母姉様……富実樹御異母姉様っ……」
早理恵は、強く唇を噛み締めた。
「ごめ、なさっ……わた、くし……全然、分かって、なっ……！
御、異母姉様、達が……どんな、御気持ち、だったのかっ……！
ごめ、なさい……ほん、とに……本当に、ごめんなさいっ……御異母姉様……！」
早理恵は、珍しいくらいに、素の感情を吐露していた。
滅多に、ないほどに。

# 第二章「兄弟姉妹達」―2

杜歩埜は通信を切ると、後ろを振り返った。

「……これで、良かったかな？　みんな」

そこにいたのは、璃枝菜、風絃、篠諺、柚菟羅、鳳蓮、麻箕華、涼聯、羅緯拿、苓奈。

戦争に付いて行くとなっている富瑠美達と、行方不明の富実樹を除いた峯慶の子供達十人が、この部屋にいたのだ。

普段は、深沙祇妃の子供で、しかもずっとその手元で育って来た柚菟羅と苓奈は、他の兄弟達とあまり仲が良くない。

だが……それでも、ここにいる。

それが、意味する所は――。

その時、璃枝菜が口を開いた。

璃枝菜はここにいる兄弟達の中で、杜歩埜を除いて一番年上だからなのだろうか。

「ええ。御異母兄様。充分過ぎるほどですわ。わたくしには、よく分かりました。確かに、あれは早理恵です。わたくしの御母様は阿実亜女ですが、あれが早理恵だと、充分過ぎるほどに分かりますわ。富瑠美御異母姉様とは、やはり違いますもの。多少似ているとはいえ、実の兄弟を騙そうなんて無理ですわ。……まあ、早理恵達が旅立ってから確認したわたくし達にも、問題があったとは思いますけれど」

その言葉に、他の兄弟達も頷き、一様に麻箕華を見詰めた。

まだ十五歳の麻箕華は、頬を染めてあわあわと手を振った。

「え、だ、だって……富瑠美御異母姉様も早理恵御異母姉様も、些南美御異母姉様も柚希夜も、わたくしに黙っていてほしいと……入れ代わることは、絶対に内密にするようにと……」

そして、視線をうろうろと動かす。

「そ、それに宗賽大臣殿も、御存知のことで……一応、わたくし…

…反対は、致したのですが……」
麻箕華は、小さな声になってぼそぼそと呟くように言った。
「御異母姉様達は……全然、御聞きになって下さらなくって……」
その言葉に、彼らは難しい顔をしたが、柚菟羅が苦笑して言った。
「まあ、早理恵異母姉上(あねうえ)が入れ代わったことに、ずっと気付かなかった私達も悪いということですよ。麻箕華は悪くありません。富瑠美姉上達が、それを強制しただけなのですから。そうでしょう？」
その言葉に、皆は苦笑しながらも頷いた。
「全く……早理恵御姉様達は、本当に白々しいですわ」
羅緯拿が、唇を尖らせて言った。
「わたくし達……それほどまでに、信用が、ならないのでしょうか？　何も……一言も、打ち明けぬほど」
「まさか。そんなことはあり得ませんわ、羅緯拿御異母姉様。御姉様達はただ、わたくし達を巻き込みたくはないと御考えになられただけでしょう。ただ、わたくしはそれを、白々しいとは思いますけれどね。……昔からそうですわ。富瑠美御姉様も、些南美御異母姉様も、柚希夜も。皆、余所余所しいほどまでに白々しいのですわ。信用していないのではなく、ただ巻き込みたくはないと思って、それで黙っているだけでしょう。全く……的外れにもほどがありますわ。知らせない方がわたくし達にとって辛いことだと、全く理解しておりませんもの」
苓奈は、つんと顔を上げて、気位が高そうに言い放った。
だが、だからと言って苓奈が早理恵達を蔑んでいる訳ではない。
少し高飛車なのは、苓奈のいつもの様子だった。
麻箕華と苓奈は顔が似ていて、しかも生まれた月はたったの七ヶ月差の同い年だ。
しかも、髪の色は二人とも同じで、アッシュブロンドである。
昔から、この二人を見分ける方法は、瞳の色を見るか性格を見るかだと言われるほど、この二人の性格は違っていたのだった。
苓奈は、部屋にいる兄姉達を見回して言った。

「今わたくし達が確認したことを纏めますと、まず、富瑠美御姉様はあの船に御乗りになってはいらっしゃらない。そして、早理恵御異母姉様が富瑠美御姉様の身代わりをしていらっしゃる。……そういうことですわよね？」

その言葉に、皆は頷く。

苓奈はこの中では一番年下で、兄弟全員が揃ったとしても下から二番目でしかないが、この中で最も年上の杜歩埜と年下の苓奈の歳の差は、たったの三年と一ヶ月しかないのだ。

人数は多いものの大して歳が違わず、苓奈にはそれなりの統率力といざという時に惑わされない冷静さがあるということもあって、今は苓奈が杜歩埜と並んで仕切っていた。

「取り敢えず、どうして、や何故、といった疑問は、横に置いておくことに致しましょう。ここでつまずいていては先に進めませんし、いくら考えても、その答えは訊かなければ分かりませんもの。とすると、残る疑問は一つ。……富瑠美御姉様は、一体、どこで何をしていらっしゃるのか」

「ああ。そうだね。……それと、些南美や柚希夜は関与しているのか否か、ということも挙げられると思うよ？」

杜歩埜が言い、残る兄弟達も揃って麻箕華を見詰めた。

そして、麻箕華とは同腹の兄、篠諺が口を開いた。

「麻箕華。……説明しなさい」

その口調は、穏やかながらもどこか厳しく、さすがは王子と感心するほどだ。

麻箕華は観念するしかなく、仕方なく口を開いて、富瑠美と些南美と柚希夜が今どこにいるのかを話した。

そして、何をしているのかも。

だが、前戦祝大臣（せんしゅくだいじん）達のことは話さなかった。

自分は一応この国の鴬大臣（おうだいじん）で、国王が不在の為、代理もやっている。

だが、今現在国政に関わっていなくて、そしてこれからも関わら

ないだろうという兄弟も大勢いる。
その話は、ここで話すようなことではないのだ。
そして、いつかは話すにしても、今話してしまっては時期尚早だろう。
第一、富瑠美達がどこにいるかというだけでも途轍もない大珍事なのだ。
それにこのことが累乗してしまったら、とんでもない大惨事になりかねない。
それを証明するように、前戦祝大臣達のことを抜いた話を聞いた兄弟達の顔からは一斉に血の気が引いた。
「……な、何てことを許可したのだっ！　麻箕華っ！」
真っ先にそう叫んだのは、風絃だった。
「ふ、風絃御異母兄様……で、ですから、わたくしは、止めたと申し上げました……それを聞かずに、地球連邦まで行ってしまわれたのは、富瑠美御異母姉様達の方です。……わたくしに責任がないとは、申しませんけれど……」
「確かに、富瑠美異母姉上達も軽率ではあっただろう。だが、そのような愚昧な行動を抑えるのも、鴬大臣たる麻箕華、御前の仕事ではないのかっ？」
そう言われ、麻箕華は思わず俯いてしまう。
確かに、まだ十五歳というほんの歳若い少女だとはいえ、麻箕華はもう一年以上鴬大臣をやっているのだ。
そして、歴代の王が愚挙愚計を企てた時には、国の為に生命を張って止めるのも鴬大臣としての仕事の一部。
つまり、成り立ての頃ならばともかく、鴬大臣の仕事に就いて一年以上経った今の麻箕華が止められなかったということは、鴬大臣として相応しくないという烙印を押されても、全く文句は言えない。
「申し訳、御座いません……」
麻箕華が俯いたまま謝ると、苓奈が一つ溜息をついて言った。
「とにかく、今はそのようなことを取り沙汰しても何の意味もあり

ませんわ、風絃御異母兄様。過ぎたことは過ぎたことです。過去を変えることは、誰にもできませんもの。今は、変えることのできる先のことを考えるべきでしょう」

その苓奈の言葉に、皆沈黙した。

これでも、苓奈はまだ十五歳の、麻箕華や涼聯や羅緯拿とは同い年の異母妹(いもうと)なのだ。

だが、このてきぱきとした動きは、とてもそうとは思えない。

さすがは、富瑠美の実の妹であり、富実樹の異母妹だというべきか。

「……取り敢えず、このことは秘密にしておこう」

そう言ったのは、杜歩埜だ。

「これは、無闇矢鱈に公言すべきことではない。……王が異母弟妹(ていまい)達と共に、対戦国に行っているなどとは、決して公表できない。他国の人間にも、国民にも」

「ええ、私もそう思います、杜歩埜異母兄上(あにうえ)。私達が知っていればよいことだと。……それと、もう一つ」

「何でしょうか？　篠諺御兄様」

麻箕華が不思議そうに、それでいて不安そうに篠諺を窺うと、篠諺は静かに言った。

「母上達にも、このことは内緒にすべきだと思います。母上達は、政に近いのか近くないのか、微妙な立ち位置にある。知っても、御互いに困るだけではないでしょうか？　それに、沙樹奈后(さきなこう)も深沙祇妃も、良くも悪くも立派な淑女です。御生まれになられた時から、ずっと王族として生きて来られた御方です。そのような方々が、もし自らの娘が王の振りをして戦地に向かっている、または敵地にいると知ったのなら、一体どのようなことになるか……。想像するだけで、とても寒気が致します」

その言葉に、その沙樹奈后と深沙祇妃の子供である杜歩埜と柚菟羅と羅緯拿と苓奈は、それぞれ顔を見合わせて苦笑した。

「確かに……」

「まあ、あの母上達でしたら……」
「何をするのか、分かりませんわね……」
「篠諺御異母兄様の仰る通り、御母様達には告げない方が、賢明な判断と言えるのでしょうね……」
だが、その中でただ一人、鳳蓮だけが顔を曇らせた。
「ですが……この中で最も年上の杜歩埜異母兄上ですら、まだ十八ですよね？」
「……何が言いたいの？　鳳蓮」
璃枝菜が、訝しげな表情で言った。
「璃枝菜姉上……忘れてはいませんか？　私達は、まだ……子供なのだということを」
まだ十六歳の鳳蓮だったが、この中ではかなりの現実主義者だったのだ。

# 第二章「兄弟姉妹達」―3

鳳蓮に痛い所を突かれた兄弟達は、一斉に押し黙った。

「で、ですが……鳳蓮異母兄上。確かに私達はまだ子供ですが、私達は王族で、しかも十人もいるのです。それぐらいのことならば、大丈夫ではないのでしょうか？　それに、下手に母上達にお話しすると……」

涼聯が慌てたように口を開くと、鳳蓮はゆっくりと首を振った。

「別に、私はそれを否定する訳ではないよ、涼聯。だが、一般的に見れば、私達はまだ幼い子供だと、そういうことだ。せめて、一人でいいから……私達が信用できる大人に、相談ができればいいのだが。……私達だけで考えるのは、あまりにも危険過ぎる……。普通の同年代の子供達よりは物を知っているとは思うが、私達は世間知らずだ。世の中を知らない」

鳳蓮は腕を組み、深く考え込む。

「けれど、鳳蓮。そこまで都合のよい大人は、一体どこにいると言うのだ？」

そう言ったのは、柚菟羅だ。

「母上達には、決して話せない。ヒステリーを起こしてしまうのは目に見えている。沙樹奈后や母上以外の方も、莉未亜貴は地封貴族の御息女であらせられたし、紗羅瑳侍も幼い頃からこの城で御育ちになられて来たし、かろうじて平気そうなのは阿実亜女だけだが、それでも、後ろ盾の低さと元の御身分が庶民だということに、一抹の不安は残る。……大臣達も、完全に信用できる者はいないのではないか？　せめて、宗賽大臣殿達御三方が手隙でいらっしゃれば、話は違っていたかも知れないが……」

その言葉に、思わず麻箕華が身体を揺らした。

その反応に、実兄の篠諺は訝しげな顔を向けたが、それだけだった。

「マリミアン様……」
ふと、杜歩埜が呟いた声に、その疑問は霧消してしまったのだ。
「え？」
その場にいた兄弟達は皆、杜歩埜の言葉に首を傾げる。
「マリミアン様は……どうだろうか？　マリミアン様は、かつての由梨亜妾――つまり、私達の義母であった。そして、今は王宮を退いていらっしゃる。それに、マリミアン様の父君はかつての戦祝大臣であり、今は異母兄君が戦祝大臣を務めていらっしゃる。マリミアン様自身も、とても聡明であらせられると共に茶目っ気も御持ちで、柔軟な御心の持ち主だ」
杜歩埜の言葉に、異母弟妹達は顔を見合わせる。
「そして、富実樹異母姉上のこともあり、現実をよく知っておられる方であろう。……本当ならば、父上に御相談するのが最もよい手段なのだろうが……父上は、未だに御目覚めになられない。……私には、そのような都合のよい御方は、マリミアン様しか思い浮かばない」
その言葉に、思わず柚菟羅と苓奈が顔を顰めた。
だが、苓奈は渋々ながらも小さく頷いて言った。
「ええ、まあ……会って下さる、下さらないはともかくとして、候補の御一人としては……賛成してもよいのではないかと愚考する次第に御座いますわ」
顔を顰めたまま一気に言われても、何の信憑性もない。
だが、苓奈にとってはこれが精一杯の譲歩なのだろう。
あれほど仲の悪い姉弟の、母親なのだから。
「ええ、そうですわね。わたくしも、確かにマリミアン様ならば、とても条件に合う御方だと、思いますわ。マリミアン様以上の、好条件の御方は、他におられないのではないでしょうか？」
羅緯拿は、にっこりと笑いながら賛成をする。
「ですから、わたくしも、杜歩埜御兄様に賛成ですわ。ですが、その……苓奈の言った、『候補の一人』、ということは……苓奈、わ

たくしには思い付かないのですが、他にも、丁度よいと思えるような御方が、おりますのかしら？」

羅緯拿の、一種独特なのんびりとした口調での質問に、苓奈は少し目を伏せ、そして顔を上げると言った。

「……ええ。わたくしは、マリミアン様だけではなく、宗賽大臣殿――シュール殿も、候補の一人になり得るのではないかと思いますわ。何しろ、シュール殿はあのような御性格でいらっしゃいますし、富瑠美（ふるみ）御姉様達が向こうへ行っておられることも御存知なのでしょう？　でしたら、御相談するのに最も相応しい御方なのではないでしょうか？　少なくとも、わたくしはそう思いますわ」

その言葉に、兄姉達はそれぞれ考え込み、賛同の意を示し出す。

「お……御待ち下さいませっ！」

声を上げたのは、この中で唯一、シュールが何をやったのかを知っている麻箕華だ。

だからこそ、麻箕華は――麻箕華だけは、この苓奈の意見に、賛成することはできなかった。

「……麻箕華？」

篠諺が訝しげな顔をすると、麻箕華は気まずそうに視線を逸らしたまま、早口で言った。

「宗賽大臣殿に御相談することは、わたくしには認められません。たとえ誰が何と仰ろうとも、絶対に。本当にわたくしは、決して、それだけは認められないのです。これは……」

麻箕華は少し言いよどみ、視線を振るわせた。

「第百五十四代鴬大臣として、そして第百五十二代花鴬国国王、花（か）雲恭峯慶（うんぎょうほうぎょう）の第六王女及び第十一子、並びに第九王位継承者としての立場から言わせて頂きます」

その言葉に、兄弟達は一斉に訝しげな顔になった。

「……麻箕華？　御前は、一体……」

杜歩埜が言うと、麻箕華は疲れたように、静かに首を振った。

「……申し訳御座いません、杜歩埜御異母兄様（おにいさま）。このことを話す訳

には、参りませんのです。まだ……今の段階でそれを御話しするには、時期尚早なのです。いつかは御話しできるかも知れませんが、今は、まだ……。それに、富瑠美御異母姉様（おねえさま）にも、そして戦祝大臣殿にも、厳重に口止めをされているので……。もし、三大臣のどなたかに御相談をするのであれば、それは、戦祝大臣殿以外には駄目です。それ以外の方には、決して認められません。そうでなければ……もう、それ以外、わたくしに申せることは……何一つとして、御座いません。……申し訳、御座いません……」

麻箕華は、震える身体を必死に抑えて言った。

頭の中は、恐怖で一杯だ。

その尋常でない様子に、兄弟達は一様に不思議そうな、不安そうな顔になる。

「……貴女がそこまで仰るのなら、それ以上は訊きませんわ、麻箕華」

璃枝菜（りえな）が、静かに言った。

「……ありがとう御座います、璃枝菜御異母姉様」

麻箕華も、静かに頭を下げる。

「……それ以上は、無理なのですね、麻箕華御異母姉様」

「……はい」

「分かりましたわ。それならば、マリミアン様に、御相談致しましょう？」

羅緯拿はおっとりと言い、にっこりと笑って杜歩埜を見上げた。

「ねぇ？　宜しいでしょう？　杜歩埜御兄様？」

「あ、ああ……勿論だとも、羅緯拿」

おっとりと笑いながら決して退かない羅緯拿の様子を見る度に、杜歩埜は異母妹（いもうと）であり、そして最愛の女性である些南美（さなみ）のことを思い出す。

いくら腹違いの姉妹とはいえ、見た目も似ていて性格も似ている彼女と同母の兄妹で、特に何もない限り毎日のように顔を合わせていなければならないとは、これは一体何の拷問かと、些南美がいな

くなってから、ずっと密かに思っている杜歩埜だった。
最も、その独特のゆったりした調子の語り口調で、思い惑うことも思ったより多くはないが。
「それでは、そういうことで……宜しいですか？　皆様」
羅緯拿がおっとりと微笑みながらそう言うと、兄弟達は、静かに頷く。
「それでは、あんまりこうして皆で集まっていると、何を言われるか分からないからね。そろそろ解散としよう。……マリミアン様には私と麻箕華で連絡を取ってみるから、心配しなくていい」
杜歩埜がそう言い、異母弟妹達は互いに会釈を交わした後、三々五々散らばって行った。

## 第二章「兄弟姉妹達」―4

マリミアンは、突然ふっと顔を上げ、虚空を凝視した。
丁度、店の中に客はいない。
だからその様子を見付けたのは、大学の講義がなくて店でぶらぶらしていた、マレイとレイシャだけだった。
「……マリミアンさん？　どうか……したんですか？」
マレイが不思議そうに訊ねると、マリミアンははっとしたような表情になり、こちらを見詰めた。
だが、微妙に焦点が合っていない。
「マリミアンさん……？」
再び呼ぶと、マリミアンは瞳を揺らし、ようやく焦点が合ってきたようだ。
「大丈夫ですか？　マリミアンさん」
「ええ……大丈夫よ、マレイ、レイシャ。……わたくし自身には、何もないわ」
その言葉に、二人は不思議そうな顔になる。
「マリミアンさんに何にもないんなら……じゃあ、誰に何があるんですか？」
その鋭い言葉に、マリミアンは苦笑する。
「鋭いわね、貴女達……」
「それで？　一体、どうなんです？」
その顔はいかにも興味津々で、その様子に、思わずマリミアンは再び苦笑を洩らした。
「そこまでは、わたくしには分からないわ。わたくしの勘は、当たるか否かで言えば当たったことしかないけれど、そこまで詳しいことは分からないのよ。けれど……」
「けれど？」
「これは、わたくし自身に関わることのようね。でも、今すぐでは

ない……多分、少し時間は掛かるでしょうね。けれど、そう遠くもない……」

マリミアンは、二人に笑ってみせた。

「まあ、その時が来れば分かるわよ。逃げなければならないほど、重大なことでもないようだし……座して待て、というのが一番近いのかしらね？」

マリミアンの言葉に、レイシャが顔を顰めた。

「嫌だ。……『座して待て』なんて、あたしがいっちばん苦手なもんじゃん」

その様子が可笑しくて、思わずマリミアンは吹き出した。

「ちょっとぉ、笑わないで下さいよ、マリミアンさんっ！　マリミアンさんって、本当に花鴬国一番の貴族のお嬢様なんですかぁ？」

その言葉に、何故かマレイも頷く。

その様子に、マリミアンは苦笑した。

「ええ。本当よ。それにね、レイシャ、マレイ。『スウェール家の令嬢』っていうだけでそんな固定概念、可笑しいわよ？　わたくしは元々こういう性格ですもの。御父様にも御母様にも、御異母兄様にも御異母姉様にも……もう、家族全員に、『御前は好奇心が旺盛だな』とか、『少しは大人しくしてくれ』とか、『もう悪戯は止めなさい』とか……もう、本当に色々と言われて来ているのよ」

「それって……貴族として、大丈夫なんですか……？」

「ええ。わたくしは、産まれた時から峯慶様と結婚することがほとんど決まっていたから、学校も、貴族の子弟しかいないような女学校にずっと通っていて……それで、女の子だけの世界って、まあ、ある意味男女両方がいる世界よりも、色々と凄いことがあってねぇ……」

マリミアンは、ふと遠い目をした。

「それで、元々の性格に拍車が掛かってしまったのよ。それに、貴族で第一王位継承者の婚約者っていうだけで、好きな時に外出が許されなかったし、街を歩きたい、ウィンドウショッピングがしたい

って思ってもできなかったわ。そのせいでストレスが溜まっちゃって、それを屋敷で発散させていたのよ」

その言葉に、レイシャとマレイは目を白黒させている。

まあ、貴族と言う存在に夢を持っている彼女達にしたら、突然非情な現実を突き付けられたように感じても仕方がないだろう。

だが、マリミアンは容赦しなかった。

「でもねぇ、これぐらいで驚いていたら、わたくしの娘達に会ったら腰を抜かすでしょうねぇ」

その言葉に、レイシャとシュミアが石化した。

すると、そこに声が掛かる。

「え～っ?!　それってどういうことですかぁっ?!」

その声は、いつの間にか帰っていたミアが発した物だった。

その隣には、ユリアの姿もある。

「ああ、お帰りなさい、ミア、ユリア」

「そんなことよりも、マリミアンさんっ！　マリミアンさんの娘さん達ってっ……娘さん達、って、誰……？」

そう言って、首を傾げる。

「ちょっとミア、一人ぐらいは知ってるでしょ」

ユリアが、顔を顰めて言う。

「えっ？　嘘、誰々？」

「富実樹先王陛下よ。花鴬国の第百五十三代国王陛下」

「えっ？　あの行方不明になってしまった女王様って……マリミアン様の娘さんなんですかぁっ?!」

シュミアが、仰天して大声を出す。

「ええ。あと、第五王女の些南美と第七王子の柚希夜が、わたくしの産んだ子供達よ。……本当に、富実樹も些南美も、わたくしに似なくていい所まで似てしまって……。富実樹なんか、御腹が空いたからといって厨房に忍び込んだこともあるのよ?」

その言葉に、四人はピシッと固まる。

「そ……れ、って……」

「しかもその時、丁度峯慶様は御病気で、その日は何も御口になされなくて……。それを心配した富瑠美（ふるみ）――今の陛下は、料理をしようと思い立ったけれど、料理の仕方が分からなくて、結局富瑠美は富実樹と一緒に料理をして、わたくしと峯慶様の所に持って来たのよ。まあ、そんな無駄なぐらいの行動力が、富実樹の富実樹たる所以だけど」

その言葉に、四人は更々と砂になりかける。

「せ……先王陛下って……」

「そんな人なんですか……？」

「ええ。わたくしの可愛い娘よ。些南美も富実樹に負けないぐらいの行動力を持っているし、柚希夜も、富実樹や些南美とは違った破天荒さがあるわ。それに富瑠美も、時として富実樹を凌ぐほどの奇想天外な発言や行動があって……本当に面白いわ。話で聞いただけだけれど、わたくしが後宮を退いた後に起こった深沙祇妃（みさぎひ）――妃（ひ）とその子供達の親子喧嘩は、とても凄かったらしいわ。国宝級の絵や壷を投げ合って、最後には沙樹奈后（さきなこう）――后（きさき）も気絶してしまったほどらしいし……ちょっと見てみたかったわねぇ」

その言葉に、四人はぐしゃっと潰れてしまった。

マリミアンは、大して意図もせずに、王侯貴族に夢見る少女達の夢を、跡形もなく壊してしまったのであった……。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7986x/

時と宇宙（そら）を超えて～分割版～

2011年12月13日05時51分発行